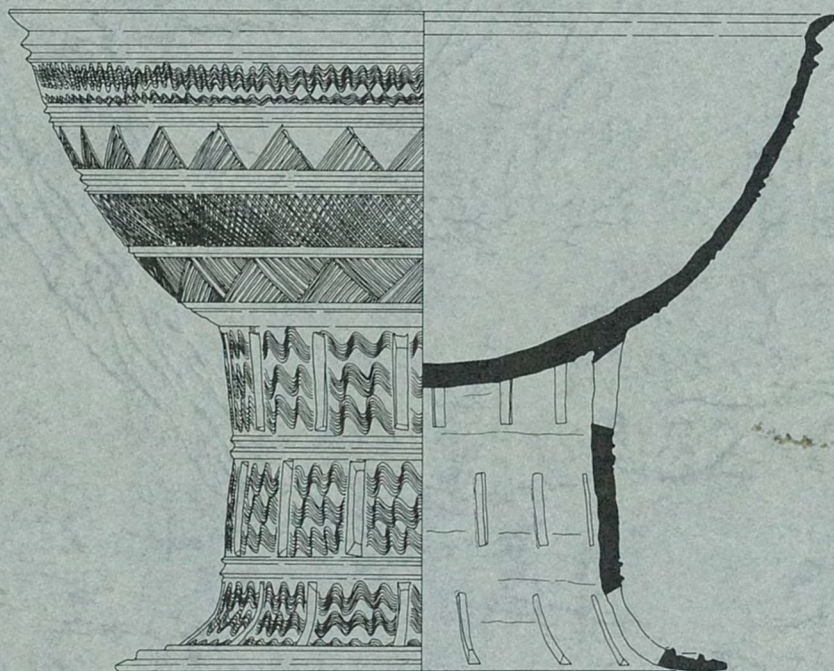


(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第75輯

陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ

近畿自動車道松原すさみ線建設に伴う発掘調査報告書



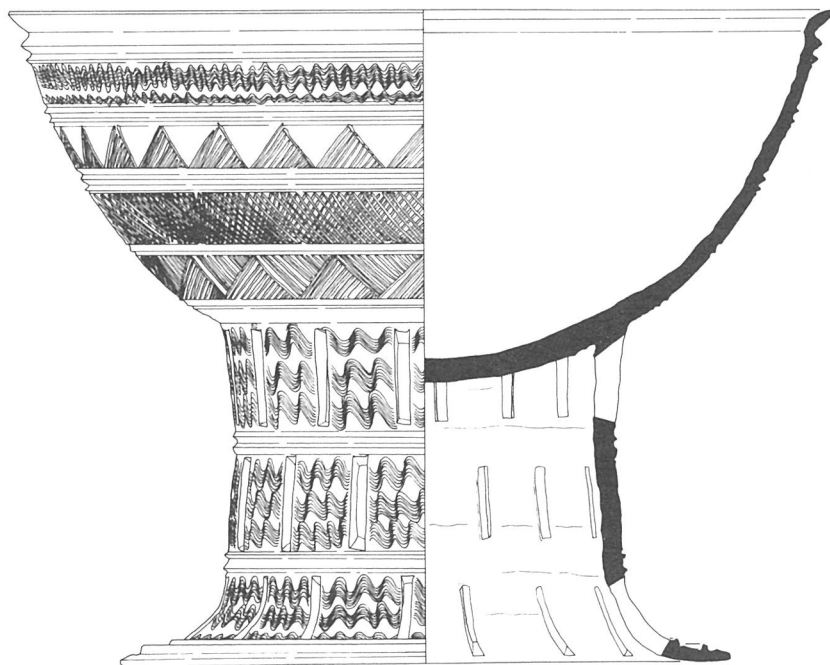
1993

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第75輯

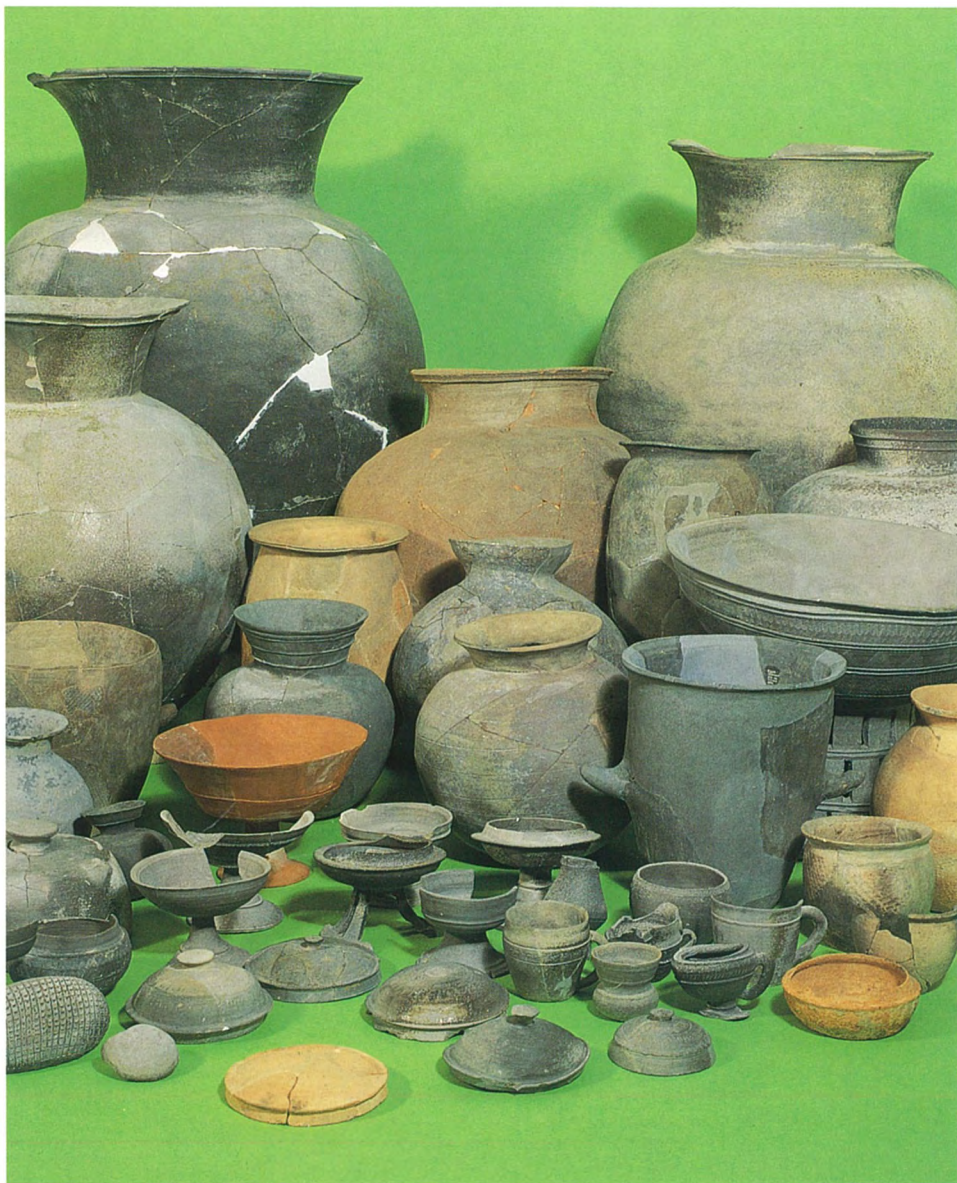
すえむら 陶邑・おぼでら 大庭寺遺跡Ⅲ

近畿自動車道松原すさみ線建設に伴う発掘調査報告書



1993

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



大庭寺遺跡出土初期須恵器



I区C 全景



I区E 全景

序 文

埋蔵文化財の宝庫、泉北丘陵の一角に関西国際空港の重要アクセスとなります近畿自動車道路が計画されて以来、大阪府教育委員会ではその対応について、関係当局と慎重に協議を重ね、空港開港に向けて昭和60年度から発掘調査を進めてまいりました。

大庭寺遺跡のある堺南インターチェンジから岸和田インターチェンジの区間は、本線最後の供用区間として事業の進捗が待たれておりましたが、お蔭をもちまして平成4年度中に、現地発掘調査をすべて終了することができました。現地調査は終了しましたものの、調査結果の公開がこれからの大きな課題として残されております。

本府といたしましては、今後も関係各機関との協議を重ね、調査資料の活用や報告書の刊行などについてなお一層の努力を続けてまいる所存です。

今回の報告は、平成2年度に発掘調査を実施しました堺市大庭寺遺跡第5次調査の成果の一部を収録いたしました。

本調査を実施するにあたって、日本道路公団大阪建設局ならびに、堺市教育委員会、関係者各位、調査を担当された財団法人大阪府埋蔵文化財協会の皆様に深く感謝いたします。今後とも本府の文化財行政に対して、各位の変わらぬご理解とご援助をお願い申し上げます。

平成5年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 亀岡 勝敏

序 文

近畿自動車道路松原すさみ線（松原海南線改称）の建設に先立つ堺市大庭寺遺跡の発掘調査は本年度で7年目を数え、このほどすべての現地発掘調査を終了することができました。この間の発掘調査は、旧石津川の河川部分から丘陵部分、さらにはその西側に刻まれた谷筋まで地形的な変化に富んでおり、縄文時代以降各時期の重要な遺構が検出されております。とくに最古の一群とされる大量の初期須恵器の出土と窯跡の発見は、大いに注目を集めているところです。これまでの調査成果につきましては、その一部をすでに2冊の報告書にまとめて刊行しており、本書は第3冊として、平成2年度に発掘調査を実施しました堺市大庭寺遺跡丘陵頂部の調査成果の一部を収録いたしました。大庭寺遺跡の調査成果はまだ初期須恵器窯跡とその周辺の報告作業が残されており、現在鋭意整理作業を進めているところです。今後の報告につきましても大いにご期待頂きたいと思っております。

本調査を実施するにあたって、職員の派遣など本協会の事業にご理解をいただいている近畿各府県・大阪府下市・町教育委員会ならびに大阪府教育委員会、日本道路公団大阪建設局、堺市教育委員会、地元自治会をはじめとする関係者各位に多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝しております。今後とも当協会の事業に、変らぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成5年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 伴 恭二

例 言

1. 本書は、1986年から発掘調査を実施している近畿自動車道松原すさみ線（海南線改称）建設予定地内に所在する、陶邑・大庭寺遺跡の発掘調査報告書第Ⅲ冊である。
2. 本書は、1990年度の調査成果の一部を掲載している。本書に含まれないものについては、順次刊行予定である。
3. 調査は、日本道路公団大阪建設局大阪工事事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
4. 調査は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会第4班が担当した。担当者は、富加見泰彦、土井和幸である。
現場調査期間は、1990年5月7日～1991年3月25日で、整理については、調査に併行して行なった。
5. 整理および執筆は、富加見、土井が担当した。挿図や図版類の作成等の作業については西村 歩、駒井正明、岡戸哲紀各技師の手を煩わせている。遺構の写真撮影は各調査担当者が行なったが、遺物の写真撮影は小倉 勝、加茂幸彦が行なった。
6. 調査の実施にあたっては、日本道路公団大阪建設局大阪工事事務所、堺市教育委員会および地元関係各位の協力を得た。
7. 整理にあたっては、財団法人和歌山県文化財センター、堺市教育委員会の協力を得た。
8. 調査では、土器の産地同定を奈良教育大学教授 三辻利一氏に依頼し、玉稿をいただいた。

9. 英文要旨については、大阪府教育委員会有井宏子氏の協力を得た。
10. 調査および報告書作成にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課、大阪府泉北考古資料館、財団法人大阪文化財センターを始めとしてご指導、ご教示を受けた。記して感謝の意を表したい。

小田富士雄	(福岡大学)
三辻利一	(奈良教育大学)
中村 浩	(大谷女子大学)
申敬澈	(韓国慶星大学校)
安在皓	(韓国釜山大学校博物館)
宋桂鉉	(韓国釜山直轄市立博物館)
武末純一	(福岡大学)
亀田修一	(岡山理科大学)
柳田康雄	(福岡県教育委員会)
藤井保夫	(和歌山県教育委員会)
吉川義彦	(関西遺跡調査会)
酒井清治	(国立歴史民俗博物館)
木下 亘	(奈良県立橿原考古学研究所)
積山 洋	(財団法人大阪市文化財協会)
京嶋 覚	(財団法人大阪市文化財協会)
石田 修	(堺市立埋蔵文化財センター)
前田敬彦	(和歌山市教育委員会)
有井広幸	(財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)
山上雅弘	(兵庫県教育委員会)

(順不同、敬称略)

凡 例

1. 遺構名は大阪府埋蔵文化財協会の調査規程に従って付し、遺構図面・図版と対称できるようにした。
2. 遺物は遺物挿図に通し番号を付し、本文中の遺物番号は遺物図・図版と一致するようにした。
3. 本書の遺構実測図・文中に用いた方位のNは、国土座標系の座標北を示す。尚、真北方向へは $0^{\circ} 19'$ 東へ、磁北は $6^{\circ} 20'$ 西へ振る位置関係にある。
4. 標高は省略しているがT.P.+である。国土座標の単位はすべてmである。
5. 遺物は前報告書では質の相違によって塗り分けたが、今回は全て断面を黒塗りとした。
6. 土色の記述は、小川正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帳5版』（1976）による。
7. 遺構名の表記については、年度、地区を度外視して通し番号で名付けることが混乱を避ける方法であるが、調査進行の上で、実施できなかった。従って既刊の報告書と遺構番号が一部重複するものがある。
8. 本書の執筆分担は目次に記した。
9. 遺構の実測は80分の1を基本としているが、このスケールに納まらないものについては、その都度スケールを付し、混乱を避けるように努めた。
10. 遺物は4分の1を基本としたが、大型の遺物については6分の1で記載した。さらに、このスケールに納まらないものについては、その都度スケールを付し、混乱を避けるように努めた。

11. 本書でいうところの初期須恵器とは定型化以前の須恵器で、中村編年の I 型式 2 段階までの須恵器を指す。
12. 本書では、陶質土器と初期須恵器について、両者に明確な判断基準を設けることは困難なため、便宜上、初期須恵器として取り扱うことにした。
13. 本書では、いわゆる韓式系土器と呼ばれる一群については、朝鮮半島で「赤褐色軟質土器」と呼ばれている土器の影響を受けて日本で製作された土器ということで軟質土器という名称を、使用している。
14. 須恵器との判断基準が困難な土器については、可能な場合、形態で両者に分類し、不可能な場合さらに手法・色調によって須恵器と軟質土器に分類した。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯 (富加見)	1
第2節	調査の方法 (土井)	2
第2章	周辺の遺跡と既往の調査	4
第1節	周辺の遺跡 (土井)	4
第2節	既往の調査 (富加見)	7
第3章	調査の成果	10
第1節	基本層序と遺物包含層の出土遺物 (土井)	10
第2節	I区Cの調査成果 (富加見)	12
第1項	古墳時代	12
第2項	奈良時代	28
第3項	平安時代	43
第4項	中世	46
第5項	時期不明遺構	48
第3節	I区Dの調査成果 (土井)	54
第4節	I区Eの調査成果 (土井)	54
第1項	古墳時代	54
第2項	奈良時代	64
第3項	中世	70
第4項	時期不明遺構	71
第5節	393-OLの調査成果 (土井)	74
第1項	393-OLの概要	74
第2項	393-OL出土遺物	78
第4章	まとめ	131
第1節	古墳時代の集落について (富加見)	131
第2節	奈良時代の集落について (土井)	134
第3節	初期須恵器について (富加見)	137
附章	分析 (三辻)	146

插图目次

第1图	地区割图	3
第2图	周边遗迹分布图	6
第3图	调查地地区割全体图	9
第4图	基本层序模式图	10
第5图	I区C、I区E包含层出土遗物	11
第6图	578-OB平面・断面图	13
第7图	16-OB平面・断面图	14
第8图	17-OB平面・断面图	15
第9图	319-OB平面・断面图	16
第10图	319-OB出土遗物	16
第11图	338-OB平面・断面图	17
第12图	327-OB平面・断面图	18
第13图	134・516-OO平面・断面图	19
第14图	135-OO平面・断面图	20
第15图	539-OO平面・断面图	21
第16图	134・516・539・355-OO出土遗物	21
第17图	404-OO平面・断面图	22
第18图	401-OO平面・断面图	23
第19图	392-OX平面・断面图	24
第20图	392-OX出土遗物	25
第21图	391-OG平面・断面图	26
第22图	391-OG遗物出土状况	27
第23图	391-OG出土遗物	28
第24图	62-OB平面・断面图	29
第25图	50-OB平面・断面图	30
第26图	84-OB平面・断面图	31
第27图	85-OB平面・断面图	32
第28图	82-OB平面・断面图	33

第29図	141—O B平面・断面図	34
第30図	106—O B平面・断面図	35
第31図	396—O S出土遺物(1)	37
第32図	396—O S出土遺物(2)	38
第33図	396—O S出土遺物(3)	39
第34図	396—O S出土遺物(4)	39
第35図	396—O S出土遺物(5)	40
第36図	396—O S出土遺物(6)	41
第37図	396—O S出土遺物(7)	42
第38図	396—O S出土遺物(8)	43
第39図	346—O B平面・断面図	44
第40図	312—O B平面・断面図	45
第41図	8—O B平面・断面図	46
第42図	209—O B平面・断面図	47
第43図	450—O B平面・断面図	48
第44図	418—O B平面・断面図	49
第45図	110—O B平面・断面図	50
第46図	292—O B平面・断面図	51
第47図	171—O B平面・断面図	52
第48図	381—O B平面・断面図	53
第49図	1—O D平面・断面図	55
第50図	1—O D出土遺物(1)	56
第51図	1—O D出土遺物(2)	57
第52図	115—O D平面・断面図	58
第53図	153—O D平面・断面図	59
第54図	120—O D平面・断面図	60
第55図	120—O D遺物出土状態	61
第56図	120—O D出土遺物	62
第57図	165—O D平面・断面図	63
第58図	154—O S出土遺物	64

第59図	18—O B 平面・断面図	65
第60図	47—O B 平面・断面図	66
第61図	17—O B 平面・断面図	67
第62図	227—O B 平面・断面図	68
第63図	227—O B、117・118—O O 出土遺物	69
第64図	149・150・151・117・118・166—O O 平面・断面図	70
第65図	111—O B 平面・断面図	71
第66図	157—O B 平面・断面図	72
第67図	169—O B 平面・断面図	73
第68図	393—O L 土層断面図	75
第69図	393—O L I 層出土遺物	76
第70図	393—O L II 層出土遺物 (1)	77
第71図	393—O L II 層出土遺物 (2)	77
第72図	393—O L II 層出土遺物 (3)	78
第73図	393—O L II 層出土遺物 (4)	79
第74図	393—O L II 層出土遺物 (5)	80
第75図	393—O L II 層出土遺物 (6)	81
第76図	393—O L II 層出土遺物 (7)	82
第77図	393—O L II 層出土遺物 (8)	83
第78図	393—O L II 層出土遺物 (9)	84
第79図	393—O L II 層出土遺物 (10)	85
第80図	393—O L II 層出土遺物 (11)	86
第81図	393—O L II 層出土遺物 (12)	87
第82図	393—O L II 層出土遺物 (13)	88
第83図	393—O L II 層出土遺物 (14)	89
第84図	393—O L II 層出土遺物 (15)	90
第85図	393—O L II 層出土遺物 (16)	91
第86図	393—O L II 層出土遺物 (17)	92
第87図	393—O L II 層出土遺物 (18)	93
第88図	393—O L II 層出土遺物 (19)	94

第89図	393-O L II層出土遺物 (20)	95
第90図	393-O L II層出土遺物 (21)	96
第91図	393-O L II層出土遺物 (22)	97
第92図	393-O L II層出土遺物 (23)	98
第93図	393-O L II層出土遺物 (24)	99
第94図	393-O L II層出土遺物 (25)	100
第95図	393-O L II層出土遺物 (26)	101
第96図	393-O L II層出土遺物 (27)	102
第97図	393-O L II層出土遺物 (28)	103
第98図	393-O L II層出土遺物 (29)	104
第99図	393-O L II層出土遺物 (30)	105
第100図	393-O L II層出土遺物 (31)	106
第101図	393-O L II層出土遺物 (32)	107
第102図	393-O L II層出土遺物 (33)	108
第103図	393-O L II層出土遺物 (34)	109
第104図	393-O L II層出土遺物 (35)	110
第105図	393-O L II層出土遺物 (36)	111
第106図	393-O L II層出土遺物 (37)	112
第107図	393-O L II層出土遺物 (38)	113
第108図	393-O L II層出土遺物 (39)	114
第109図	393-O L II層出土遺物 (40)	115
第110図	393-O L III層出土遺物 (1)	116
第111図	393-O L III層出土遺物 (2)	117
第112図	393-O L III層出土遺物 (3)	118
第113図	393-O L III層出土遺物 (4)	119
第114図	393-O L III層出土遺物 (5)	120
第115図	393-O L III層出土遺物 (6)	121
第116図	393-O L III層出土遺物 (7)	122
第117図	393-O L III層出土遺物 (8)	123
第118図	393-O L III層出土遺物 (9)	124

第119図	393-O L III層出土遺物 (10)	125
第120図	393-O L III層出土遺物 (11)	126
第121図	393-O L III層出土遺物 (12)	127
第122図	393-O L III層出土遺物 (13)	128
第123図	393-O L III層出土遺物 (14)	129
第124図	古墳時代遺構全体図	132
第125図	奈良時代遺構全体図	135
第126図	蓋形態分類図	138
第127図	杯身形態分類図	138
第128図	高杯形態分類図	140
第129図	器台装飾文様分類図	141
第130図	広口壺口頸部形態分類図	141
第131図	中型甕口頸部形態分類図	142
第132図	大型甕口頸部形態分類図	142

図版目次

巻頭図版 1 大庭寺遺跡出土初期須恵器

巻頭図版 2 I区C 全景

I区E 全景

図版 1 遺跡近景

図版 2 I区C 空中垂直写真

図版 3 I区C 16・17-OB (北西から)

I区C 319-OB (北西から)

図版 4 I区C 319-OB遺物出土状況

I区C 327-OB (南東から)

図版 5 I区C 338-OB (手前)、327-OB (中央)、319-OB (奥)

I区C 135-OO (手前)、134-OO (左)、516-OO (右)

図版 6 I区C 134-OO遺物出土状況

I区C 134-OO遺物出土状況

- 図版7 I区C 134・516-OO土層断面
I区C 135-OO（北東から）
- 図版8 I区C 404-OO（西から）
I区C 401-OO（北西から）
- 図版9 I区C （上）391-OG（北西から）、（中央）391-OG土層断面、
（下）391-OG遺物出土状況
- 図版10 I区C 62-OB（東から）
I区C 50-OB（北から）
- 図版11 I区C 84-OB（北東から）
I区C 82-OB（北東から）
- 図版12 I区C 84-OB（手前）、85-OB（中央）、82-OB（奥）
I区C 106-OB（北から）
- 図版13 I区C 399-OO土層断面
I区C 398-OS土層断面
- 図版14 I区C 398-OS土層断面
I区C 312-OB（北から）
- 図版15 I区C 418-OB（北東から）
I区C 292-OB（北東から）
- 図版16 I区E 空中垂直写真
- 図版17 I区E 1-OD（東から）
I区E 225-OH（東から）
- 図版18 I区E 1-OD遺物出土状況（東から）
I区E 1-OD遺物出土状況・土層断面（南東から）
- 図版19 I区E 1-OD遺物出土状況（南から）
I区E 115・153-OD（東から）
- 図版20 I区E 120-OD（東から）
I区E 120-OS遺物出土状況
- 図版21 I区E 120-OS遺物出土状況
I区E 120-OS遺物出土状況

- 図版22 I 区E 120-OS 遺物出土状況
I 区E 120-OS 遺物出土状況
- 図版23 I 区E 165-OD (西から)
I 区E 154-OS 遺物出土状況
- 図版24 I 区E 47-OB (東から)
I 区E 17-OB (東から)
- 図版25 I 区E (上から) 149・150・151・117・118・166-OO
I 区E 3-OS (上)、4-OS (下)
- 図版26 I 区C、I 区E 包含層出土遺物
- 図版27 319-OB・134-OO・516-OO 出土遺物
- 図版28 392-OX・391-OG・396-OS 出土遺物
- 図版29 396-OS 出土遺物
- 図版30 396-OS 出土遺物
- 図版31 396-OS 出土遺物
- 図版32 1-OD・120-OD 出土遺物
- 図版33 154-OS・393-OL 出土遺物
- 図版34 393-OL 出土遺物
- 図版35 393-OL 出土遺物
- 図版36 393-OL 出土遺物
- 図版37 393-OL 出土遺物
- 図版38 393-OL 出土遺物
- 図版39 393-OL 出土遺物
- 図版40 393-OL 出土遺物
- 図版41 393-OL 出土遺物
- 図版42 393-OL 出土遺物
- 図版43 393-OL 出土遺物
- 図版44 393-OL 出土遺物
- 図版45 393-OL 出土遺物
- 図版46 393-OL 出土遺物
- 図版47 393-OL 出土遺物

- 図版48 393-O L出土遺物
- 図版49 393-O L出土遺物
- 図版50 393-O L出土遺物
- 図版51 393-O L出土遺物
- 図版52 393-O L出土遺物
- 図版53 393-O L出土遺物
- 図版54 393-O L出土遺物
- 図版55 393-O L出土遺物
- 図版56 393-O L出土遺物
- 図版57 393-O L出土遺物
- 図版58 393-O L出土遺物
- 図版59 393-O L出土遺物
- 図版60 393-O L出土遺物

表 目 次

第1表	古墳時代掘立柱建物観察表	133
第2表	奈良時代掘立柱建物観察表	136
第3表	393-O L出土遺物器種構成比率表	137
第4表	蓋法量比較表	139
第5表	杯身法量比較表	139
第6表	甕(体部)調整比率表	143
第7表	甕・壺法量比較表	143

付 図 目 次

- 付図1 調査地全体図
- 付図2 I区C遺構全体図
- 付図3 I区D、I区E遺構全体図

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

大庭寺遺跡は堺市大庭寺、小代地区に所在する縄文～中世にかけての複合遺跡である。この地域は大阪南部に広がる泉北丘陵の一角にあたり、陶器窯跡群と呼ばれる窯址群が累々と築かれたところでもある。

この泉北丘陵を分断するように流れ、大阪湾へと注ぐ石津川の水系には深田橋遺跡、小阪遺跡、伏尾遺跡、四ツ池遺跡といった須恵器生産に深く関与した著名な遺跡群が存在している。

日本道路公団の近畿自動車道松原ささみ線建設ルートが、大庭寺遺跡や野々井遺跡の範囲を通過することが明らかとなったため、1986年に大阪府教育委員会の指導のもと、この石津川と和田川間の試掘調査を実施した。

その結果、予想に違わず全域に遺構が存在することが明らかとなった。これをうけて、大阪府教育委員会が調査範囲を決定し、日本道路公団大阪建設局と協議し、1987年から大庭寺遺跡の発掘調査を行なうこととなった。

1987年度は、石津川左岸の沖積地を調査し、初期須恵器を多量に含む石津川の旧河道の一部と、奈良時代および大溝によって区画された中世の集落を検出した。旧河道については上面に奈良、中世の遺構が広がり、旧河道を全掘すればそれらの遺構がすべて消え去ることから保存の方針が立てられ、一部調査したにとどまった。

1988年度は、沖積地の未調査地区と母丘陵の一部について約9200㎡を調査し、古墳時代の掘立柱建物および堅穴住居を中心とする集落と掘立柱建物からなる奈良時代の集落を検出した。

1989年度は、沖積地の未調査地区と母丘陵、更に、石津川左岸の橋脚予定地の試掘調査を行なった。

1990年度は、大庭寺遺跡は協会と大阪文化財センターで調査することとなり、濃登ノ池を境として、石津川寄りから、濃登ノ池までの未調査であった地区の調査を実施した。これによって、おおよそ石津川から濃登ノ池までの遺構の在り方が判明してきた。

第2節 調査の方法（第1図）

大庭寺遺跡の発掘調査区は、里道、池などによる分断に加え、調査年度別で調査区が設定された結果入り組んだ状態にある。今年度の調査区は3箇所の地区にわたり、一部調査期間が重複するものの順次I区D、I区C、I区Eと調査を実施した。それぞれの調査区は既往の調査区と接する部分を有する状況にある。

調査区内の遺跡の位置、地区割りをはじめ、調査の実施にあたっては、(財)大阪府埋蔵文化財協会の「発掘調査規程」に従っている。

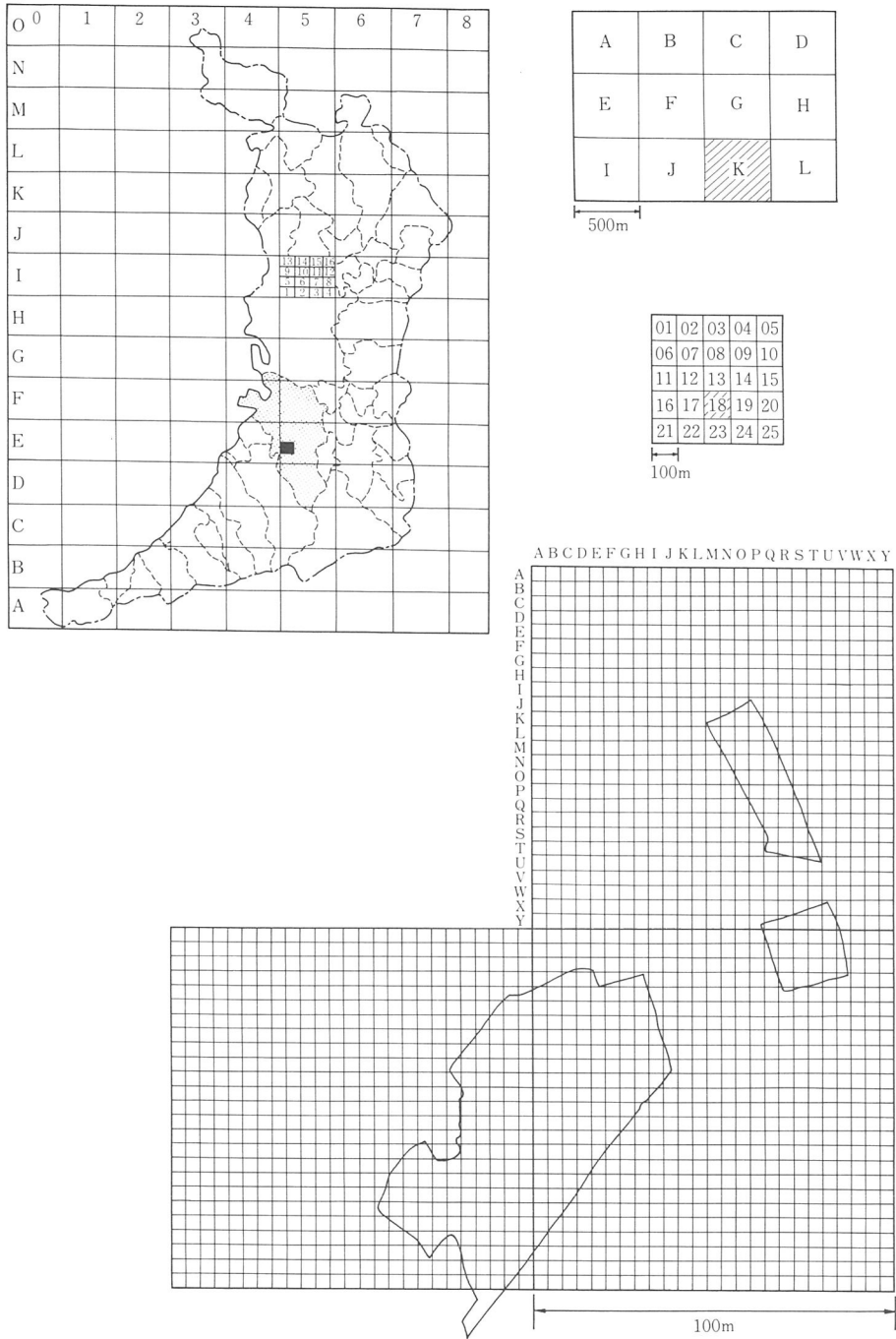
地区割りは全ての調査区について統一しており、遺物・遺構の検出地点を明確にしている。遺跡の位置は国土調査法に基づく新平面直角座標の第VI座標系に基づき表示される。地区割りは、大阪府発行新版（1984年建設省国土地理院承認）2,500分の1の地形図を基準とする。今回の調査対象地は、大E-5-5に位置している。さらに、これを12等分して500m四方の区画を作り、この区画にA～Lの呼称を与える。この区画を25等分し100m四方の区画を作り01～25までの名称を与える。この区画を更に25分割625等分し、4×4mの区画を作り、南北方向（縦軸）を先に、東西方向（横軸）を後にしてアルファベット（A～Y）が与えられ、5桁の記号で標記される。

掘削は耕土・床土、攪乱部分を機械により掘削し、遺物包含層の掘削、遺構の検出は人力による掘削を行った。

以上に従って出土遺物は取り上げられ、遺構はその位置する区画が記入される。

遺物登録番号は全調査区において、また遺構番号は各々の調査区において命名したことにより、各年度毎、調査区毎に同一の番号が生じている。既往の調査については既に報告済みである。

図面は航空測量を実施し、20分の1図化が基本となっているが、その他については調査中に適宜図面を作成している。



第1图 地区割图

第2章 周辺の遺跡と既往の調査

第1節 周辺の遺跡（第2図）

大庭寺遺跡は、大阪府堺市大庭寺・小代にまたがる、縄文時代から中世までの複合遺跡として知られる。当該地は、石津川の中流域西岸付近の拇丘陵上に位置し、標高25m程の沖積段丘から標高37m程の中位段丘上にかけて遺跡の分布が認められる。

大庭寺遺跡の位置する泉北丘陵の、なかでも石津川流域における歴史は、西浦橋遺跡、万崎池遺跡、野々井遺跡、鈴の宮遺跡、伏尾遺跡などで出土した遺物から、旧石器時代以来まで遡ることが判る。

太平寺遺跡、野々井遺跡、小角田遺跡、小阪遺跡、伏尾遺跡など縄文時代中期までは遺物出土の報告が知られるのみで、明確な遺構は確認されていない。各々遺跡の立地からは、人々の活動が石津川流域を中心に展開されたことを雄弁に物語っている。

縄文時代後期から晩期にかけては、浜寺石津町東遺跡、鈴の宮遺跡、西浦橋遺跡など遺構の検出事例の増加に加え、四ツ池遺跡など後の新たな時代につながる拠点的な集落などが営まれ始めた。

縄文時代晩期の遺物・遺構が検出される遺跡の多くは、弥生時代前期においても引き続き生活の痕跡をとどめ、他に新たな遺跡の成立も垣間みられる。石津川水系の豊富な水資源を背景に、縄文時代の人々は続く弥生文化を比較的容易に享受すると同時に、その活動範囲を、石津川流域から和田川、陶器川など、更に広範囲にわたる支流域の氾濫原や低地に求めた傾向が指摘されよう。

弥生時代においては農耕が生活の主要基盤と変化したようであるが、市内においても現在までには弥生時代に比定される水田址は確認されていない。しかし各遺跡から出土例の伝えられる石庖丁の存在から、集落近傍の低地、谷部などで水田経営が展開された可能性は否定されないだろう。

野々井遺跡では、弥生時代中期に属する直径10m以上を測る大型の竪穴式住居が検出され、弥生時代後期から古墳時代初頭においては、昭和池遺跡、山田北遺跡など前代からの継続性がなく短期間の内に廃絶する新たな集落が丘陵上に好んで営まれるなど、泉北丘陵に展開する集落の特質が抽出される。泉北丘陵における弥生時代の集落の消長は、大局的

には、縄文時代以降中核的拠点集落として展開する四ツ池遺跡とは明らかに異なった様相を示している。

古墳時代においては、古墳時代初頭まで短期間存続する集落が成立するほか、古墳時代前期には主体部に割竹形石棺をもつ二本木山古墳、須恵器生産の前夜築造された小代古墳群など、陶邑窯跡群の出現を見るまで泉北丘陵での人類の足跡は前代に比べ明らかに少ないと言える。

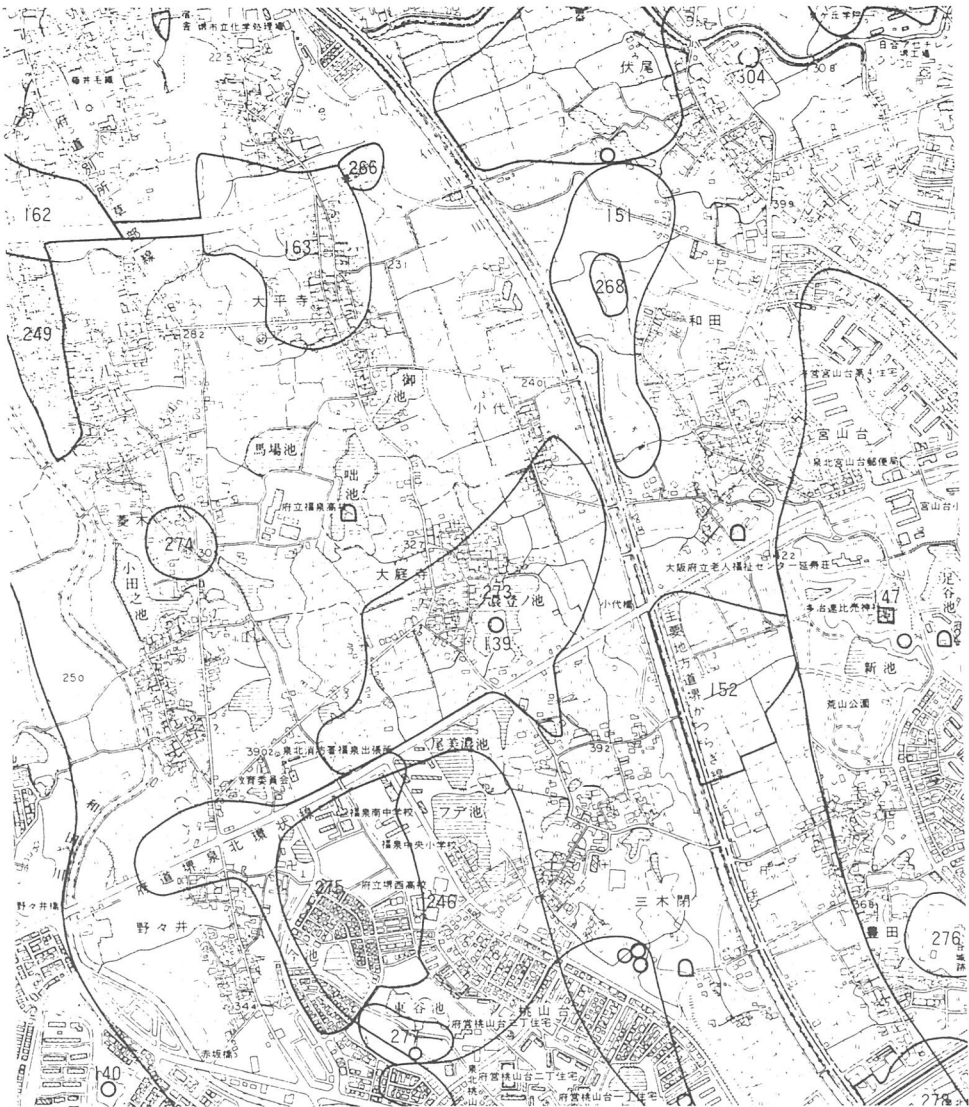
約千基とされる須恵器窯が築かれた日本最大の陶邑窯跡群が展開する古墳時代中期以降、泉北丘陵では空前の開発に曝された。この時期の遺跡としては、田園遺跡、野々井遺跡、西浦橋遺跡、万崎池遺跡、菱木下遺跡などの集落が次々に成立する。また、須恵器出現期には小阪遺跡、伏尾遺跡など須恵器生産に大きく関連する集落、小角田遺跡、辻之遺跡、深田橋遺跡など須恵器生産とその流通に密接に関連すると考えられる集落が新たな出現を見る。

また伏尾遺跡、野々井遺跡、野々井南遺跡などでは古墳群が確認されるほか、後期以降では横穴式石室・木心粘土室・磚積横穴式石室を主体部にもつ牛石古墳群、「カマド塚」と称される主体部をもつ檜尾古墳群、陶器千塚などの造墓活動も活発化する。さらには万崎池遺跡、菱木下遺跡、野々井遺跡、伏尾遺跡で土壙墓群が検出されている。

さて、大庭寺遺跡の所在する当該地付近一帯は、『和名類聚抄』による和泉国大鳥郡上神郷に属していたと考えられる。上神郷は石津川を中心として東岸の伏尾丘陵から西岸の梅丘陵を含み、その郷域はほぼ自然地形にそくしたかたちで理解されよう。『新撰姓氏録』から地名にもある大庭造の存在が知られその関係が推し量られるほか、『行基年譜』に記載の大庭院存在の手がかりが与えられている。考古学的にも、瓦・独尊埴仏・「大…」とヘラ書きされた風字硯など上述に関連する遺物の出土事例が既に報告されている。また、光明池38-II号窯跡からは「大庭造国□」とヘラ書きされた平瓦が、岡田寺跡からは「大庭寺瓦也仁安四年□月廿五日修理クワライカウ」と瓦当面に陽刻された軒平瓦が出土している。

周辺の奈良時代の遺跡としては、鶴田池東遺跡、深井清水町B遺跡などで掘立柱建物が検出されているほか、梅遺跡では須恵器を中心とした遺物が豊富に出土している。また小阪遺跡で検出された水田は、条里型地割が8世紀まで遡る可能性を指摘している。

続く平安時代に属する遺跡はその数を減らし、大庭寺遺跡においても先の奈良時代に比べ遺構は希薄である。中世ではより耕作域として土地利用目的が変化していく。



第2図 周辺遺跡分布図（堺市文化財地図）

- | | | | | | |
|-----|---------------|-----|-------|-----|--------|
| 139 | 野園池古墳 | 181 | 小阪遺跡 | 275 | 野々井遺跡 |
| 142 | 牛石遺跡 | 246 | 陶邑窯跡群 | 276 | 小谷城跡 |
| 147 | 多治速比売神社本殿（重文） | 249 | 菱木遺跡 | 277 | 野々井南遺跡 |
| 151 | 伏尾遺跡 | 266 | 太平寺遺跡 | 278 | 豊田遺跡 |
| 152 | 深田橋遺跡 | 268 | 小代古墳群 | 281 | 高倉73号窯 |
| 162 | 菱木下遺跡 | 273 | 大庭寺遺跡 | 304 | 関宿藩陣屋跡 |
| 163 | 万崎池遺跡 | 274 | 菱木上遺跡 | | |

第2節 既往の調査（第3図）

1986年度の調査

近畿自動車道和歌山線（現松原すさみ線）建設予定に伴ない、堺市南西部の小代地区から檜尾地区に至る全長約3kmに81箇所のグリットを設定し、試掘調査を行なった。調査対象となった地域は石津川から和田川にかけての丘陵（榎丘陵）と、和田川の沖積地および信太山丘陵の一部で、丘陵・河川を横断する形となった。

その結果、大庭寺遺跡では、石津川寄りの氾濫原では古墳時代～中世にかけての遺物包含層と古墳時代の河道、奈良時代の柱穴等を検出した。丘陵上では、古墳時代の溝、柱穴の他、古墳時代や奈良時代の須恵器を検出した。これによって全面に遺構が存在することが明らかとなった。

1987年度の調査

前年度の成果に基づき石津川西岸の沖積地を調査した。時代順にその成果をあげれば、縄文時代の石津川の河道と縄文土器を含む不定形な落ち込みを数箇所確認した。弥生時代では中期の土器を含む溝、後期の竪穴住居1棟を検出した。古墳時代では祭祀が行なわれたと見られる素掘りの井戸や、「ヒト」を線刻した板状の木製品が出土した6世紀後半の溝、そして特筆すべきは、幅約60mにおよぶ石津川の河道を発見したことである。この河道からは弥生後期の土器を初現として、膨大な量の須恵器が検出された。特に、須恵器は初期のものが多く、「陶邑」を見直す貴重な資料を提供した。

奈良・鎌倉時代では集落跡が確認された。奈良時代では、倉庫2棟を含む掘立柱建物12棟、建物群に付属し「上」「清水」と「水」と書かれた墨書土器が出土した木組みの井戸1基、さらには建物付近からは、円面硯、風字硯等が発見され、当時の有力支配者層の集落の一部が初めてわかってきた。鎌倉時代では、竈を付属施設として持つ掘立柱建物と、中小の溝によって区画された掘立柱建物群を主要な建物として、これらを「コ」の字型に囲む東西1町（108m）、南北1町以上の規模を持つ大溝（幅約2m）を検出した。溝の方向は周囲の条里と符合することから、その出現が両者同時期の13世紀であることがわかってきた。ただし、集落については15世紀にはもう廃棄され、その機能を果していないことも確認された。

1988年度の調査

石津川西岸の沖積地の一部と丘陵およびその斜面部を調査した。沖積地では、弥生時代

後期の竪穴住居、奈良時代の掘立柱建物の資料を追加した。丘陵とその斜面では大きな成果をあげることができた。丘陵は削平はうけているものの初期須恵器を含む5世紀前半の土坑や溝、5世紀～6世紀にかけての掘立柱建物7棟が確認された。建物は2×2間の倉とみられるものが多く、さらに全域に広がる傾向を見せた。斜面地は、削平を免れたため、丘陵以上の成果があった。初期須恵器を含む竪穴住居2棟と溝、土坑を始めとして5世紀～6世紀にかけての掘立柱建物3棟を検出するとともに、集落の内外を画する溝も検出された。これらの成果によって、集落の存続時期と石津川旧河道の流路の変遷が互いに密接な因果関係の上に成り立っていることがわかってきた。

奈良時代の掘立柱建物は19棟発見されており、総数では31棟となり、何時期かにわたって営まれていたことがわかってきた。遺物では「大」とヘラ書きされた瓦や須恵器あるいは埴仏等が出土し、当初は礎石に使用されたと見られる花崗岩の割り石を建物の束に再利用した例も発見されるに至り、行基年譜にみられる「大庭院」を想起させる資料も発見されている。

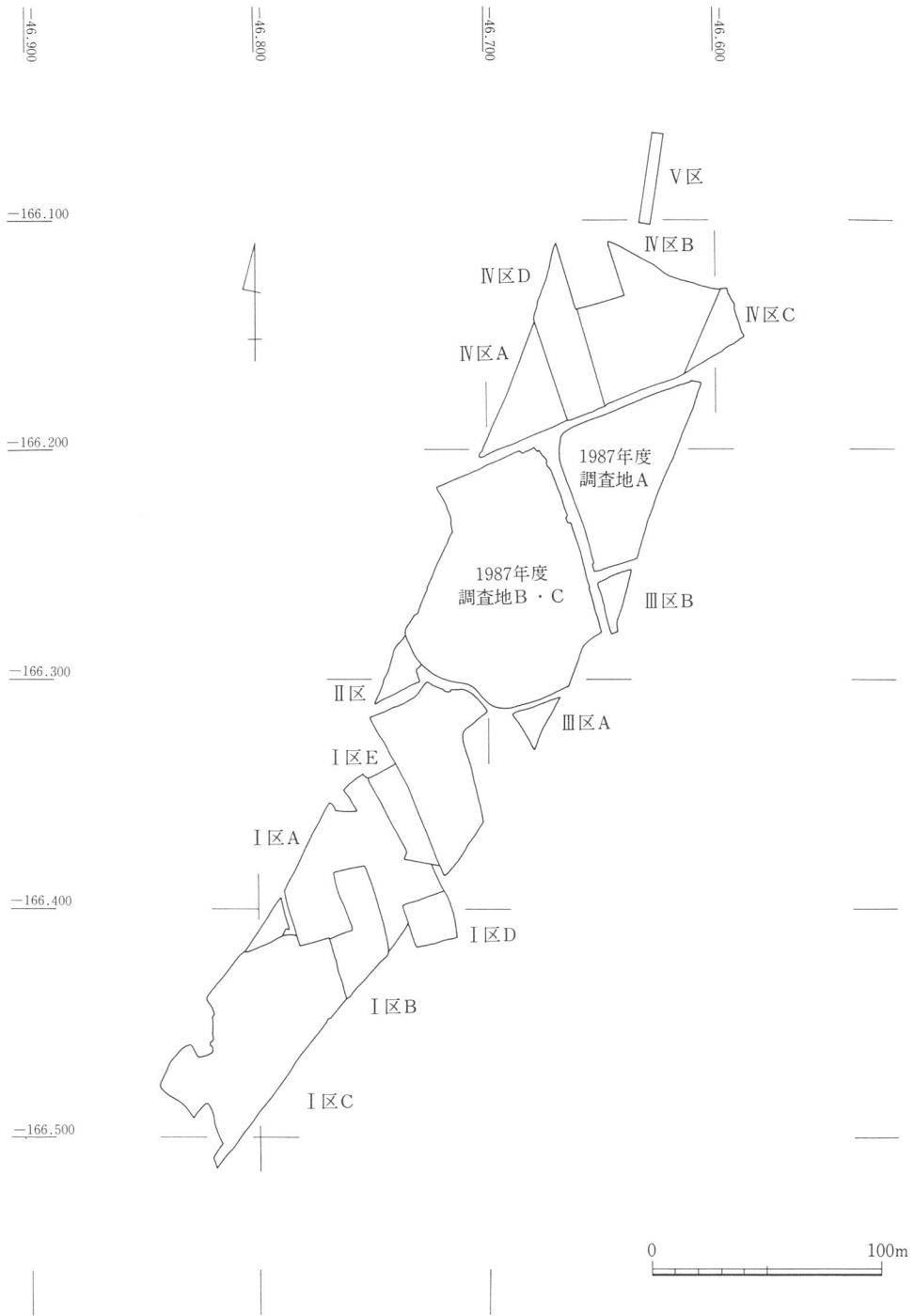
平安時代の掘立柱建物も9棟が初めて確認された。建物群はさらに南に延びて存在することも予想されるに至り、連綿と営まれた遺跡であることが確認された。

1989年度の調査

丘陵と沖積地の未調査区の調査を行なった。その結果、丘陵からは古墳時代7棟、奈良時代2棟を含む16棟の掘立柱建物が検出された。奈良時代の建物が丘陵からも発見されたことによって、大庭寺遺跡における奈良時代集落はさらに大きな広がりを見せることが確実となった。それは、大きく4群にわかれることも判明してきた。また、丘陵の開発もこの頃、拍車がかかったものと推察されるに至った。沖積地の調査では、弥生時代中期の溝が何条も検出されたものの、直接集落に関係する遺構は検出できなかった。これまで住居が検出されたのは、今回の調査地点より南のやや高い位置にあたるため、あるいは集落からはずれているのかもしれない。

1990年度の調査

石津川よりの丘陵緩斜面（I区E、I区D）と濃登ノ池までの未調査区（I区C）の調査を実施するに至った。その成果については、第III章以下に記述するものである。



第3図 調査地地区割全体図

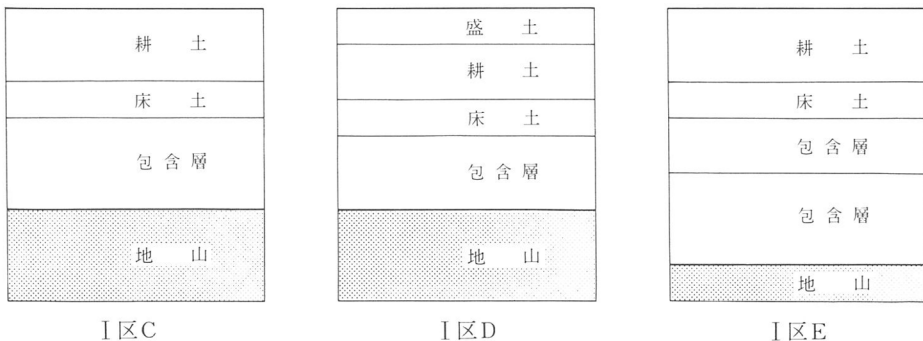
第3章 調査の成果

第1節 基本層序と遺物包含層の出土遺物 (第4・5図、図版26)

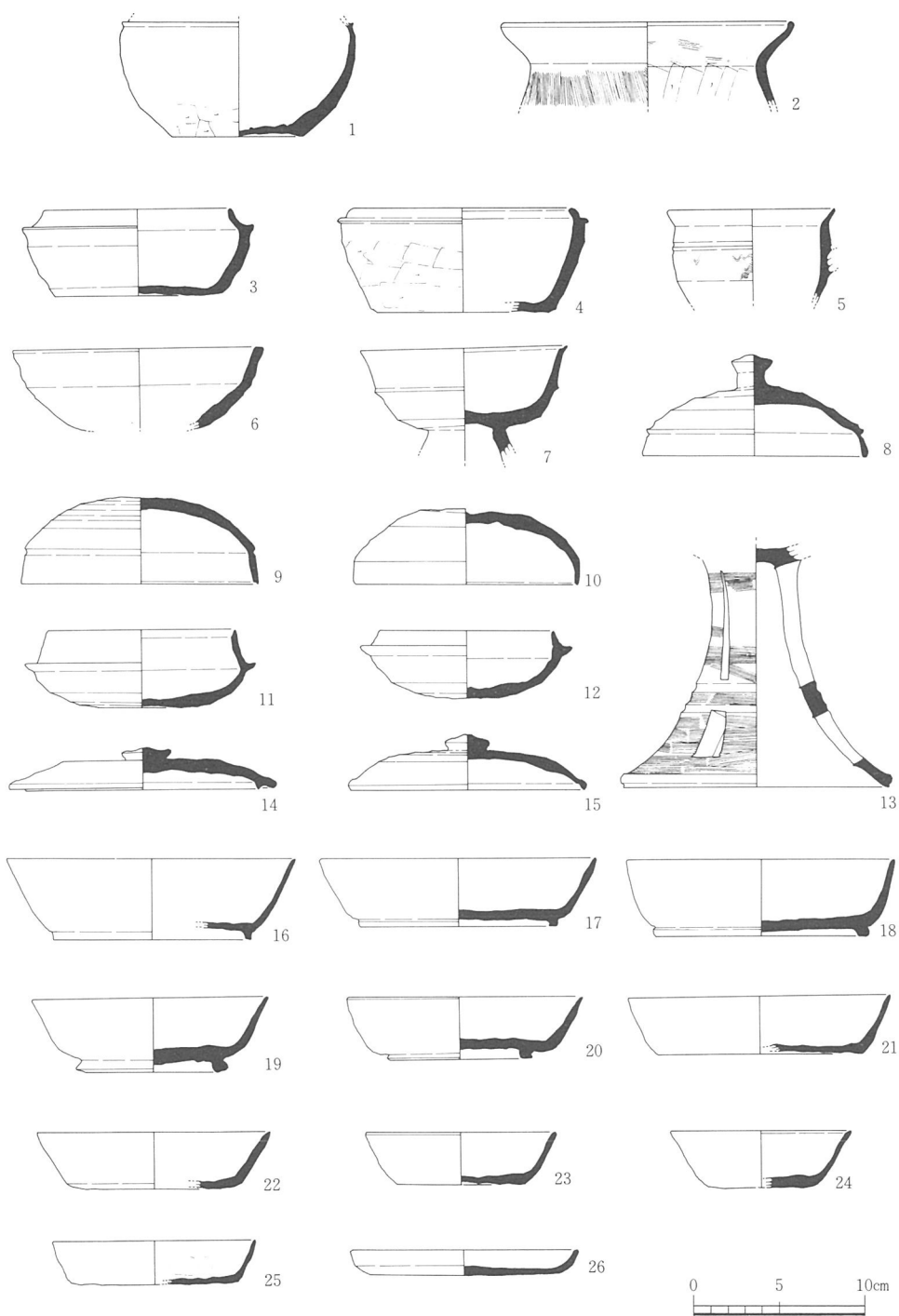
今回発掘調査を行った調査区は、中位段丘上に位置する。調査前は水田として利用され、比較的平坦な面を有する。現代耕土・床土を除くと黄褐色系シルト質粘土層の地山が露呈し、これをベースとして遺構が検出される。検出された遺構は、その深さから数次にわたる削平を受けると考える。部分的には黄褐色粘土の遺物包含層が認められ、遺物は全体的に著しいローリングを受けるが、いずれも遺構と直接的に関連するものと思われる。

I区D・I区Eは丘陵東側斜面の中位段丘上に位置し、東方の石津川へ向かっては沖積段丘が展開する。現況で1mの段差が認められ、地形的緩急の著しい地点と言える。I区Dは水田として利用された後宅地となり、既に著しい削平が認められ、遺構・遺物の遺存状態は悪い。I区Eでは現代耕土・床土下に30~50cmの層厚を測る遺物包含層が認められ、東接する既往の調査II区の調査結果と一致する。遺物包含層は灰褐色系の粘質土で、更に上下2層に細分が可能である。下層は上層に比べ褐色味が増し、古墳時代から奈良時代の遺物包含量が増加する傾向があり中世の遺物は認められない。遺物包含層上面から検出される遺構はなく、地山の上面で検出される遺構はやや削平を受ける。

第5図に示した遺物のうち、(1・2)はI区Cの、その他はI区Eの出土遺物である。瓦器は微量出土しているが図化できなかった。図示した奈良時代の遺物は全て須恵器であるが、この他に土師器片、瓦片などが少量出土している。(3)の杯身は土師質で、外面に黒斑をもつ。



第4図 基本層序模式図



第5图 I区C、I区E包含层出土遗物

第2節 I区Cの調査成果

調査地点の概要（付図2）

調査は、1989年度にI区と呼称した丘陵部のうち、未調査であったC地点・D地点・E地点について実施した。C地点は1989年度に調査したA地点の南側部分で、丘陵の鞍部にあたる。過去の調査では掘立柱建物が多く検出され、多大の成果をあげた地点に隣接するため、今年度の調査でも成果が大いに期待された地点である。

調査では、丘陵鞍部から掘立柱建物22棟（建て替え含む）以上、土坑8基以上、溝が8条以上、古墳が1ないし2基、弥生土器～中世の瓦器まで含む開析谷を検出した。

時代別の内訳は、古墳時代が掘立柱建物5棟、土坑7基、古墳1ないし2基で、奈良時代が掘立柱建物7棟、土坑1基、溝が4条である。平安時代は掘立柱建物が2棟、溝1条、中世は掘立柱建物が2棟である。他に時期不明の掘立柱建物が6棟、溝3条以上存在している。建物に伴わない柱穴を約370基検出した。特筆すべき点として開析谷からは最古型式の須恵器が膨大な量出土していることが挙げられる。

丘陵は、かなり削平を受けているため、遺構の残存状況が悪い。これは奈良時代以降の開発によるところが大きい。

以下、古墳、奈良、平安、中世、時期不明の順で、検出した遺構について記述を進める。

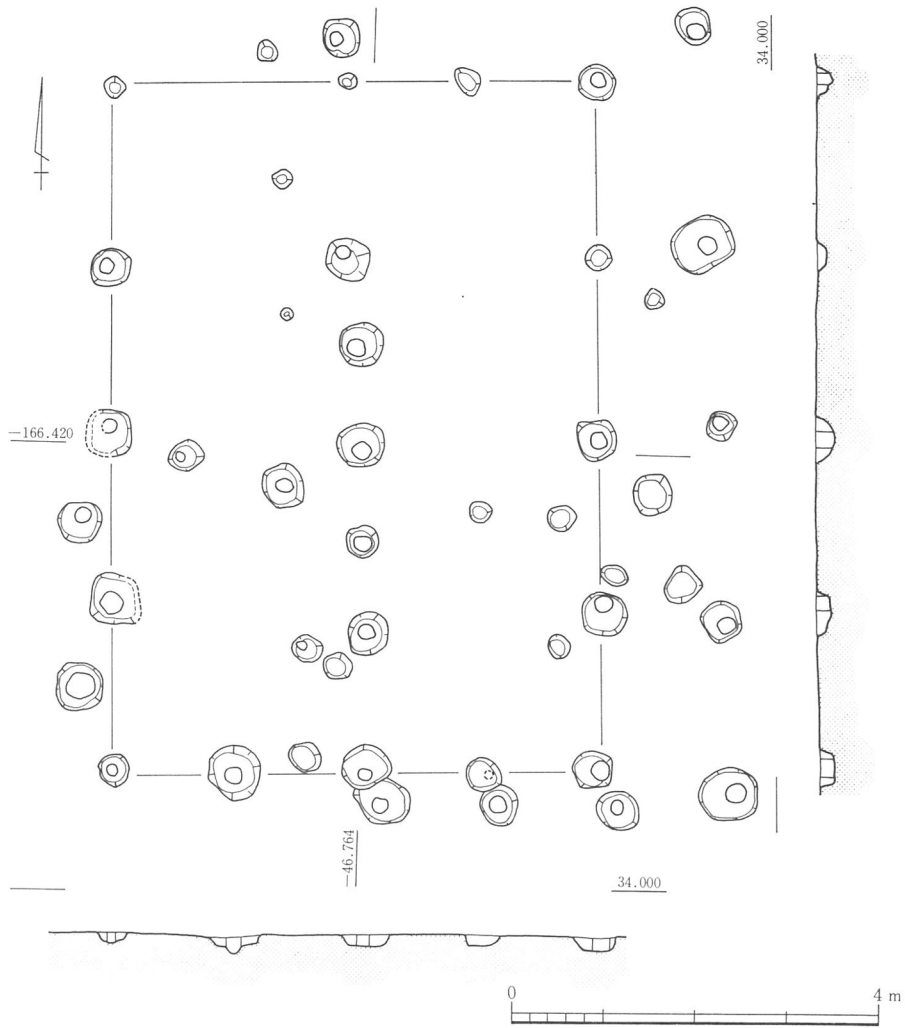
第1項 古墳時代

578-O B（第6図）

1989年調査の578-O B関連の柱穴を検出した。これによって建物の規模が明らかとなった。遺構の検出レベルは33.50mである。桁行4間（南北7.50m）、梁行4間（東西5.36m）の掘立柱建物で面積は40.2㎡を測る。桁行の柱間は1.8m等間で、梁行の柱間は1.3～1.4mである。主軸方位はほぼ真南北のN-2°-Wである。

掘方は楕円形あるいは隅丸方形で0.2～0.6mと不揃いである。不揃いなのは削平による影響が大である。柱痕跡は約20cmで、柱穴底のレベルは33.32～33.42mである。柱穴埋土は2.5Y7/2シルトで柱心は7.5YR4/4シルトである。

柱は総柱ではなく、床束の本数が少ないため重量物に耐える構造としては不向きで床張りの住居と考えられる。重複する570-O BがII型式4段階の時期で、その建物の建て替えと考えられる。



第6図 578-OB平面・断面図

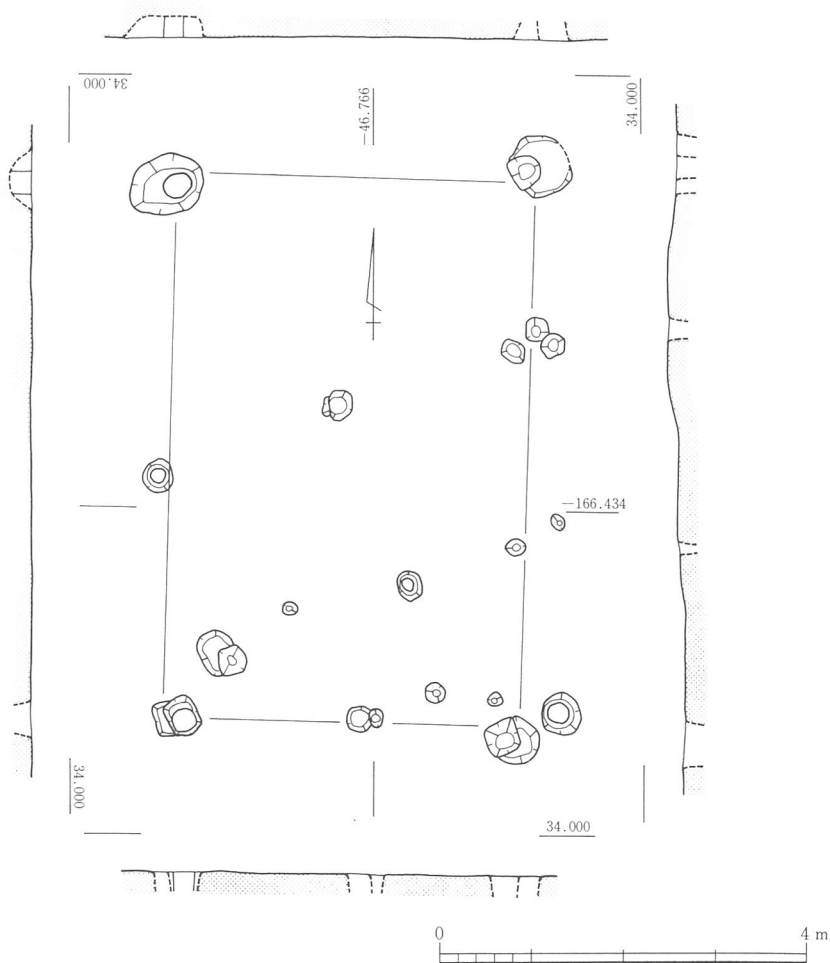
16-OB (第7図、図版3)

2棟の重複する建物で、K23HHに位置する。16-OBが17-OBより重複関係から新しい。建物の検出レベルは、33.6mである。16-OBは桁行3間（南北6.02m）、梁行2間（東西3.8m）の建物で面積は22.9㎡を測る。桁行の柱間は約2mで梁行の柱間は約1.9mである。主軸の方位は、磁北に沿ったNS-0である。掘方は、楕円形か隅丸方形を呈し約0.3m、柱痕跡は0.2~0.3mである。柱穴埋土は2.5Y7/2シルトで、柱心は2.5Y7/4シルトである。

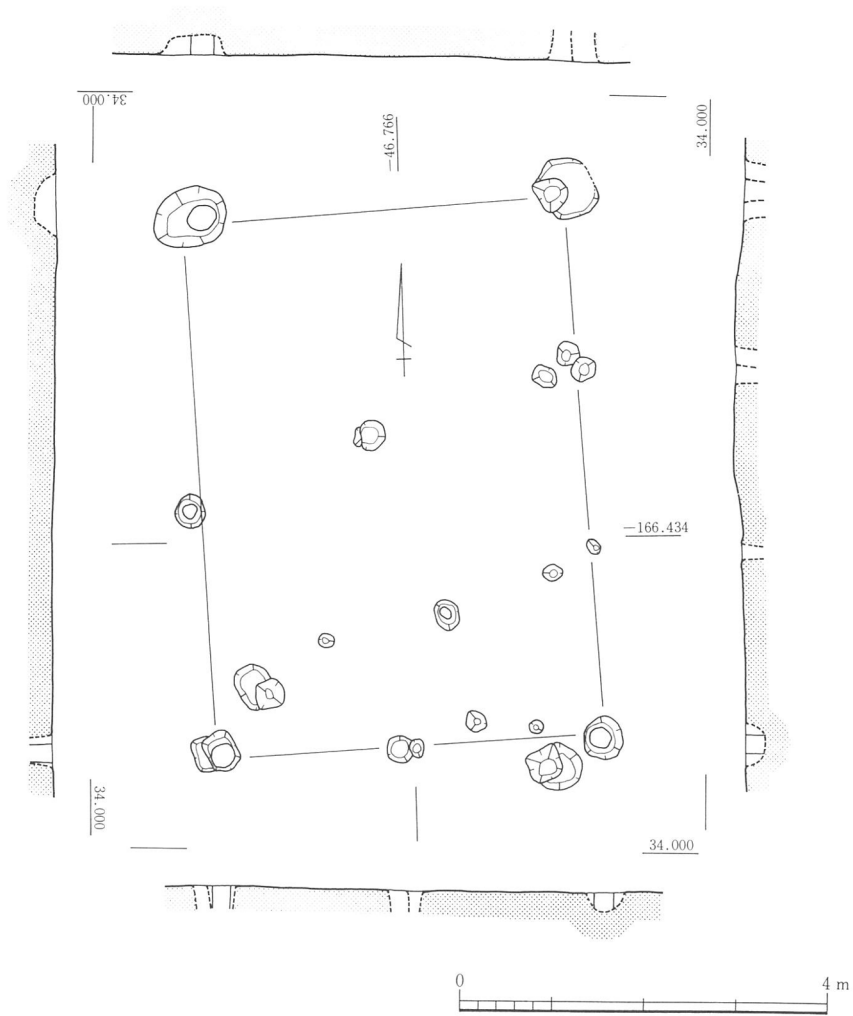
17-OB (第8図、図版3)

K23HHに位置し、桁行3間(南北6m)、梁行(東西4.3m)の建物で面積は25.2㎡を測る。桁行の柱間は2m等間で、梁行の柱間は2.15mである。主軸方位はN-2°-Wで16-OBより2°西に偏しているが、ほぼ同じ位置に建てられている。

掘方は楕円形あるいは円形で0.4~0.6mと不揃いである。柱痕跡は約25~28cmである。柱穴埋土は10Y R5/2シルトで柱心は10Y R5/3シルトである。側柱だけで構成される建物であることから倉ではなく住居としての可能性が高い。構造、規模、位置からみて建て替えの可能性が考えられる。



第7図 16-OB平面・断面図



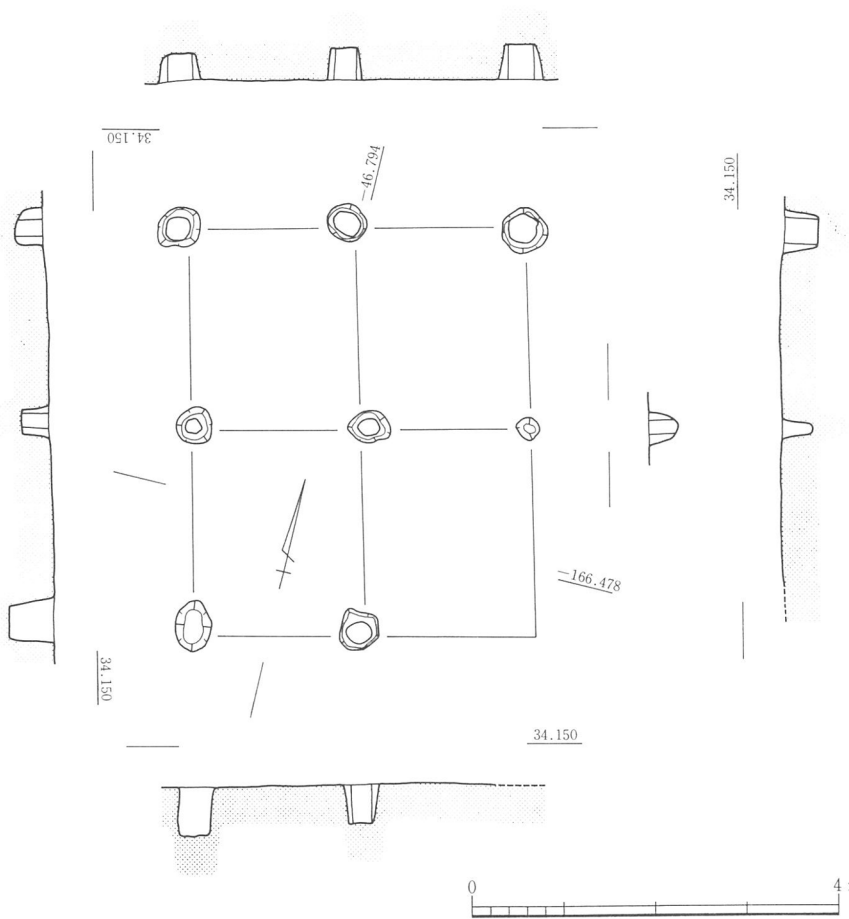
第8図 17-OB平面・断面図

遺物は須恵器と土師器が細片ではあるが出土している。時期については、他の古墳時代の建物群と埋土が同じであることから同時期に比定した。

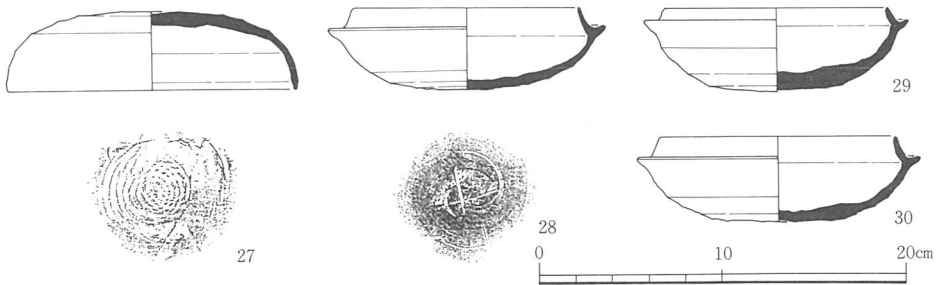
319-OB (第9・10図、図版3～5・27)

K23A Sに位置する。3棟並列する建物のうち、東側の建物で3棟のなかでは一番大きい建物である。桁行2間(南北4.45m)、梁行2間(東西3.70m)の建物で面積は16.5㎡を測る。桁行の柱間は2.15m、2.30mとやや不揃いである。梁行の柱間は1.8m、1.9mである。主軸方位はN-15°-Wである。掘方は楕円形あるいは隅丸方形で0.4~0.5mと不

揃いである。不揃いなのは削平による影響が大である。柱痕跡は約0.2~0.3mである。柱穴埋土は10Y R7/4シルトで、柱心は10Y R7/3シルトである。柱は総柱であることから倉



第9図 319-O B平面・断面図

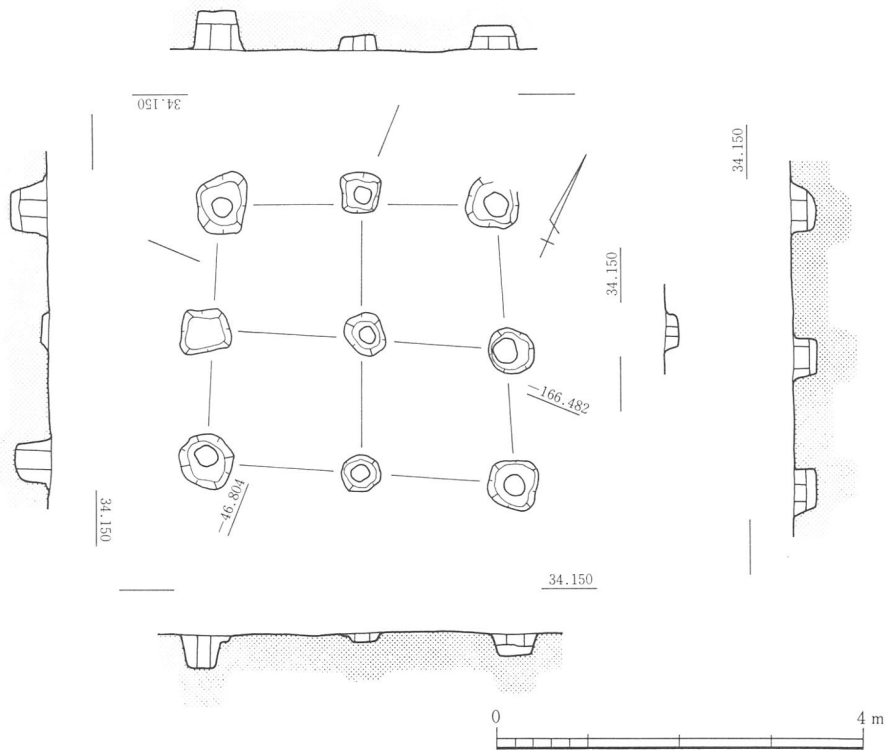


第10図 319-O B出土遺物

と見られる。南西隅の柱穴からは、須恵器の蓋（27）と杯身（28～30）、甕の破片が出土した。蓋（27）は口径15.8cm、器高4.2cmで内面には同心円の当て具痕が顕著に残る。杯身は3点出土し、口径は12.4～12.6cm、器高は4.4～4.6cmとほぼ近似する量である。そのうち杯身（28）には「×」印のへら記号が認められる。須恵器のその形態からみて、中村編年のII型式3段階頃と考えられ、建物の時期もこれを前後する時期と考えられる。

338-O B（第11図、図版5）

K22XUに位置し、3棟並列する建物のうち、真ん中に位置する掘立柱建物である。建物の検出レベルは33.60～33.70mである。桁行2間（南北3.00m）、梁行2間（東西3.00m）の総柱建物であるが、西側柱間は2.85mと短く、南側柱間は3.3mを測り、したがってややいびつな建物となっている。面積は9.4㎡を測る。主軸方位はN-19°-Wである。掘方は楕円形あるいは隅丸方形で、0.4～0.75mと不揃いであるが概して大きい。柱痕跡の径は、約0.25～0.3mである。柱穴底のレベルは建物中央の東柱が最も浅く33.50mで、

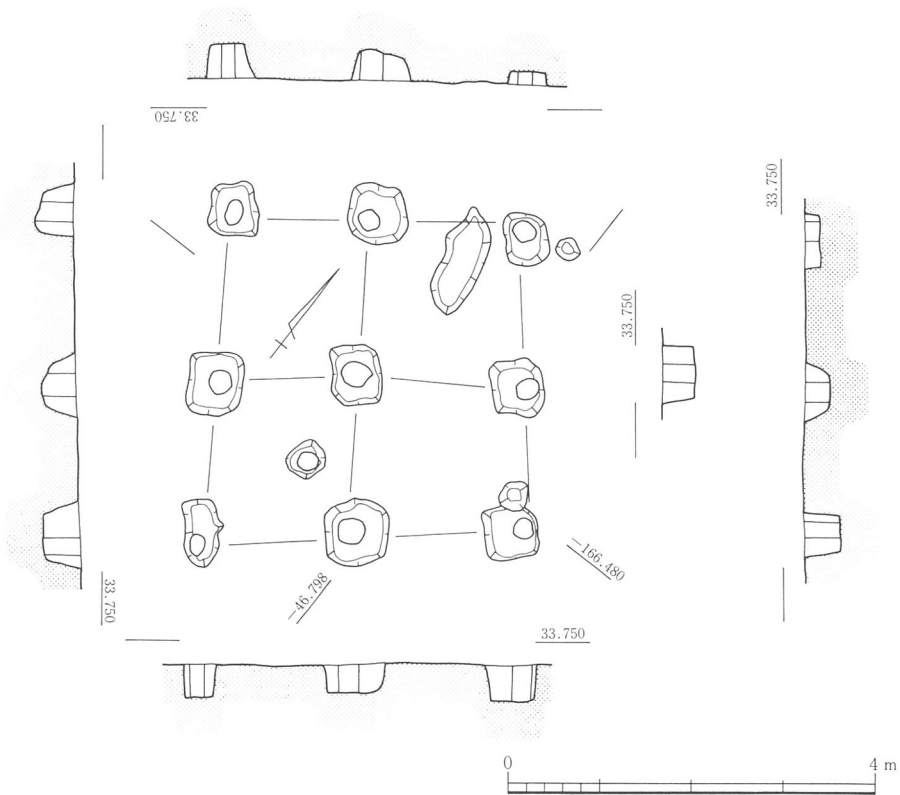


第11図 338-O B平面・断面図

他のレベルは33.28～33.40mを測る。柱穴埋土は10Y R7/4シルト、柱心は10Y R6/2シルトである。柱は総柱で総じて掘方もしっかりしていることから倉と見られる。遺物は出土していないが、319-OBと埋土が酷似することから、同時期と考えられる。

327-OB (第12図、図版4・5)

K23S Aに位置し、3棟の建物のうち、西側に位置する掘立柱建物である。遺構の検出レベルは33.6m前後である。桁行2間(南北3.60m)、梁行2間(東西3.6m)の掘立柱建物で面積は12.96㎡を測る。桁行の柱間は1.8m等間で、梁行の柱間は1.7～1.94mである。主軸方位はN-35°-Wである。掘方はおおよそ隅丸方形で、規模は0.5～0.65mと他に比べて大きい。柱痕跡は約20cmである。柱穴埋土は10Y R6/3シルトで、柱心は10Y R5/6シ



第12図 327-OB平面・断面図

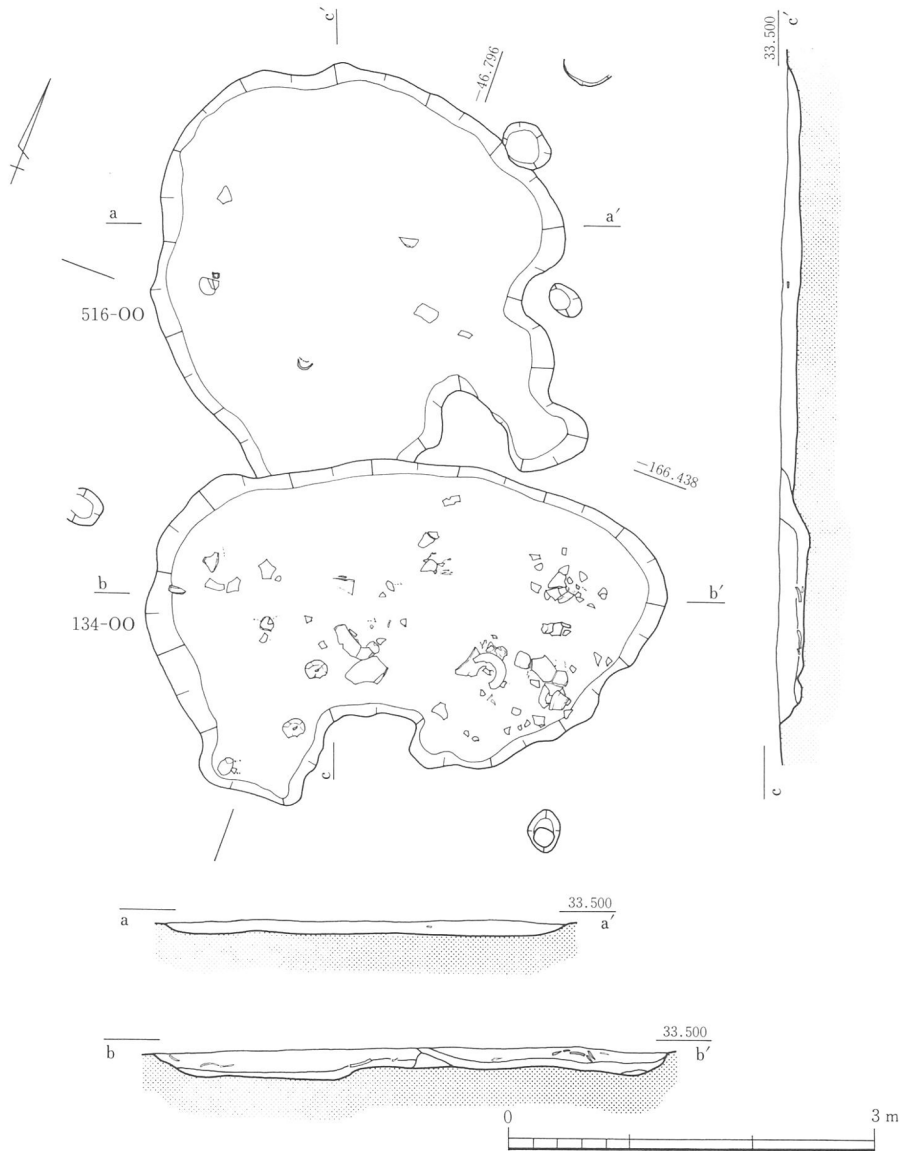
ルトである。柱は総柱で倉と考えられる。

134-OO (第13・16図、図版5～7・27)

K23A Jに位置し、516-OOと重複する土坑である。新旧関係は134-OOが新しいが、

埋土は酷似し、ほぼ同時期と見られる。規模は長軸が2.83m、短軸で1.40mを測る。土坑の上部は削平されており、プランは現状では不整形で、深さは0.15mである。埋土は2層からなり、上層は10Y R5/2シルトで、下層は10Y R4/2シルトである。

遺物は初期須恵器が廃棄された状態で検出されている。遺物の多くは土坑底から遊離した状態で主に上層から検出されている。出土した土器はすべて須恵器で直口壺(31)、高



第13図 134・516-〇〇平面・断面図

杯(32・33)、小型平底埴(34)、甕がある。直口壺は口縁径14.3cm、器高15.4cmでこのタイプとしては小型品で、凸帯あるいは波状文などの施文は認められない。高杯は、無蓋(32)と有蓋(33)がある。無蓋高杯の杯部は、蓋杯の蓋を逆にした形状で、有蓋高杯は杯部が深く釜形を呈するが、ともに多窓のスカシを持つ高杯である。小型平底埴(34)は朝鮮半島の影響を如実に示す土器の一つで、口径7.1cm、器高6.5cmの法量を持った土器である。須恵器から見た土坑の時期はI型式1段階までに収まると考えられる。

516-〇〇(第13・16図、図版5~7)

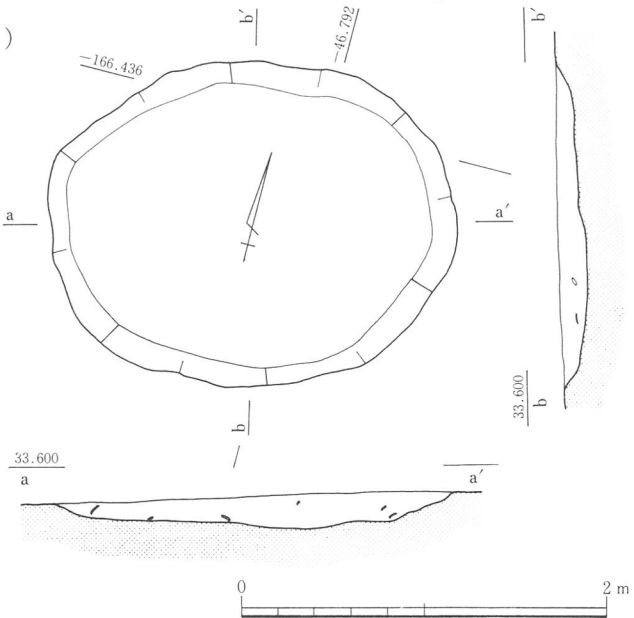
K23A Iに位置し、134-〇〇と重複する。東西2.2m、南北は134-〇〇によって切られているが、現状で2.2mを測る。プランは現状では不整形で、深さは0.08mである。埋土は2層からなり、上層は7.5Y R4/3シルトで、下層は10Y R6/4シルトである。

遺物は134-〇〇同様、初期須恵器が廃棄された状態で検出されている。遺物の多くは土坑底から遊離した状態で主に上層から検出されている。

遺物は把手付椀(35)と鉢(36)が出土している。ともに初期須恵器である。把手付椀は口縁径10.5cm、器高6.8cmの法量で、体部は施文がなくやや丸みを持ち、底部は平底で把手も大きめである。鉢は口縁径15.2cm、器高11.3cmの法量で、口縁部と体部の境には不明瞭な段を有する。底部は平底で、静止ヘラケズリが体部下半に明瞭に残る。須恵器から見た土坑の時期は134-〇〇と同様、I型式1段階までに収まると考えられる。

135-〇〇(第14図、図版5・7)

K23B Jに位置する土坑で、遺構のプランは楕円形である。長軸2.23m、短軸1.78m、深さは0.17mを測る。遺構の検出面は33.42m、土坑底はフラットでレベルは33.25mである。この土坑についても上部が削平されていると見られ、埋土は2.5Y6/3シルトの単一層である。遺物は、須恵器蓋が出土している。遺物からII型式2段階と考えられる。

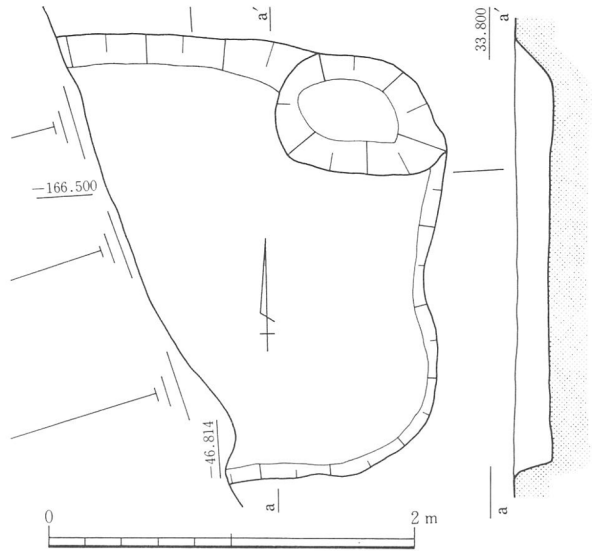


第14図 135-〇〇平面・断面図

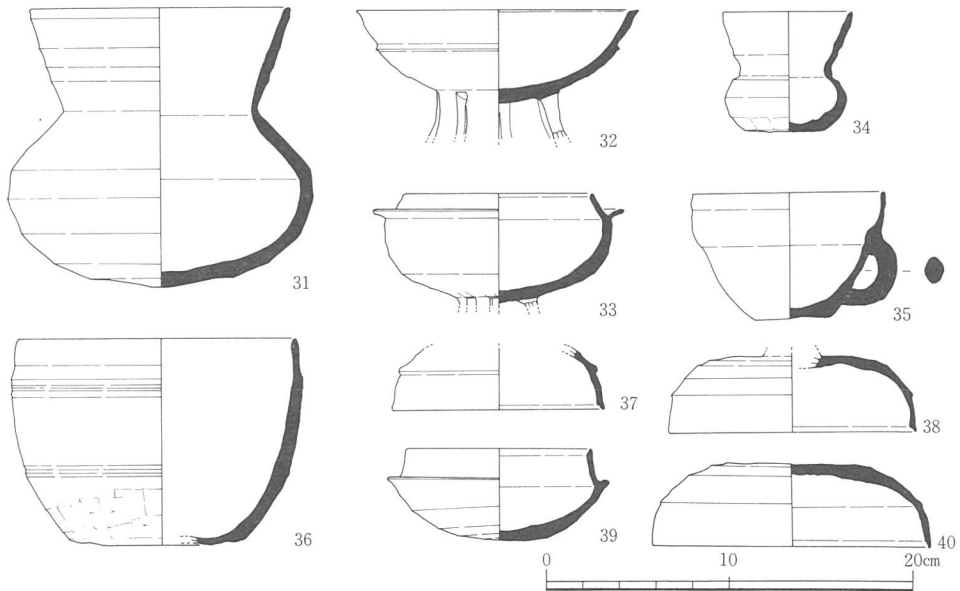
539-〇〇 (第15・16図、図版27)

K22WAに位置する土坑で、南北辺が2.4m、東西辺が開墾で削られているが現状では1.6mを測る。遺構の検出レベルは33.68m、土坑の底は比較的平坦で、レベルは33.48mである。したがって、深さは20cm程である。埋土は10Y R6/6シルトの単一層である。

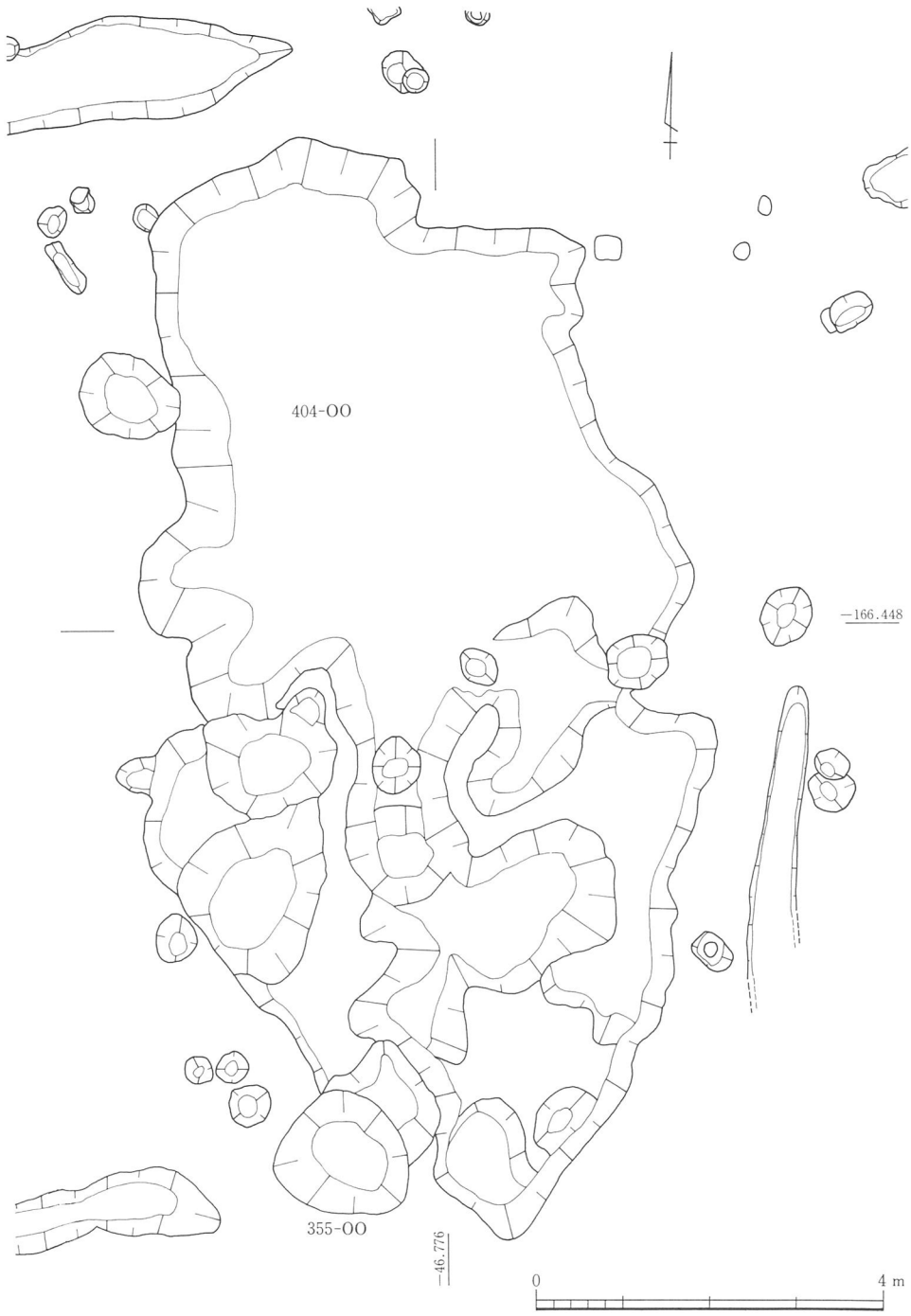
遺物は須恵器がほとんどで、蓋杯の蓋(37)と身(39)が出土している。蓋(37)と身(39)は、II型式1段階頃の範疇に収まるものである。



第15図 539-〇〇平面・断面図



第16図 134・516・539・355-〇〇出土遺物



第17图 404-00平面·断面图

404-〇〇 (第17図、図版8)

K23 I LからK23 I Nにかけて位置する土坑である。ほぼ南北に延びており、長軸6.48 m、2.42~3.40mを測る。複数の小土坑によって複雑に切り合って大きな土坑を形成している。したがってプランは不整形をしている。検出面は33.30~33.40mである。この小土坑は最低でも15基以上確認できる。規模は様々であるが0.80m程度の楕円形のものも多く、深さも様々で0.2~0.7mを測る。最深部のレベルは32.70mを測る。土坑はその重複関係からそれぞれ掘られた時期は異なるとみられるが、埋められたのは、短時間であると見られる。埋土は土坑によって微妙には異なるが、黒ずんだ地山の黄色シルトである。遺構の性格については、粘土採掘坑と判断される。遺物は大量の須恵器と一緒に埋められており、初期のものから6世紀に至るまで、幅広く出土している。7世紀以後の遺物はこの土坑から検出されていないため、埋められたのはおそらく6世紀代と考えられる。

355-〇〇 (第16・17図、図版27)

K23 N Fに位置する。0.8×0.7mの規模を有し、粘土採掘坑と考えられる。

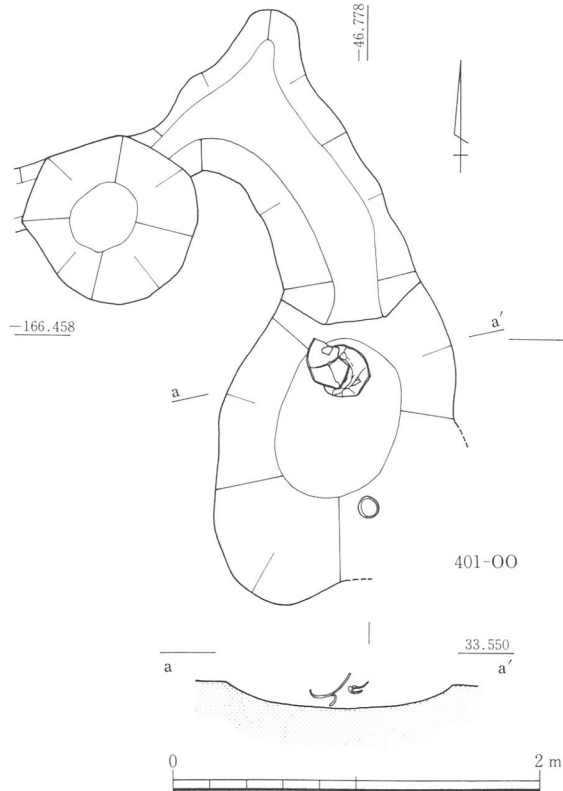
401-〇〇 (第18図、図版8)

K23 E Oに位置する土坑である。近世の溝403-〇 Sと重複しているため、プランは不明確である。検出面は33.43m、底のレベルは33.11mを測る。東西辺は1.26mを測るが、南北辺は不明である。埋土は2.5 Y6/1で単一層である。

遺物は底から約10cm浮いた状態で須恵器の甕と蓋杯の身が1点出土している。土坑の時期は須恵器から見てII型式2段階頃と考えられる。

392-〇 X (第19・20図、図版28)

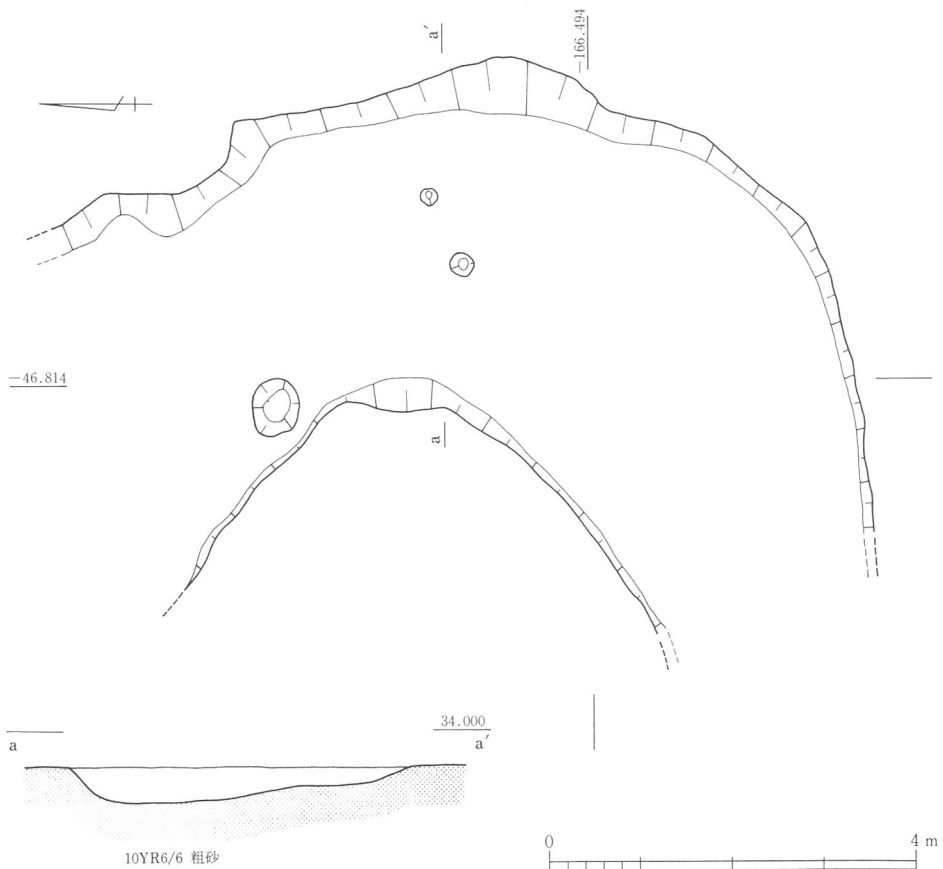
K22 U Vに位置する。大きく弧を描いた溝状の遺構で、約10



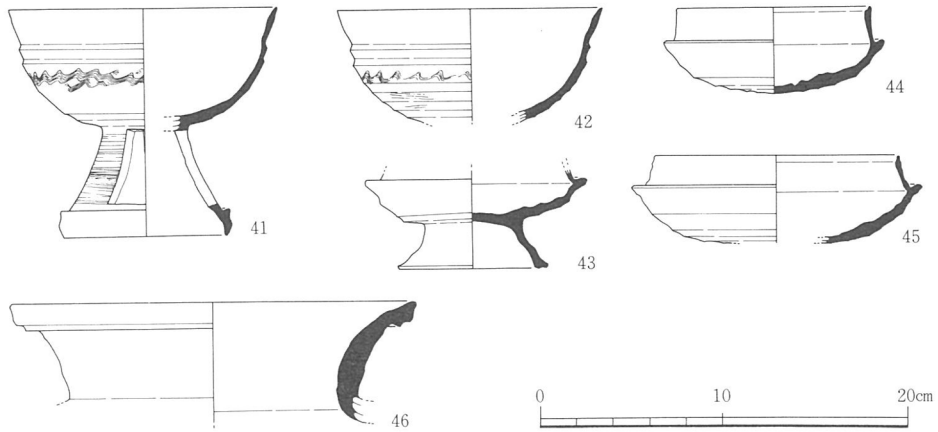
第18図 401-〇〇平面・断面図

mの範囲にわたり検出した。北側と西側はともに水田化に伴う掘削で消滅している。遺構の検出面は33.43mで、幅は最大で3.88m、最小で2.7mを測る。遺構埋土は10Y R6/6粗砂の単一層である。溝底は比較的平らでレベルは北端で33.38m、西端で33.30mを測る。したがって、溝の深さは5～13cm程度と浅い。溝は東辺が弧を描いているのに対して、西辺は90°に近い角度をもっている。溝の外周を推定復原すれば、10～12m前後の規模を測る。1/4程度の検出であるため推測の域を出ないが古墳としての蓋然性は高く、方墳の可能性もある。

遺物は、高杯(41～43)、杯身(44・45)、甕(46)等の須恵器が出土している。高杯(41)は、口縁径14.5cm、器高12.9cmの無蓋高杯である。口縁部と体部の境には1条の凸帯を有す。体部には波状文が巡る。受け部は比較的深く、丸味を持った形状を示す。脚部は長方形のスカシを3方に穿ち、器面はカキメで調整している。(42)の高杯も直接には接合できない



第19図 392-O X平面・断面図



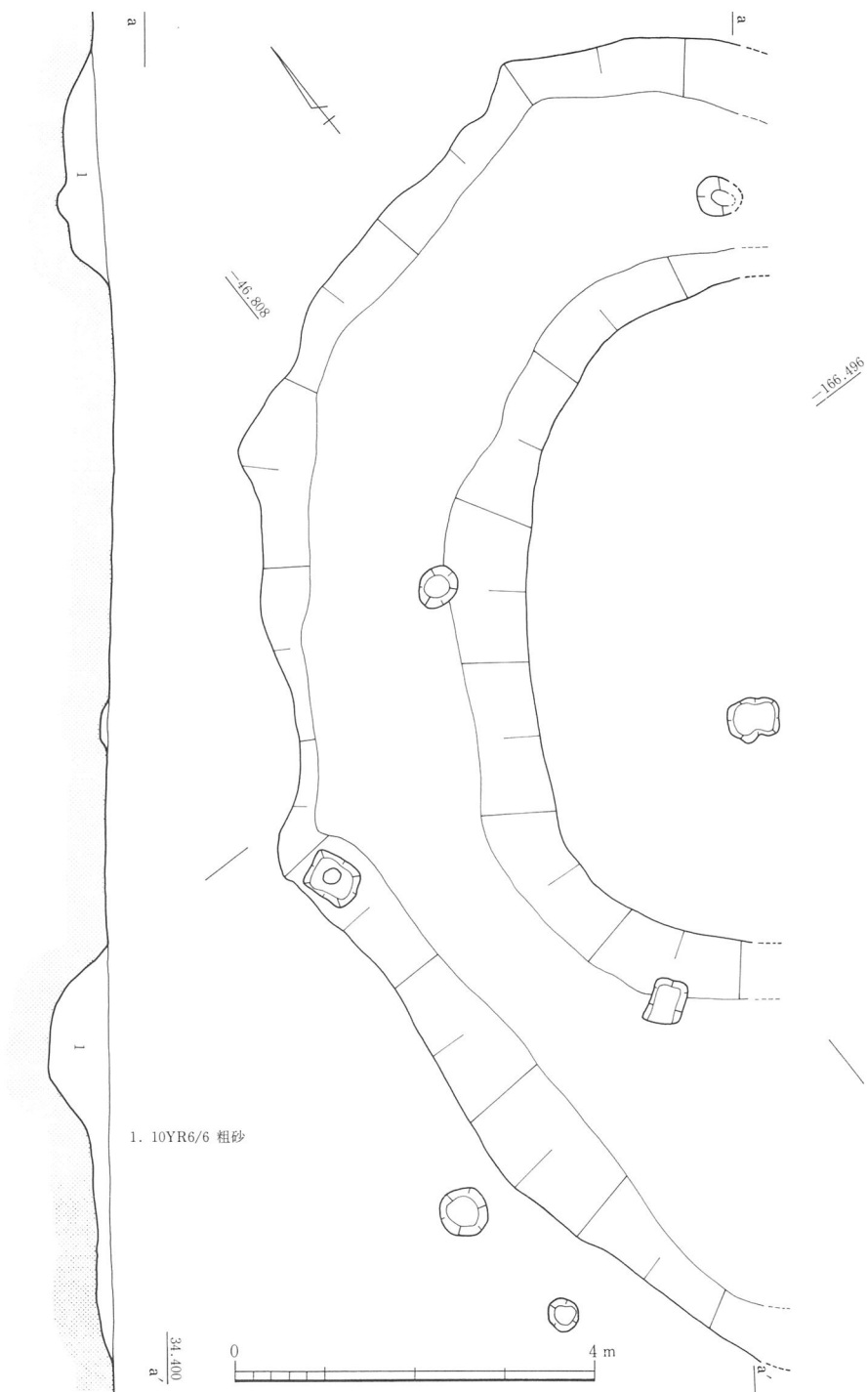
第20図 392-O X 出土遺物

が、その形状から(41)と同一個体の可能性がある。(43)は、低脚の高杯で、口縁部は欠損している。受け部の径は12.3cmで2.4cmの高さの脚が付く。杯身(44)は口縁径10.7cm、器高4.7cmを測る。口縁部のたちあがりは垂直に近く、端部の形状は内傾する凹面を呈している。杯身(45)は口縁径13.3cmを測る。(44)に比べて口径は大きく口縁部は内傾し、体部も浅い。甕(46)は口縁径22.1cmを測る。口頸部には波状文は認められず、僅か痕跡ほどの凸帯が巡る。出土した須恵器から見て、やや時間幅が認められ、I型式5段階(杯身44)～II型式2段階頃と考えられる。

391-O G (第21～23図、図版9・28)

K23 Y Xに位置する。大きく弧を描いた溝状の遺構で、約7.5mにわたって検出した。南側は調査区外へと延びており、全体は把握できないが、古墳と見られる。遺構の検出面は33.58～33.80mで、幅は最大で4.65m、最小で2.80mを測る。遺構埋土は10Y R6/6粗砂の単一層である。溝底は比較的平らでレベルは東端で33.44m、西端で33.56mを測る。溝の深さは浅いところで0.32m、深いところで0.58mを測る。墳丘と見られる内側の区画の径は上端で7.44m、下端で8.40mを測り、弧を描く溝の外周径は12.8mである。仮に円墳だとすれば、9m前後の墳丘を持つと考えられる。ただ、墳丘は丸味を保つがコーナー付近はやや角度があり、方墳の可能性もある。古墳自体はかなり削平を受けており、埋葬施設に関する痕跡は認められなかった。

遺物は周溝のなかから甕(47)と、壺が並んだ状態で検出された。更に、その状況から調査区外へと連なると見られる。壺は周溝底から少し浮いた位置で検出されたが、甕は溝底

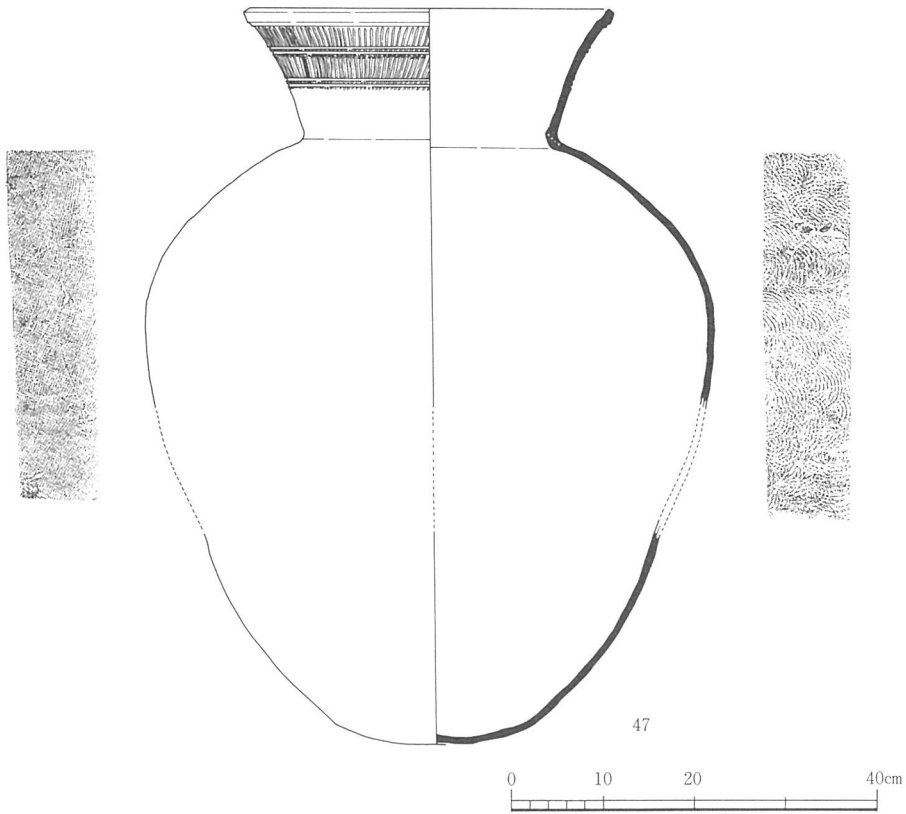


第21图 391-OG平面·断面图



第22図 391-O G遺物出土状況

に深さ6 cm程の窪みをつくり、その上に据えていた。土圧で潰れているが、ほぼ原位置を保っている。明らかに供献の遺物と見られる。甕(47)は口径39.4 cm、器高80 cmの大型品である。口縁端部は肥厚し、断面は方形を呈する。口頸部器面には波状文を模倣したと見られる縦方向の条線が刻まれている。甕が示す時期はII型式6段階頃と考えられる。



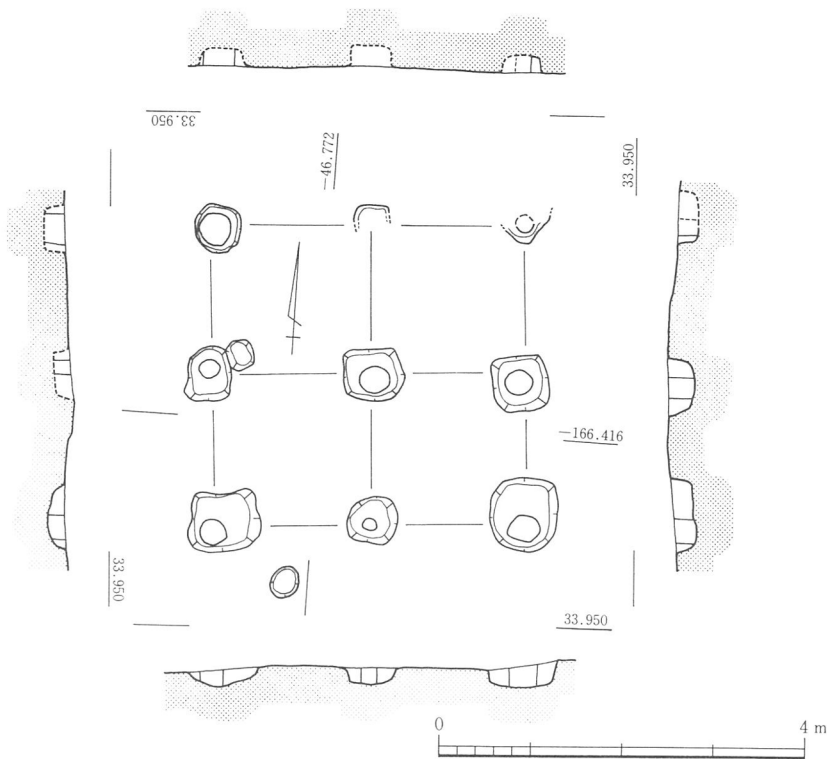
第23図 391-OG 出土遺物

第2項 奈良時代

62-OB (第24図、図版10)

K23HDに位置する掘立柱建物である。建物の検出レベルは33.50～33.56mである。桁行2間（東西3.42m）、梁行2間（南北3.30m）の総柱建物である。梁行の柱間は1.63～1.70mを測り、桁行の柱間は1.70～1.72mを測る。面積は11.95㎡を測る。主軸方位はN-2°-Wである。他の建物が南北方向に棟を持つのが多いが、東西方向に棟を持っている。掘方は方形あるいは隅丸方形で、0.52～0.80mと不揃いであるが概して大きい。柱痕跡は約0.25m前後で、柱穴底のレベルは、四隅の柱が33.30mと一定で、建物中央の束柱が最も浅く33.40m、他の柱は33.36～33.40mを測る。柱穴埋土は10Y R7/6、柱心は10Y R5/6シルトである。柱は総柱で総じて掘方もしっかりしていることから倉と見られる。

遺物は出土していないが、これまでの調査した奈良時代の建物と埋土の状況が酷似することから、奈良時代の建物と考えられる。



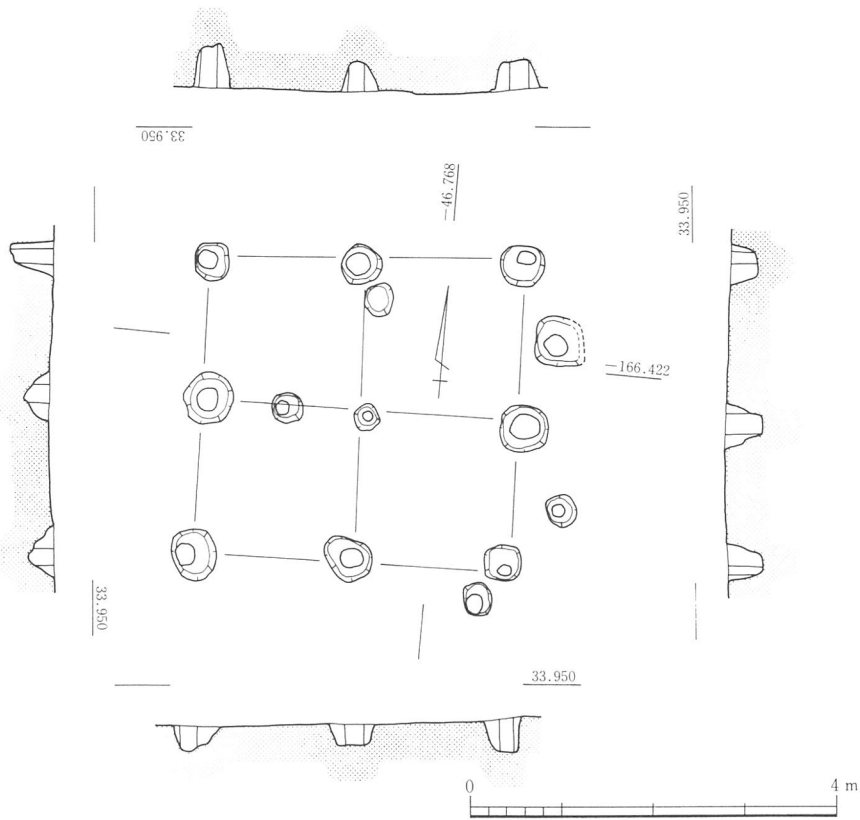
第24図 62-OB平面・断面図

50-OB（第25図、図版10）

K23 I Fに位置する掘立柱建物である。建物の検出レベルは33.56~33.60mである。桁行2間（南北3.50m）、梁行2間（東西3.50m）の総柱建物である。桁行の柱間は1.60m、1.90mで、桁行の柱間は1.70m、1.80mを測り、柱間寸法は不揃いである。面積は10.5㎡を測る。主軸方位はN-3°-Wである。掘方は、62-OBのそれと比較して小さく、楕円形あるいは隅丸方形を呈しており、0.35~0.50mと不揃いである。建物中央の東柱は、規模がやや小さく0.30mである。柱痕跡は約0.20m前後で、柱穴底のレベルは、四隅の柱が33.37mである。建物中央の東柱が最も浅く33.45m、他の柱は33.36~33.45mを測る。柱穴埋土は62-OBと同様の10Y R7/6、柱心は10Y R5/6シルトである。柱は総柱で倉と見られる。

遺物は出土していないが、これまでの調査した奈良時代の建物と埋土の状況が酷似することから、奈良時代の建物と考えられる。

84-OB（第26図、図版11・12）



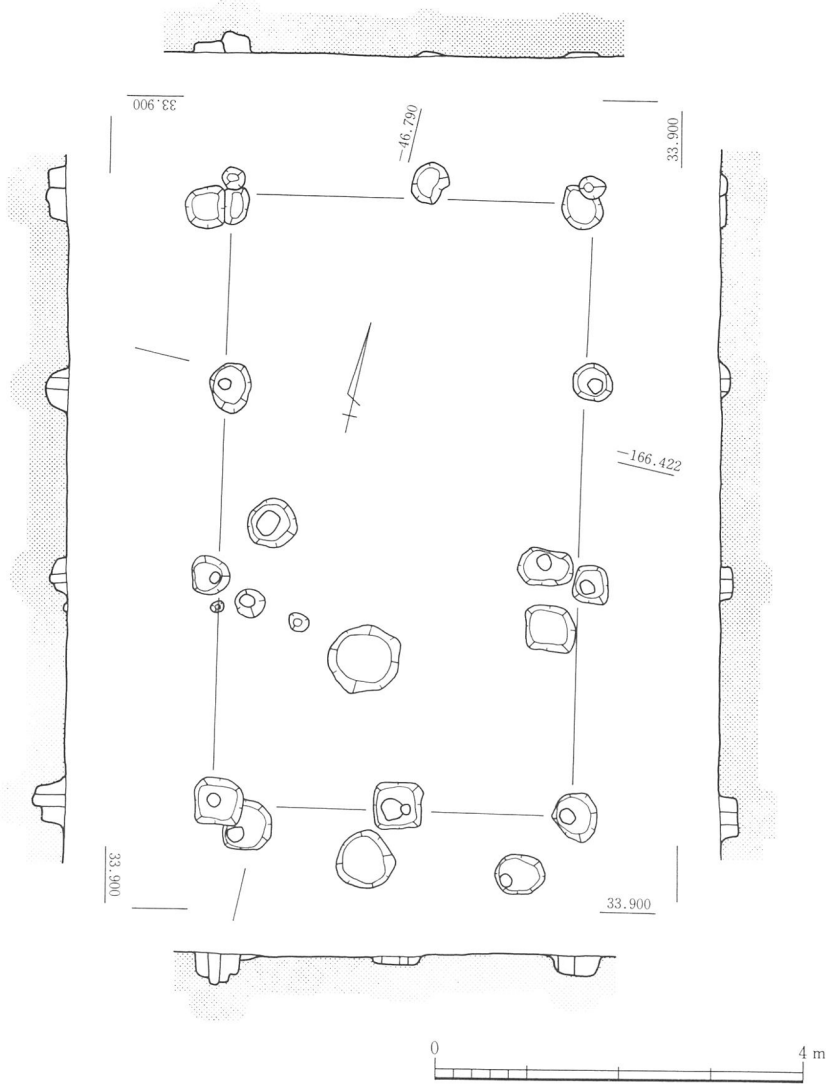
第25図 50-OB平面・断面図

K23C Eに位置する掘立柱建物で、85-OB、82-OBと重複する。切り合い関係から85-OBより新しい。建物の検出レベルは33.50m前後である。桁行3間（南北6.70m）、梁行2間（東西3.90m）の規模の側柱建物である。桁行の柱間は北から2m、2.2m、2.5mで、桁行の柱間は東から1.9m、2mを測り、柱間寸法は不揃いである。面積は26.13㎡を測る。主軸方位はN-10°-Wである。掘方は、楕円形あるいは隅丸方形を呈し、規模は0.4~0.5mである。柱痕跡は約0.15m前後で倉と比較するとやや細い。柱穴底のレベルは、四隅の柱が33.40m前後と一定している。柱穴埋土は62-OBと類似の10Y R6/6、柱心は10Y R5/4シルトである。規模、構造から住居と見られる。

柱穴からは、5世紀代の須恵器、土師器の破片が出土しているが、99・100-OPからは奈良時代の須恵器が検出されていることから、同時期と判断した。

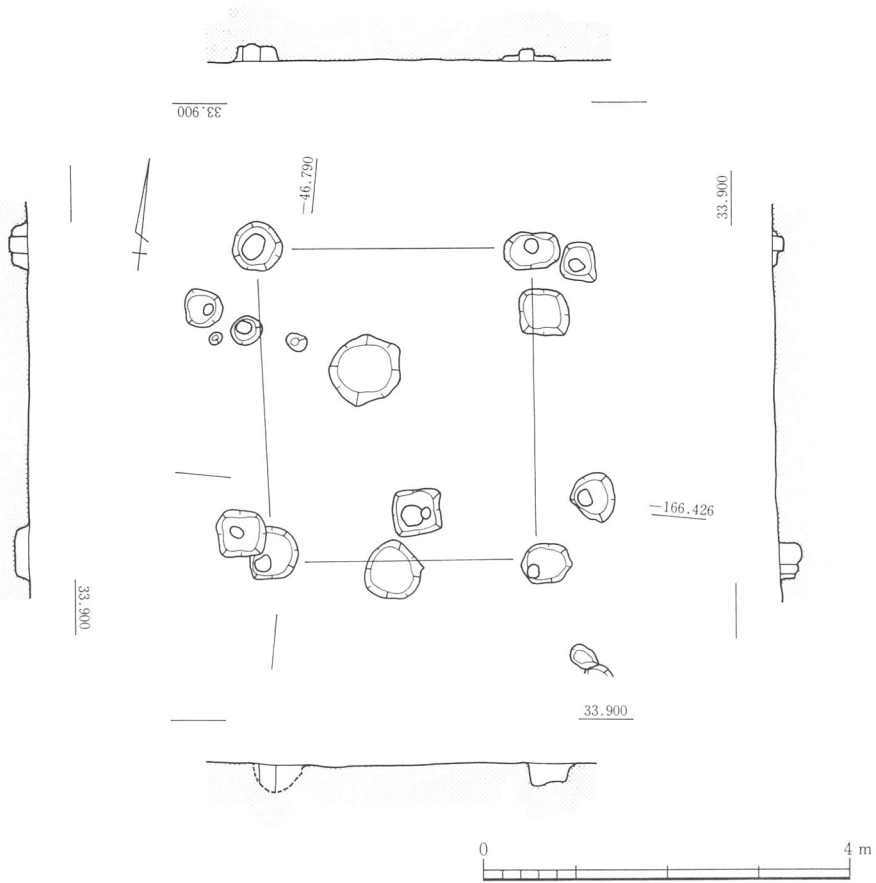
85-OB（第27図、図版12）

K23F Cに位置する掘立柱建物である。84-OB、82-OBと重複する。切り合い関係



第26図 84-O B平面・断面図

から新旧関係は84-O Bより古い。82-O Bとの関係は不明である。建物の検出レベルは33.45m前後である。桁行1間（南北3.50m）、梁行1間（東西3.00m）の規模の側柱建物であるが、本来は2×2間の建物と見られる。面積は10.50㎡を測り、50-O Bと同規模である。主軸方位はN-6°-Eである。掘方は、楕円形あるいは隅丸方形を呈し、規模は0.5~0.6mである。柱痕跡は約0.15m前後で、柱穴底のレベルは、四隅の柱が33.30m前後と一定している。柱穴埋土は10Y R6/8、柱心は10Y R5/4シルトである。規模から倉



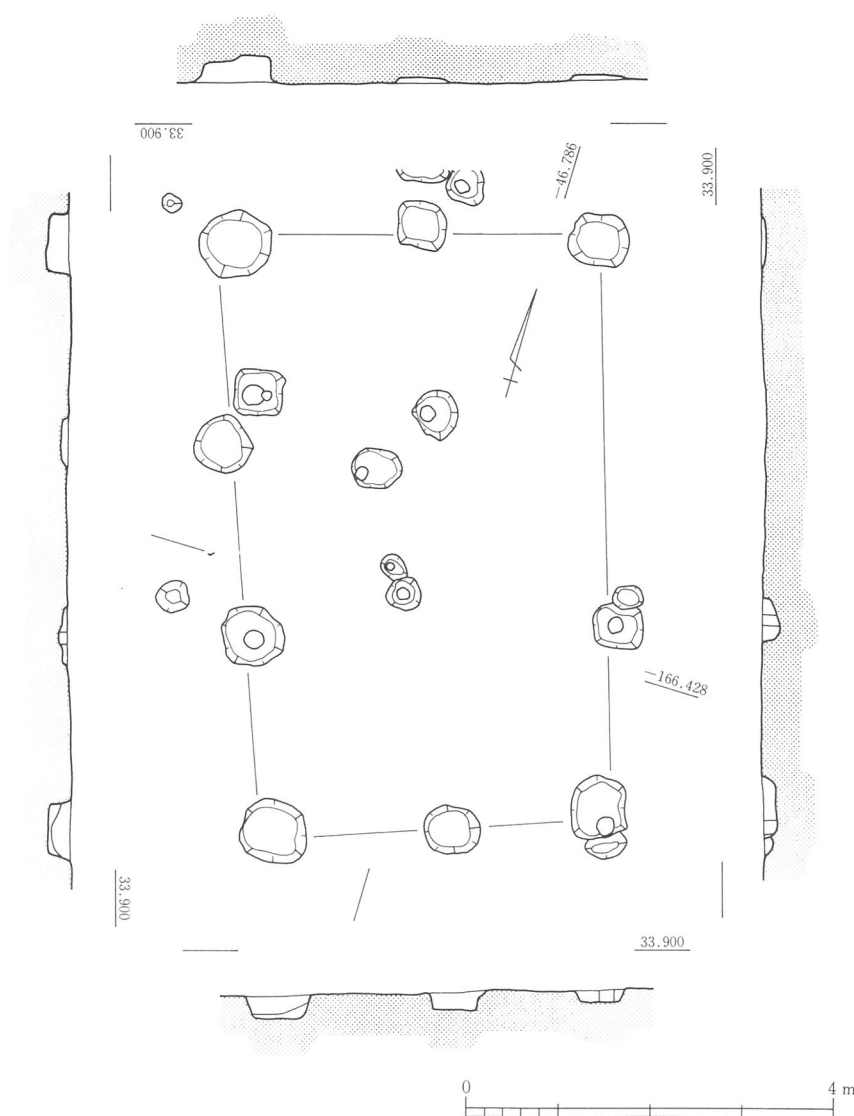
第27図 85-OB平面・断面図

と見られる。

82-OB (第28図、図版11・12)

K23DFに位置する掘立柱建物で、84-OB、85-OB、141-OBと重複する。141-OBとの新旧関係では、82-OBが古い。建物の検出レベルは33.4m前後である。桁行3間(南北6.60m)、梁行2間(東西4.0m)の規模を持つ側柱建物である。面積は26.4㎡で、84-OBとほぼ同じ規模である。主軸方位はN-18.5°-Wである。掘方は、楕円形あるいは隅丸方形を呈し、規模は0.6~0.7mである。柱痕跡は約0.15m前後で、柱穴底のレベルは、33.35m前後と一定している。柱穴埋土は10Y R6/6、柱心は10Y R6/2シルトである。規模、構造から住居と見られる。

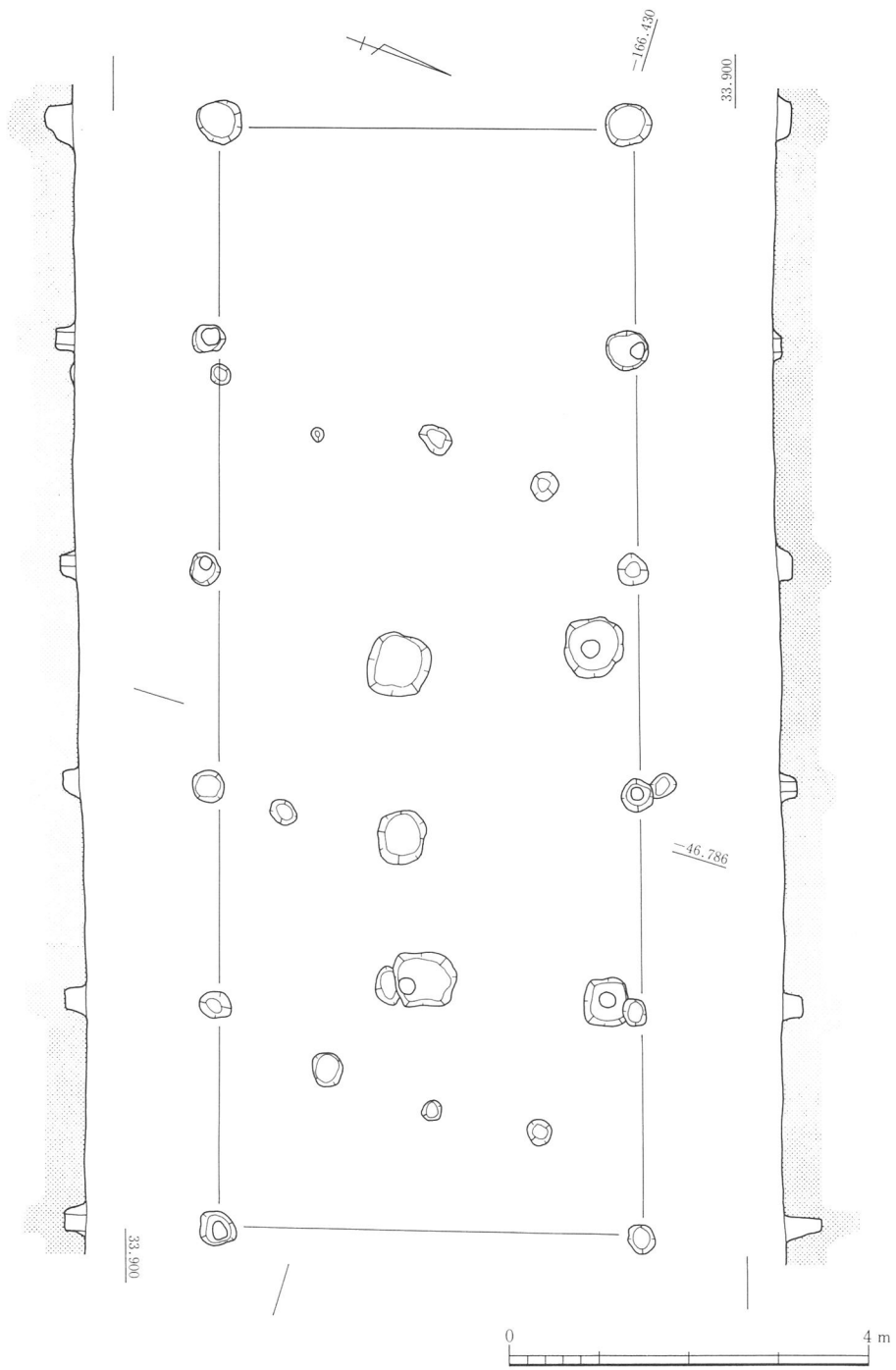
遺物は奈良時代の須恵器、土師器の破片が出土している。



第28図 82-OB平面・断面図

141-OB (第29図)

K23EGに位置する掘立柱建物で、82-OBと重複する。新旧関係は141-OBが新しい。建物の検出レベルは33.45m前後である。桁行5間(東西12.4m)、梁行1間(南北4.8m)を測り、面積は60.52㎡である。主軸方位はN-73°-Eである。掘方は円形ないし楕円形で、0.30~0.40mを測る。柱痕跡は約0.15mで、柱穴底は33.28~33.38mである。柱穴埋土は10Y R5/4、柱心は10Y R6/2シルトである。規模、構造から住居と見られる。

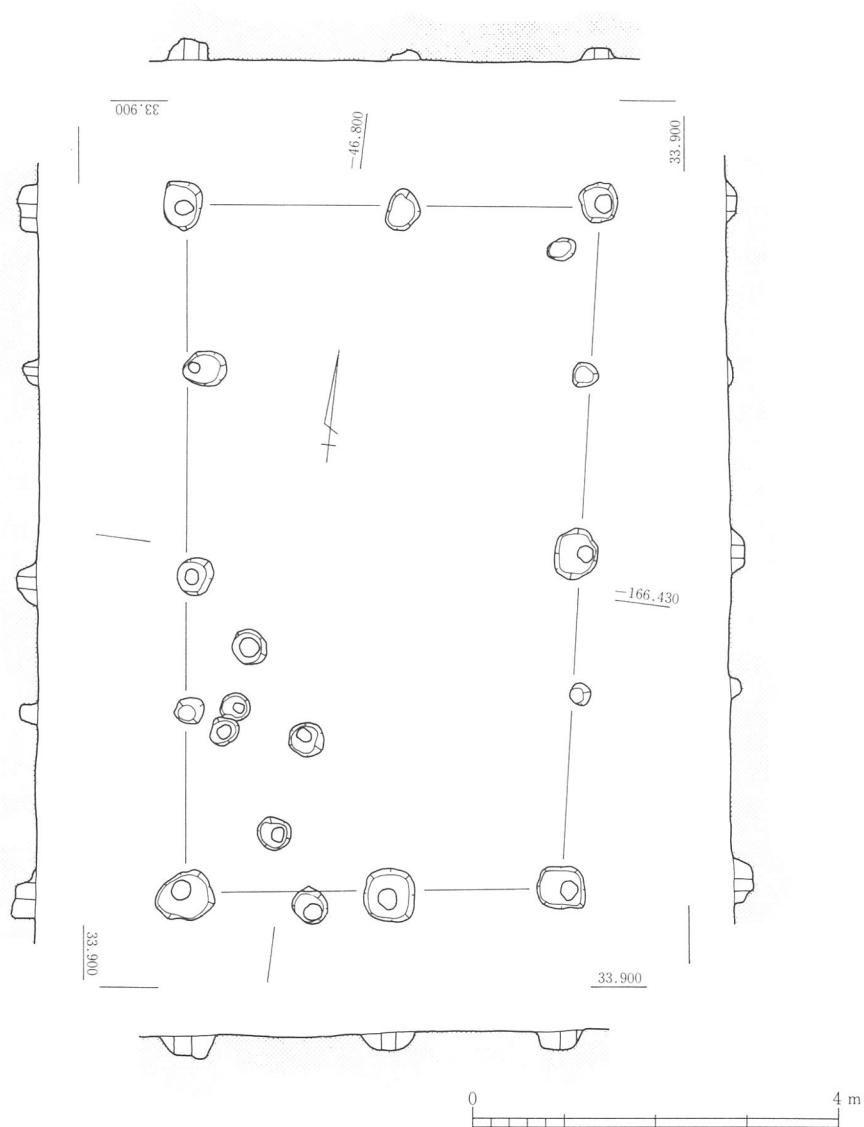


第29図 141-OB平面・断面図

遺物は奈良時代の須恵器、土師器の破片が出土している。

106-O B (第30図、図版12)

K23AGに位置する掘立柱建物である。110-O Bと重複し、新旧関係は110-O Bが新しい。建物の検出レベルは33.45m前後である。桁行4間(南北7.5m)、梁行2間(東西4.6m)を測る。桁行の柱間寸法は1.8m、2.2m、1.5m、2mで、梁行柱間寸法は2.4m、



第30図 106-O B平面・断面図

2.2mと不揃いである。面積は34.5㎡である。主軸方位はN-6°-Wである。掘方は方形ないし楕円形を呈し、径は0.25~0.60mと不揃いである。柱痕跡は約0.15m、柱穴底は33.21~33.28mである。柱穴埋土は10Y R6/2、柱心は2.5Y5/4シルトである。規模、構造から住居と見られる。遺物は奈良時代の土師器の破片が出土している。

399-00 (図版13)

K23MDに位置する土坑で、プランは不整形で遺構の検出レベルは33.24mである。規模は長軸1.3m、短軸0.80m、深さ0.87mを測る。埋土は3層からなり、遺物は、上・中層にはなく、最下層(10Y R6/1シルト)から奈良時代の須恵器、土師器が廃棄された状態で検出されている。

396-0S (第31~38図、図版28~31)

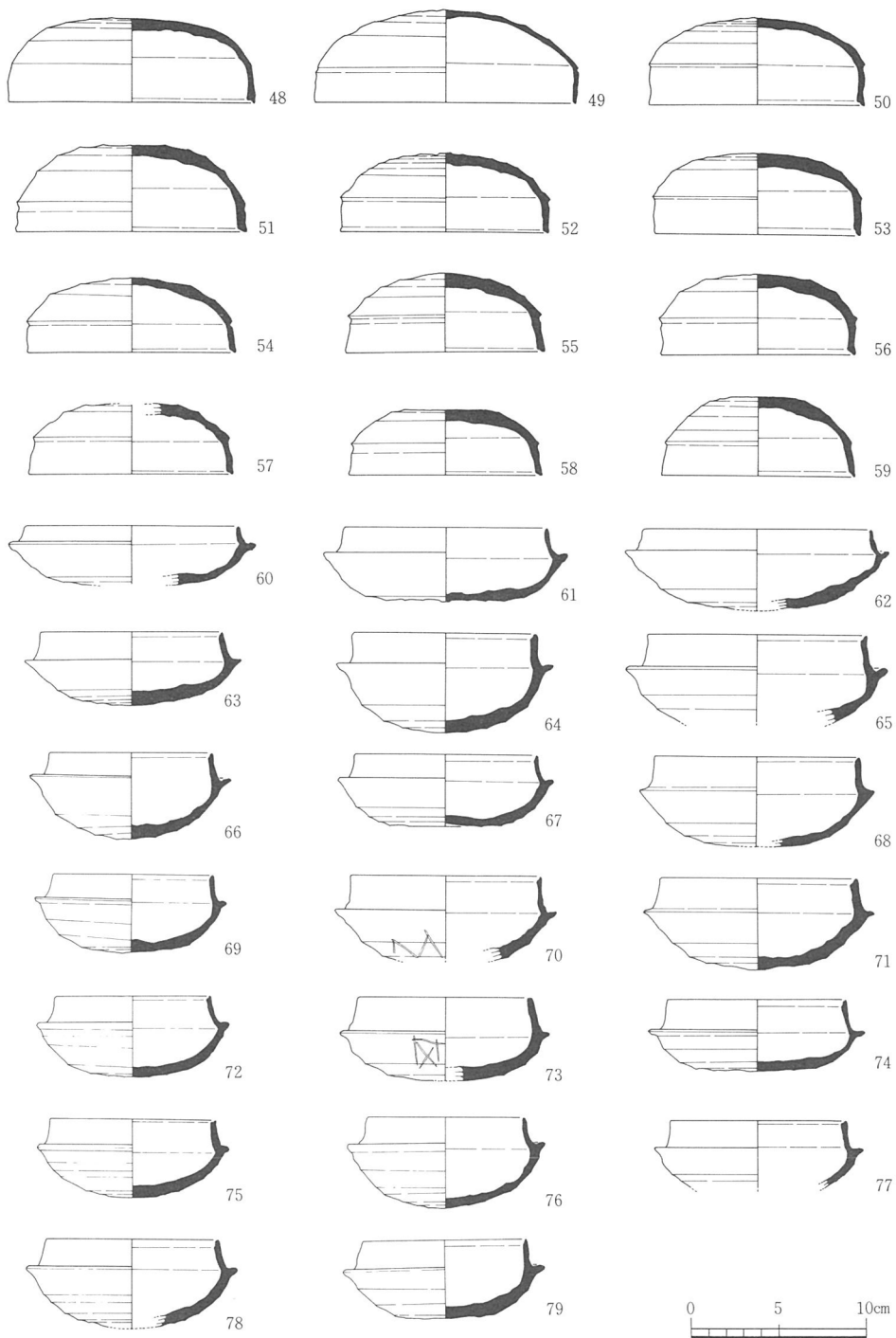
K23MB・NB・NCにかけて存在する溝で、激しく蛇行しており、自然にできた流路の可能性が高い。397-0S、394-0Sと重複する。397-0Sとの新旧関係は不明確であるが、394-0Sとでは396-0Sが新しい。

しかし、三条の溝にはさほど時間差はないと考えられる。溝幅は、最大で1.1m、最狭で0.85mを測る。断面は下流ほど「V」字形に近い形状を示す。遺構の検出レベルは、高いところで33.17m、低いところで32.20mを測る。溝の底のレベルも31.50m~33.05mと落差があって、調査区のほぼ中央から開析谷(393-0L)に向かって流れ込み、溝の先端は「ラップ口」となる。いうなれば、393-0Lの上層にあたる。

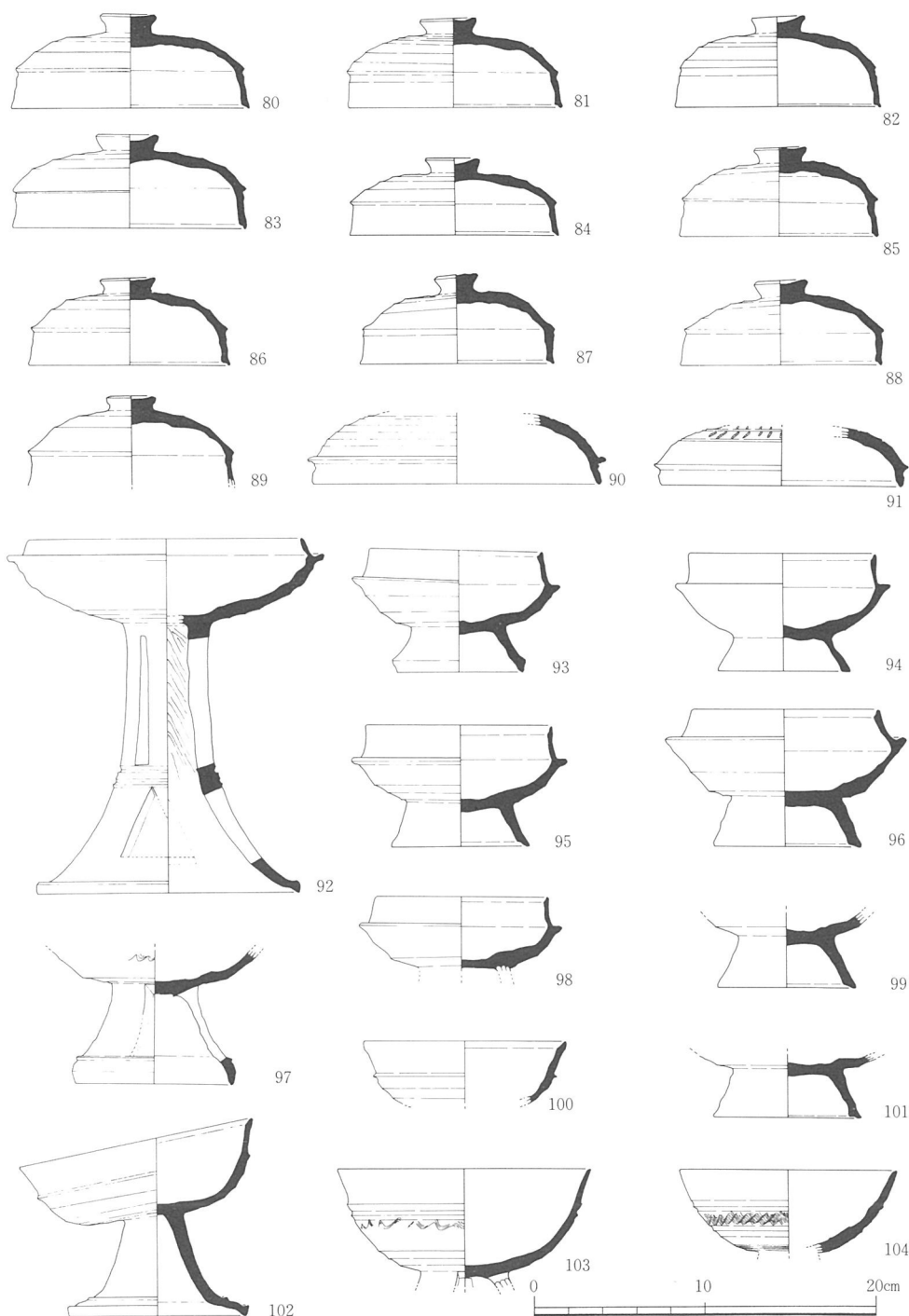
この溝からは、古墳時代~奈良時代にいたる須恵器、土師器が多く出土している。遺物の多くは須恵器で、I型式1段階~2段階に収まる須恵器蓋(90・91・106・107)、高杯(102)、器台(114~116)、壺(120)、甕(125)の初期須恵器も出土している。これらの遺物は、後述の393-0Lから出土するのと同型式である。

須恵器は、第31・32図に示すようになかにはII型式3段階以降のものが含まれるが、I型式5段階~II型式2段階にかけてのものが多い。器種は、蓋杯、有蓋高杯蓋、低脚高杯が多く見られる。

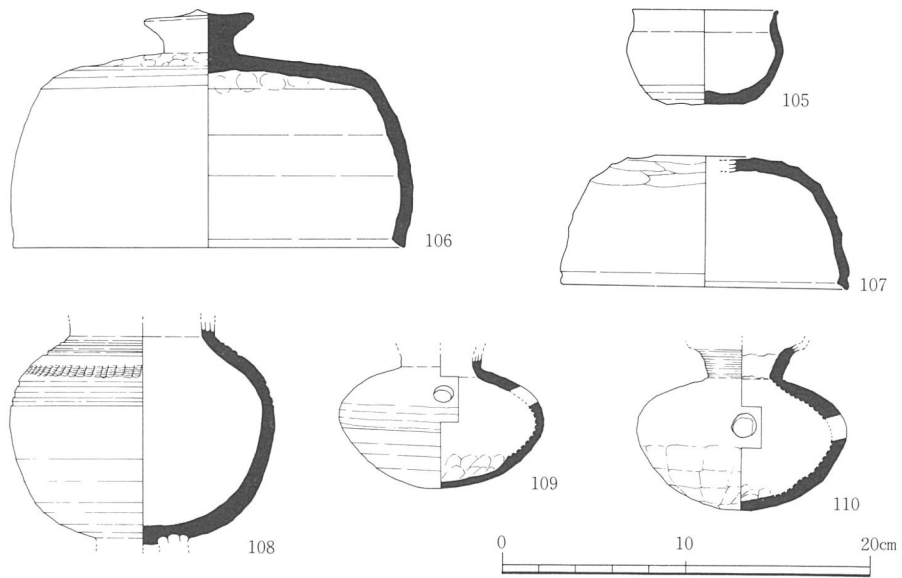
これらの遺物に混じって、土製馬(111)が出土している。土製馬は、頭と足の部分が欠落しており、胴部を残すのみである。しかし、表面には馬装の痕跡が明瞭に残存していて、頸に近い位置にはたてがみと手綱、背には鞍と鎧、尻の部分には辻金具と尻繫の痕跡が認められる。奈良時代に見られる土馬とは明らかに異なり、おそらく古墳時代の所産であると考えられる。



第31図 396-O S 出土遺物 (1)



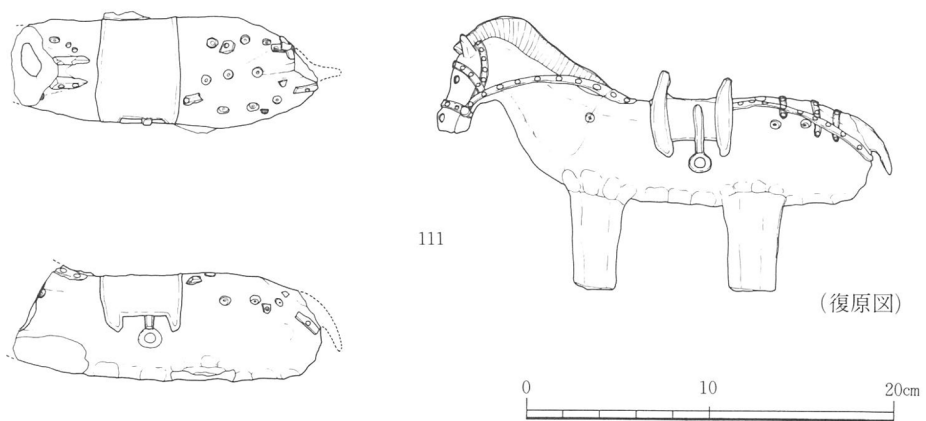
第32図 396-O S 出土遺物 (2)



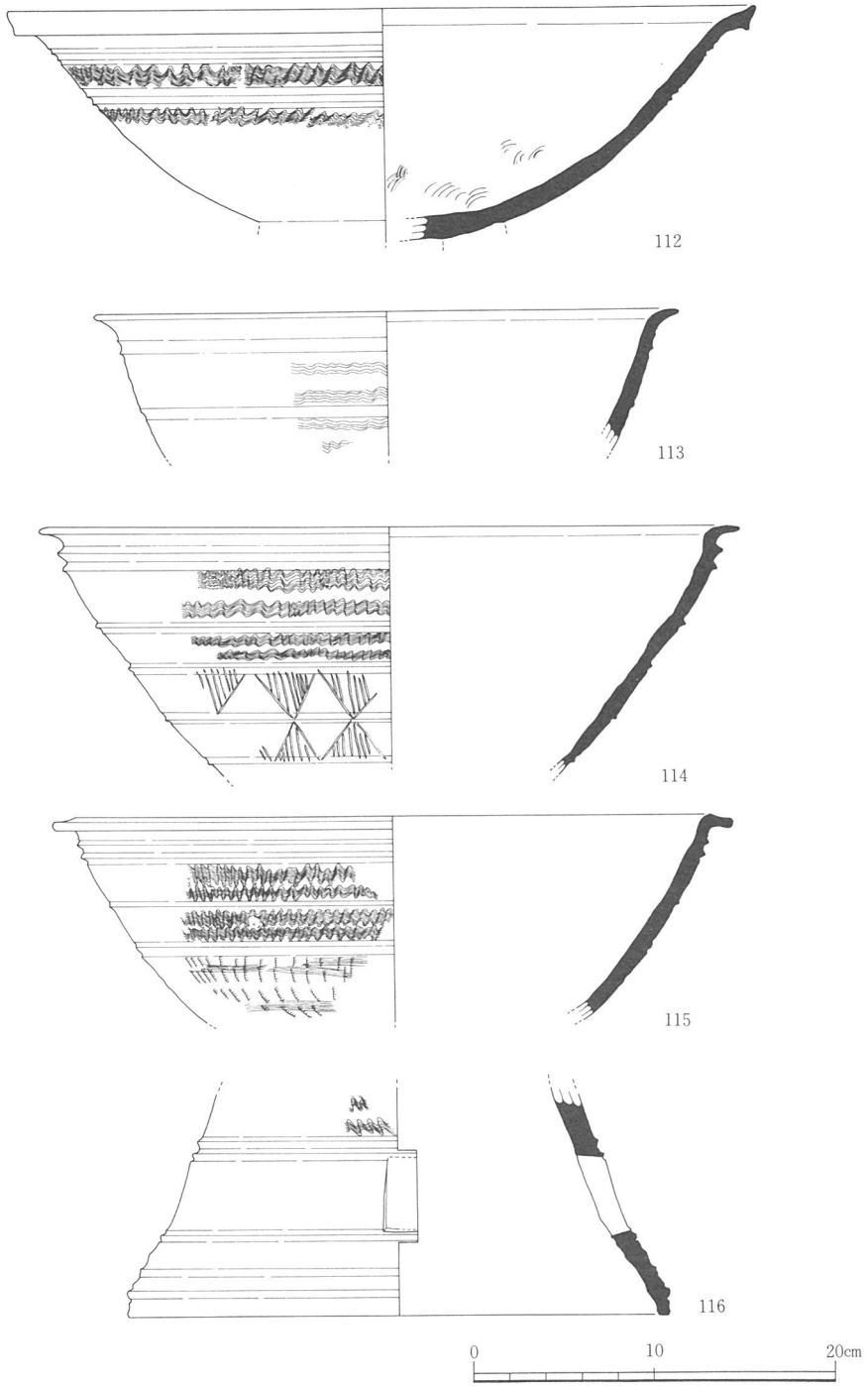
第33図 396-O S出土遺物 (3)

396-O Sに見られる遺物の検出状況は、これまで大庭寺遺跡で多く見られる丘陵削平に伴う廃棄 (296-O O、1158-O O、1125-O X等)と同様で、上方から廃棄されたものと考えられる。

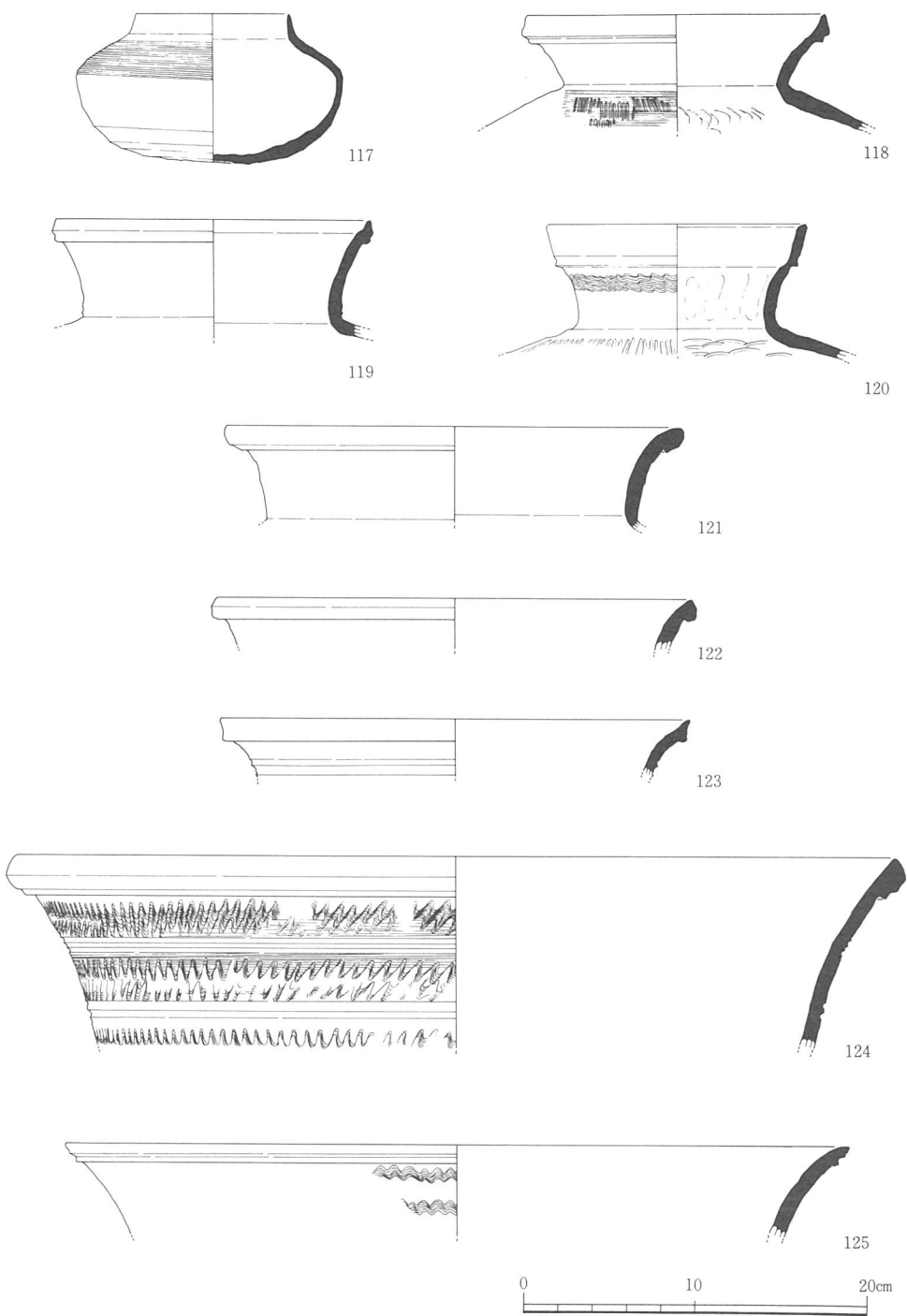
丘陵が削平された時期については、(126~133・135)の遺物が示すように、8世紀頃とみられる。



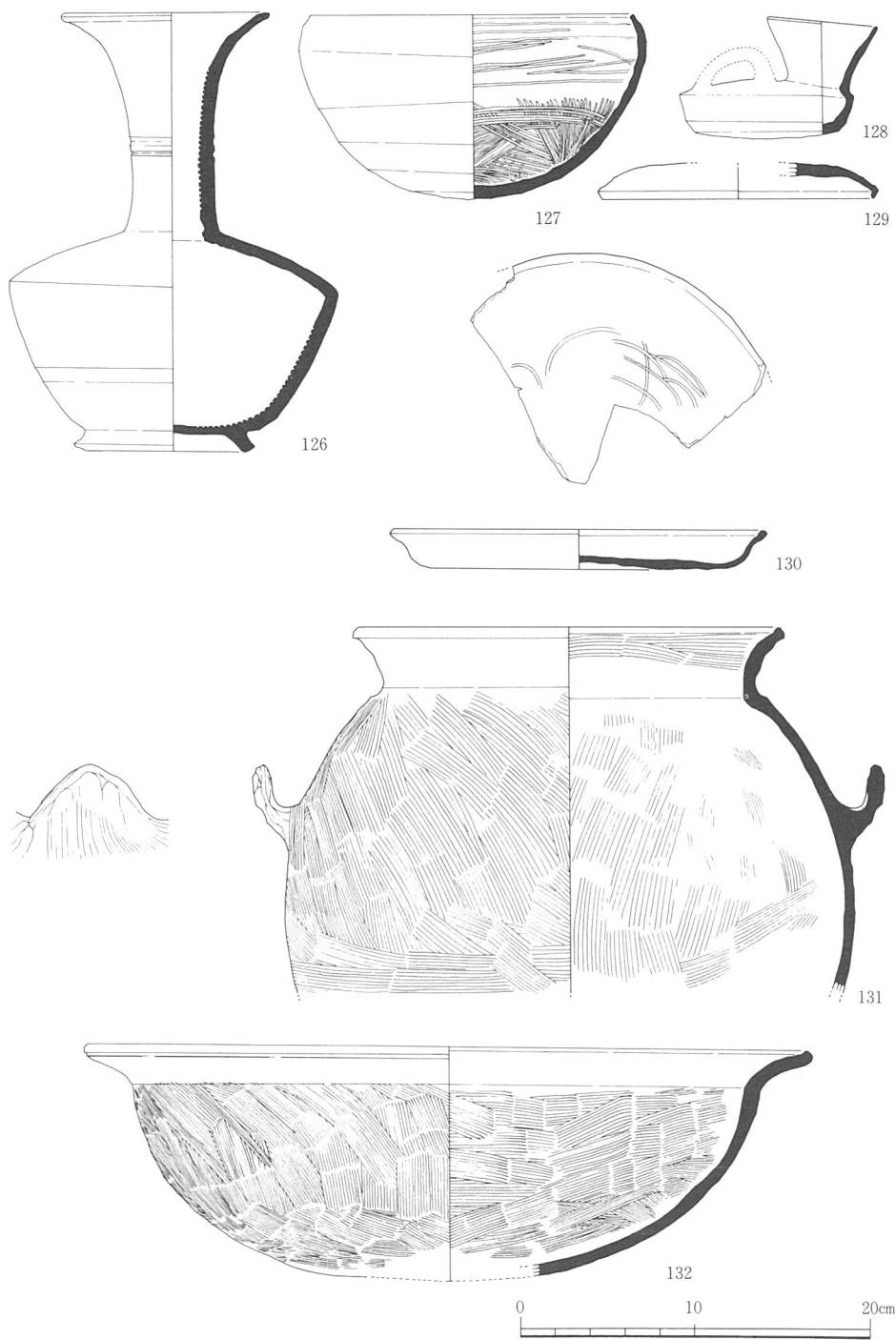
第34図 396-O S出土遺物 (4)



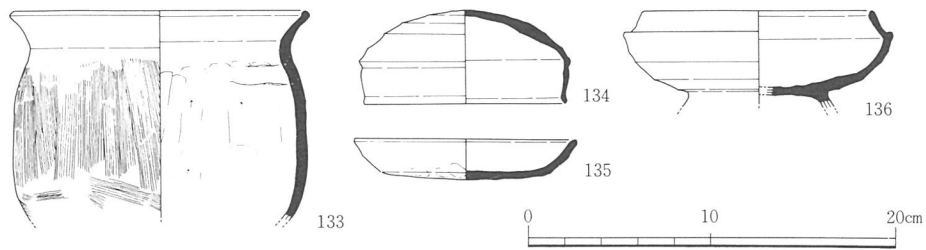
第35図 396-O S 出土遺物 (5)



第36図 396-O S 出土遺物 (6)



第37図 396-O S 出土遺物 (7)



第38図 396-O S 出土遺物 (8)

398-O S (図版13・14)

K23MCに位置する溝で、396-O Sと重複する。新旧関係は不明であるが、396-O Sと一連の遺構として捉えるのが妥当かもしれない。遺構の検出レベルは33.05mで、溝の底は32.60mを測る。溝の最大幅は約1.7mを測る。埋土は10Y R7/3シルトである。

397-O S

K23MBに位置する溝で396-O S、398-O Sと重複する。新旧関係は不明確で、同時期と考えられる。遺構の検出レベルは32.50~33.05mでかなりの落差がある。溝は直線的で幅約0.3mで、深さ約0.1mを測る。埋土は10Y R7/3シルトである。

394-O S

K23LBに位置する溝で、西端で「L」字に屈曲し393-OLに流れ込む。292-OBと重複する。新旧関係は292-OBが新しい。溝の全長は約10.5m、幅は約0.6mで、深さは最深で約0.6mを測る。埋土は10Y R7/3シルトである。

317-O S

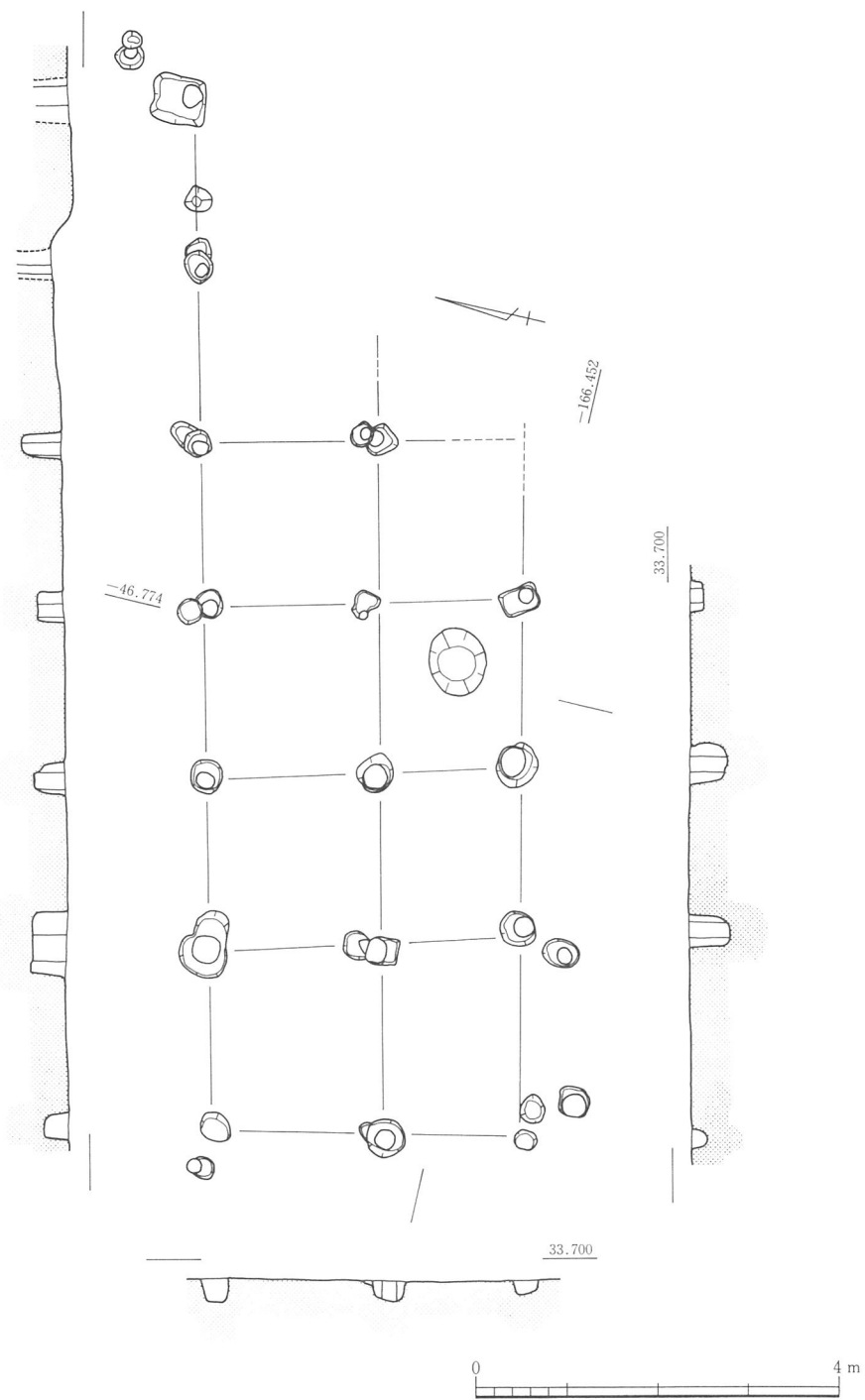
K23MDに位置する溝で、長さ約10mにわたって検出した。遺構の検出レベルは32.50mである。溝幅は最大で約0.5m、深さは5~10cmと比較的浅い。埋土は10Y R7/3シルトの単一層である。

遺物は、古墳~奈良時代の土器がわずかに出土している。

第3項 平安時代

312-OB (第39図、図版14)

K23MFに位置する桁行6間(東西11.45m)以上、梁行2間(南北3.50m)の規模を持つ総柱の掘立柱建物である。土坑404-OO、346-OBと重複する。404-OOが埋まった後、建てられている。建物の検出レベルは33.50m前後である。桁行の柱間は1.8~2.0mで、梁行の柱間は北から1.6m、1.9mを測り、柱間寸法はやや不揃いである。面積は

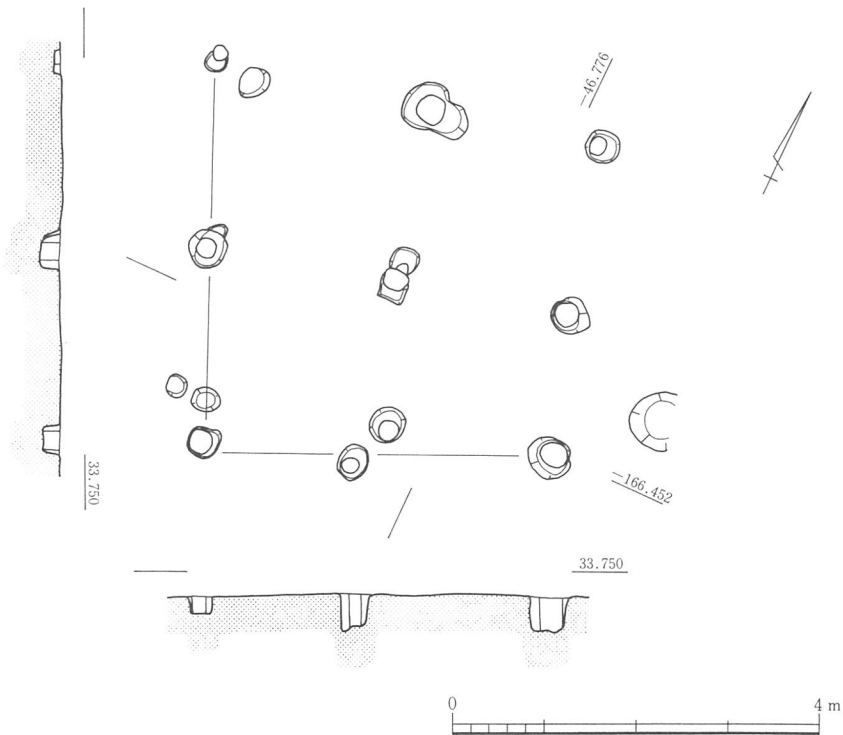


第39图 312-O B平面・断面图

39.50m²以上を測る。主軸方位はN-102°-Wである。掘方は、楕円形あるいは隅丸方形を呈し、規模は0.4~0.5mである。柱痕跡は約0.2~0.25mで倉と比較するとやや細い。柱穴底のレベルは、32.88~33.12mと不揃いである。柱穴埋土は10Y R7/3シルトで、柱心は5 Y R7/1シルトである。柱跡は重複するものが多く、建て替えられている可能性が高い。柱穴からは、5世紀代の須恵器、土師器の破片が出土しているが、北西隅の345-O Pからは黒色土器が検出されていることから、同時代と判断した。

346-O B (第40図)

K23MFに位置する桁行2間(東西4.3m)以上、梁行2間(南北3.8m)の規模を持つ掘立柱建物である。土坑404-O O、312-O Bと重複する。404-O Oが埋まった後、312-O B、346-O Bが建てられている。建物の検出レベルは312-O Bと同一である。桁行の柱間は2.1m、2.2mで、梁行の柱間は北から1.7m、2.1mを測り、柱間寸法はやや不揃いである。主軸方位はN-25°-Wである。面積は16.34m²以上である。

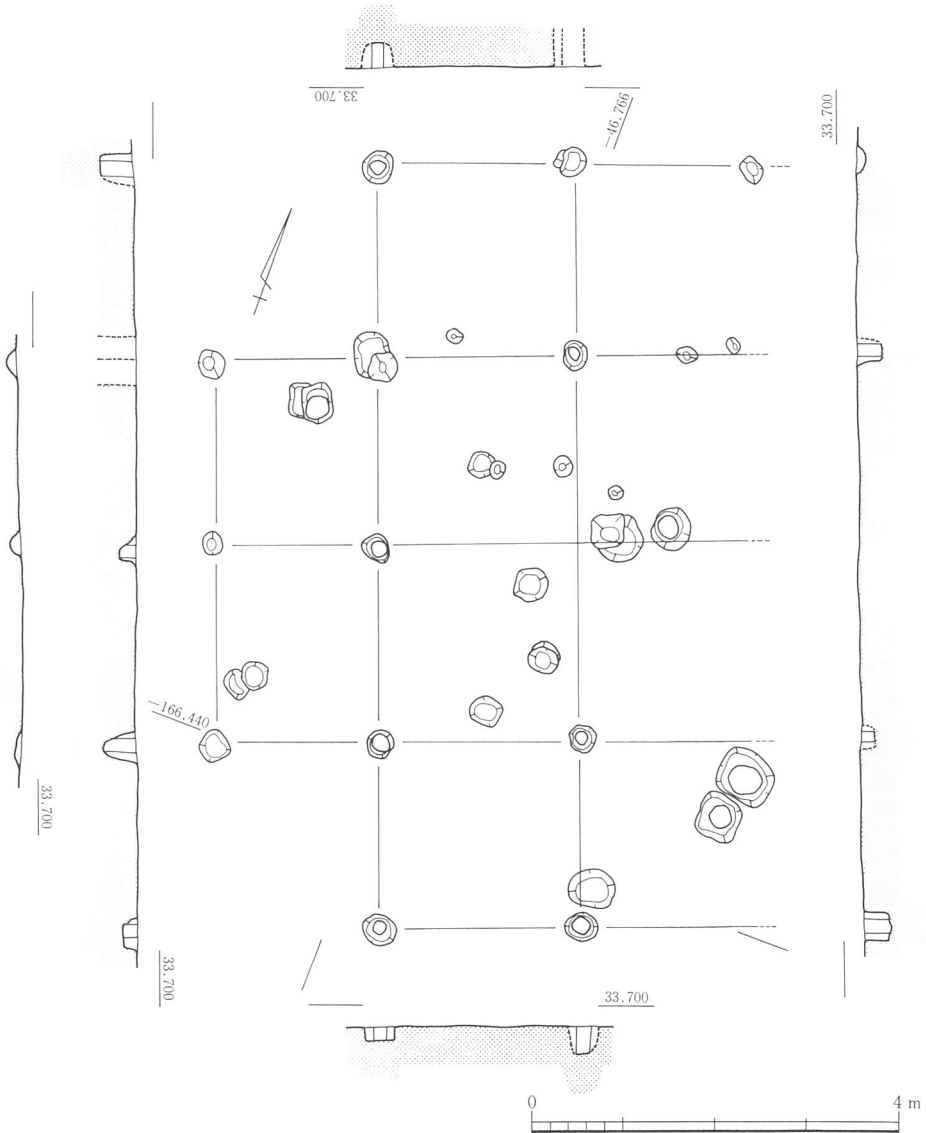


第40図 346-O B平面・断面図

第4項 中世

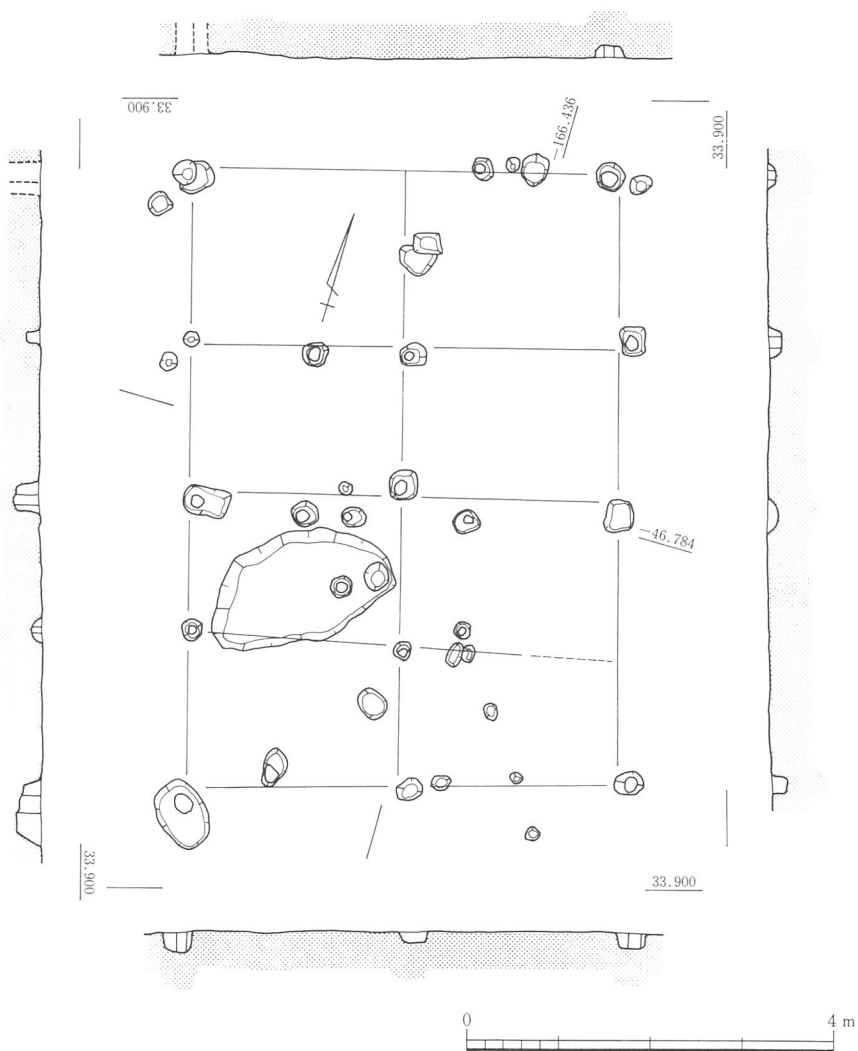
8-OB (第41図)

K23 I Hに位置する桁行4間(南北8.4m)、梁行3間(東西5.8m)の規模を持つ総柱の掘立柱建物である。16-OB、17-OBと重複している。新旧の関係は8-OBが新しい。建物の検出レベルは33.50m前後である。桁行の柱間は2.1m等間であるが、梁行の柱



第41図 8-OB平面・断面図

間は1.8m～2.1mを測り、柱間寸法はやや不揃いである。面積は48.2㎡を測る。主軸方位はN-20°-Wである。掘方は、楕円形を呈し、規模は0.3m前後で他の時期の建物の掘方に比べ小さい。柱痕跡も約0.2m前後とやや細い。柱穴底のレベルは、33.36～33.49mと不揃いである。柱穴埋土は10Y R5/2シルトで、柱心は5 Y R5/3シルトである。北西隅と南西隅の柱穴が見当たらないため、建物は2×4間に、西側を1×2間拡張した可能性も考えられる。



第42図 209-O B平面・断面図

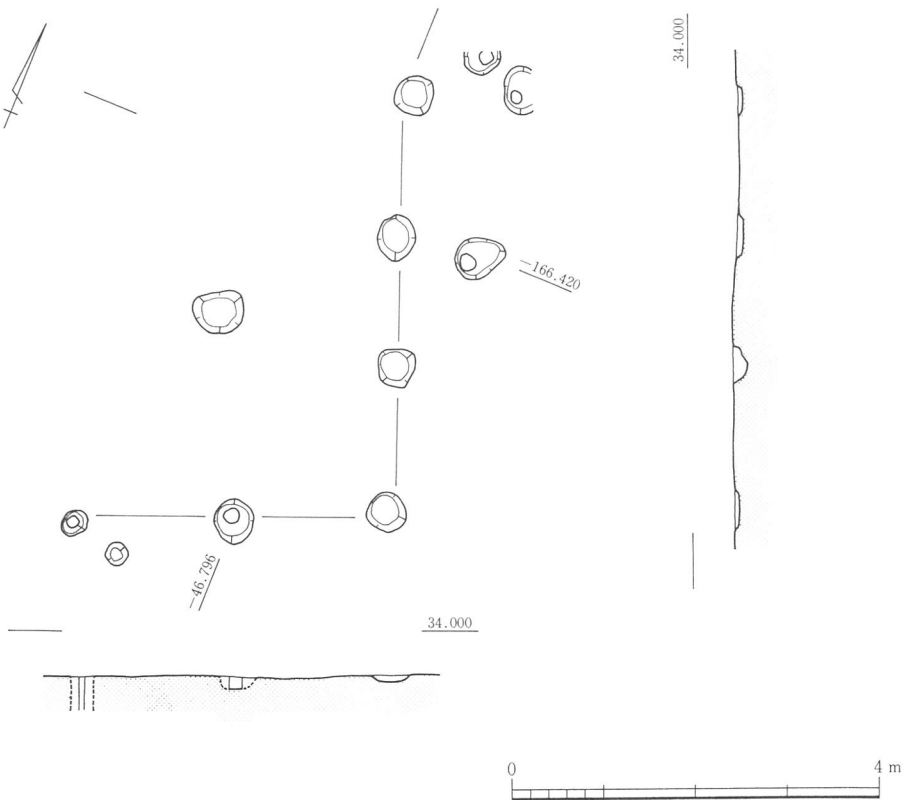
209-O B (第42図)

K23E I に位置する桁行4間(東西7.0m)、梁行2間(南北4.8m)の規模を持つ総柱の掘立柱建物である。建物の検出レベルは33.45m前後である。桁行の柱間は1.4~1.9mと不揃いであるが、梁行の柱間は2.4m等間である。面積は33.6m²を測る。主軸方位はN-105°-Wである。掘方は、楕円形を呈し、規模は0.3m前後で8-O Bの掘方と比較すると同程度である。柱痕跡も約0.2m前後とやや細い。柱穴底のレベルは、33.32~33.41mと不揃いである。柱穴埋土は2.5Y6/2シルトで、柱心は2.5Y7/1シルトである。

第5項 時期不明遺構

450-O B (第43図)

K23E I に位置する桁行3間(南北4.7m)以上、梁行2間(東西3.6m)以上の規模を持つ掘立柱建物である。建物の検出レベルは33.43mである。桁行の柱間は1.5~1.6mで、梁行の柱間は1.8m等間である。面積は17.86m²以上を測る。主軸方位はN-20°-Wである。

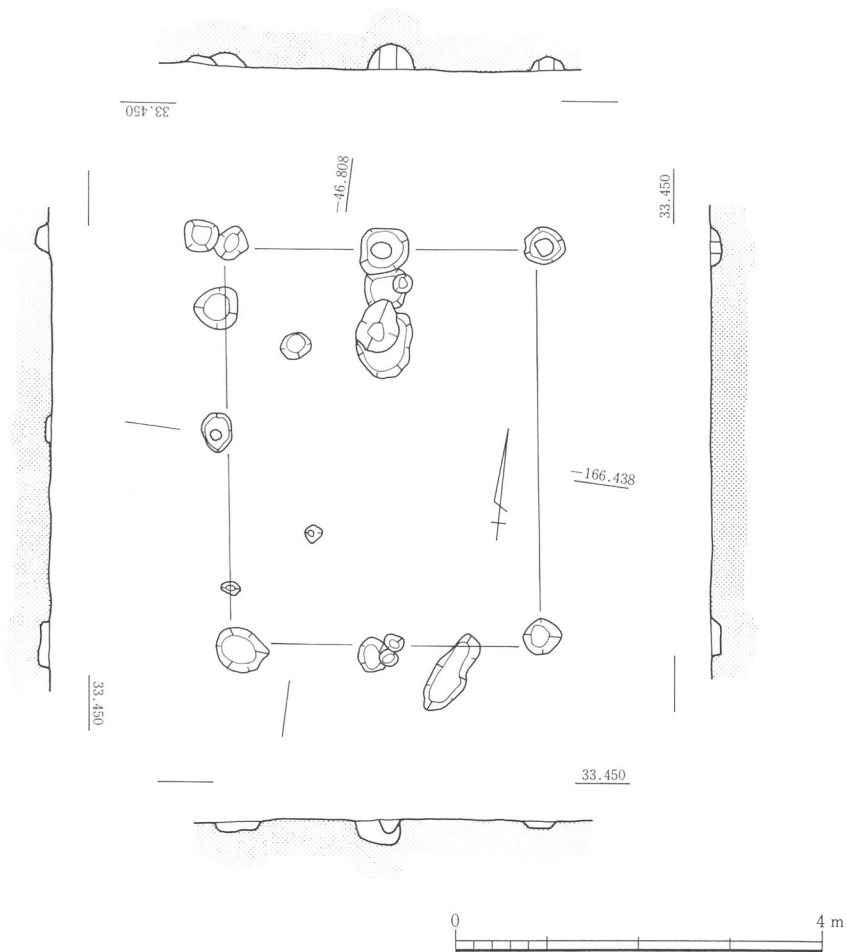


第43図 450-O B 平面・断面図

る。掘方は楕円形を呈し、規模は0.4～0.5m前後である。柱穴埋土は10Y R6/6シルト、柱心は10Y R6/3シルトである。

418-O B (第44図、図版15)

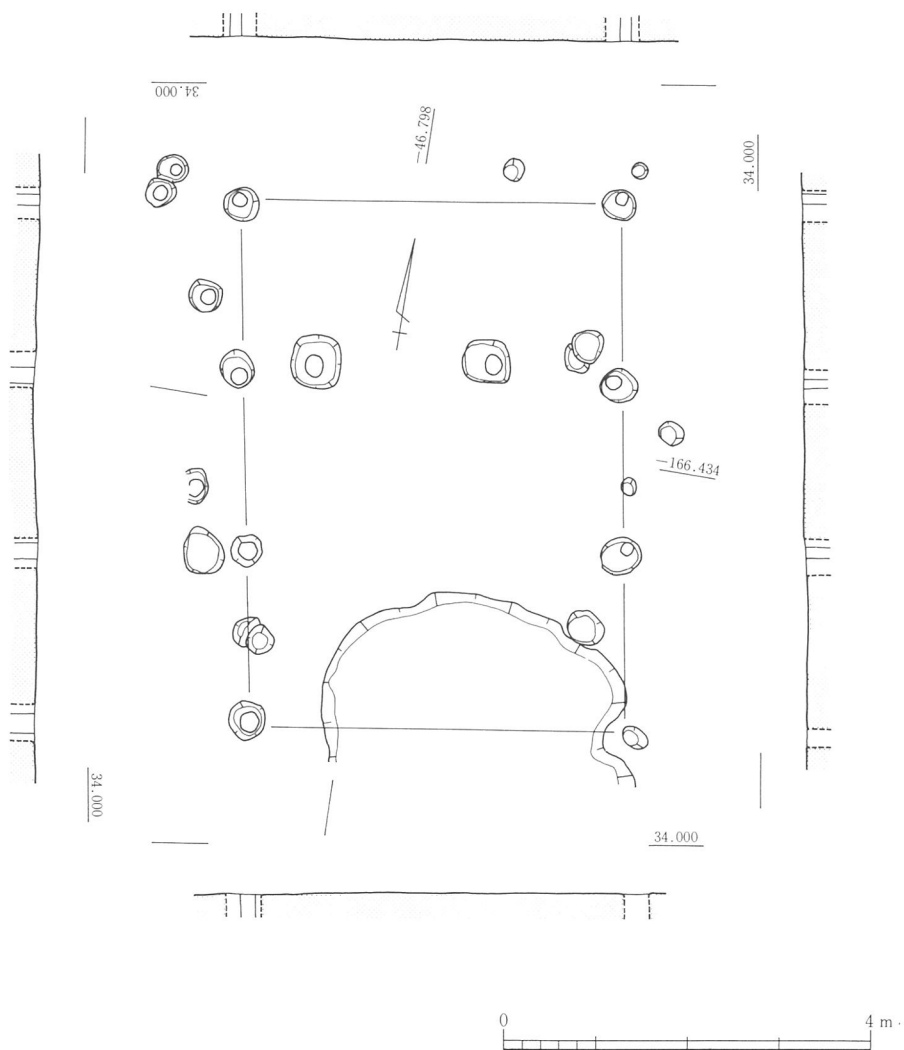
K22 X Jに位置する桁行2間(南北4.5m)、梁行2間(東西3.5m)の規模を持つ掘立柱建物である。建物の検出レベルは33.10mである。桁行の柱間は北から2.1m、2.4mで、梁行の柱間は東から1.7m、1.8mである。面積は15.75m²を測る。主軸方位は、N-8°-Wである。掘方は、楕円形を呈し、規模は0.4～0.5m前後である。柱穴底は四隅とも32.98mと一定のレベルであるが、柱径は10～20cmと不揃いである。柱穴埋土は10Y R6/3シルト、柱心は10Y R5/4シルトである。



第44図 418-O B平面・断面図

110-O B (第45図)

K23A Hに位置する桁行3間(南北5.7m)、梁行2間(東西4.1m)の規模を持つ掘立柱建物で、建物の検出レベルは33.45mである。134-O Oと重複し、桁行の柱間は北から1.9m等間、梁行の柱間は不明である。面積は23.37m²を測る。主軸方位はN-9.5°-Wである。掘方は楕円形を呈し、規模は0.4~0.5m前後である。柱穴底のレベルは33.20~33.28mである。柱径は約20cmである。柱穴埋土は10Y R6/3シルト、柱心は10Y R5/4シ

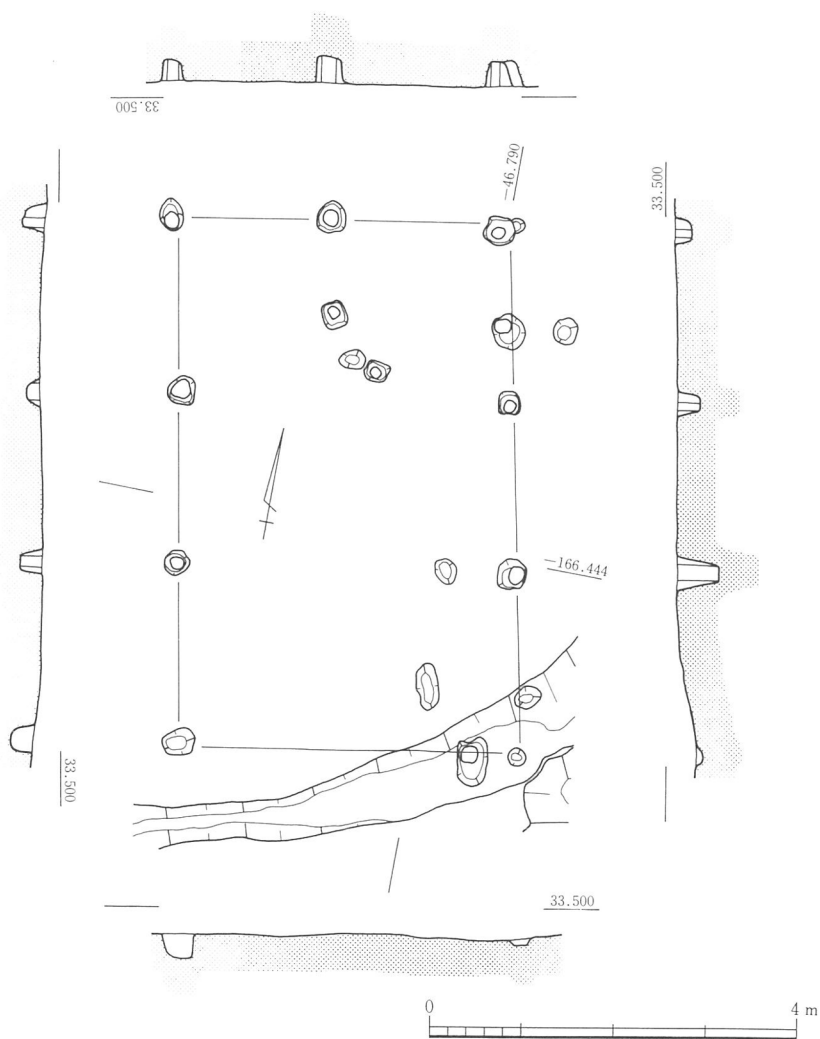


第45図 110-O B平面・断面図

ルトである。

292-O B (第46図、図版15)

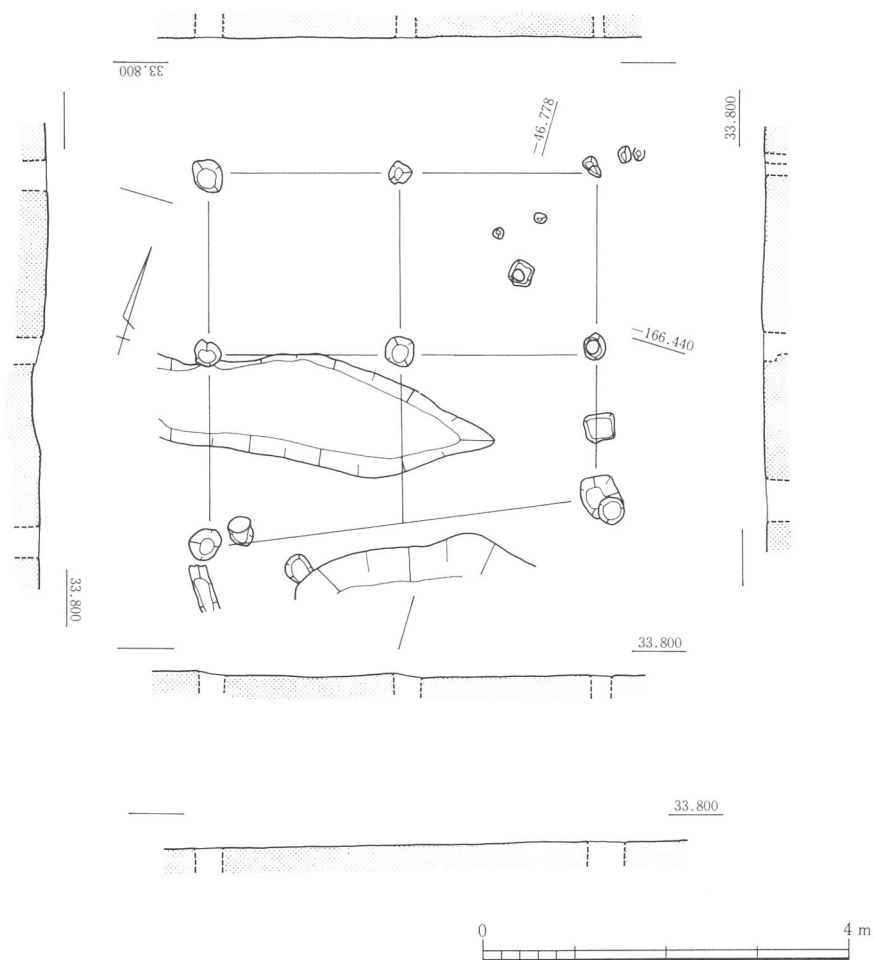
K23C Kに位置する桁行3間(南北5.8m)、梁行2間(東西3.6m)の規模を持つ掘立柱建物で、検出レベルは33.45mである。桁行の柱間は北から1.9m、1.9m、2mで、梁行の柱間は東から1.7m、1.9mを測る。面積は20.88㎡を測る。主軸方位はN-12°-Wである。掘方は楕円形を呈し、規模は0.3m前後である。柱穴底のレベルは33.01~33.30mで柱径は約20cmである。柱穴埋土は2.5Y5/3シルト、柱心は10Y R7/2シルトである。



第46図 292-O B 平面・断面図

171-O B (第47図)

K23C Kに位置する桁行2間(東西4.2m)、梁行2間(南北4m)の規模の掘立柱建物である。奈良時代の溝394-O Sと重複する。新旧関係は、171-O Bが新しい。建物の検出レベルは33.45mである。桁行の柱間は2.1m等間で、梁行の柱間は2m等間を測る。面積は16.8㎡を測り、主軸方位はN-106°-Wである。掘方は楕円形を呈し、規模は0.3m前後である。柱穴底のレベルは33.25mで一定し、柱痕径は約18cmである。柱穴埋土は10Y R7/3シルト、柱心は10Y R7/2シルトである。

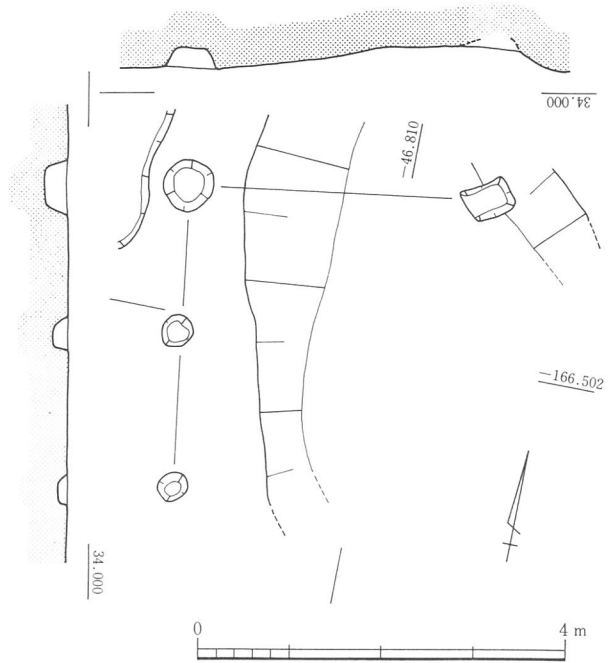


第47図 171-O B平面・断面図

381-O B (第48図)

K22WAに位置する、桁行2間(南北3.3m)以上、梁行2間(東西3.3m)以上の規模を持つ掘立柱建物で、古墳時代の391-O Gと重複するが、新旧関係は確認できなかった。あるいは391-O Gより古い可能性もある。建物の検出レベルは32.77mである。桁行の柱間は1.6m、1.7mを測る。面積は10.89m²以上を測り、主軸方位はN-15°-Wである。掘方は、円形、あるいは長方形を呈し、規模は円形のもが0.35~0.55m、長方形のもが0.4×0.5mである。柱穴底のレベルは一定

で33.40~33.52mである。柱穴埋土は10Y R6/3シルト、柱心は10Y R6/2シルトである。



第48図 381-O B 平面・断面図

第3節 I区Dの調査成果

調査地点の概要（付図3）

当該地区は丘陵東側斜面の中位段丘上に位置し、更に東方の石津川へ向かっては沖積段丘が展開し、既往の発掘調査では石津川の旧河道等が発見されている。丘陵上のI区C地点とは現況で約1mの段差が認められる等、特に地形的に緩急の変化が認められる地点である。調査前は平坦に削平され宅地として利用されていた。削平は旧耕土の存在から開墾に起因するものと判断できるが、既存建物解体時には広範囲にわたる掘削がなされ、遺構の遺存状態は非常に悪い。

当初、既往の調査におけるI区Aで検出された遺構等と関連する遺構の検出が予想されたが、建物跡等、連続性を復原し得ない柱穴状遺構が10基検出されたにすぎない。いずれからも顕著な遺物等は出土していない。

第4節 I区Eの調査成果

調査地点の概要（付図3）

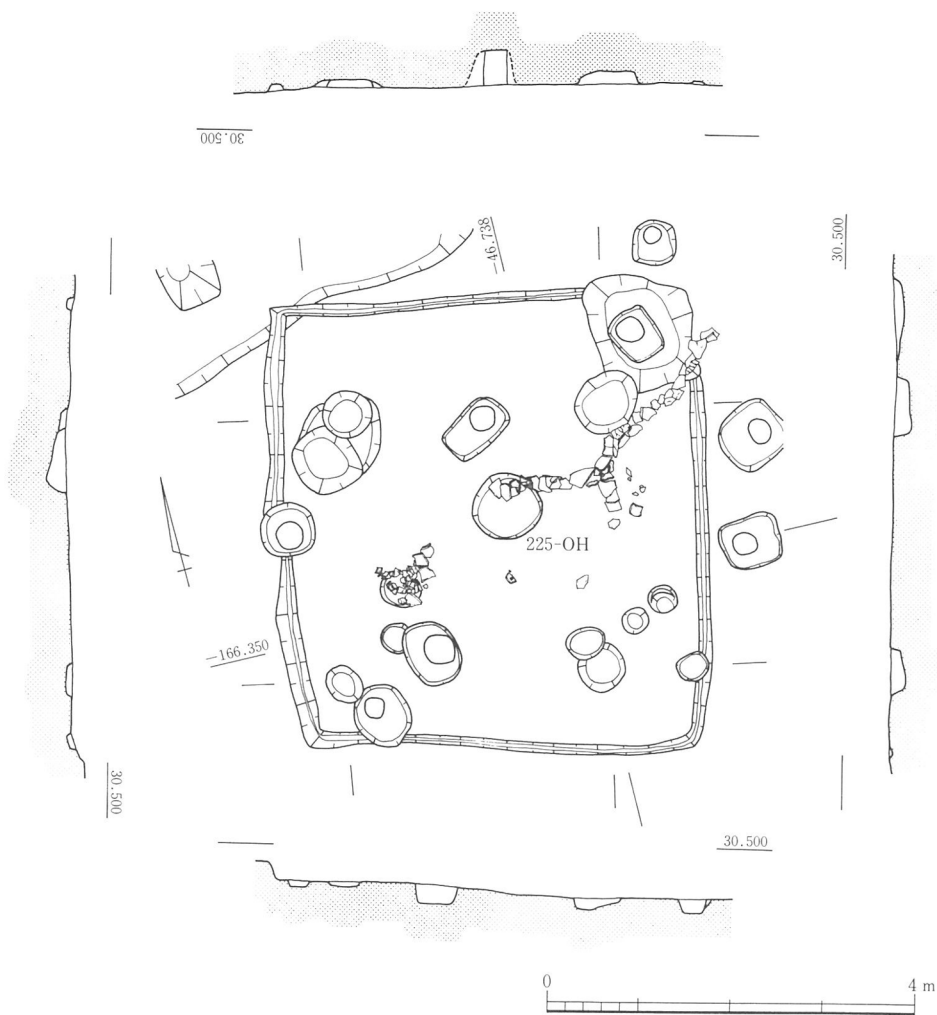
南側I区D同様に地形的な緩急の変化が認められる地点で、段差上のI区Aから段差下のII区へと続く中間部分にあたる。遺物包含層下から古墳時代竪穴住居、奈良時代掘立柱建物、土坑、溝、中世溝等が検出された。なかにはII区検出遺構から連続する未検出部分を確認する等、既往調査成果を補完すると同時に、課題とされた各時代の集落の様相も一段と明らかになった。

第1項 古墳時代

1-O D （第49～51図、図版17～19・32）

丘陵の傾斜と直行して南北に走行する段差下にあたるK18MP付近に位置する。平面方形の竪穴住居で、南北5.1m、東西4.8mを測る。北西隅が2-O S（中世）に切られるが、ほぼ全体が検出された。

四周する壁溝と四隅に住居を構成する柱穴を配する形態と判断する。これらを被覆する厚さ約10～25cmの土層中には、須恵器甕体部破片をY字状に面的に列べた一群と、土師器等の土器群が検出された。この被覆土は2～3層に細分される灰褐色系の粘質土で、竪穴住居外へ東方に層厚を増しながら存在する。出土遺物は住居床面から約10cm遊離する。遺物出土状況から竪穴住居との有機的な関連が想起されようが、これを雄弁に物語る実証的

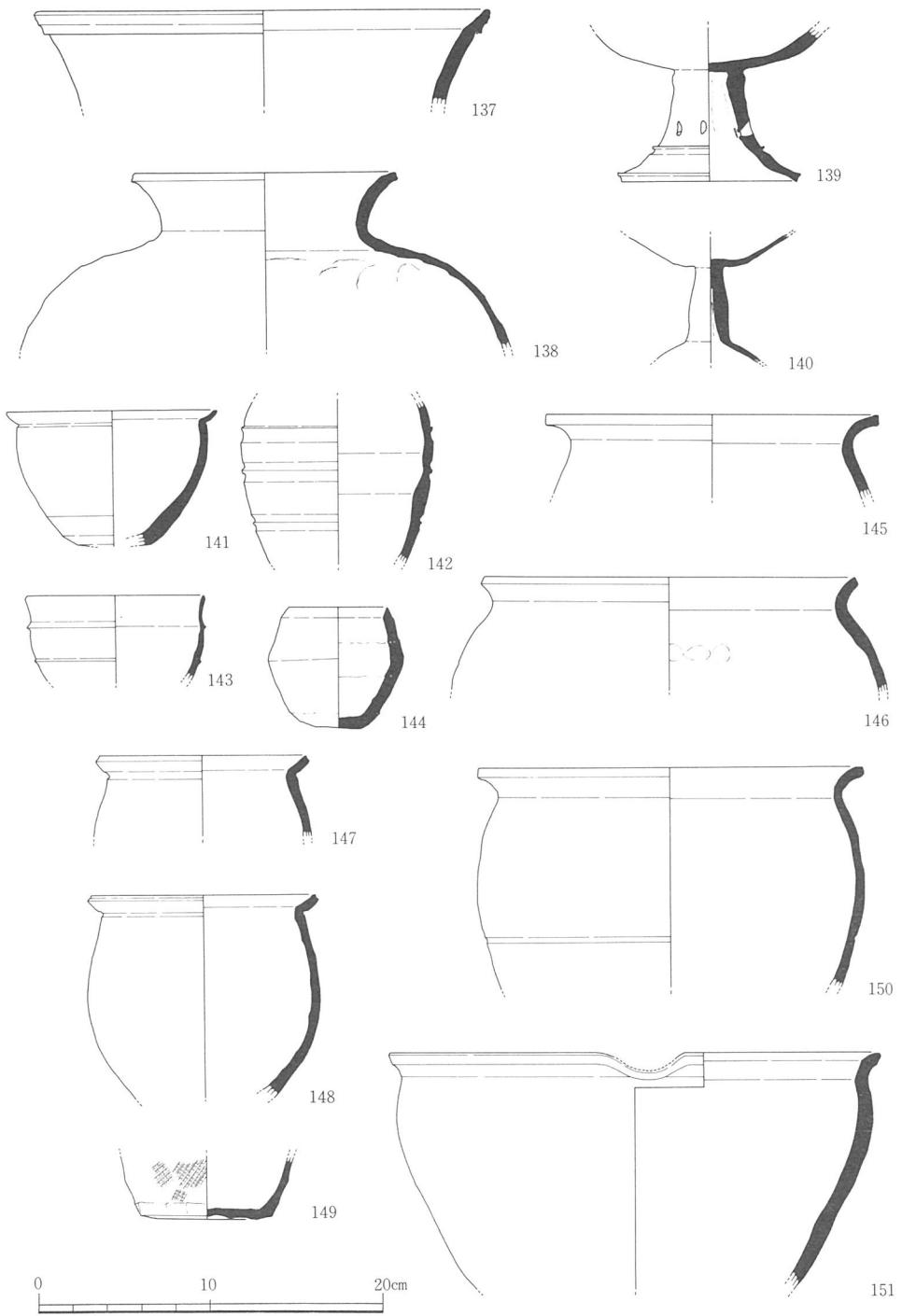


第49図 1-OD平面・断面図

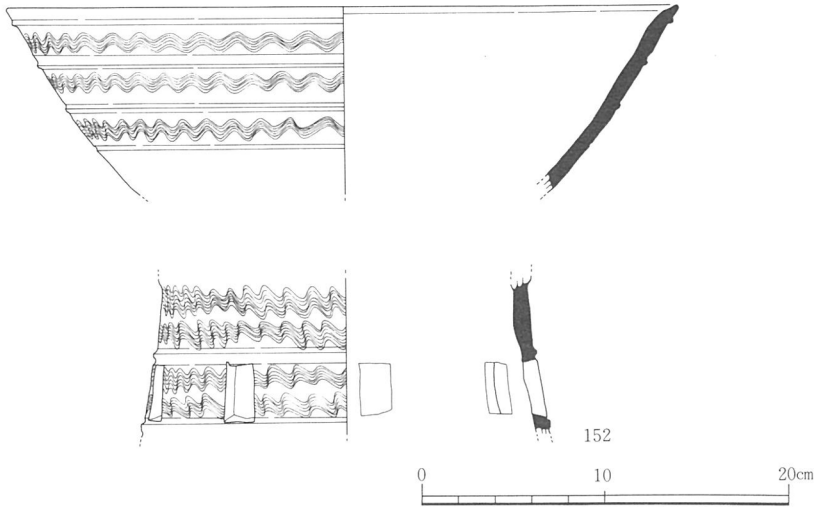
な根拠を見いだすことはできなかった。

壁溝は断面U字形で、残存する深さ5～10cm、幅20～30cmを測る。柱穴は直径40～60cmの円形で、いずれも深さ約15cmを測る。柱痕跡は認められず、埋土中からの出土遺物はない。住居のほぼ中央には円形の炉状の痕跡（225-OH）が検出された。直径は約80cmを測り、埋土は黒褐色の粘質土で焼土等は見あたらない。

図示した遺物は全て1-ODの床面からは遊離して検出された、被覆土中からの出土遺物である。器台の他は日常生活に使用されたであろう甕、高杯の他、軟質土器の平底鉢、埴が出土している。



第50图 1-OD出土遺物(1)



第51図 1-O D出土遺物(2)

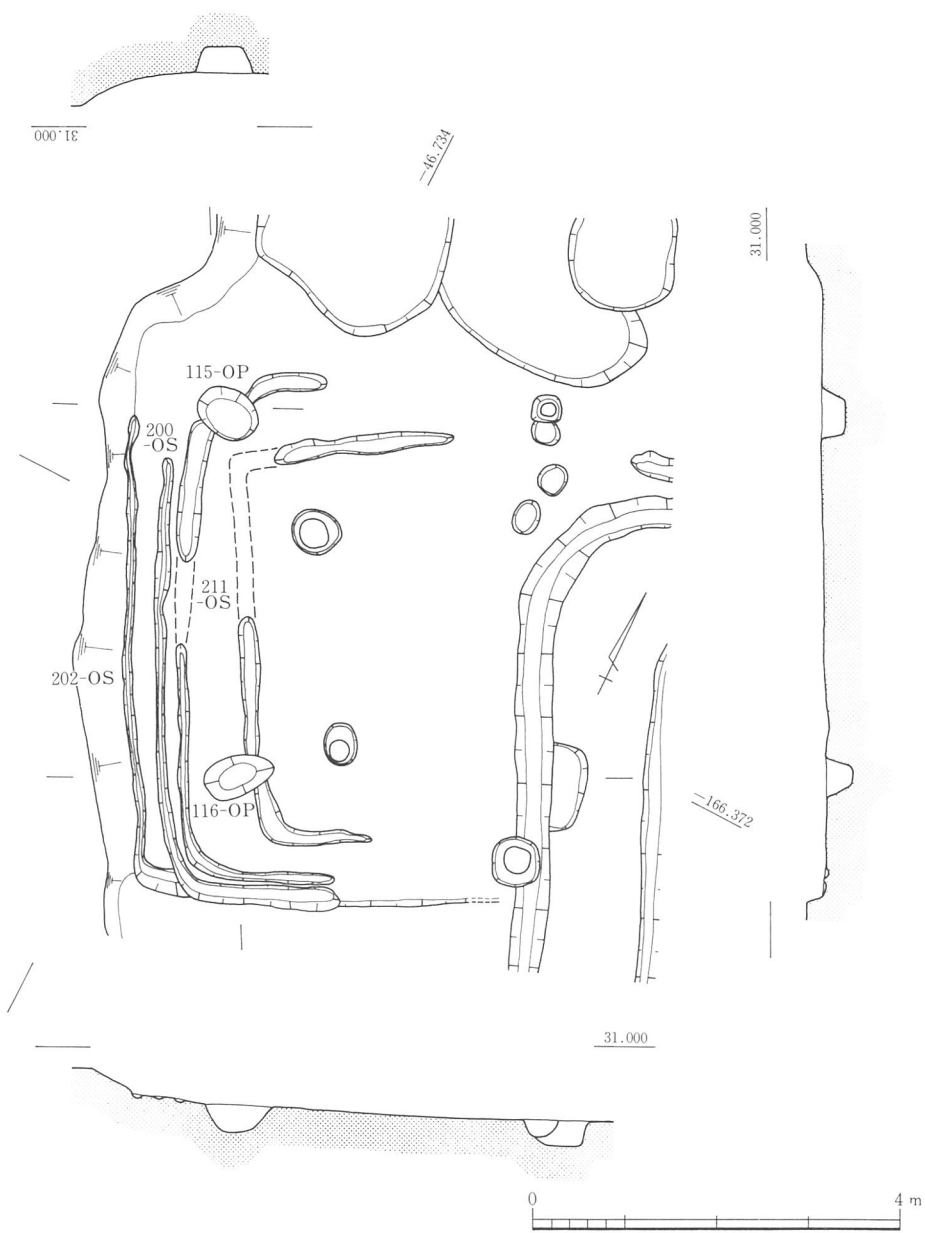
115-O D (第52図、図版19)

丘陵の傾斜に沿って南北に走行する段差下にあたるK18S Q地区付近に位置する。平面方形で四隅に支柱穴が配される形態の竪穴住居と思われる。その遺存状態は悪く、西側壁溝(202-O S)と住居を構成すると思われる柱穴の一部(115-O P、116-O P)が、この東側に重複して展開する153-O Dと切り合いの関係をもって検出された。壁溝は断面U字形で、検出長約5.2m、残存する深さ約5cm、幅10~15cmを測る。柱穴からは顕著な遺物は出土していないが、120-O Dと方向が同じ事等から、120-O Dとは前後関係を有しながらも時間的差異のほとんどない段階に营造されたものと考えられる。

検出状況から153-O Dが段階的に拡張されたものか、あるいは153-O Dが廃棄された後にまったく新たな竪穴住居が構築されたものと考えられる。いずれの場合も200-O S、211-O Sの存在から数次の拡張を想定しなければならない。

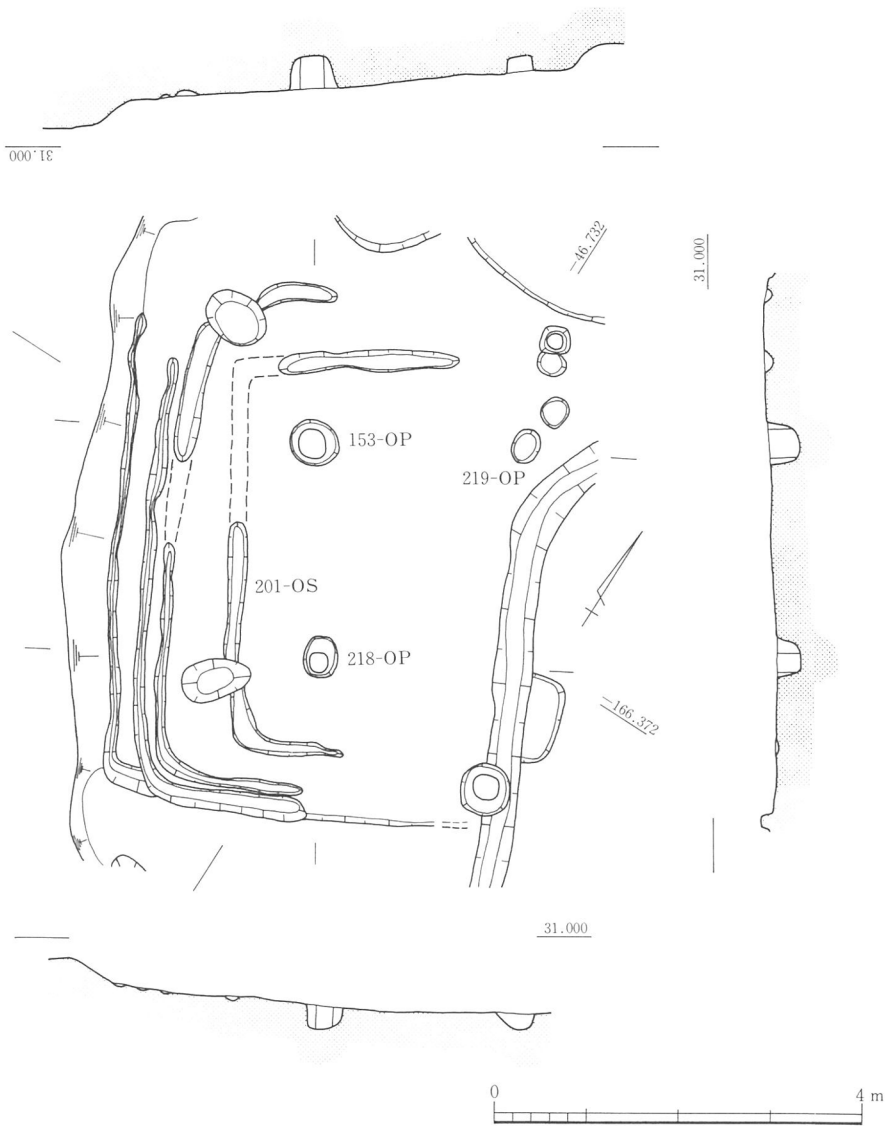
153-O D (第53図、図版19)

K18S QからK18R Q付近に位置する。平面形は方形の、四隅に支柱穴が配される形態の竪穴住居と思われる。その遺存状態は悪く、西側壁溝(201-O S)と住居を構成すると思われる三基の柱穴(153-O P、218-O P、219-O P)が、この西側に重複して展開する115-O Dと切り合いの関係をもって検出された。西側壁溝は断面U字形で、残存する深さ約5cm、復原長は4.4mを測る。153-O P、218-O Pでは、土層の観察から直径20~30cmの柱痕跡が確認された。柱穴の残存する深さは約30~40cmを測る。いずれの柱



第52図 115-OD平面・断面図

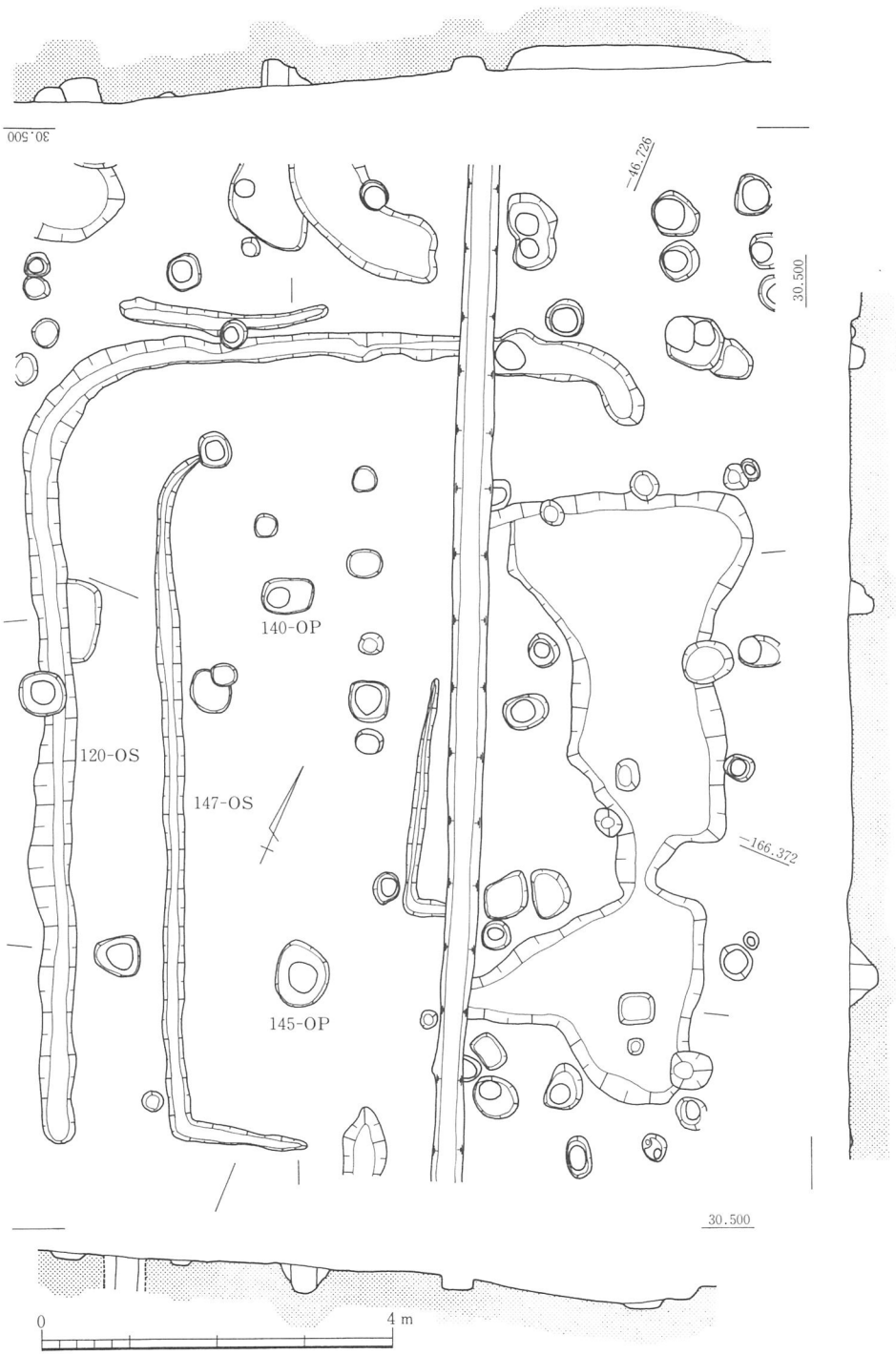
穴からも出土した遺物はない。床面は削平を受ける。219-OPの位置から、住居の東側壁溝は120-OSより更に東に展開するものと思われる。しかし両者の切り合い関係は削平のため確認できない。前述の115-ODとの明確な関係は不明であるが、より後出的な要素がみてとれそうである。



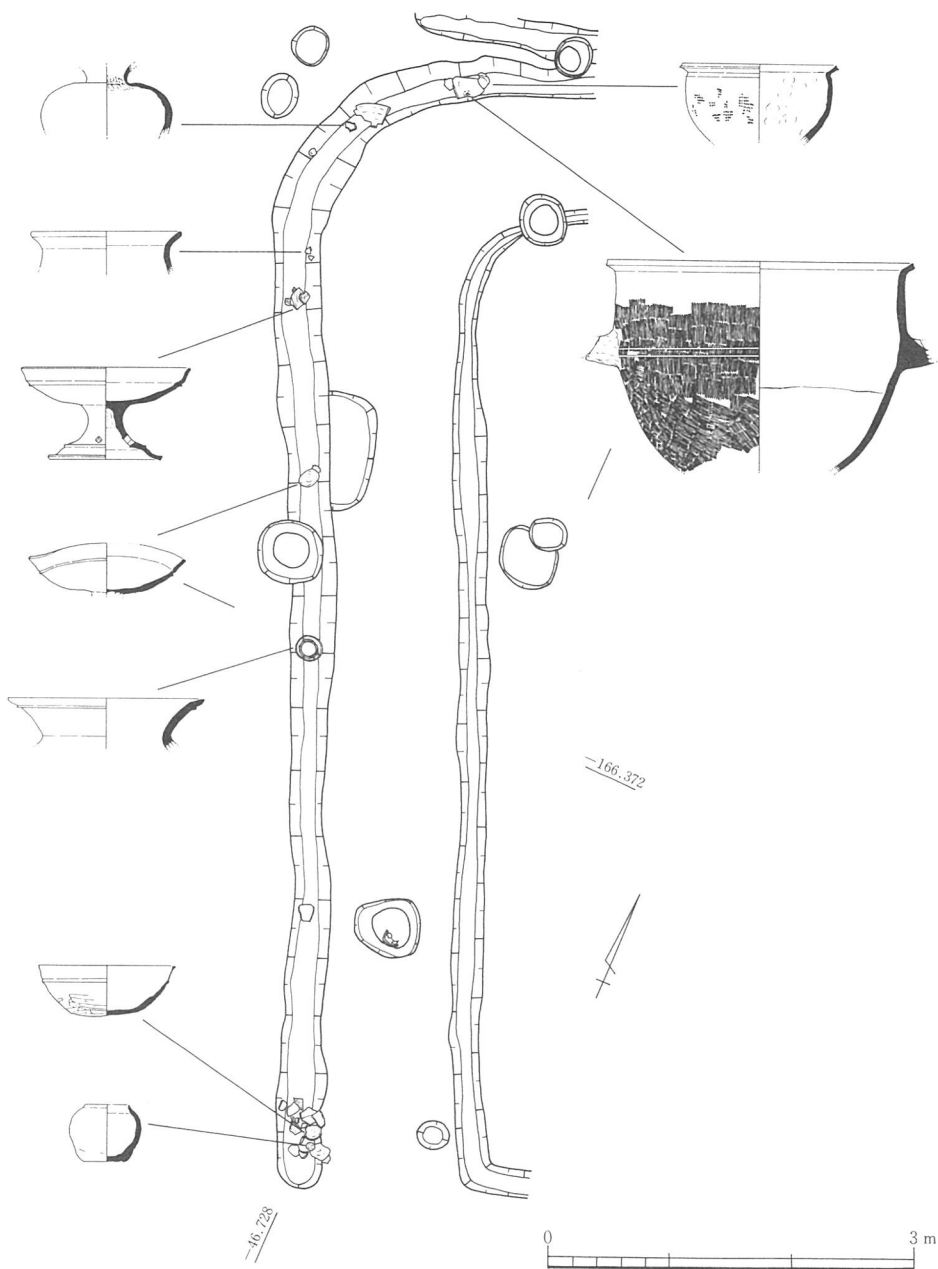
第53図 153-OD平面・断面図

120-OD (第54~56図、図版20~22・32)

東方の沖積地へ向かって緩やかに下傾する、当調査区の東端K18R R、K18S R、K18S S 付近に位置する竪穴住居である。検出された遺構は、壁溝(147-OS)と、住居を構成すると思われる二基の柱穴(140-OP、145-OP)の他に、壁溝と平行に外周する溝状遺構(120-OS)がある。今回検出された遺構は住居全体の西側半分にあたり、東



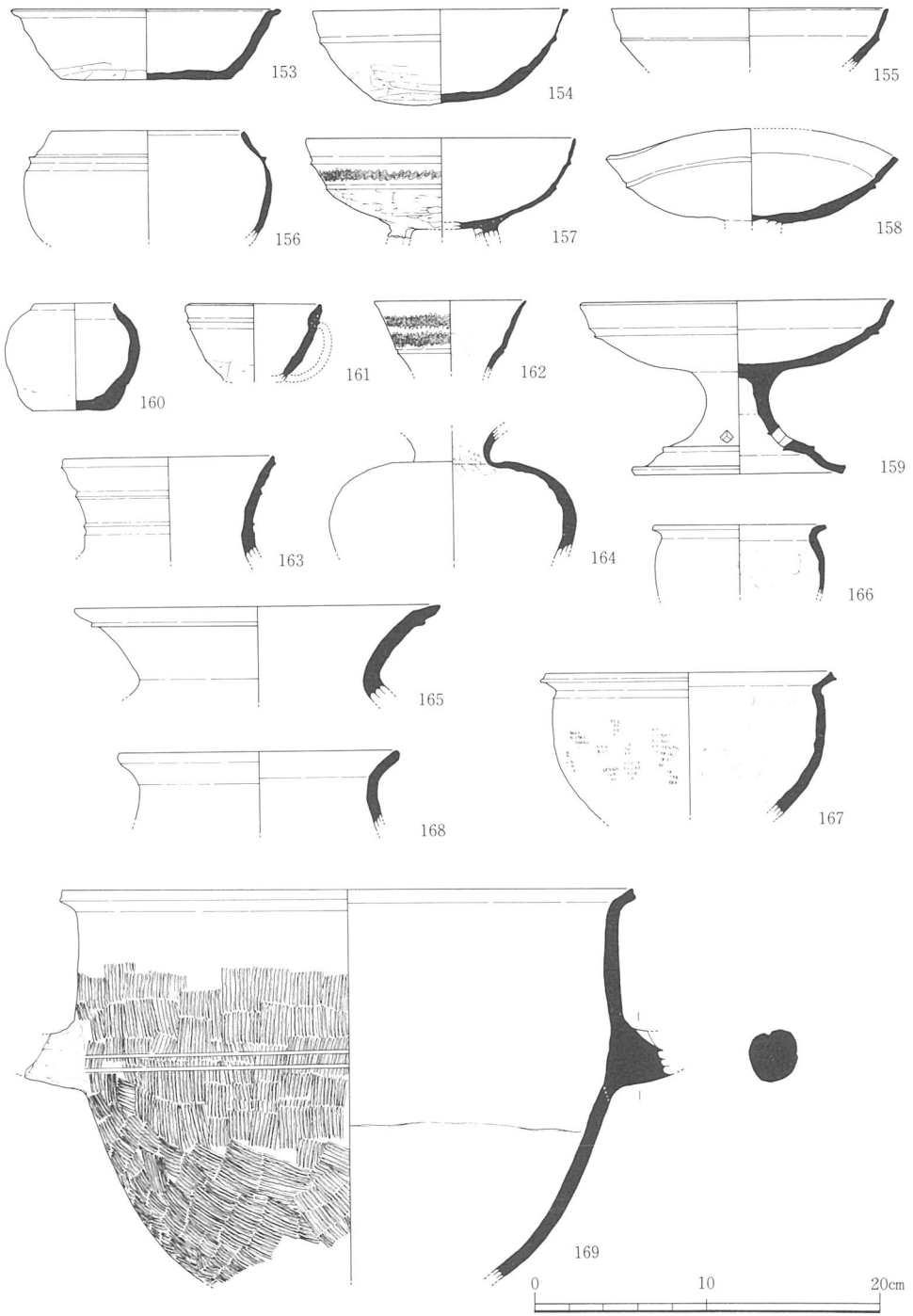
第54图 120-OD平面·断面图



第55図 120-O D遺物出土状況

半部分は既往調査区II区の190-O Sに連続し、この遺構を補完する。

120-O Sは断面U字形で、検出幅約20cmを測る。溝底レベルは地形の傾斜と同様に東方へ向かって深くなり、最深部は検出面より約20cmを測る。検出状況から住居とは相関的



第56图 120-O D 出土遺物

関係にあると考えられ、排水的機能を果たす溝と考えられる。120-O SはII区216-O Sと直接的に連続することは明白で、これより内に展開するであろう壁溝を復原すれば、その平面形は、長辺約8 m、短辺復原長4 m前後を測る長方形を呈する、他より規模の大きい竪穴住居となる。

壁溝は断面U字形で、幅10数cm、深さ約5 cmを測る。住居を構成すると考えられる柱穴は、II区調査分を含めても140-O P、145-O Pの二基のみである。いずれからも柱痕跡が認められた。柱穴からは顕著な出土遺物はない。

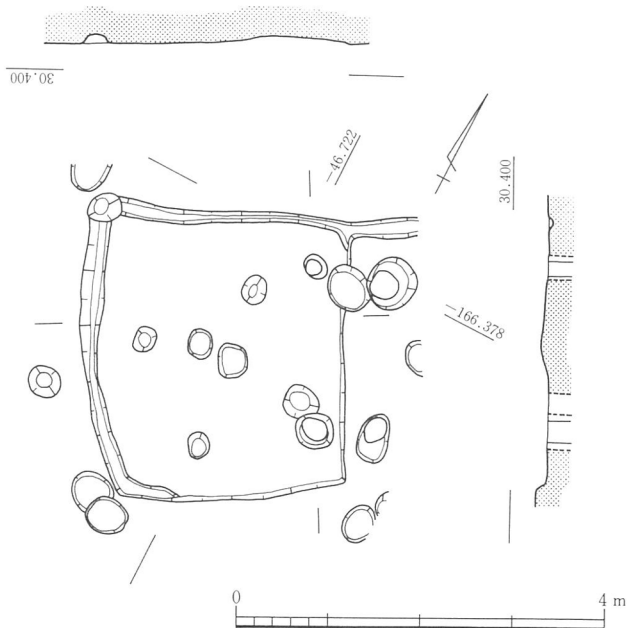
第56図に示した遺物は全て120-O Sから出土した遺物である。(166~168)以外は須恵器で、いずれも破片で出土しており、復原により図化した。(155)は高杯の杯部か。(157)は四本の脚柱をもつ。杯部下半は不定方向のやや稚拙なケズリが施される。(158)の杯部には接合部の細い脚柱がつく。(159)の脚部には菱形の透かしが3方に穿たれる。(166~168)は軟質土器で、平底鉢、埴、甕である。

以上から、120-O Dは竪穴住居とするより、むしろ専住以外の用途に供された竪穴式の建物跡と理解したい。この場合、当遺跡の立地から、須恵器生産に直接的に関連する工房的用途が十分に推考される。

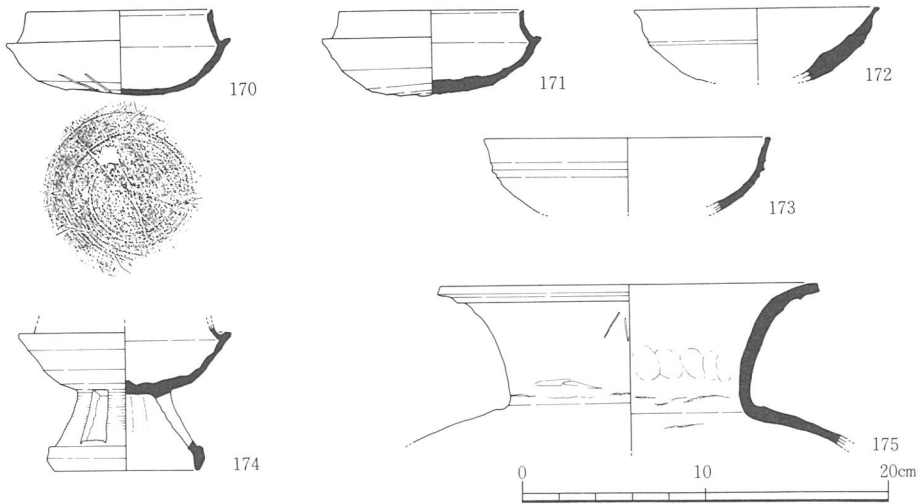
165-O D (第57図、図版23)

調査区南東隅のK18 T T付近において検出された竪穴住居で、II区において検出された1081-O Dの西側未検出部分にあたる。平面形は方形で、規模は南北約3.2m、東西約2.9mを測る。北西辺には断面U字形の壁溝が巡る。

床面の被覆土は灰褐色系の粘質土で、整地土等は確認されなかった。また、住居を構成する柱穴、竈跡は当調査区でも検出されず、出土遺物もない。



第57図 165-O D平面・断面図



第58図 154-O S 出土遺物

154-O S (第58図、図版23・33)

115-OD、153-ODの南側K18T T地区付近に位置する。遺構南端は近・現代の井戸により切られる。北側は段差があり連続性が認められない。溝状遺構として報告するが、土坑状遺構とも考えられる。断面U字形で、埋土はにぶい褐色の粘質土である。出土遺物は完形に近いものも含まれる。

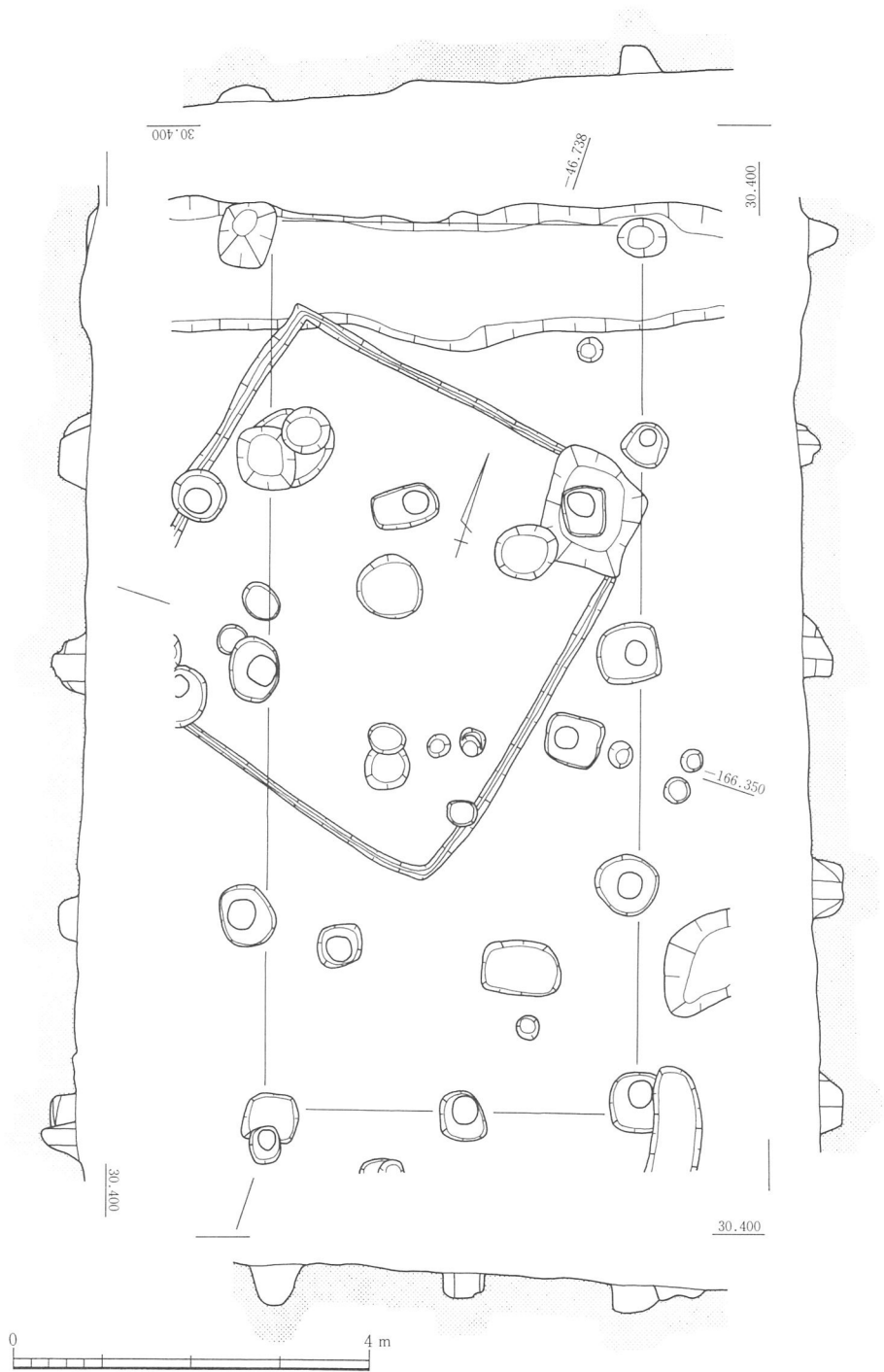
第2項 奈良時代

18-O B (第59図)

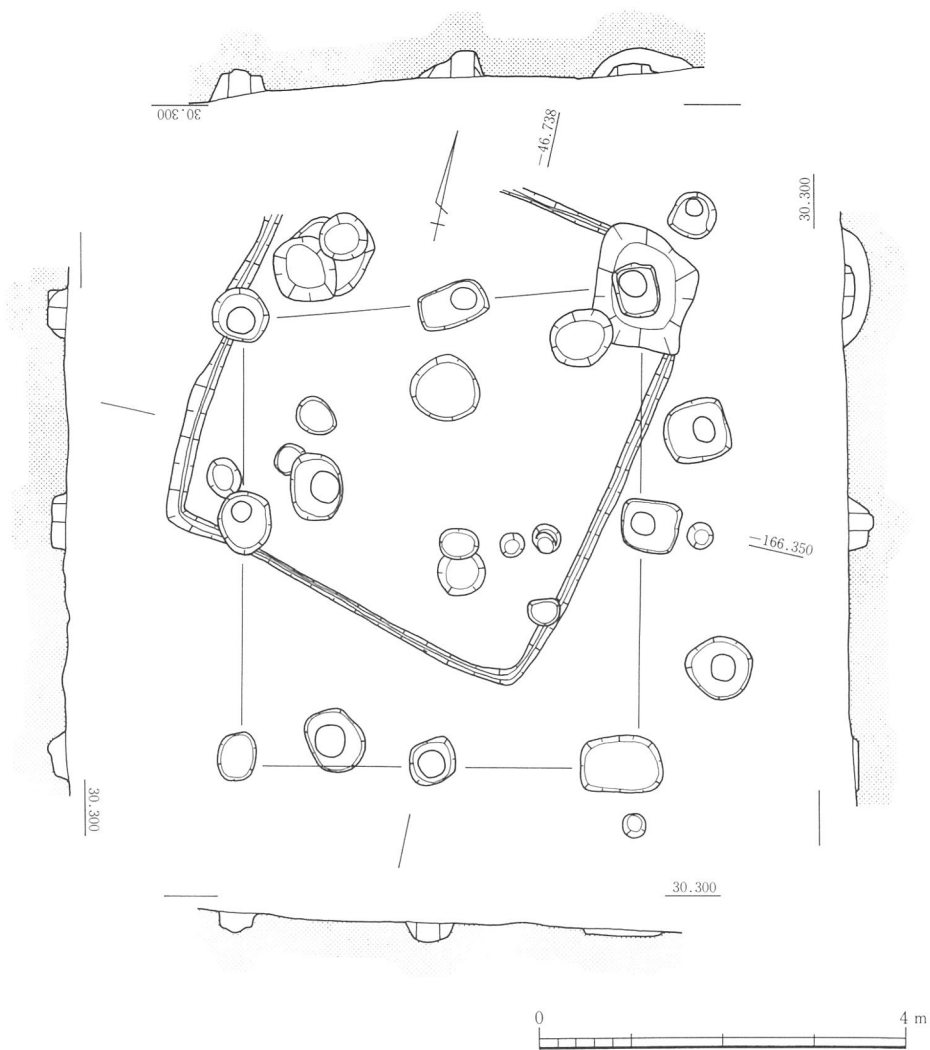
K18LO、K18MP、K18NP付近に位置する。規模は桁行4間×梁行2間(10.2m×4.2m)の南北棟である。面積は42.84㎡を測る。主軸方位は桁行軸線でN-17°-Wを示す。柱通りは良く、柱間寸法は桁行2.2~2.7m、梁行2mである。柱穴は方形に近い形状で、埋土は灰黄褐色系の粘質土、いずれの柱穴からも柱痕跡が認められた。遺構検出レベルは29.80~30.30m、柱穴底レベルは29.52~30.00mである。

47-O B (第60図、図版24)

K18MP付近に、18-O Bと重複して検出された。18-O Bとの切り合い関係はなく、両者の前後関係は不明である。規模は桁行2間×梁行2間(5.4m×4.4m)の総柱建物である。面積は23.76㎡以上を測る。主軸方位は桁行軸線でN-12°-Wを示す。柱間寸法は桁行2.1~2.8m、梁行1.8~2.4mである。柱穴は灰黄褐色系の粘質土である。遺構検出レベルは29.88~30.28m、柱穴底レベルは29.66~29.96mである。



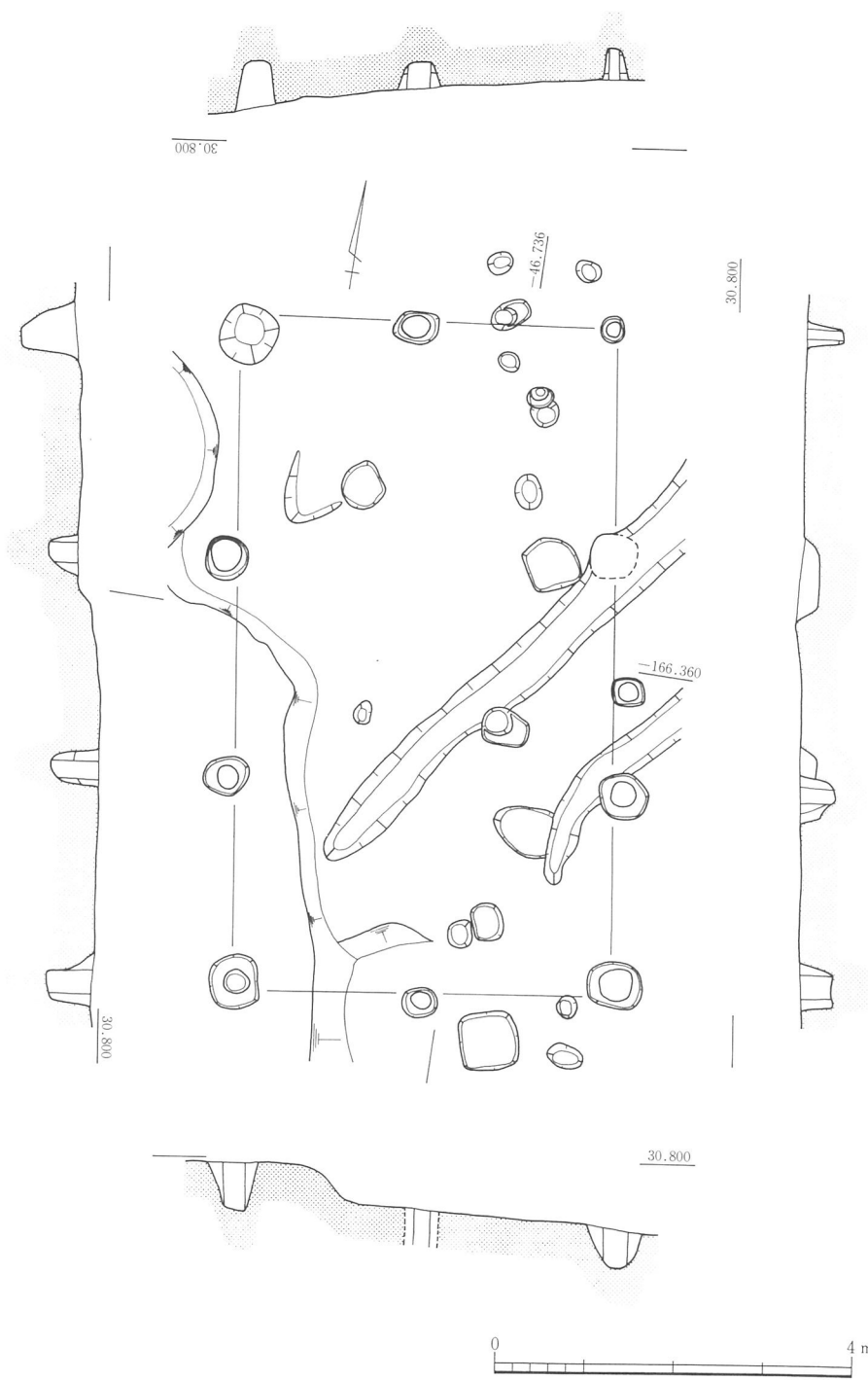
第59图 18-OB平面・断面图



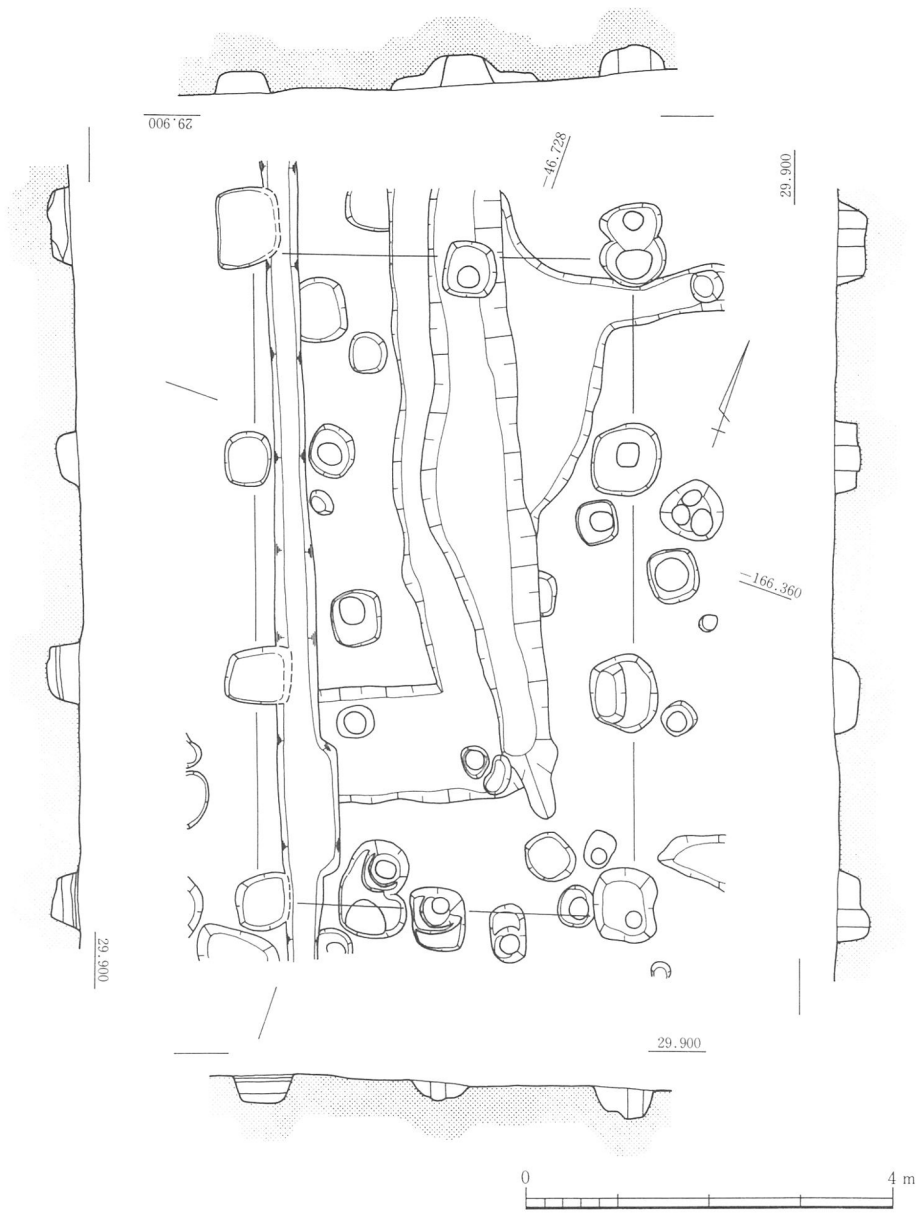
第60図 47-OB平面・断面図

17-OB (第61図、図版3・24)

K18OP、K18OQ、K18PP、K18PQ付近に位置する。約50cmの段差が生じる地点にあたる。規模は桁行3間×梁行2間(7.6m×4.3m)の南北棟である。面積は32.68㎡を測る。主軸方位は桁行軸線でN-7°-Wを示す。柱間寸法は桁行2.3~2.8m、梁行2~2.2mである。56-OPが4-OSを、63-OPが3-OSを切る。柱穴は灰黄褐色系の粘質土である。遺構検出レベルは30.04~30.76m、柱穴底レベルは29.66~30.22mで、段差下の柱穴底が深い。



第61图 17-O B平面・断面图



第62图 227-O B平面·断面图

227-OB (第62・63図)

K18PR付近に位置する。II区の513-OP、279-OP、245-OP、258-OP、227-OP、817-OPによって、桁行3間×梁行2間(7.2m×4.2m)の南北棟の建物が復原された。面積は30.24㎡を測る。主軸方位は桁行軸線でN-19°-Wを示す。柱間寸法は桁行2.1~2.6m、梁行1.8~2.4mである。柱穴は灰黄褐色系の粘質土、今回調査区内の柱穴では柱痕跡は検出されていない。遺構検出レベルは29.70m、柱穴底レベルは29.3~29.42mである。第63図(176)が出土している。

149・150・151-OO (第64図、図版25)

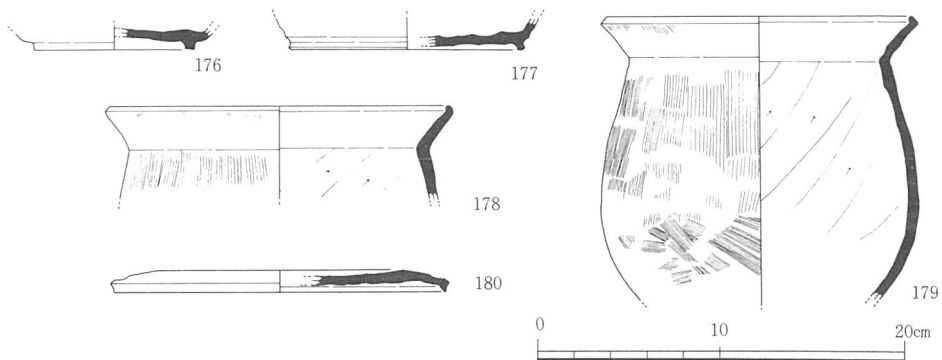
K18QQ、K18RQ付近に位置し、相互に切り合った状態で検出された。中央の150-OOが149・151-OOに切られる。平面的にはいずれも楕円形を呈し、底面は比較的平坦である。埋土は褐色系の粘質土一層である。古墳時代の須恵器片と若干の土師器片が出土している。

117・118・166-OO (第63・64図、図版25)

K18GRに位置する。相互が切り合い関係をもって検出され、118-OO、166-OO、117-OOの順序が考えられる。埋土はいずれも褐色系を基調とする色調の粘質土である。顕著な遺物は出土していない。第63図(177~179)は117-OO、(180)は118-OO出土遺物である。

3・4-OS (図版25)

K18NQ、K18OQ、K18PQ付近に位置する。標高の高い南方向から低い北方向へ、「へ」の字状に曲がりながら平行に走行する。これより南方へ更に連続していたか否かは不明である。断面U字形で、埋土は灰褐色系の粘質土一層である。埋土から奈良時代とし



第63図 227-OB、117・118-OO出土遺物



第64図 149・150・151・117・118・166-〇〇平面・断面図

たが、II区検出の484-〇S、540-〇Sと連続する可能性も指摘でき、古墳時代に属する可能性が充分にある。

第3項 中世

2-〇S

K18LO、K18LP付近と、K18MMに位置する。I区A検出の235-〇S、II区検出の235-〇Sと連続する溝である。当調査区検出部分は最も地形的緩急を有する地点であり、後世の開墾にともなう段差の形成に伴って一部が削平された状態で検出された。顕著な遺物は出土していないが、既往の調査で中世に属することが確認されている。

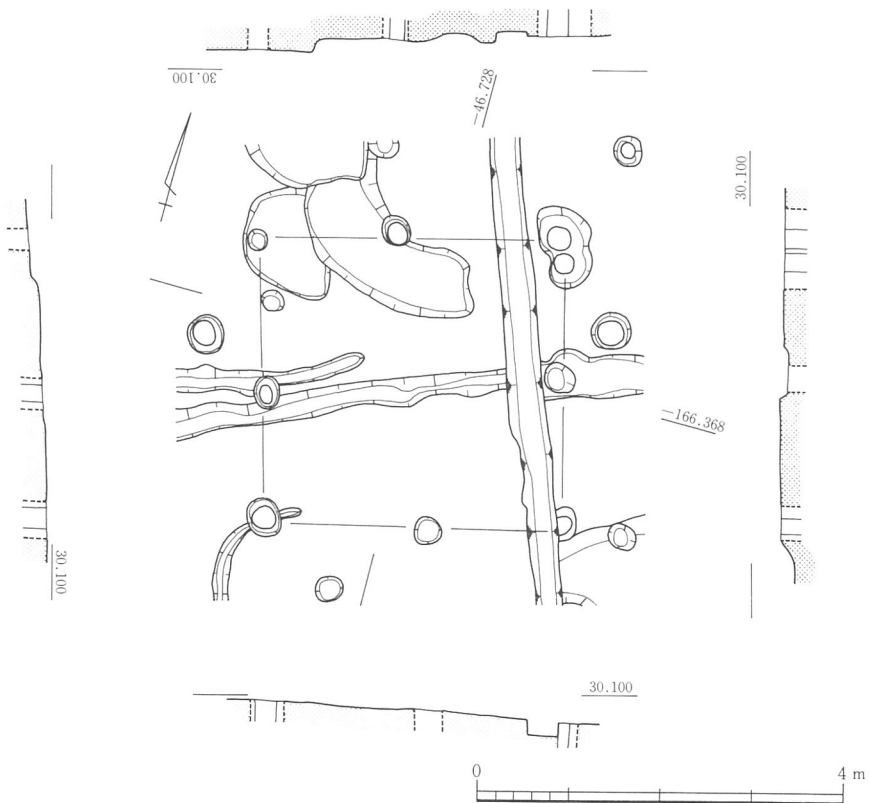
第4項 時期不明遺構

111-OB (第65図)

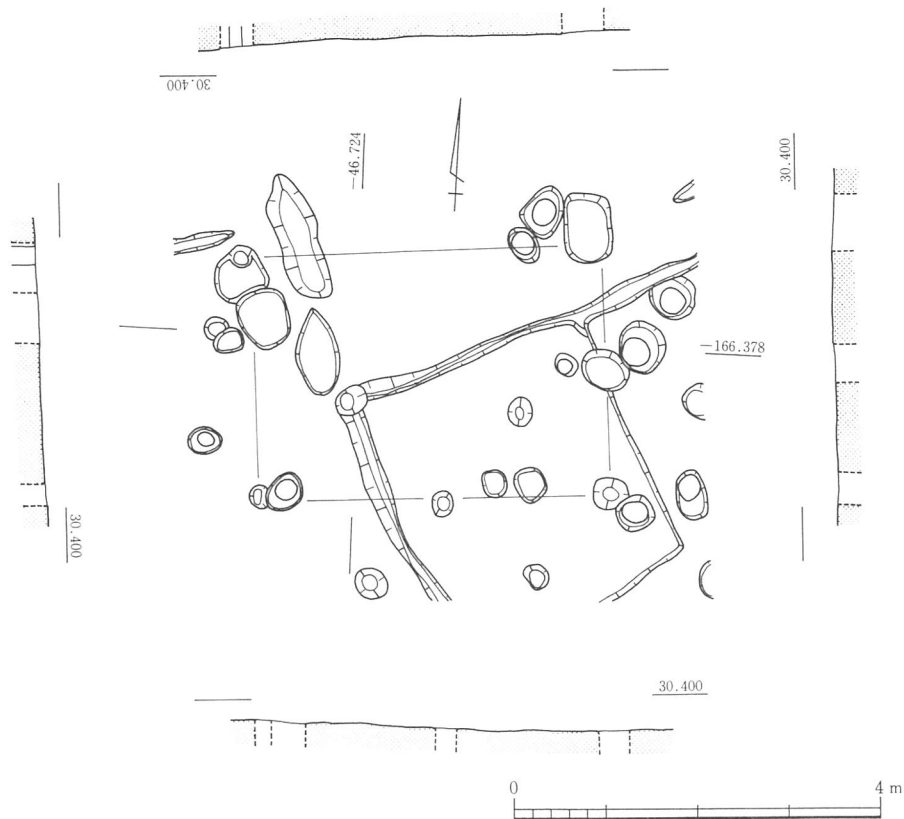
K18GR、K18RR付近に位置する。II区検出の218-OP、361-OP、192-OPとともに、桁行2間×梁行2間(3.2m×3.0m)の掘立柱建物を構成する。面積は9.6㎡を測る。主軸方位は桁行軸線でN-76°-Eを示す。柱間は桁行1.4~1.7m、梁行1.4~1.8mである。柱穴埋土は褐灰色系の粘質土で、遺構検出レベルは29.81~29.92m、柱穴底レベルは29.30~29.86mである。奈良時代の土壌118・166-OOを切る。

157-OB (第66図)

K18UT付近に位置する。II区検出の73-OP、1028-OPとともに桁行2間×梁行1間(3.8m×2.4m)の掘立柱建物を構成する。面積は9.12㎡を測る。主軸方位は桁行軸線でN-85°-Eを示す。柱間寸法は桁行1.8~2.0mである。柱穴はいずれもほぼ円形であ



第65図 111-OB平面・断面図



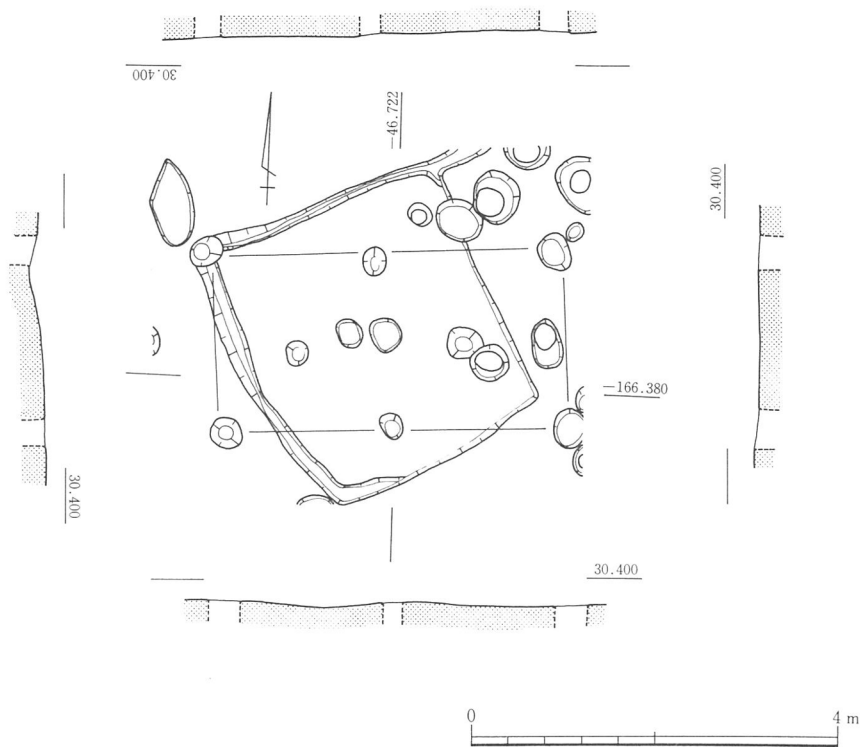
第66図 157-O B平面・断面図

るが、大きさにはばらつきがある。遺構検出レベルは30.00～30.18m、柱穴底レベルは29.78～30.10mである。

169-O B (第67図)

K18T T付近に位置する。II区検出の1631-O P、1029-O P、3-O P、22-O Pとともに桁行2間×梁行1間(3.8m×2.0m)の掘立柱建物を構成する。204-O Pが165-O Dの壁溝北西隅部を切る。面積は7.6㎡を測る。主軸方位は桁行軸線でN-90°-Eを示す。柱間寸法は桁行1.8～2.0mである。柱穴はいずれも円形を呈し、柱痕跡を確認することはできなかった。遺構検出レベルは30.16～30.2m、柱穴底レベルは29.76～29.98mである。

上述の157-O Bとともに、既往の調査においても2間×1間の構造をもつ掘立柱建物は希薄であった。両者は平面的には重複する状態で検出されているが、その規模、方向が



第67図 169-OB平面・断面図

似通っていることから長期にわたる時期差は考えがたく、前後する時期に营造されたもの
 と考える。主軸方位も古墳時代、奈良時代の掘立柱建物とは異なり、これ以降の時代に属
 する蓋然性が高いと言える。

224-OS

K18SS付近に位置する。他の遺構との切り合いがなく出土遺物がないため、時期不明
 の溝状遺構とした。しかし、検出地点が120-OD等の竪穴住居が顕著に検出される地点
 であること、溝自体がL字形に屈曲する等、元来は竪穴住居の壁溝であった可能性がある。
 断面はU字形で、検出面からの深さは約5cm程である。

第5節 393-O Lの調査成果

第1項 393-O Lの概要（第68図）

I区Cにおいて検出された、濃登ノ池に続く谷状地形である。調査前は埋没はするものの周辺より約1m程低く、方形の耕作地として利用されていた。

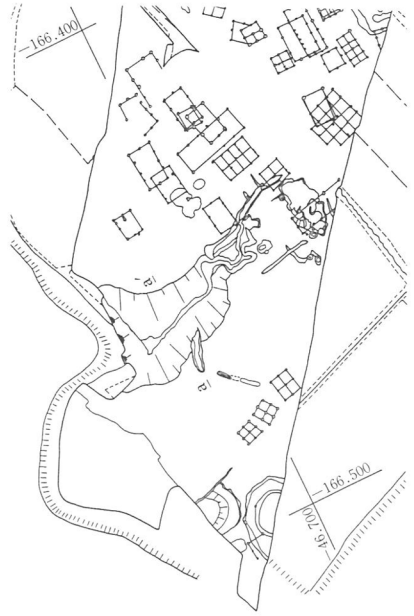
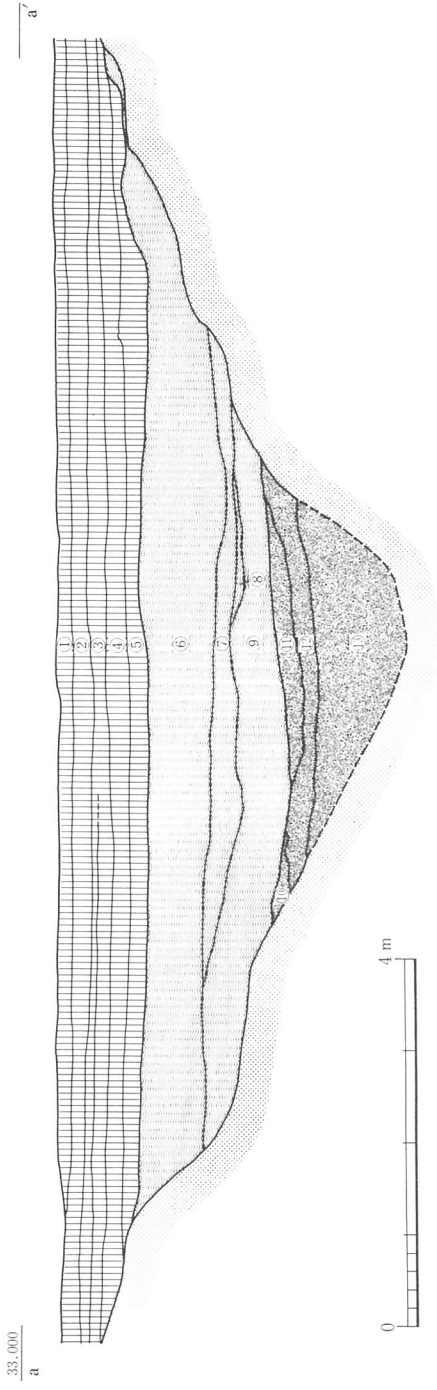
濃登ノ池は、これより更に南方のフデ池・尾美濃池・松池から連なる、拇丘陵の懐深くから石津川へと通じた一支谷が分断された結果形成された池であると認識している。

谷状地形検出時の最大幅は約20m、完掘後の最深部は検出面より約5mを測り、断面では中腹でやや平坦にのびる段を形づくるが、底部では深い「V」字状を呈する。谷状地形埋積後、埋土上面で検出される遺構はない。埋土は大きく3層に分かれ、上層からI・II・III層とした。以下に土層と出土遺物の概略を述べる。

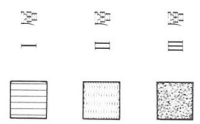
I層は層厚約1mを測る褐色系粘質土である。更に5層に細分が可能で、水平に堆積する。谷状地形肩部において12世紀末～13世紀初めに位置付けられる瓦器碗、瓦器皿、羽釜などが密集して出土した。他に古墳時代から奈良時代の遺物も出土しているが、総じて破片が多い。水田耕作土か床土とも考えられる。

II層は層厚約1.6mを測る、灰色から暗灰色系の粘土層である。更に3層に細分が可能で、最下層は最も黒色味を帯びる。I層がより人為的な二次堆積の性質の強い状況を呈するのに比べ、II層は自然作用に起因する水成的堆積層であると言える。最下層が黒色味を帯びるのは、長期滞水による粘土の堆積と植物等の炭化によるものと考えられる。すなわち、II層における最下層の土層堆積時点には、谷状地形は流水機能を喪失していた可能性が指摘され、より湿地化した情景が想定されよう。東方からは奈良時代の溝396-O Sなどが谷状地形へ続く。II層からは古墳時代から奈良時代の遺物が出土している。I層より各時代の遺物包含量は増加し、遺物の破損状態は軽減し、より完形に近い遺物の出土が目立つ。奈良時代に属する出土遺物のうち、図化していないものに埴がある。

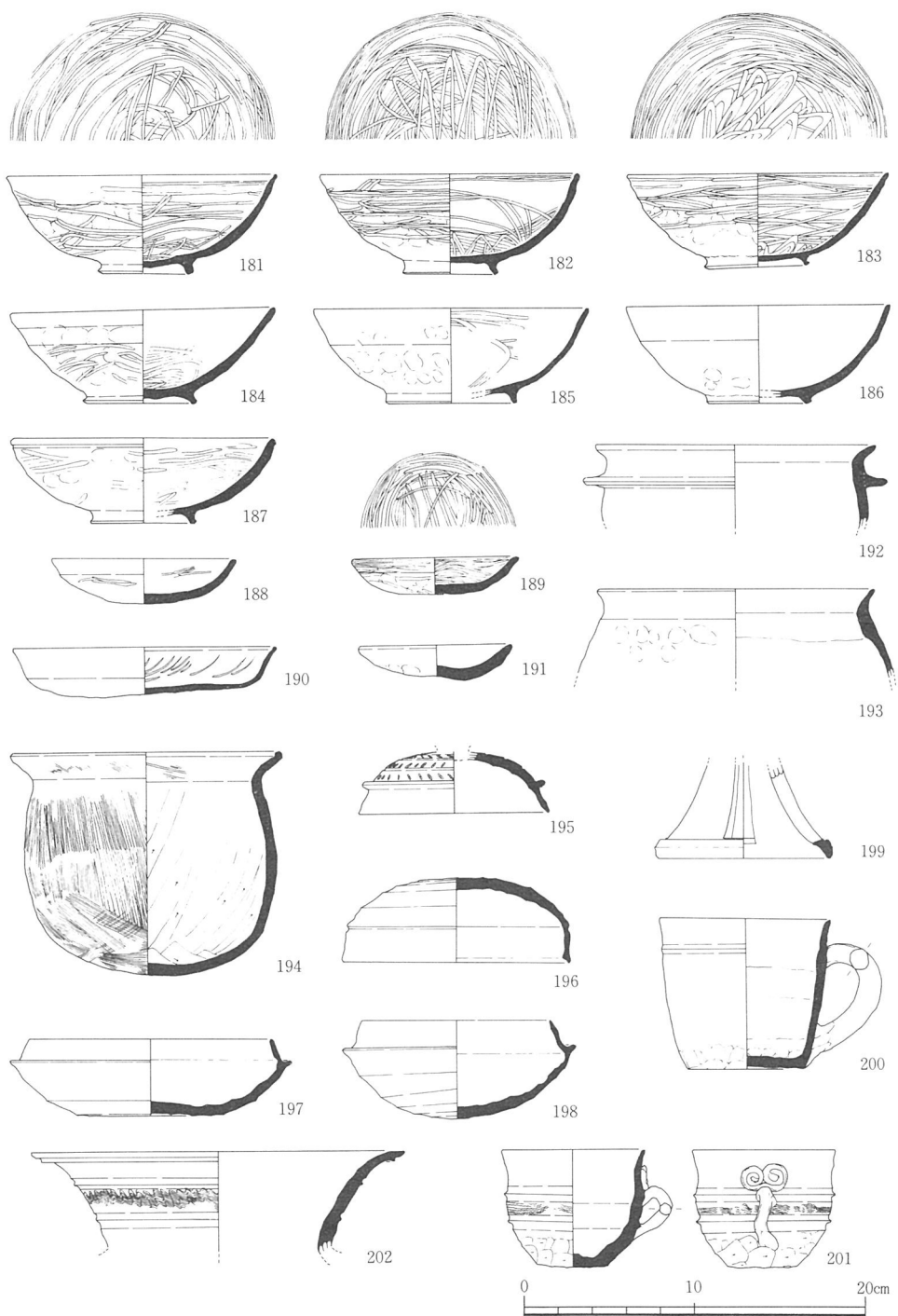
III層は層厚約1.4mを測る、灰色系の土層である。更に2層に細分が可能で、上層は灰色粘土、下層は灰色砂と腐植物を多く含む黒褐色粘質土の互層からなる。II層が滞水性の強い水成堆積様を示すのに対し、III層は比較的流水機能を有する時点での堆積状況を示すと考える。更に視野を広げれば、上記の状況は濃登ノ池全体での様相として捉えることが許されるのかもしれない。III層から出土する遺物はほぼ古墳時代のものに限られる。なかでも上層ではI型式5段階からII型式1段階併行の須恵器が、谷状地形の肩部に片寄って



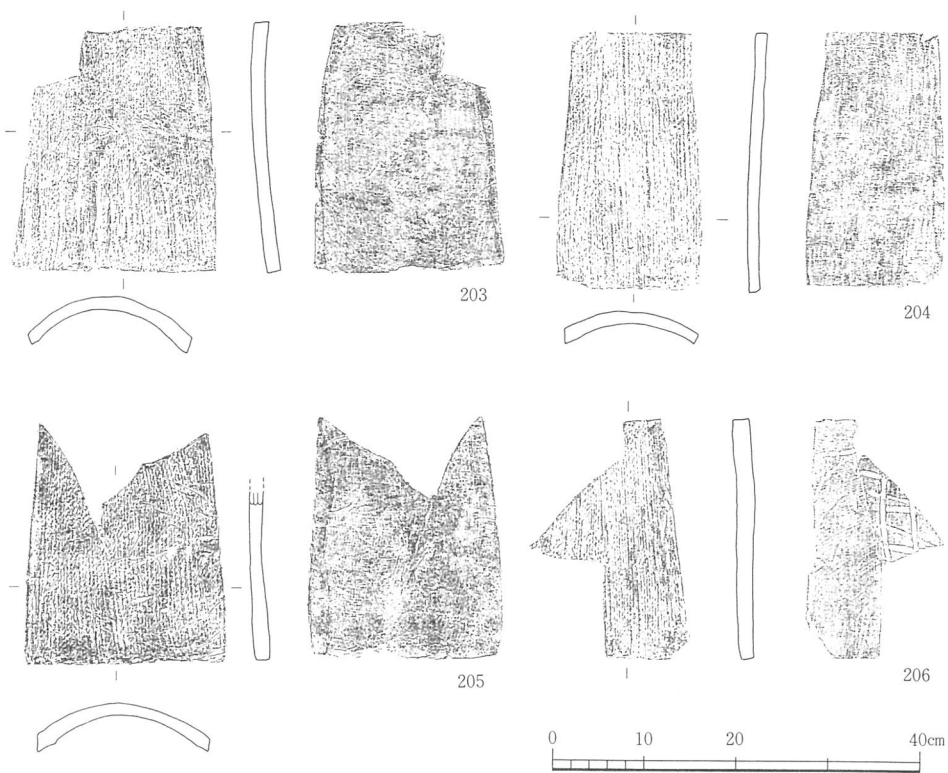
- ① 10 YR 7/1 灰 白色 粘質土
- ② 10 YR 6/4 にぶい黄褐色 砂礫土
- ③ 10 YR 5/8 黄 褐色 シルト
- ④ 10 YR 6/3 にぶい黄褐色 粘質土
- ⑤ 10 YR 5/4 にぶい黄褐色 粘質土
- ⑥ N 5 灰 色 粘 土
- ⑦ 10 Y 6/1 灰 色 粘 土
- ⑧ 7.5 Y 5/1 灰 色 粘 土
- ⑨ 10 Y 5/1 灰 色 粘 土
- ⑩ 10 Y 4/1 灰 色 粘 土
- ⑪ 10 Y 5/1 灰 色 粘 土
- ⑫ 5 Y 4/1 灰 色 粘 土
- ⑬ 7.5 Y 4/1 灰 色 粘 土



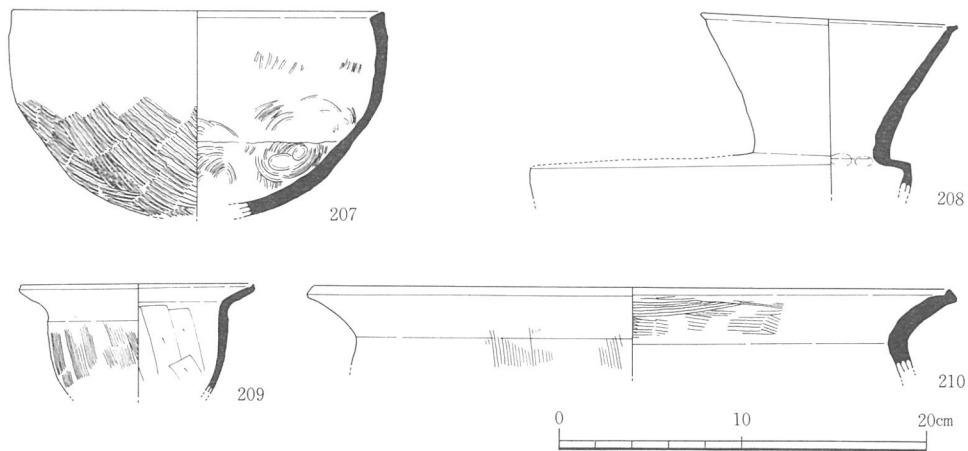
第68図 393-O L 土層断面図



第69圖 393-O L I層出土遺物

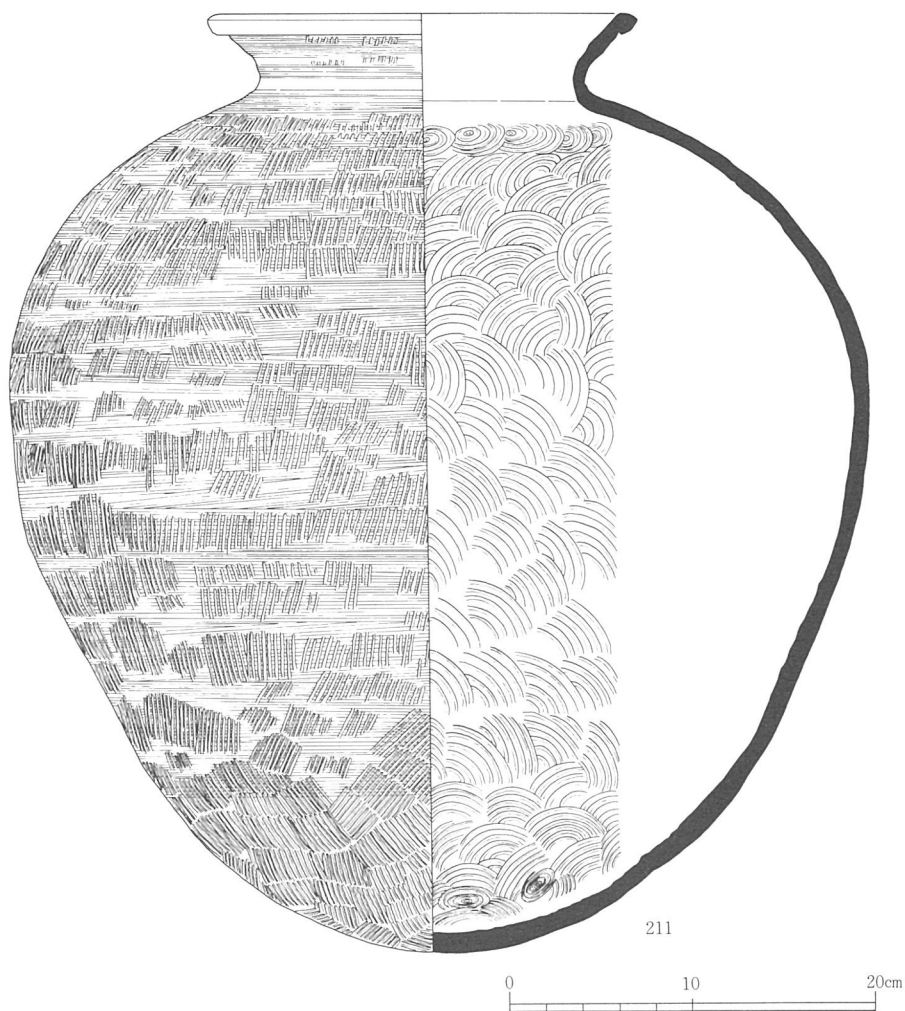


第70図 393-O L II層出土遺物(1)



第71図 393-O L II層出土遺物(2)

多く出土する傾向が認められた。また、下層において出土する遺物はほぼ初期須恵器と軟質土器に限られ、甕など完形に近い遺物の出土量が増す。なお、上述の中で古墳時代の遺物としたものの中には、須恵器出現以前の遺物は含まれていない。

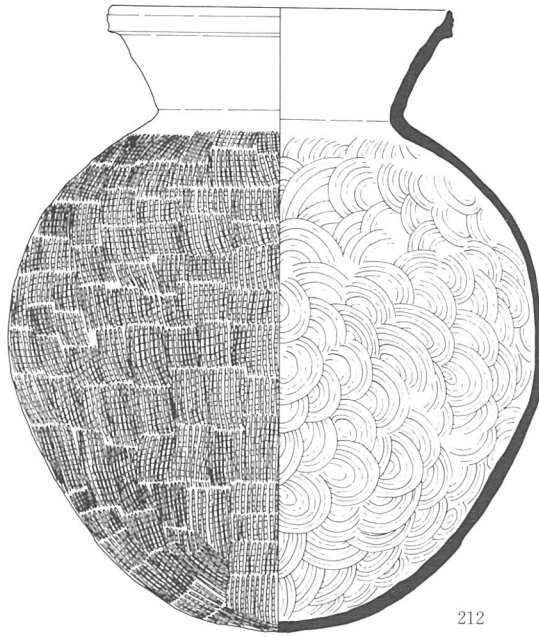


第72図 393-O L II層出土遺物(3)

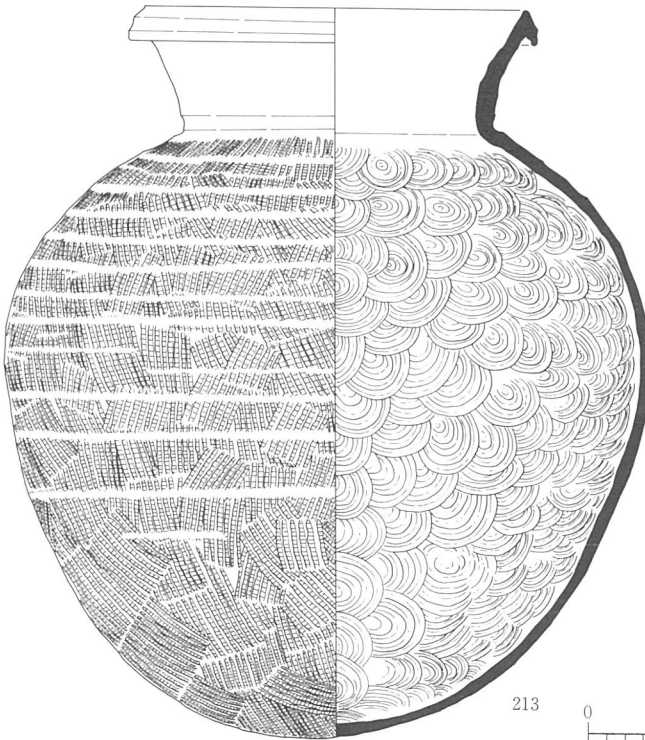
第2項 393-O L出土遺物(第69~123図、図版33~60)

以下では、各層ごとに掲列した遺物について報告する。また、全体的な分類・検討は後述のまとめにゆずることとする。

I層出土遺物は第69図に示した。(181~189・191・192)は前述の谷状地形肩部より出土した遺物である。(195)はII区1100-O S出土の蓋と類似する。(200)はほぼ完形。粘土板に粘土紐を巻き上げ、口縁下にはやや鈍い凸線を有する。下部は手持ちヘラケズリを施し、底面にはゲタ痕跡らしきものが認められるが不明瞭である。金海礼安里遺跡31号墳出土品に類例を求めることが出来よう。(201)は把手上に蕨手文が付帯される。



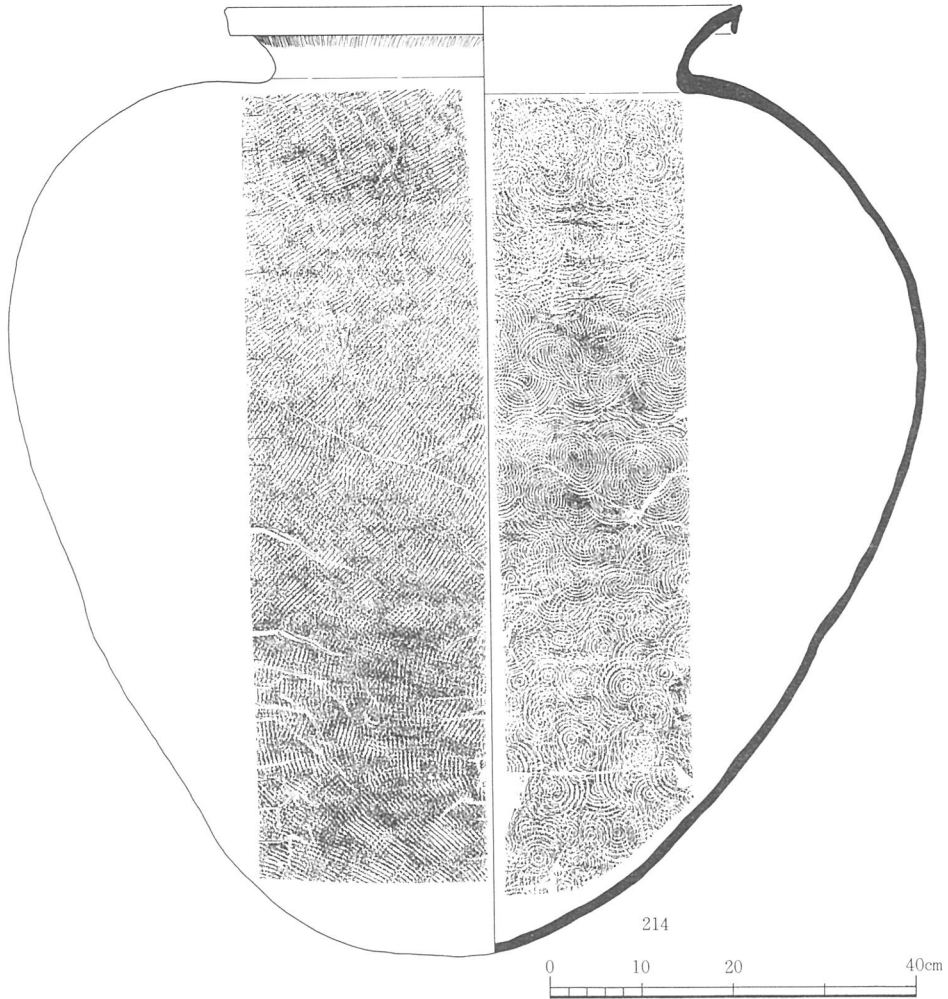
212



213

0 5 10cm

第73图 393-O L II层出土遗物(4)



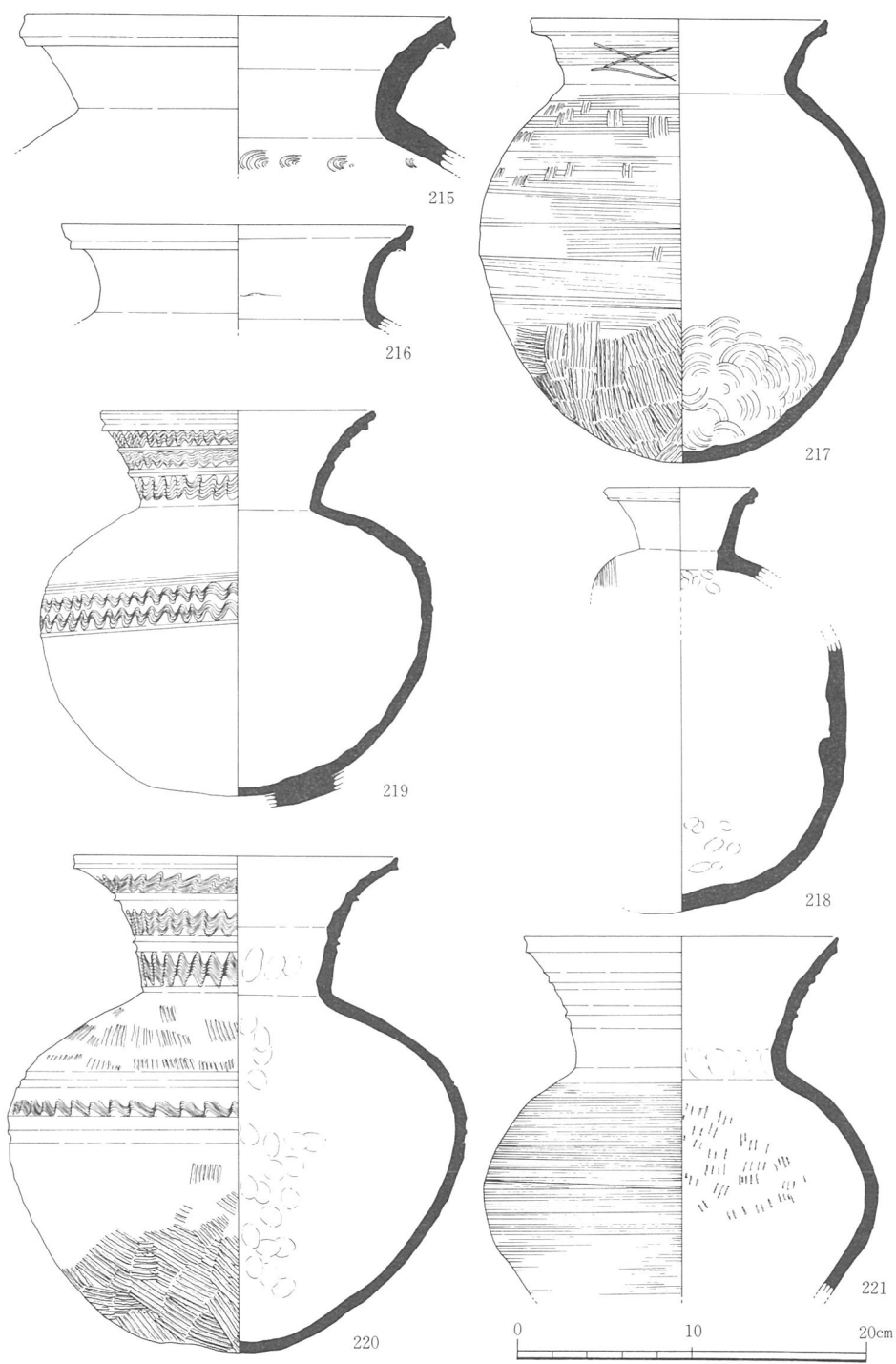
第74図 393-O L II層出土遺物(5)

II層出土遺物は第70図から第109図に示した。

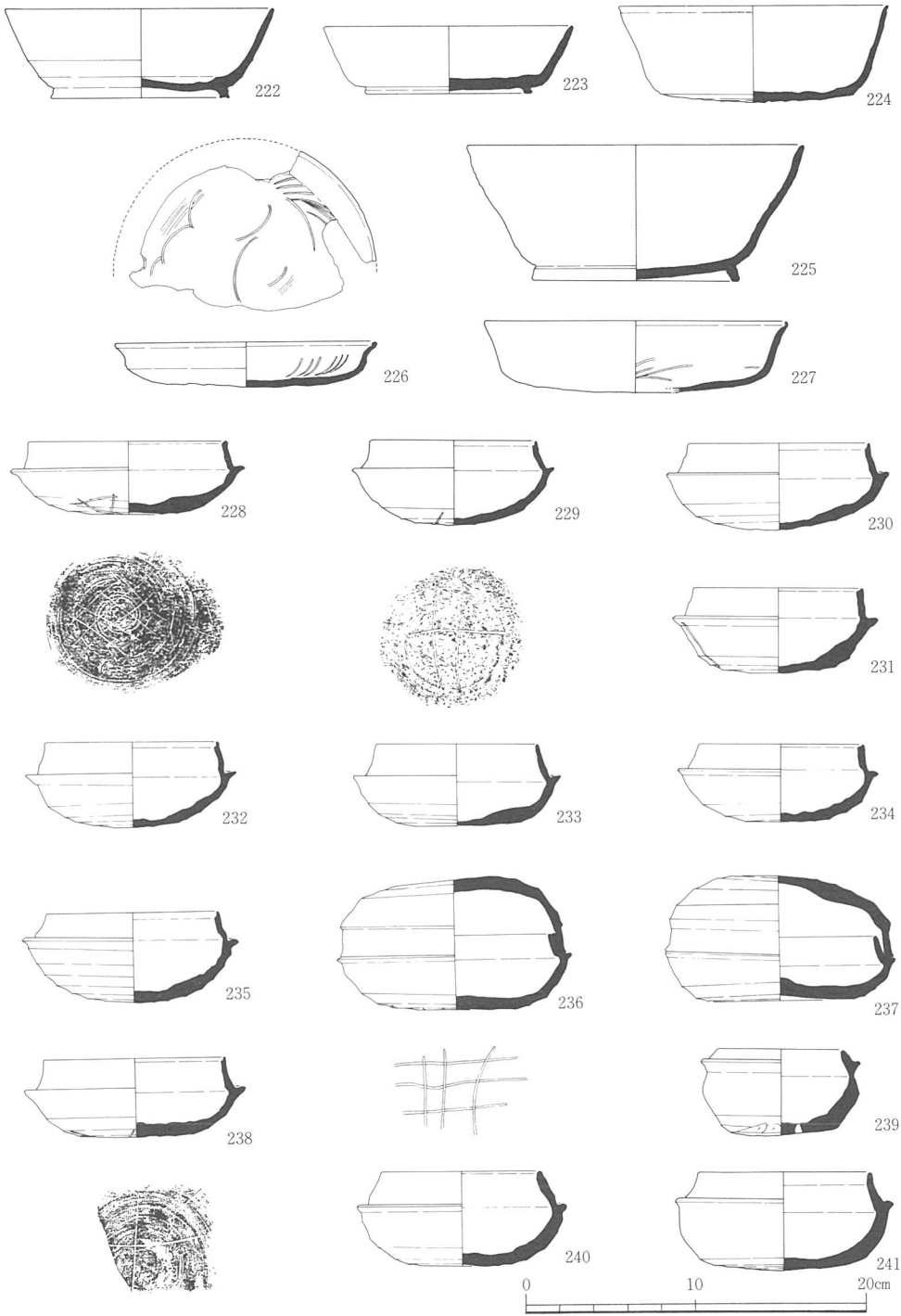
(214)は南側中腹付近に正置された状態で出土した。口頸部以上は体部内に落ち込んだ状態で存在し、体部はほぼ完形のままであった。

(246)はほぼ完形で、直径21 cmを測る大型の蓋である。天井部は水平で、中央付近にヘラ記号が記される。

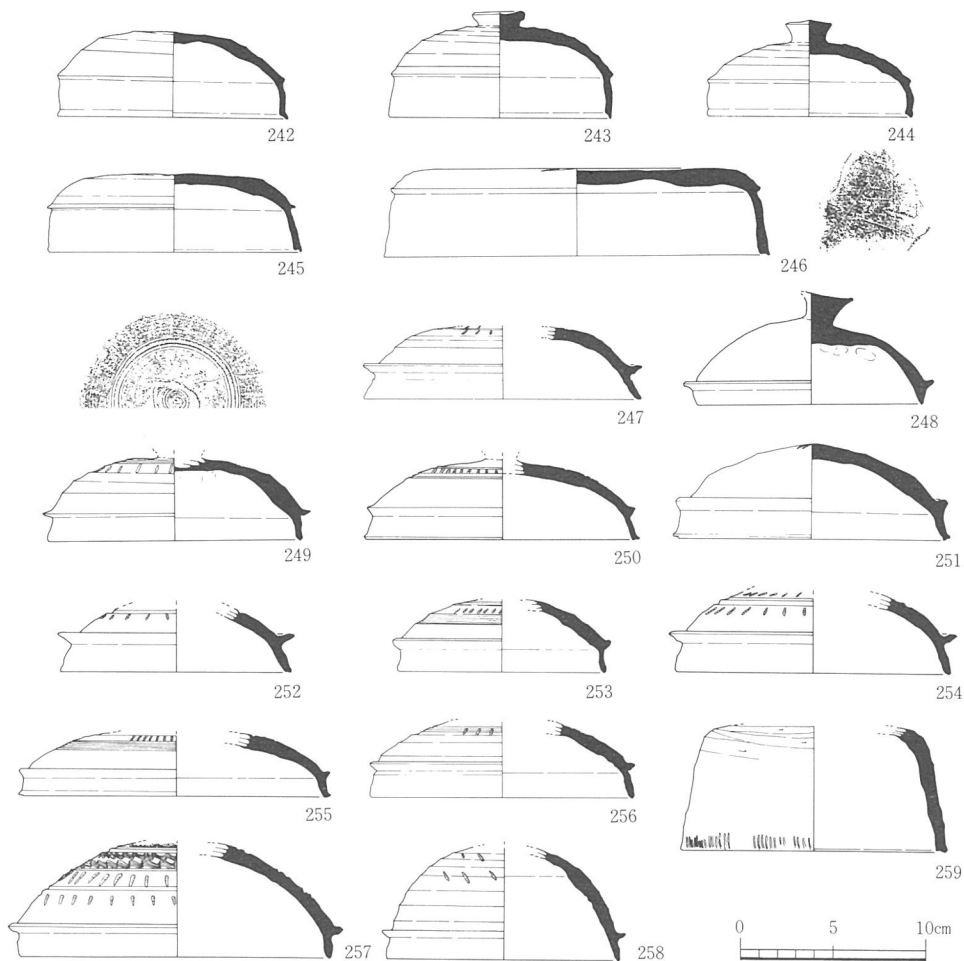
(247~256)は有蓋高杯の蓋と思われる。ただし(248・251)は別器種とセットになる可能性がある。有蓋高杯の蓋は形状、法量、天井部の施文方法などにより数種類に分類が可能である。また、蓋の多くはその内面に自然釉が認められ、天地逆さの状態で焼成が行われ



第75図 393-O L II層出土遺物(6)



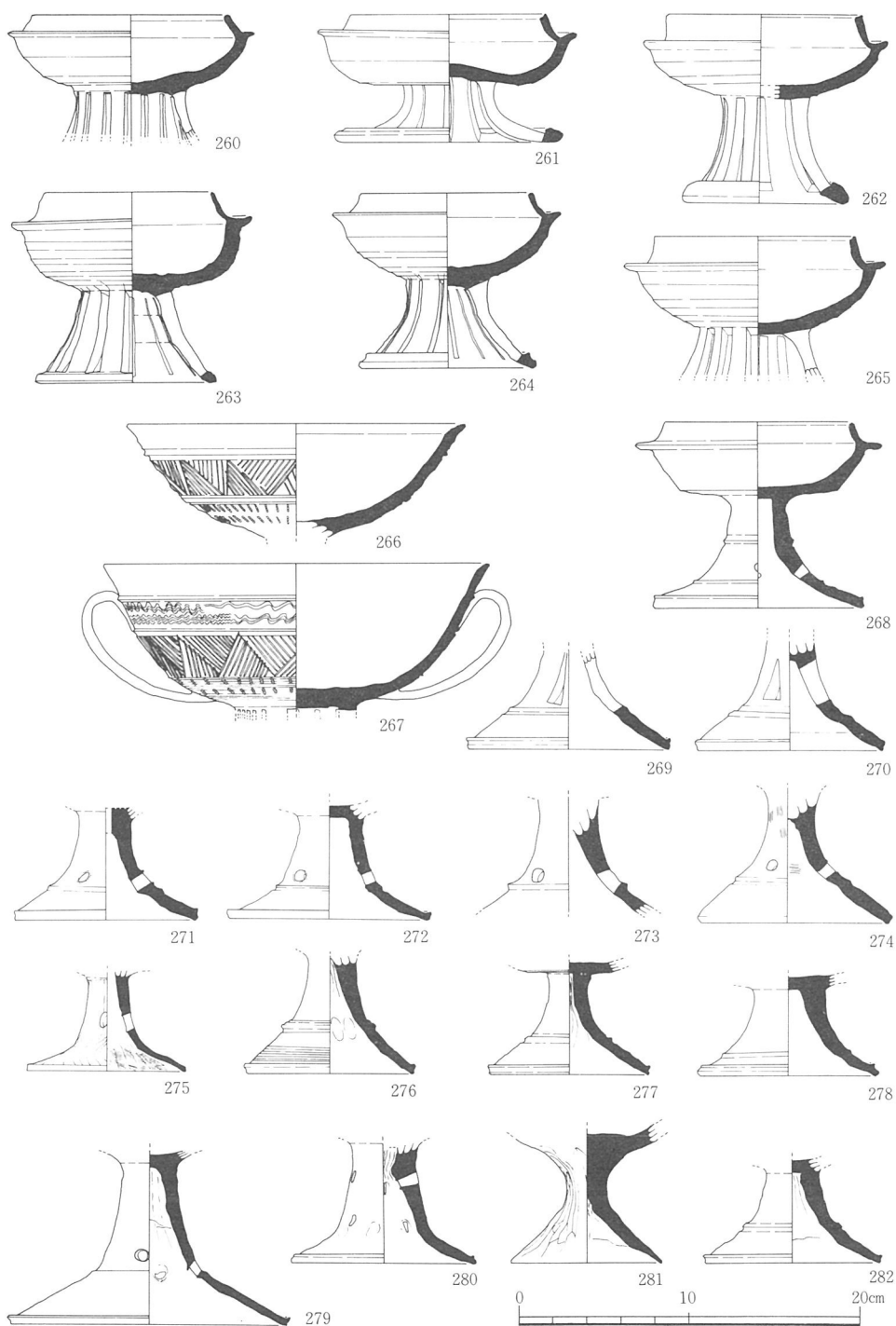
第76图 393-O L II層出土遺物 (7)



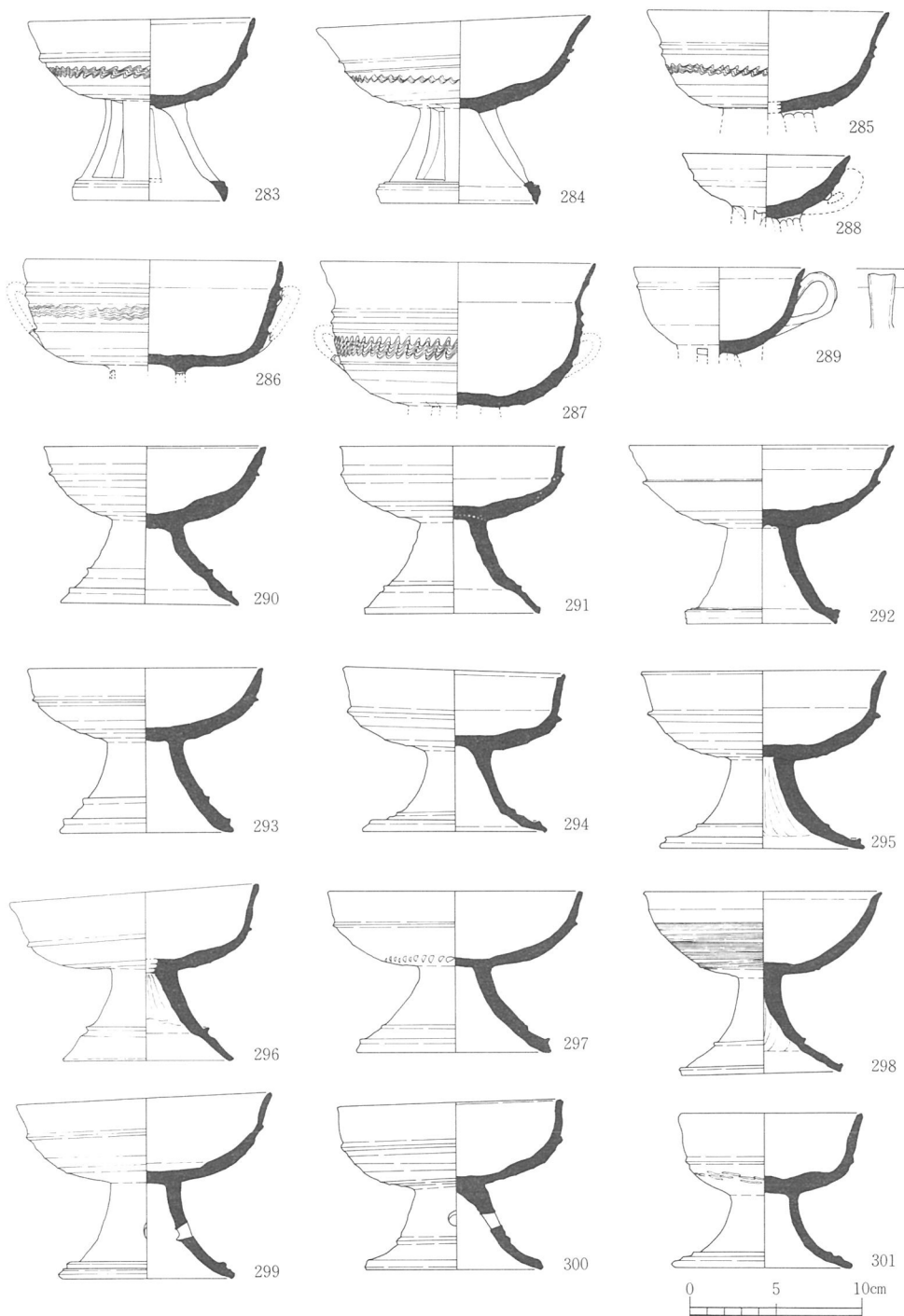
第77図 393-O L II層出土遺物(8)

たことを示唆している。(259)は短頸壺の蓋である。

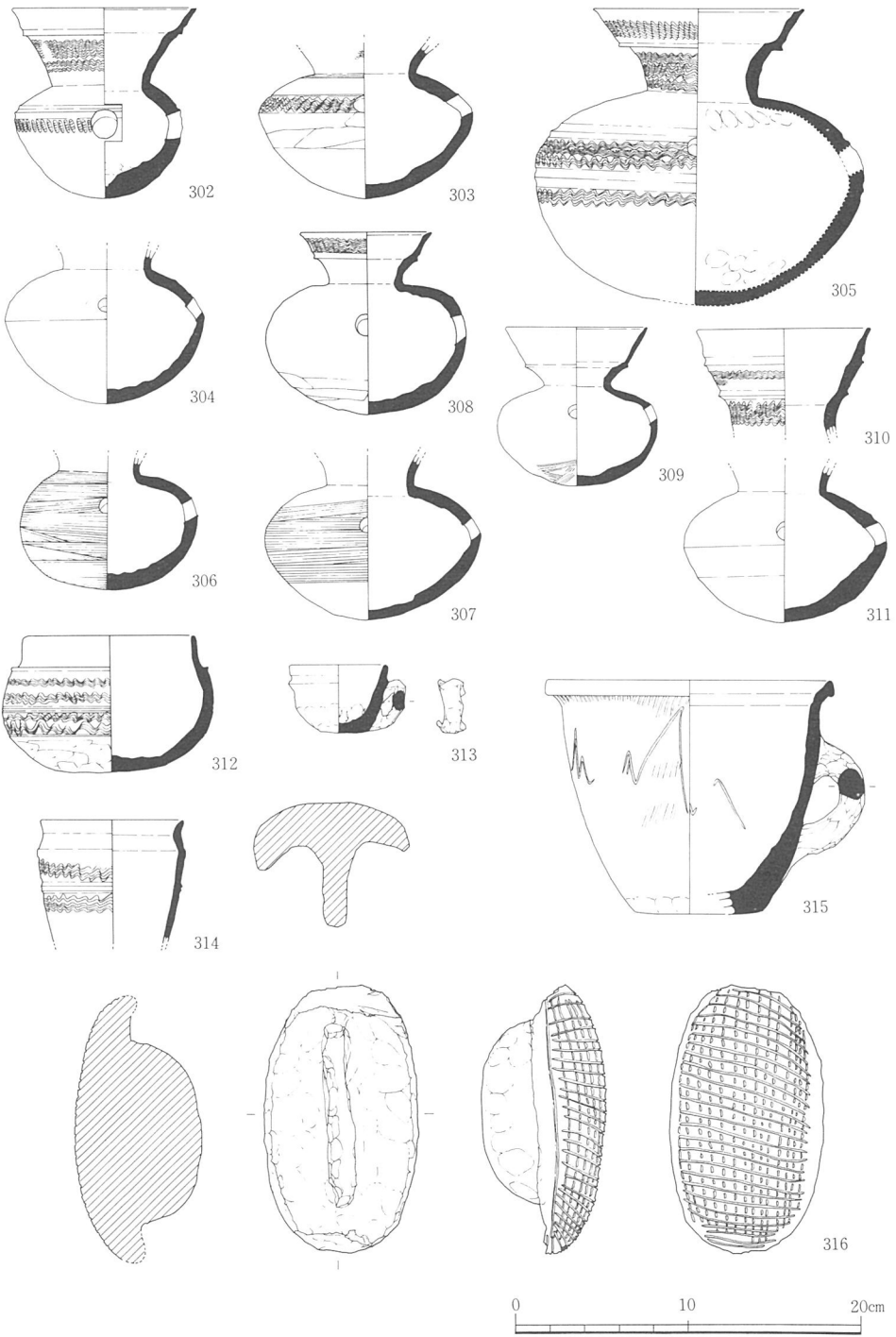
(260~265)は多窓式の高杯である。II層中のみから出土している。スカシは9方から16方穿たれ、いずれも鋭い刀子状の工具が使用される。器壁の厚い杯部は深く、水平で幅広いの受け部を有し、脚裾部を丸く仕上げるなど、総体的には一様のプロポーションを呈すると言える。特に口縁部から受け部にかけてと脚裾部の形状はより伽耶的要素を有するとされる。細部では、口縁端部に平坦な面を形づくるもの、丸くおさめるもの、脚裾部で強い凹線を施すことにより、凸線をつくり出すものなどの違いは指摘される。また、(263・264)に比べ(262)は杯部が浅く、脚部も長い。この差異が時期差を表すものか否かはわからない。類例としては、宮崎県六野原古墳群14号地下式横穴墓出土の陶質土器があげられ、



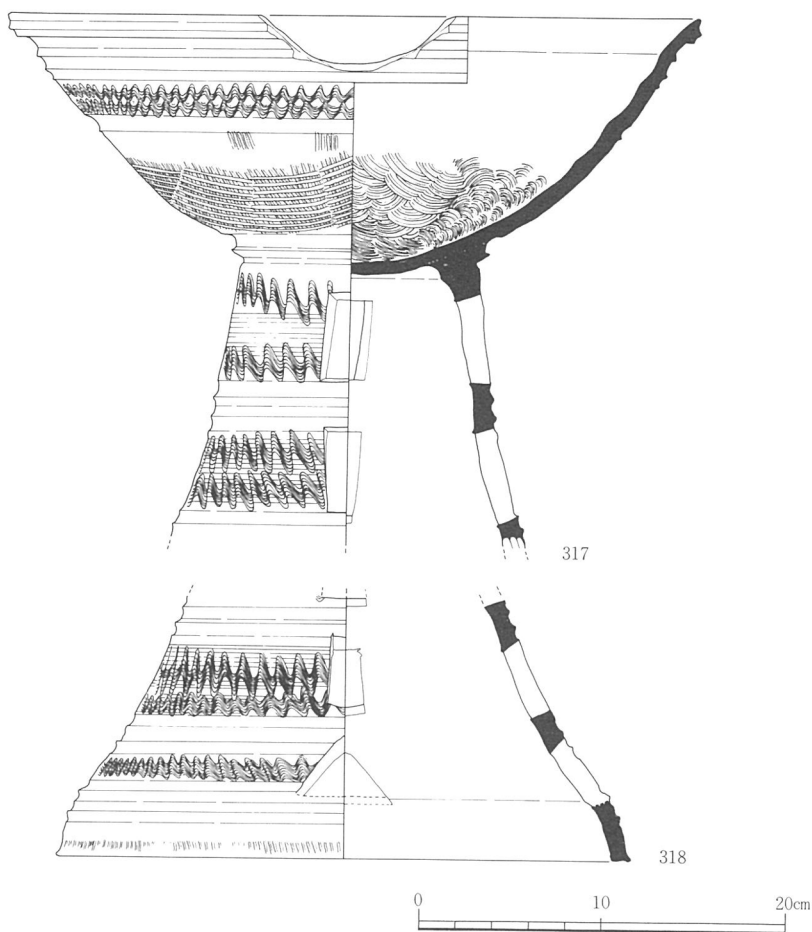
第78圖 393-O L II層出土遺物(9)



第79圖 393-O L II層出土遺物 (10)



第80図 393-O L II層出土遺物 (11)



第81図 393-O L II層出土遺物 (12)

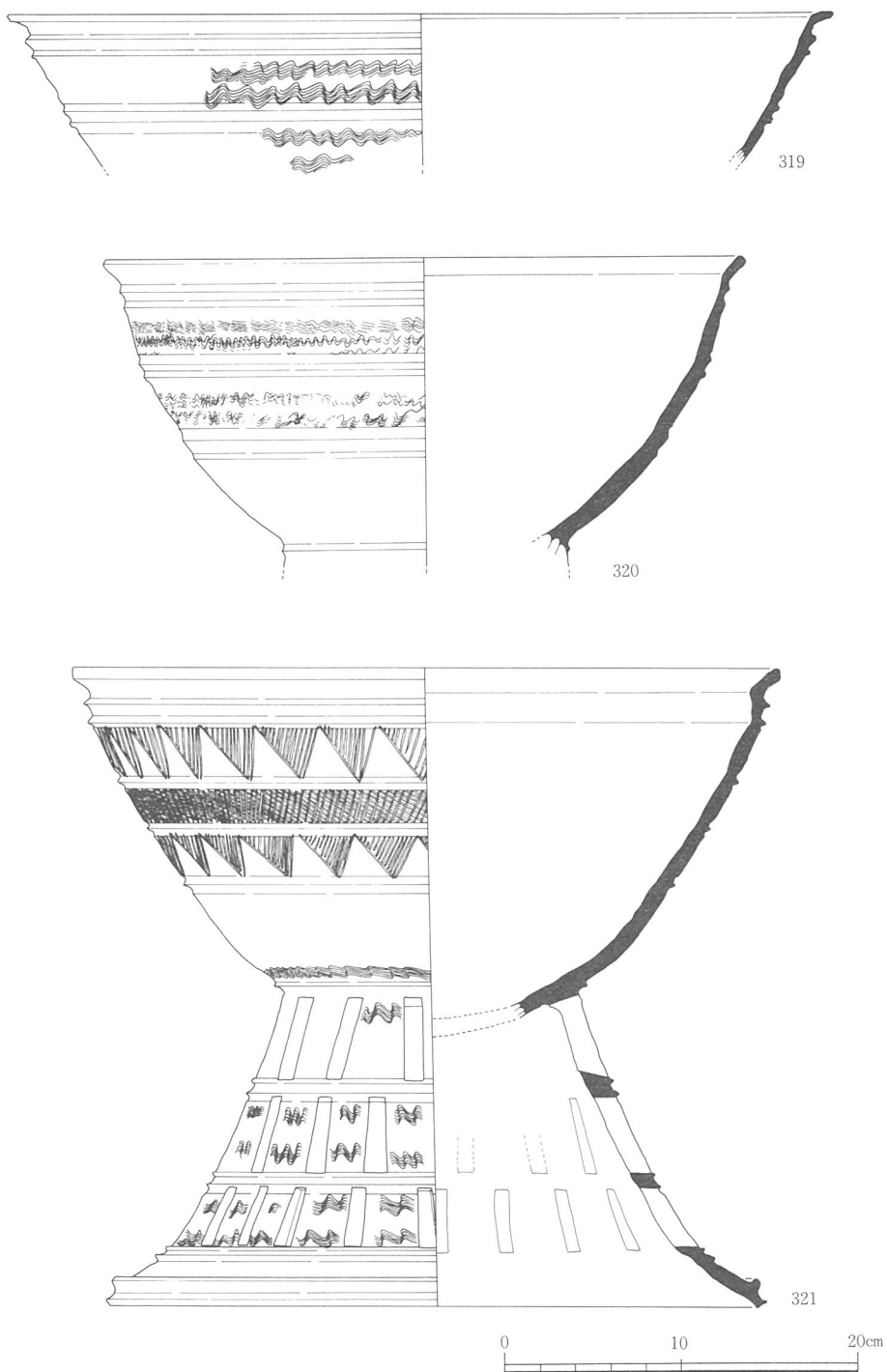
この例から前述の加飾された蓋とセット関係になることは明らかである。

有蓋高杯としては、他に(268)があり、更にIII層出土例が加わる。(268)は多窓式の高杯と同様幅広の受け部を有するが、杯部下半は水平にカットされる。脚柱には2本の凸線が配され、この間に四方から円形のスカシが穿たれる。

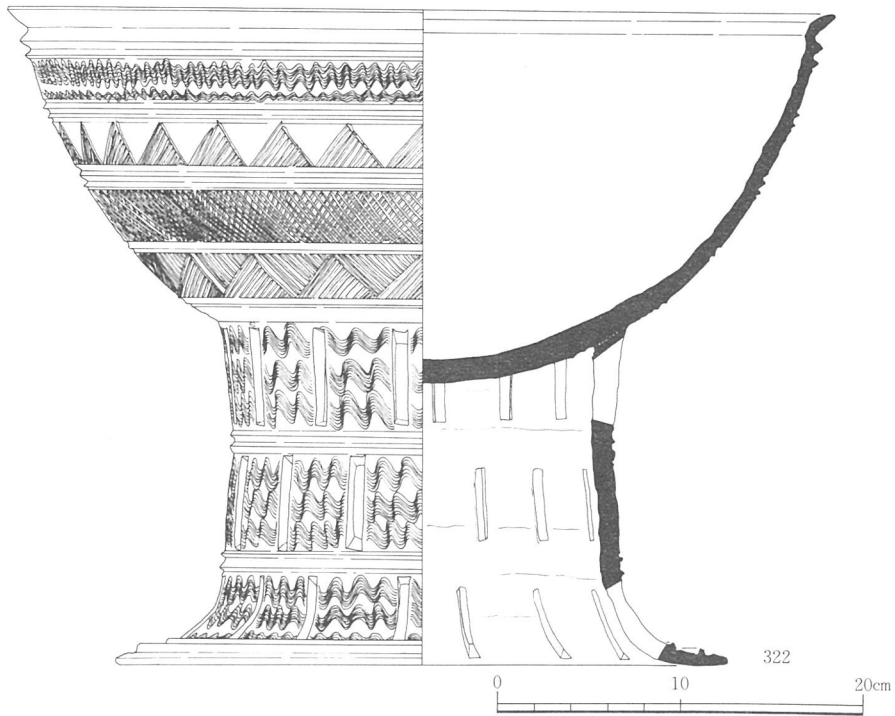
大型の高杯としては、(266・267)がある。両者とも杯部外面に鋸歯文、刺突文などを施す。(266)は脚部が欠落するが、接合痕より脚柱の細い脚がつくと想像される。(267)は杯部の対面する側面に板状粘土による把手が付帯される。脚部は欠損するが、残存状況から11方の多窓式の脚がつくと想定される。

第79図には無蓋高杯を図示した。I型式1～5段階の時期幅のある土器群である。

(290・293)は杯蓋状の杯部に裾が広く開く脚部が付く形状で、脚裾部に1条とそのやや



第82圖 393-O L II層出土遺物 (13)



第83図 393-O L II層出土遺物 (14)

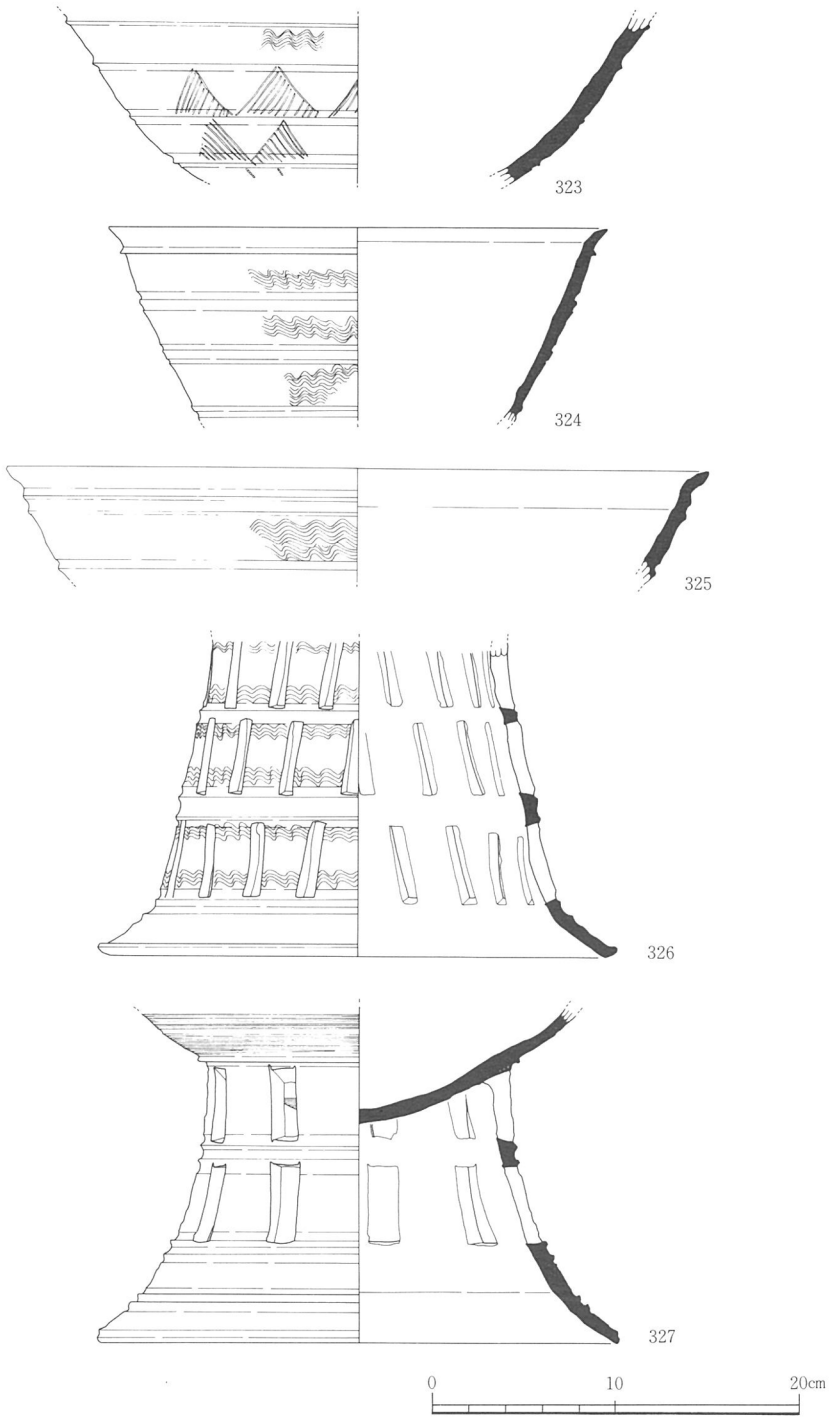
上に1条の凸線を有するのが特徴である。全体に器壁が厚く、どっしりとした印象がある。同様の脚部の形状を示す例として(294・295・297)があげられよう。ただし杯部においては口縁部の形態などに差異が認められる。形式的に時期差を示すものと理解する。

(298)は他と異なった形状の杯部を有し、脚部凸線も1条である。杯部は口縁部外面にやや強いナデを加え、下半の凸線までカキメが施される。口縁部内面にはやや鈍い段が形づくられる。脚部は脚柱部分が細く、内面はしばしば絞り目痕が観察される。

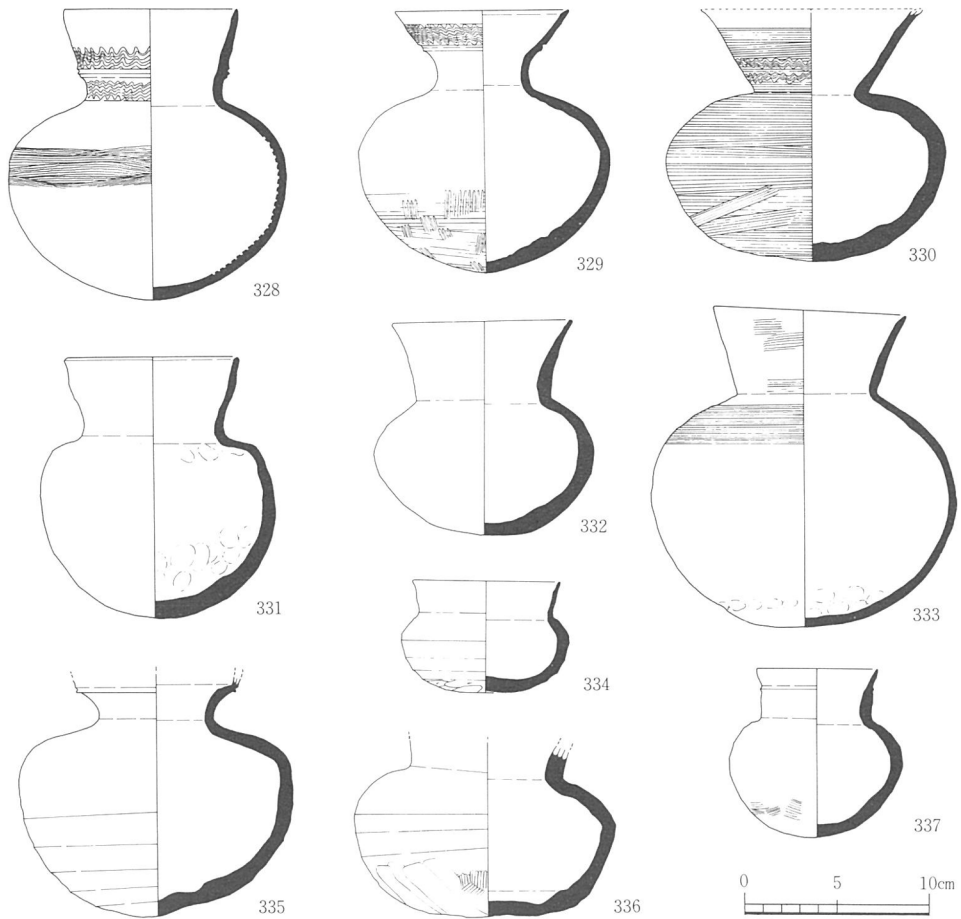
393-O L出土の高杯脚部の形態は、むしろ(298)例のものが比較的多く出土しており、一般的で、後へも継続性が認められる。

(269~282)は脚部のみ出土品である。前述から更に豊富な形態があり、特に(275・279)は土師器的な形態をしている。(275)は外面に縦方向のミガキが施され、杯部にも同様にミガキが施されている形跡が認められる。脚裾内面にはハケメが施されている。焼成は良好な須恵器である。

スカシの形状には、円形、三角形、四角形、菱形がある。菱形は刺突によるものもある。(288・289)は椀に脚と把手を付帯した形状であることから、脚付き把手付椀と呼称する。



第84図 393-O L II層出土遺物 (15)



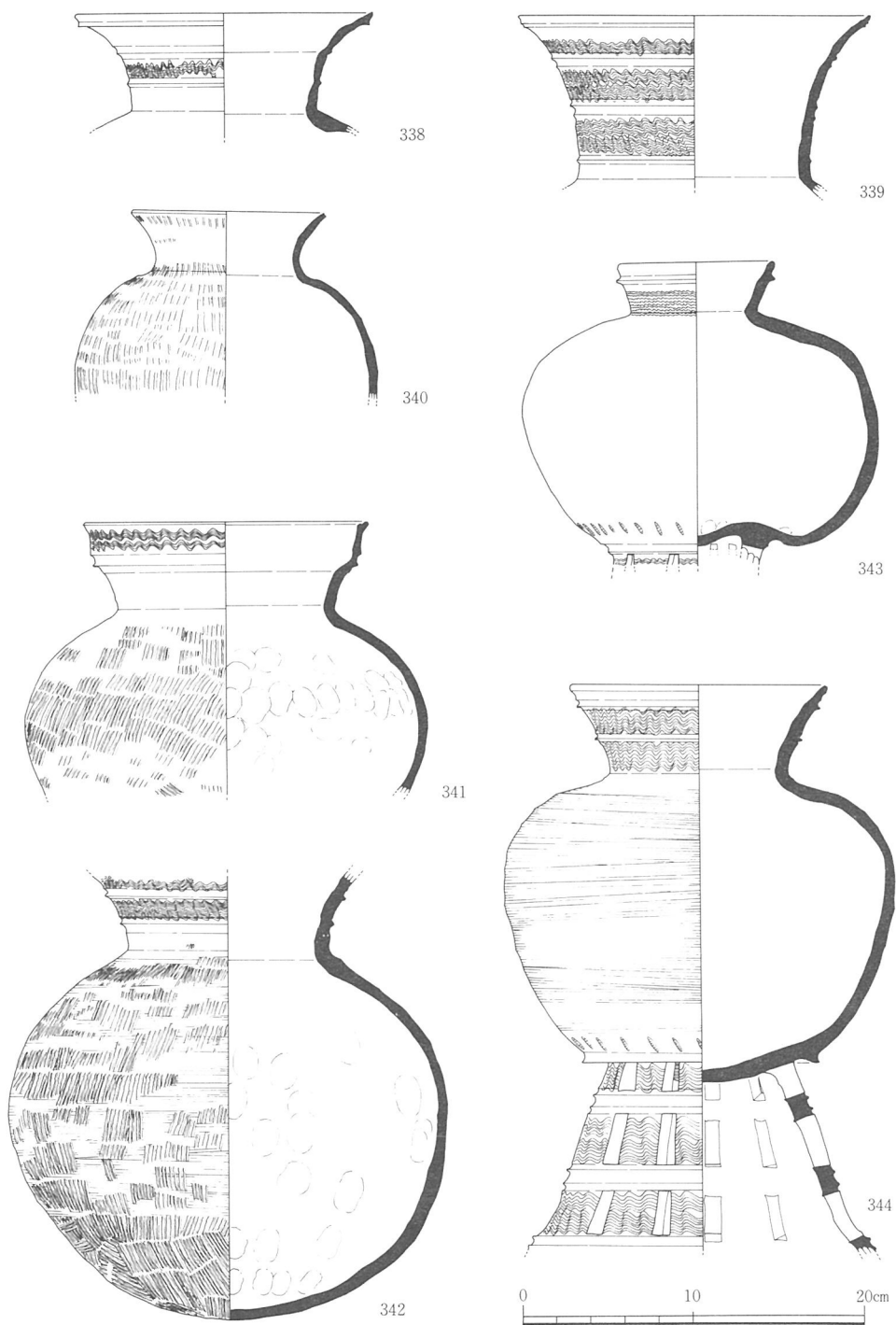
第85図 393-O L II層出土遺物 (16)

脚部の形態は不明であるが残存部から観察すると、細い、断面円形の脚がつくと考える。把手は板状で、酷似する例として和歌山市音浦遺跡出土例があげられる。

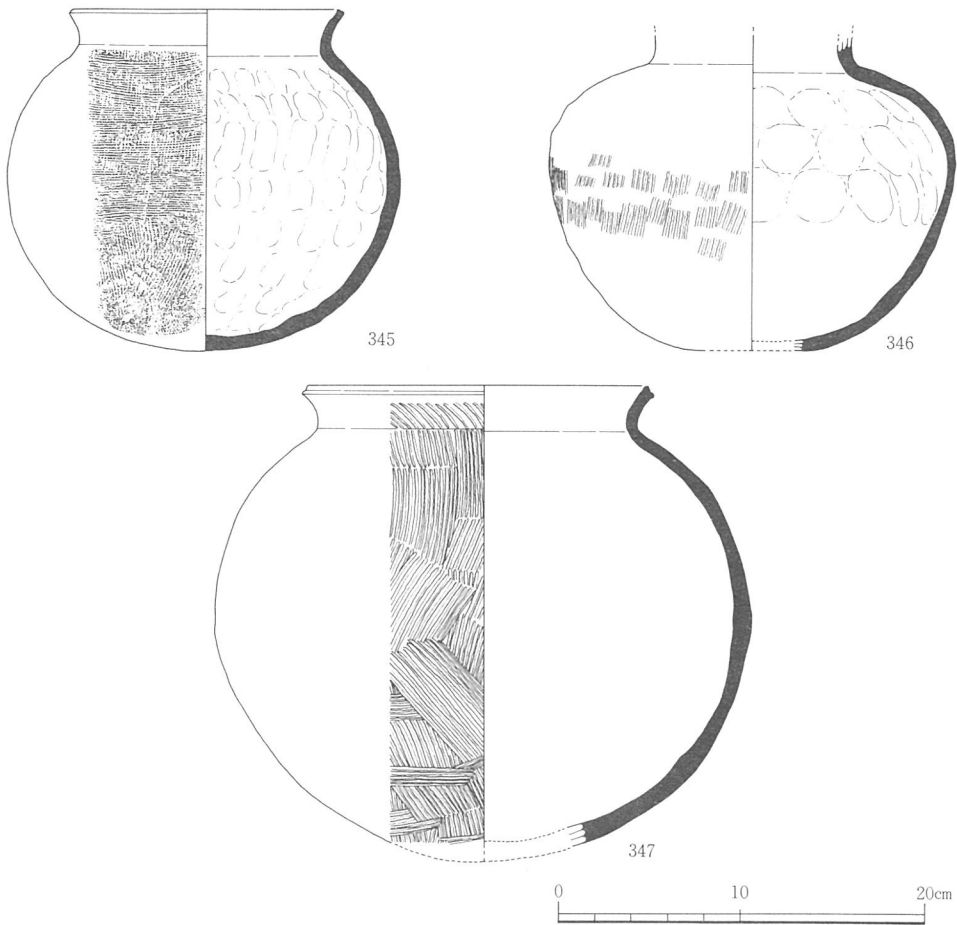
(302)の底部では、体部からの粘土材が底部中央で円形に空いた部分に、外方から粘土を補填した様が観察された。

(315)は外面に平行タタキを施すが、内面からは当て具の痕跡が認められない。

谷状地形からは当て具が2点出土している。その一つ(316)は陶製の当て具と考える。表面にはやや太いヘラ状の工具で格子状の溝が刻まれる。裏面には把手が付けられるが、その使用については、小型の器種には不適切な大きさであり、大型の甕などに限定されて使用されたと思われる。しかし実際には大庭寺遺跡出土の遺物にその使用痕が認められる例は見あたらない。これは当て具としての使用方法を否定するものではなく、内面の丁寧



第86圖 393-O L II層出土遺物 (17)



第87図 393-O L II層出土遺物 (18)

なすり消しに起因する可能性を指摘しておく。

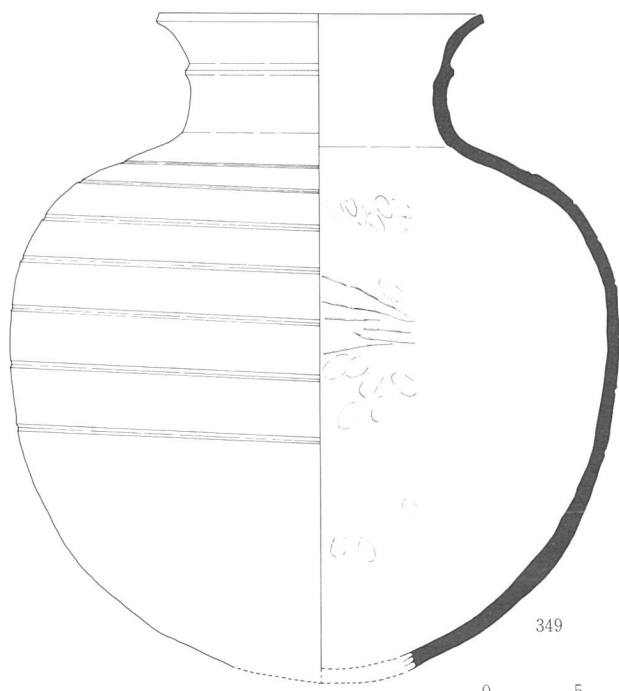
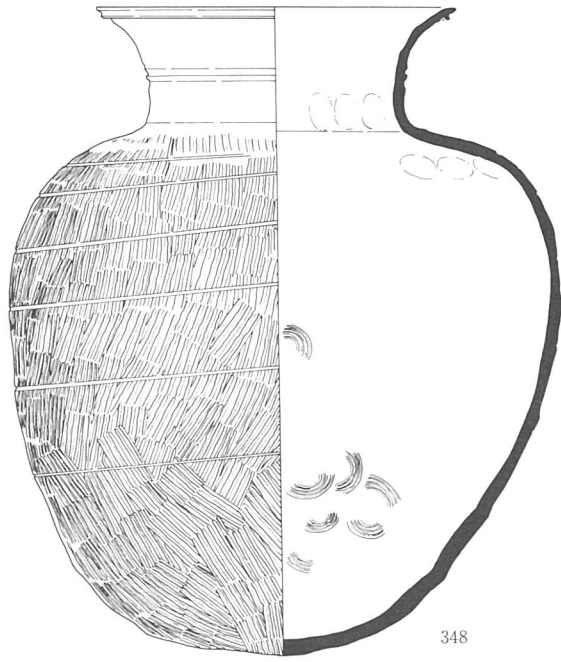
第81～84図では器台を示した。大庭寺遺跡では筒形器台も出土しているが、大半は高杯形の器台である。特に谷状地形からは筒形器台は出土していない。

(317)は杯部に片口を有する。杯部下半には顕著な格子タタキが施され、内面にも同心円の当て具痕が認められる。杯部と脚部との接合部には凸帯が配される。スカシは4方向から長方形に穿たれる。

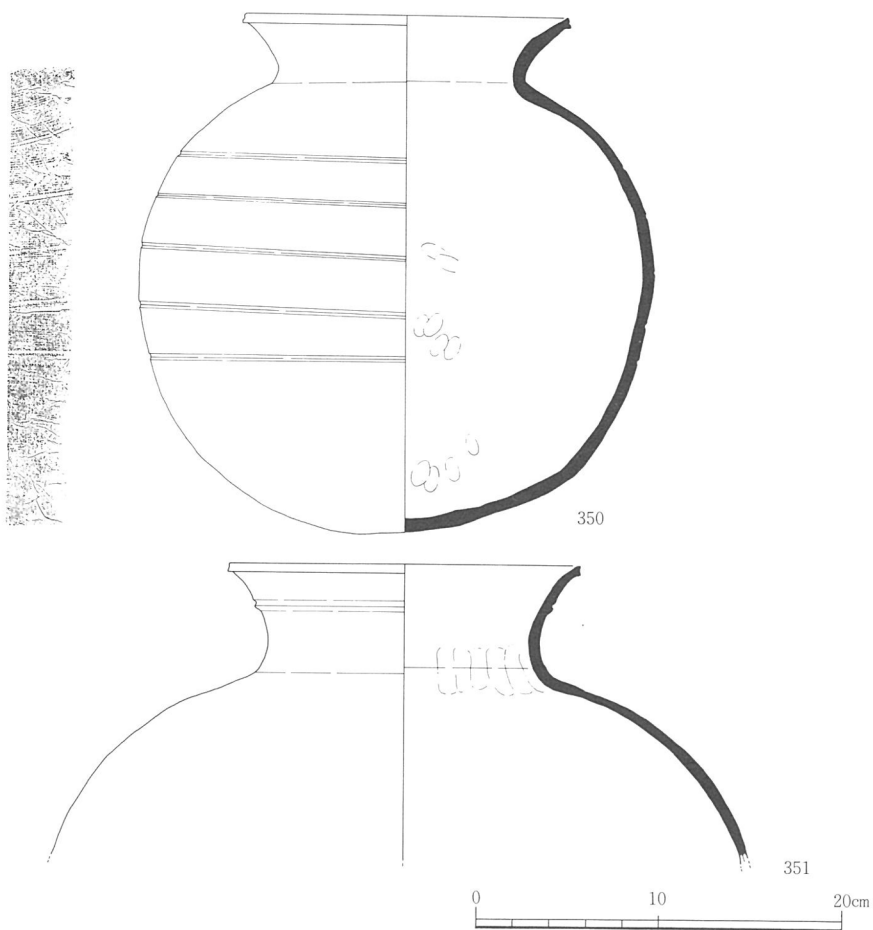
(318)は脚裾部に平行タタキが施され、最下段では三角形スカシが4方向から穿たれる。

(319・320)はいずれも上下2段に波状文が施される。(320)は他に比べ杯部が深い形態で、脚部との接合部には鈍い凸帯が配される。

(321)は反転復原により図化した。杯部外面には凸帯で3区の文様帯が構成され、下方



第88図 393-O L II層出土遺物 (19)



第89図 393-O L II層出土遺物 (20)

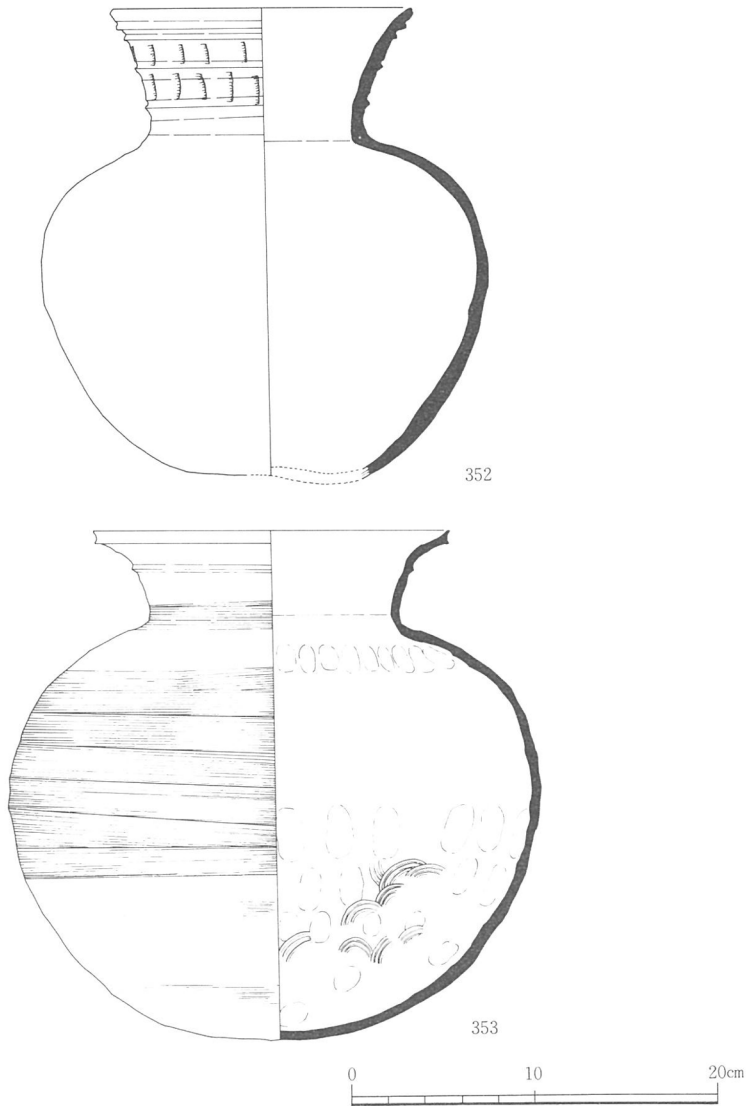
向の鋸歯文、斜格子文、下方向の鋸歯文が順に丁寧に描かれる。脚部との接合部には凸線が配され、この上に波状文が施される。脚部は広く裾が広がり、長方形のスカシが2条の波状文を施した後に、3段に穿たれる。

(322)は接合作業によりほぼ完形に復原された。全体に均整のとれたプロポーションである。杯部外面には凸帯により4区の文様帯が構成され、2条の波状文、上方向の鋸歯文、斜格子文、上下方向の鋸歯文が順に丁寧に描かれる。脚部には3段にわたって3条の波状文が施され、長方形のスカシが穿たれる。

(323)は杯部外面に波状文、上方向の鋸歯文、上方向の鋸歯文、刺突文が順に描かれる。

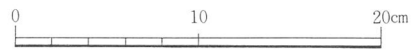
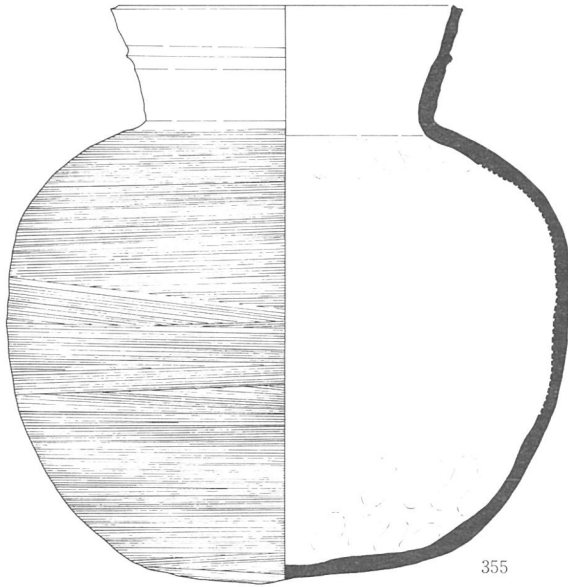
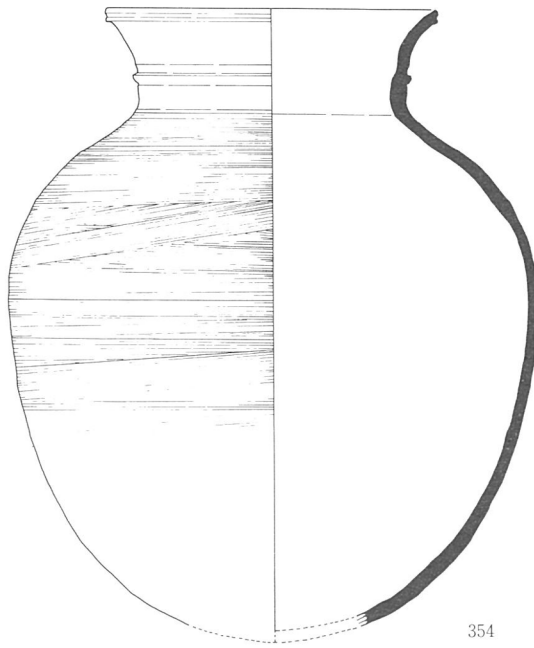
(324)は波状文のみが描かれる。

III層においても若干の出土品があるが、谷状地形において出土した器台は、細部におい

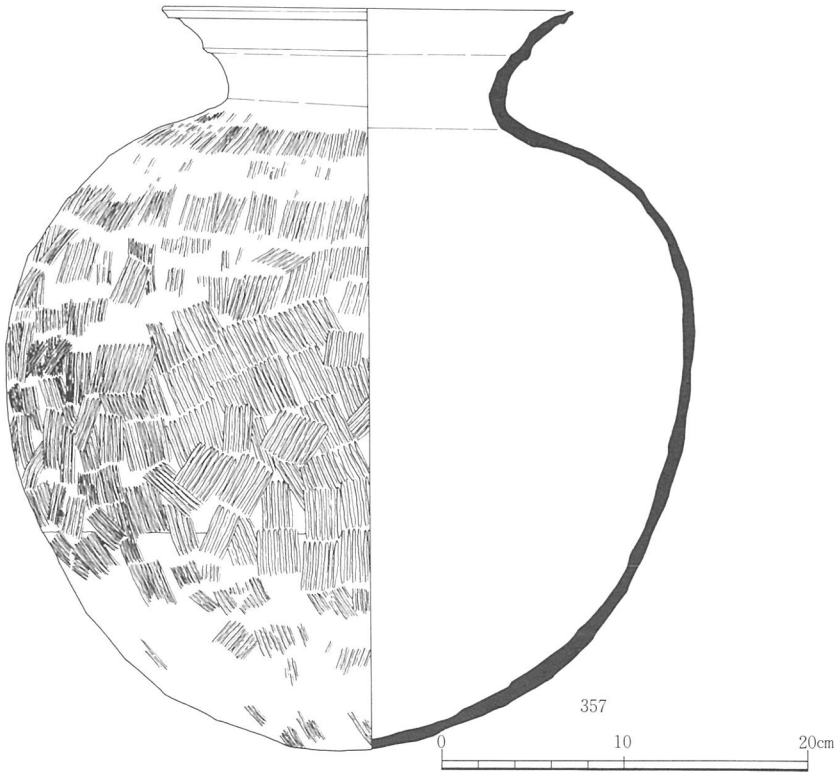
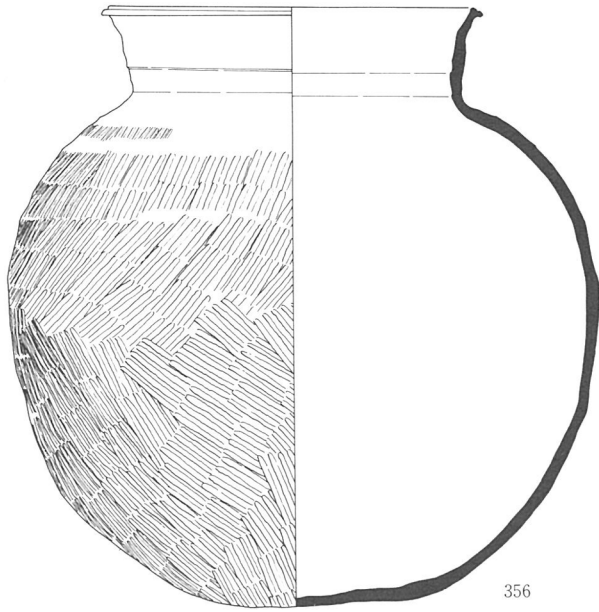


第90図 393-O L II層出土遺物 (21)

ては微差が認められるものの、大局的には大きく外反し内面に明瞭な段を形づくる口縁部、凸帯によって3区から4区の文様帯を構成する杯部、3区に構成された文様帯と千鳥状に穿たれた短冊形のスカシをもつ脚部が特徴としてあげられよう。文様では波状文、鋸歯文、格子文、刺突文との組み合わせにより、装飾性に富むことも特徴の一つとしてあげられよう。また、杯部と脚部の接合部に凸線が配される例は脚付壺などにも見受けられ、注目される。



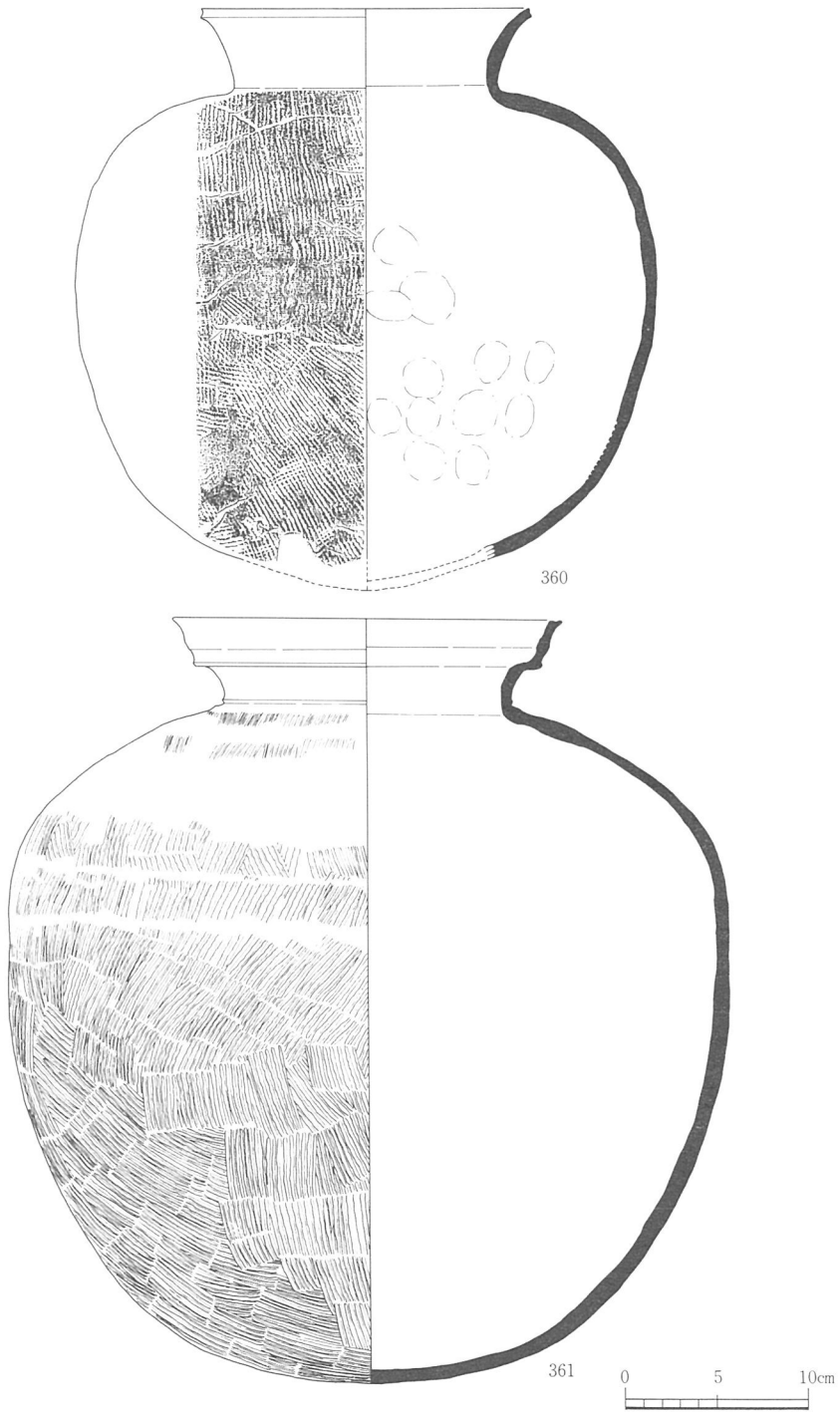
第91図 393-O L II層出土遺物 (22)



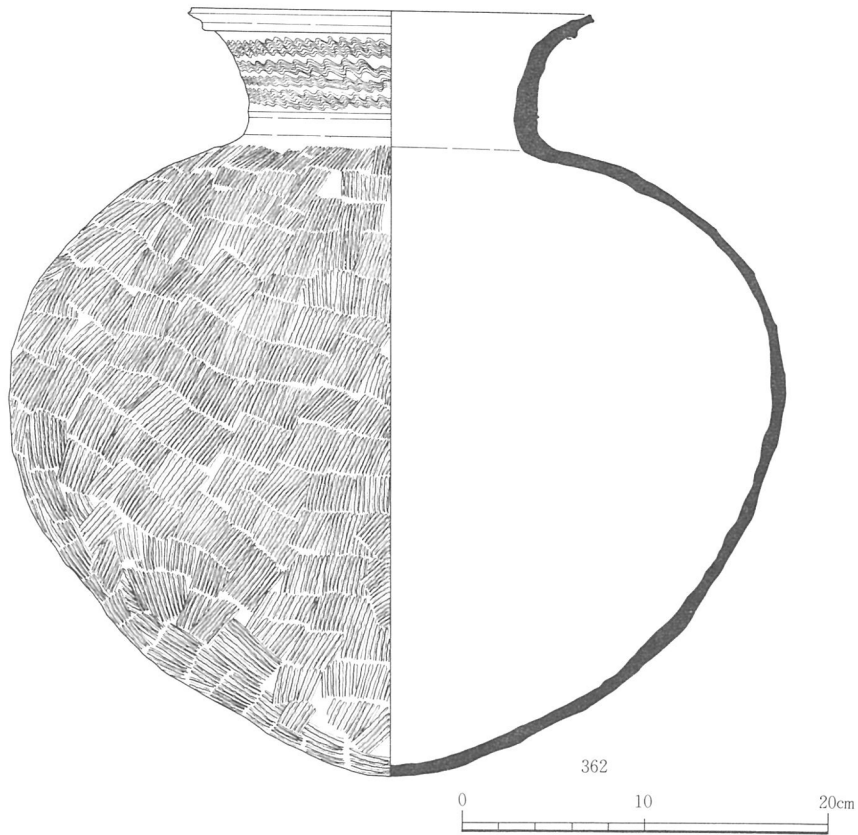
第92図 393-O L II層出土遺物 (23)



第93図 393-O L II層出土遺物 (24)



第94図 393-O L II層出土遺物 (25)



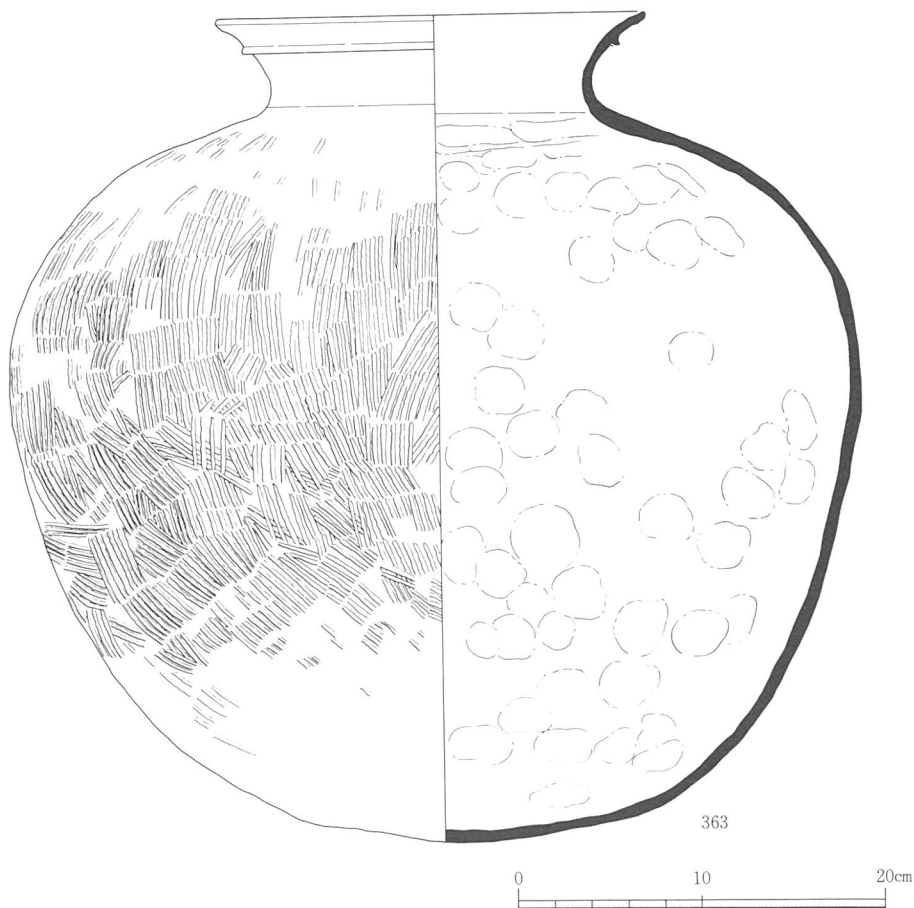
第95図 393-O L II層出土遺物 (26)

第85図には小型の壺類を示した。口頸部の形態により、2段に立ちあがるものと、上方に開きながらまっすぐに立ちあがるもののほぼ2種類に分類されよう。前者は壺と形態が酷似し、口頸部には波状文などの装飾が施される。

第86・87図には広口壺を示した。大きくは脚があるかないかにより区分されようが、口縁部の形態や調整法などにより、細かな分類は可能である。

(338・339・342)など直口的口頸部の形態を有するものは、2～3状の凸帯を配し、その間に波状文が施されている。(341)は二重口縁部を有し、同じく波状文が施されている。(340)は体部から口縁部にいたる平行タタキが施される。

(343・344)は脚付きの壺である。(343)は口頸が短く、上方部に1条の凸帯が配される。体部と脚部との接合部には凸帯が配され、その上には刺突文が巡る。(344)は(343)より口頸がやや長く、2条の凸帯と2条の波状文が施される。体部はカキメが施され、脚部との接合部には下方へ大きくはりだした凸帯が配される。凸帯の上には刺突文が巡る。脚部外



第96図 393-O L II層出土遺物 (27)

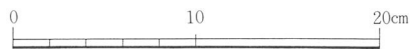
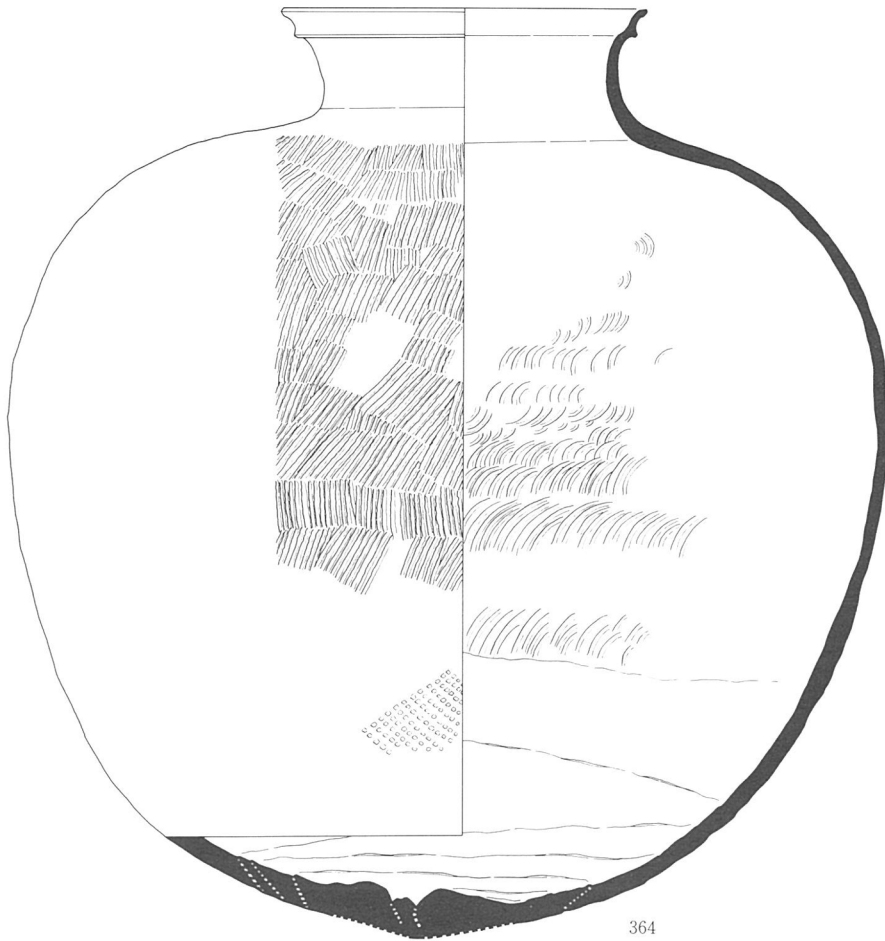
面には2条の凸帯による区画間に波状文が巡り、長方形のスカシが配される。

(345・347)は短く外反する口縁部を有す、体部は球形を呈する。(345)は外面に縦方向の縄蓆文が認められ、後にカキメを施す。内面には指頭圧痕が認められる。(347)は縦方向を基調とする平行タタキが施され、タタキは口頸部にまでいたる。

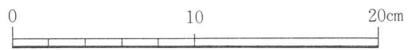
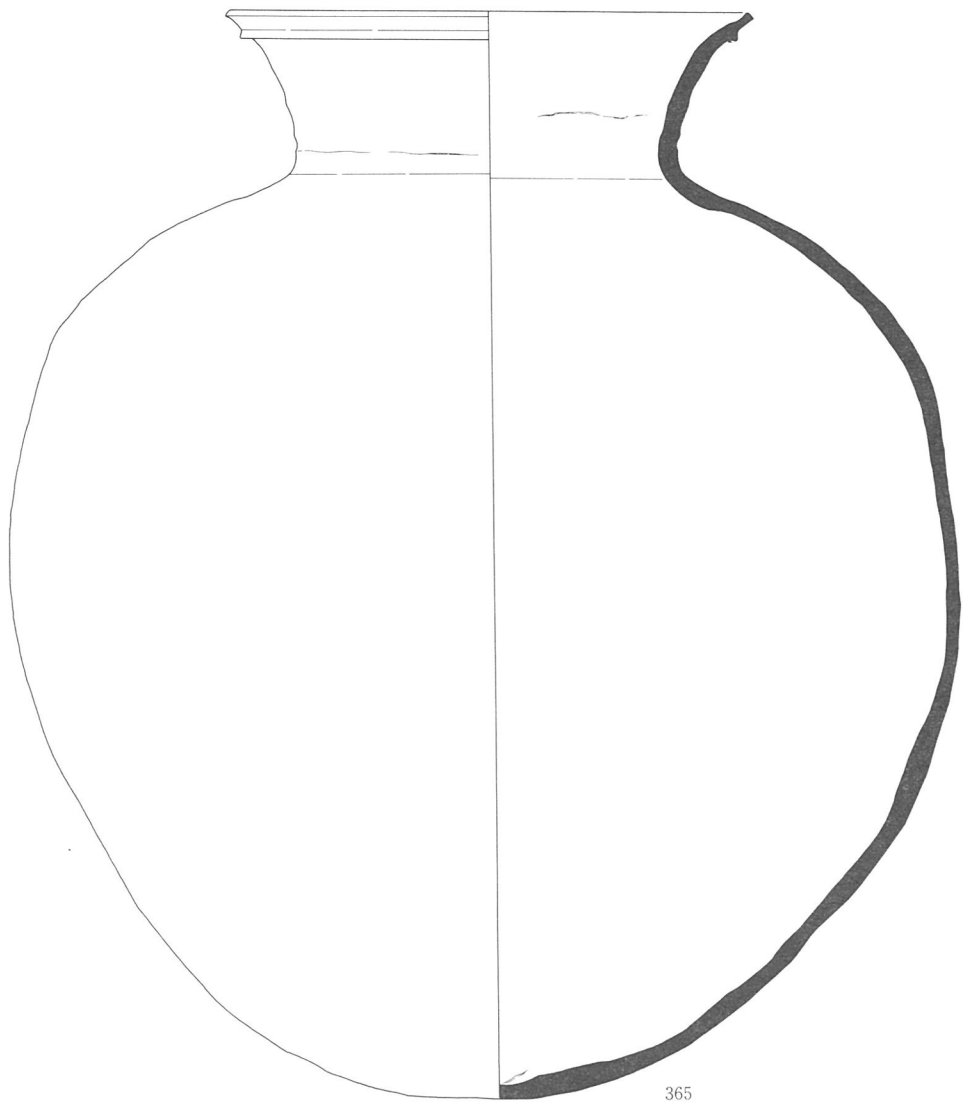
甕は法量から仮に3区分した。一応の目安として、口径が40cm以上を大型、30cm前後を中型、20cm前後を小型とする。

第88図から第94図には小型の甕を示した。口頸部の中央付近に凸帯を配するもの、口縁部が大きく外反するもの、口縁部が直行するもの、二重口縁部を有するもの(361)などに大きく区分されよう。

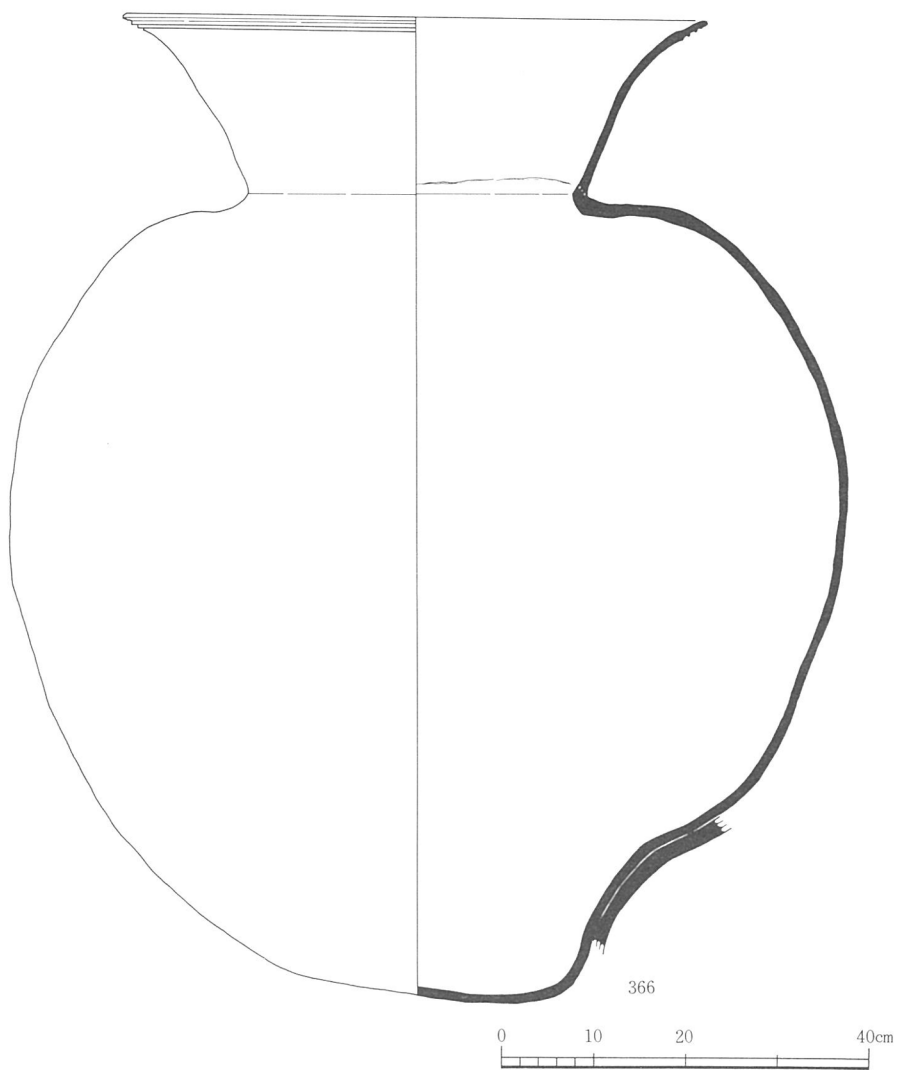
口頸部の中央付近に凸帯を配するものでは、体部が卵形のもの(348・349・354)、球形



第97図 393-O L II層出土遺物 (28)



第98圖 393-O L II層出土遺物 (29)



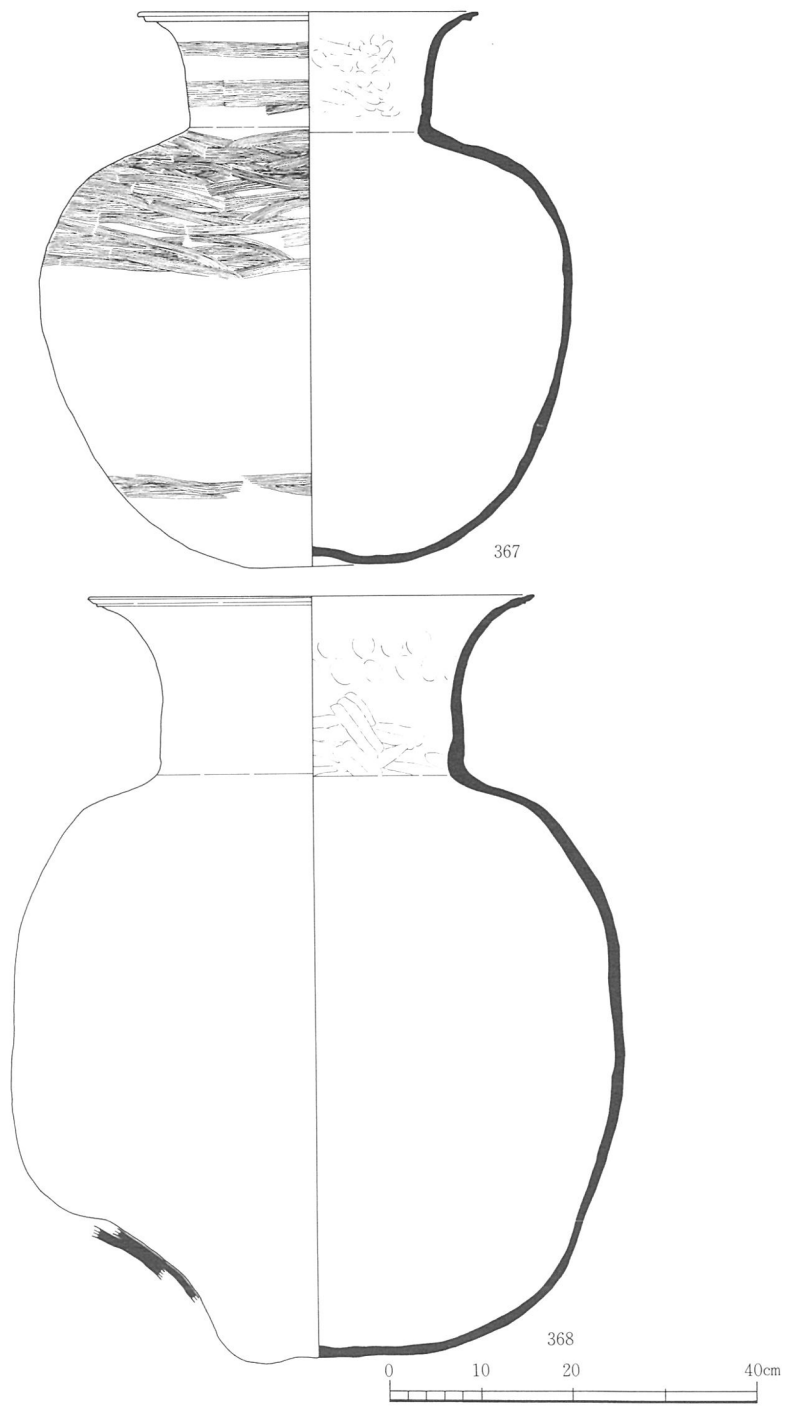
第99図 393-O L II層出土遺物 (30)

に近いもの(357~359)に分けられよう。(348・349)はいずれも体部に螺旋状の沈線を巡らす。同じく体部に螺旋状の沈線を巡らすものに(350)がある。

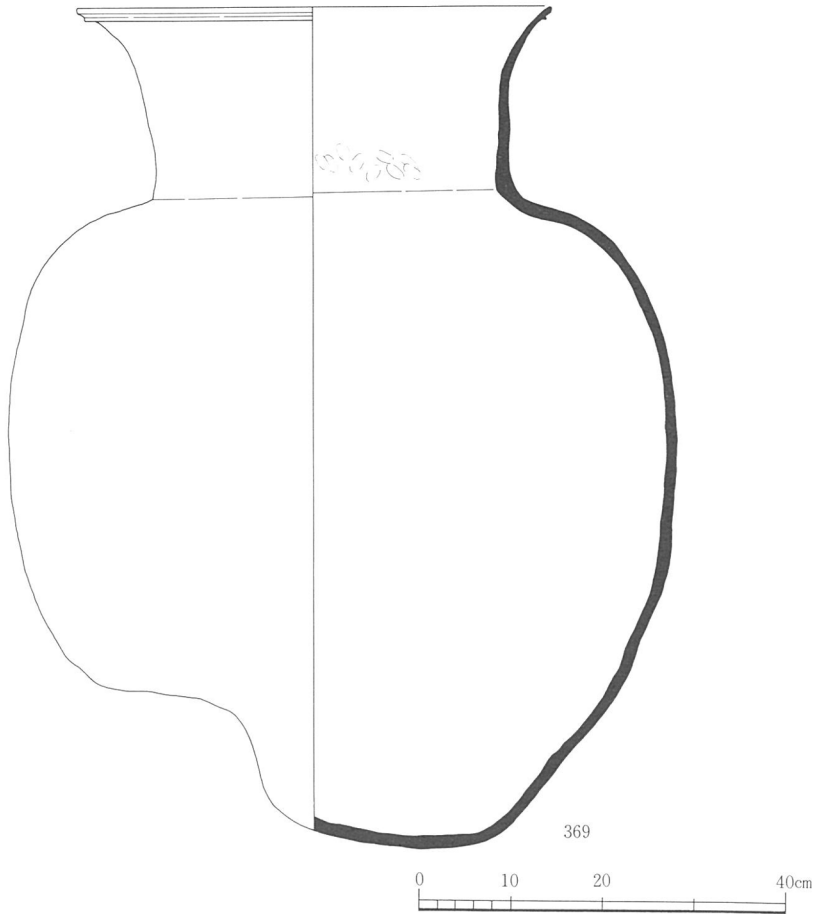
(352)は口頸部に比較的鋭い凸帯を配し、刺突文を施文している。体部はやや肩が張り、底面は凹面状を呈し、平底を意識している。

第95図から第98図には中型の甕を示した。

(364・365)の底部内面には絞り痕が認められる。(364)は体部外面の下方1/3程には格子タタキが施され、上方2/3には縦位を基調とする平行タタキが施される。一方、内面下方



第100図 393-O L II層出土遺物 (31)



第101図 393-O L II層出土遺物 (32)

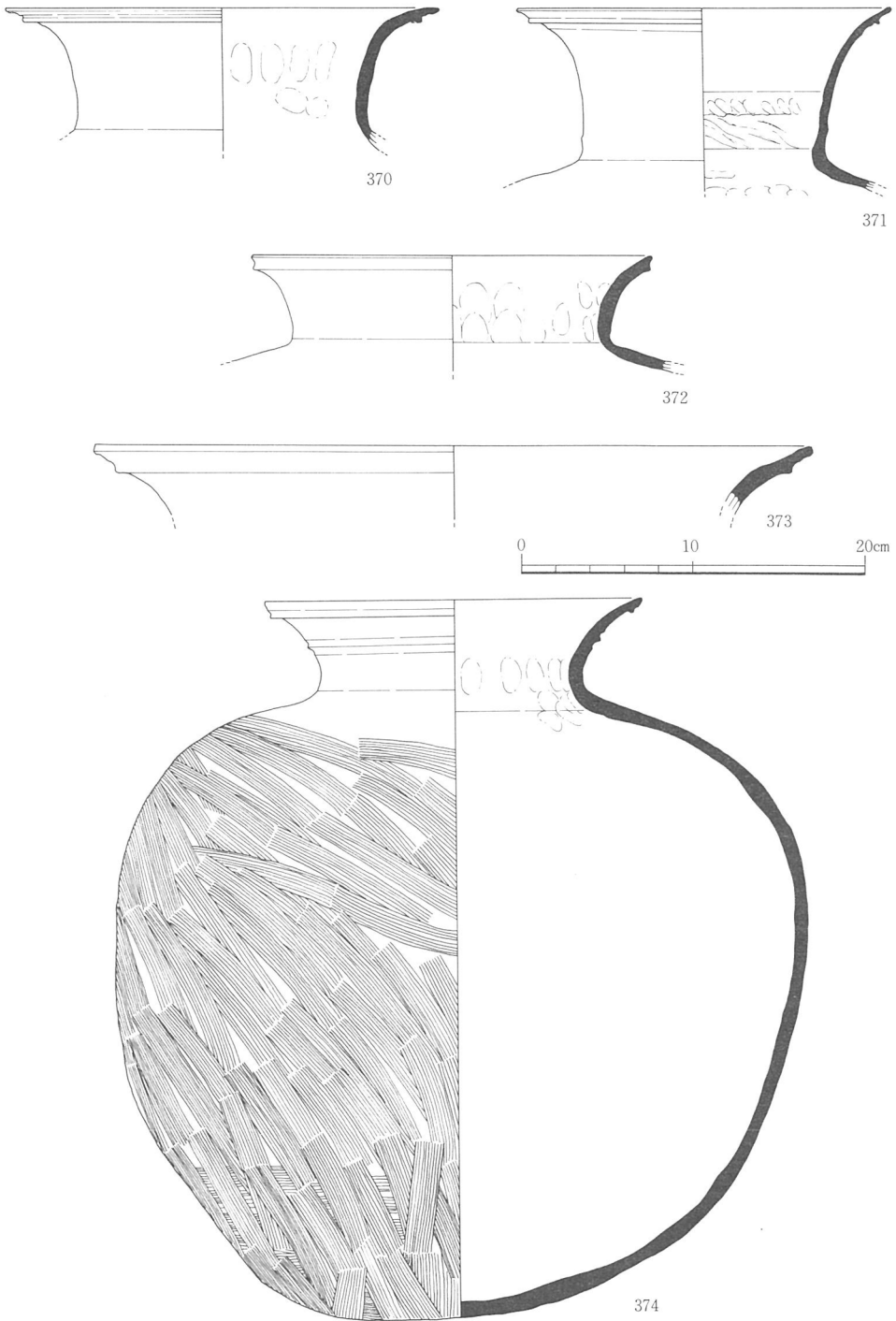
1/3には明瞭な当て具の痕跡は認められず、粘土紐の巻き上げ痕が観察される。しかし、上方2/3では当て具痕を丁寧にナデ消している。これら体部に見て取れる成形技法の差異は分割成形されたことを如実に物語るものである。

その他の甕を第99図から第102図に示した。

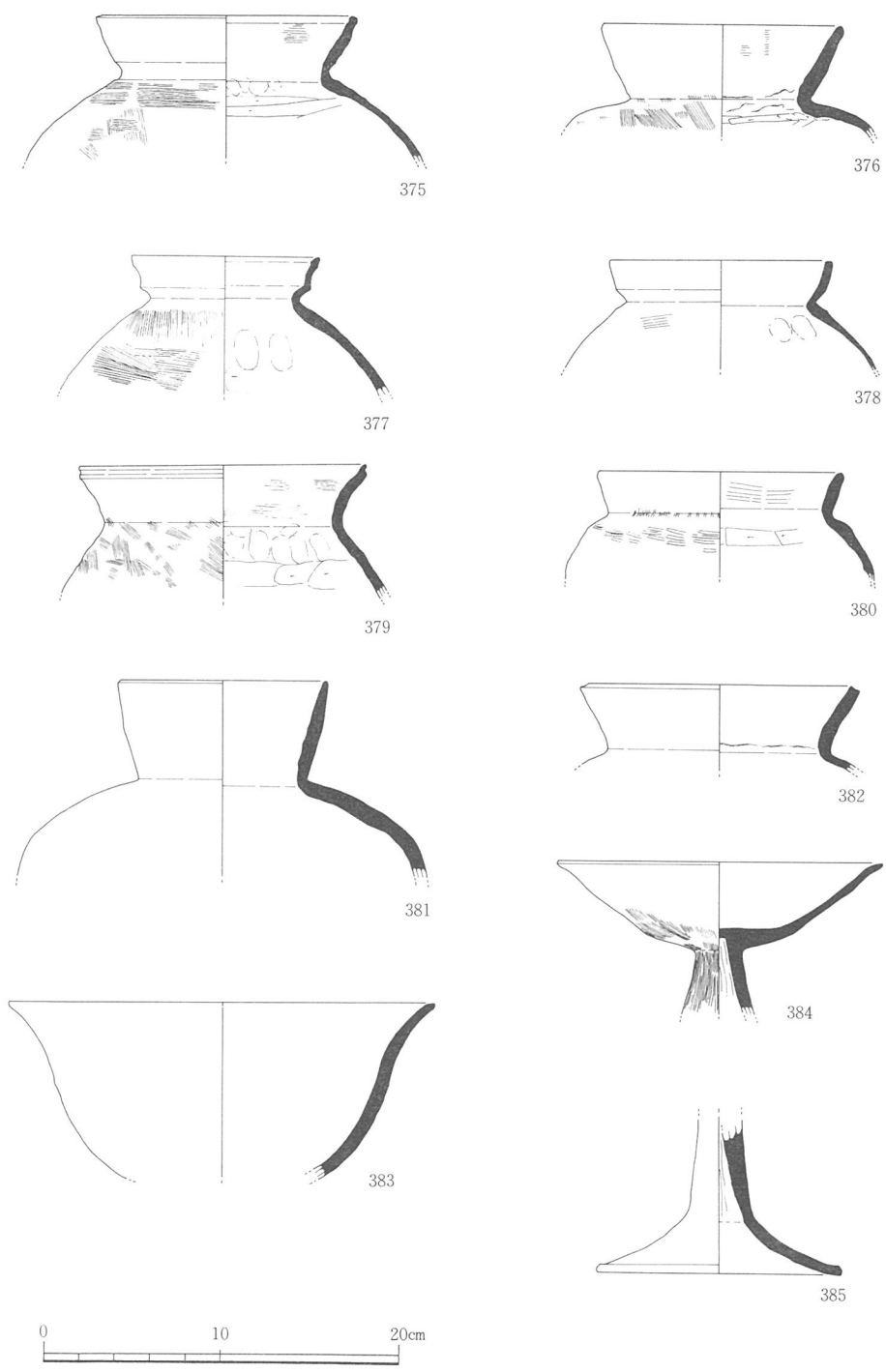
(366・368・369)は内外面を丁寧にスリ消しているため、調整は不明である。(367)は口頸部には横方向の、体部では肩部と底部付近にハケメを施す。一方(374)は体部全域に左上から右下方方向へのハケメが施される。

第103図には土師器を示した。いずれも破片でややローリングを受ける。反転復原によって図化した。器種は甕と高杯で、出土量は後述する軟質土器より極めて少ない。

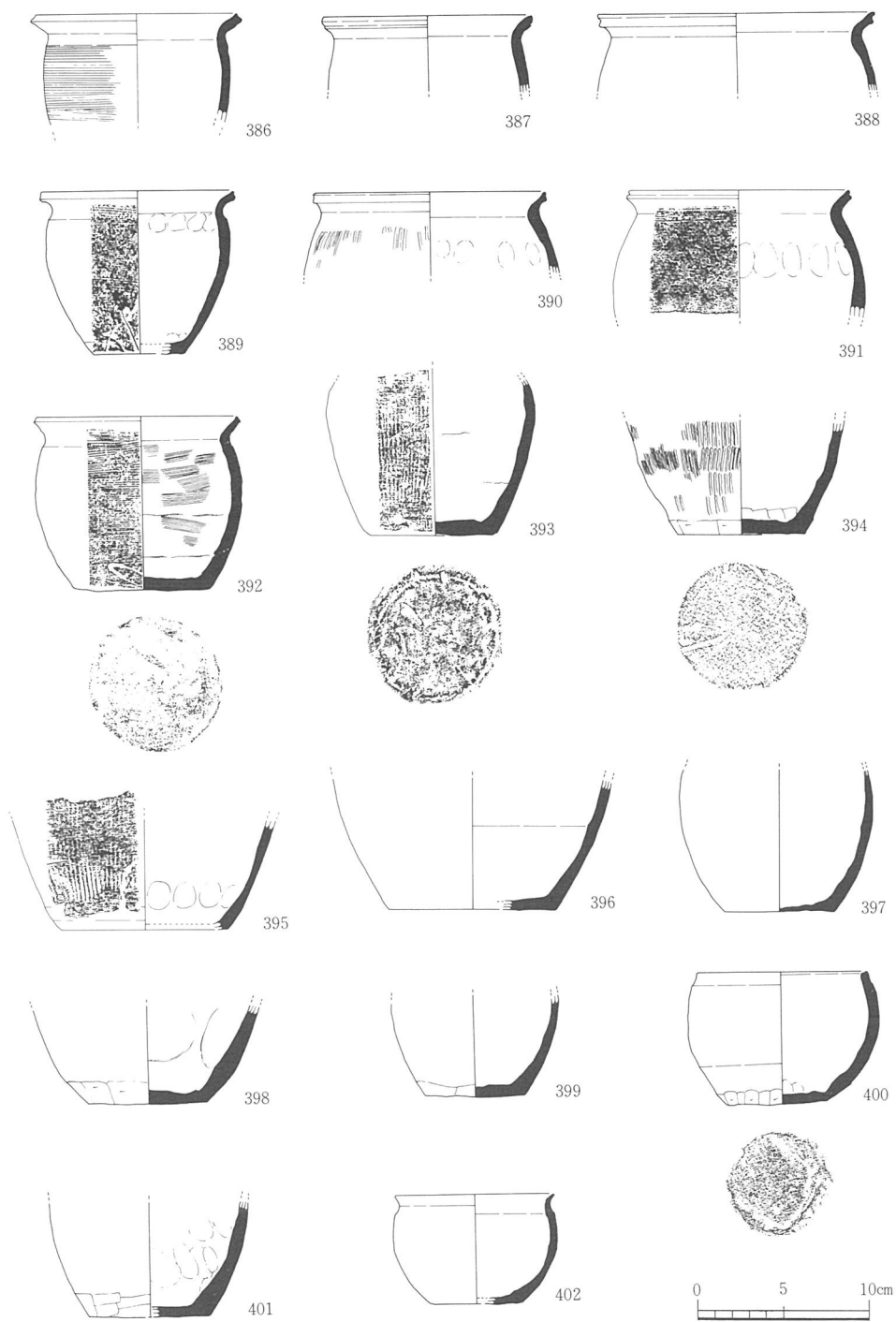
第104図は平底鉢ほかである。口縁部などには差異があるが体部の形態から、口径より



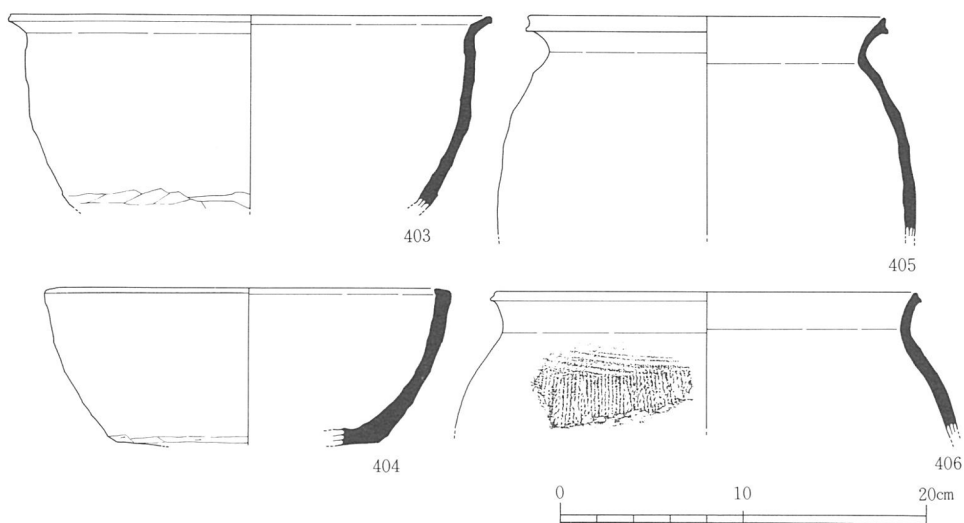
第102図 393-O L II層出土遺物 (33)



第103図 393-O L II層出土遺物 (34)



第104図 393-O L II層出土遺物 (35)



第105図 393-O L II層出土遺物 (36)

底径が小さく体部最大径が上半にあるものと、口径と底径がほぼ同じで体部最大径が中央付近にあるものの概ね2種類に分類できよう。谷状地形出土の平底鉢は、量的には前者が多い。また、口縁端部には凹線が施され、この強弱、位置により、形態に差異が生じている。

体部の成形技法としては、縄蓆文の認められるもの(392・393)、平行タタキを施すもの(390・394・395)、カキメを施すものがある。大庭寺遺跡の過去の調査例では格子タタキを施す例があるが、今回の調査では出土していない。一方、底部付近では形態や技法の差異に関係なく手持ちへら削りが施される。また、内面の調整は単一的で、粘土板に粘土紐を巻き上げる方法を採用し、接合時の強いユビオサエが如実に観察できる。

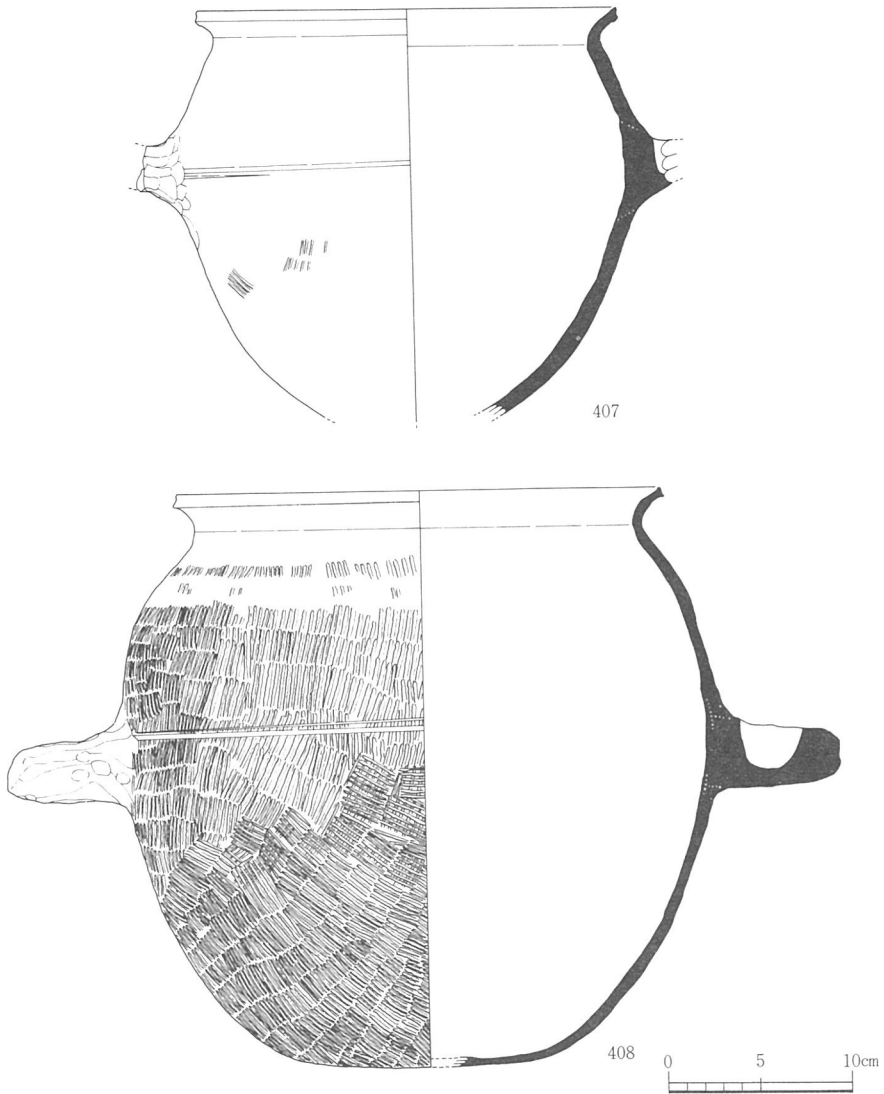
(392)は縄蓆文の後横方向のカキメが施される。また、底部には中心よりややはずれていわゆるゲタ痕が確認されている。(400)は須恵器である。底部には「コ」の字形にゲタ痕が観察される。

第105図はその他の土器である。

(403)は瓦質の埴である。(404)は須恵器で、鉢としたが壺類の蓋の可能性もある。

(405・406)は軟質土器の長胴甕である。(405)は内外面の調整は不明である。土師質に焼成される。(406)は須恵質に焼成される。体部外面には顕著な縦方向の縄蓆文が観察される。

第106図は軟質土器の埴である。(407)は須恵質に焼成される。外内面の調整は不明瞭であるが、平行タタキの痕跡がわずかに観察される。把手の高さで沈線が施文されている。

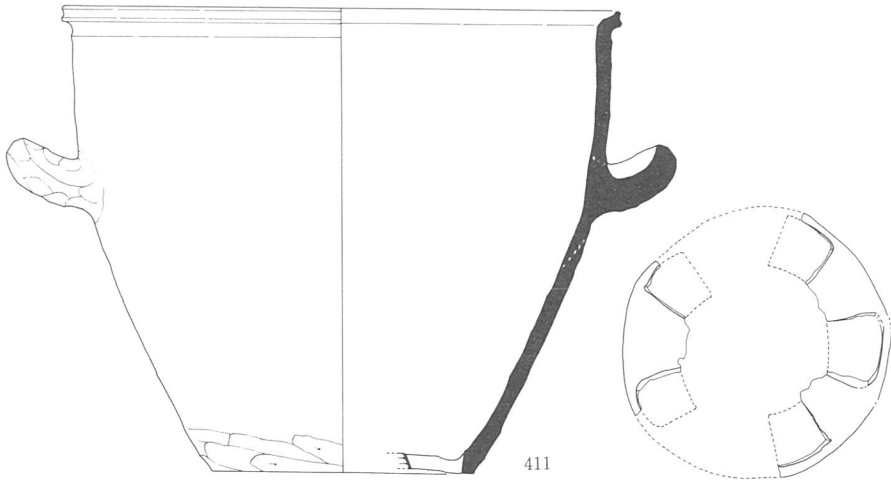
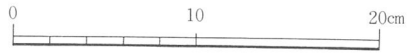
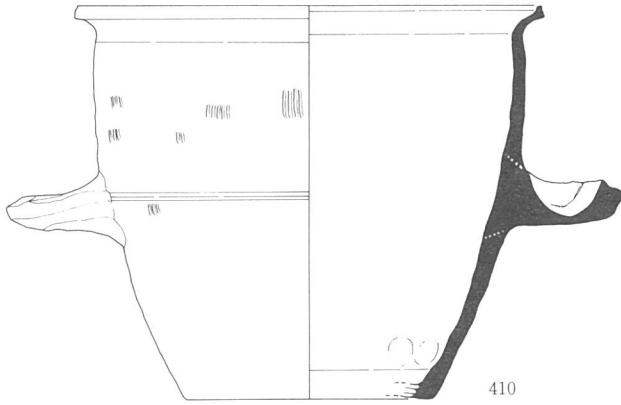
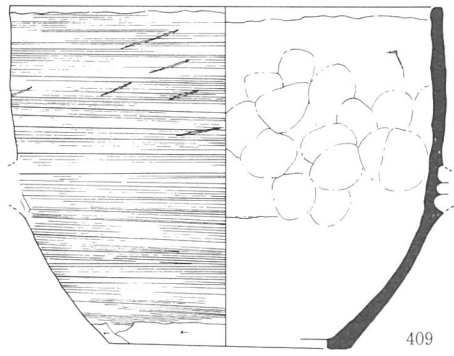


第106図 393-O L II層出土遺物 (37)

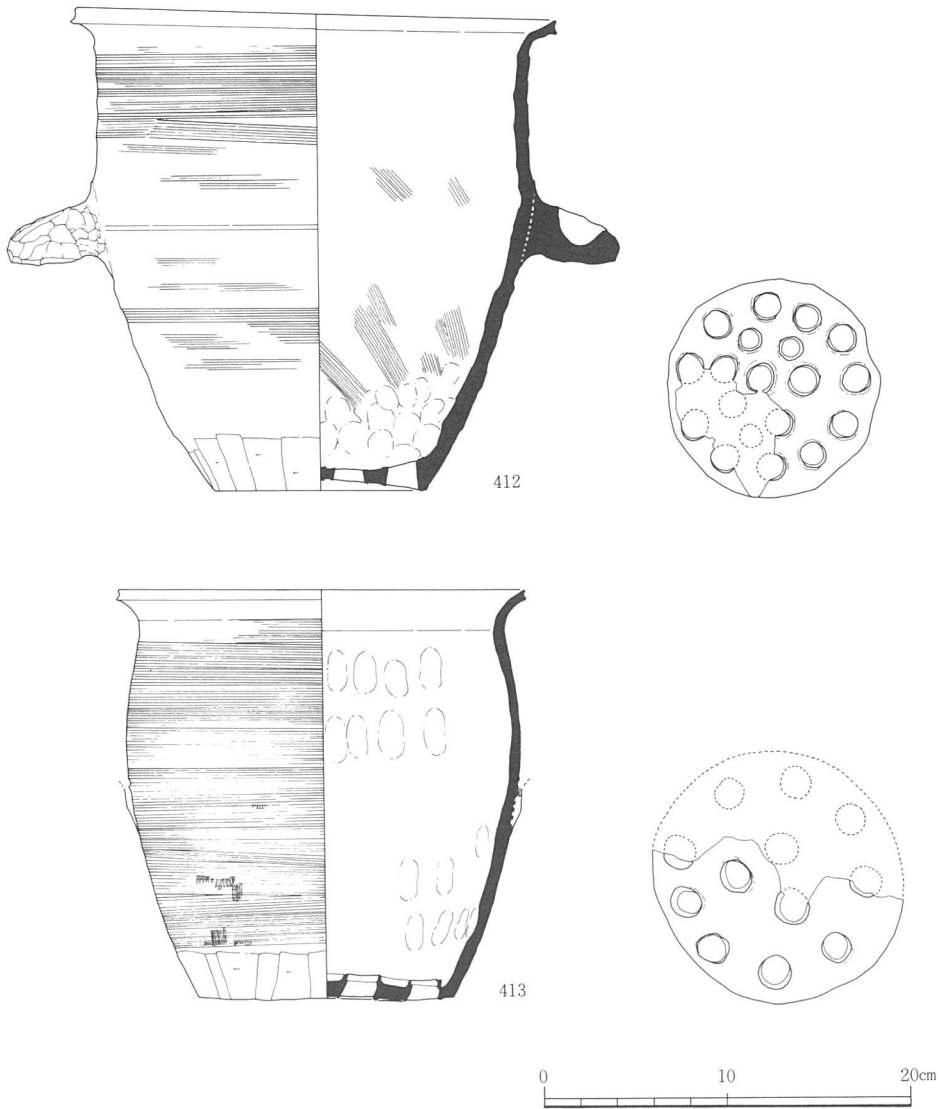
(408)は外面に平行タタキを施し、把手の高さで沈線を施文する。いずれも把手は内面にまで達していることから、接合部は体部に穴が明けられ、把手を挿入していると思われる。甗においても同様の接合方法が採用されている。

甗は第107図から第109図に示した。

甗は形態から、口径部分が最大径を測り口径に比べて器高が低いもの(409~411)、口径と器高がほぼ同じで体部の最大径が体部上半にあるもの(412・413)、口径が器高より小さ



第107図 393-O L II層出土遺物 (38)



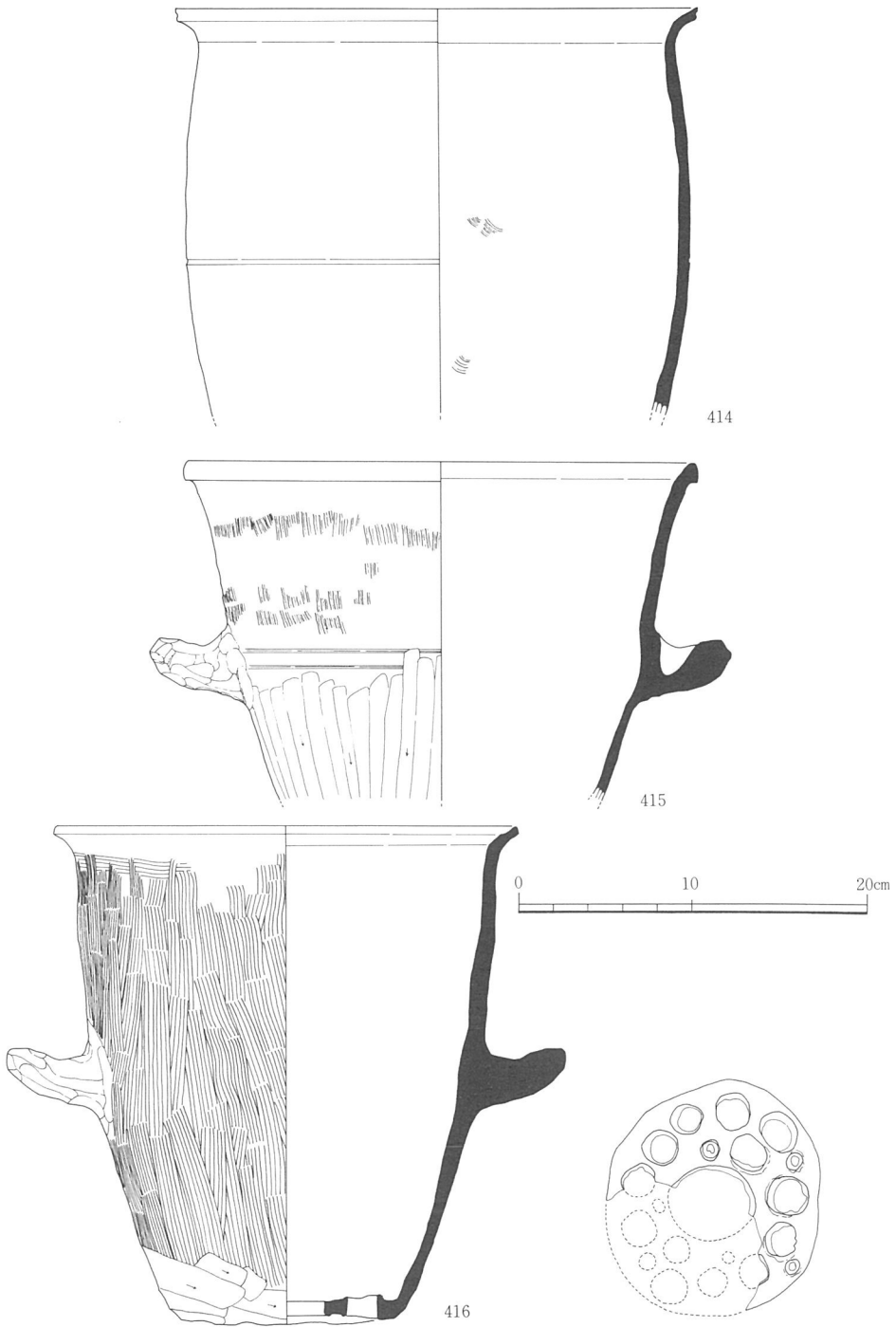
第108図 393-O L II層出土遺物 (39)

く最大径が口径であるもの(416)に分類できる。

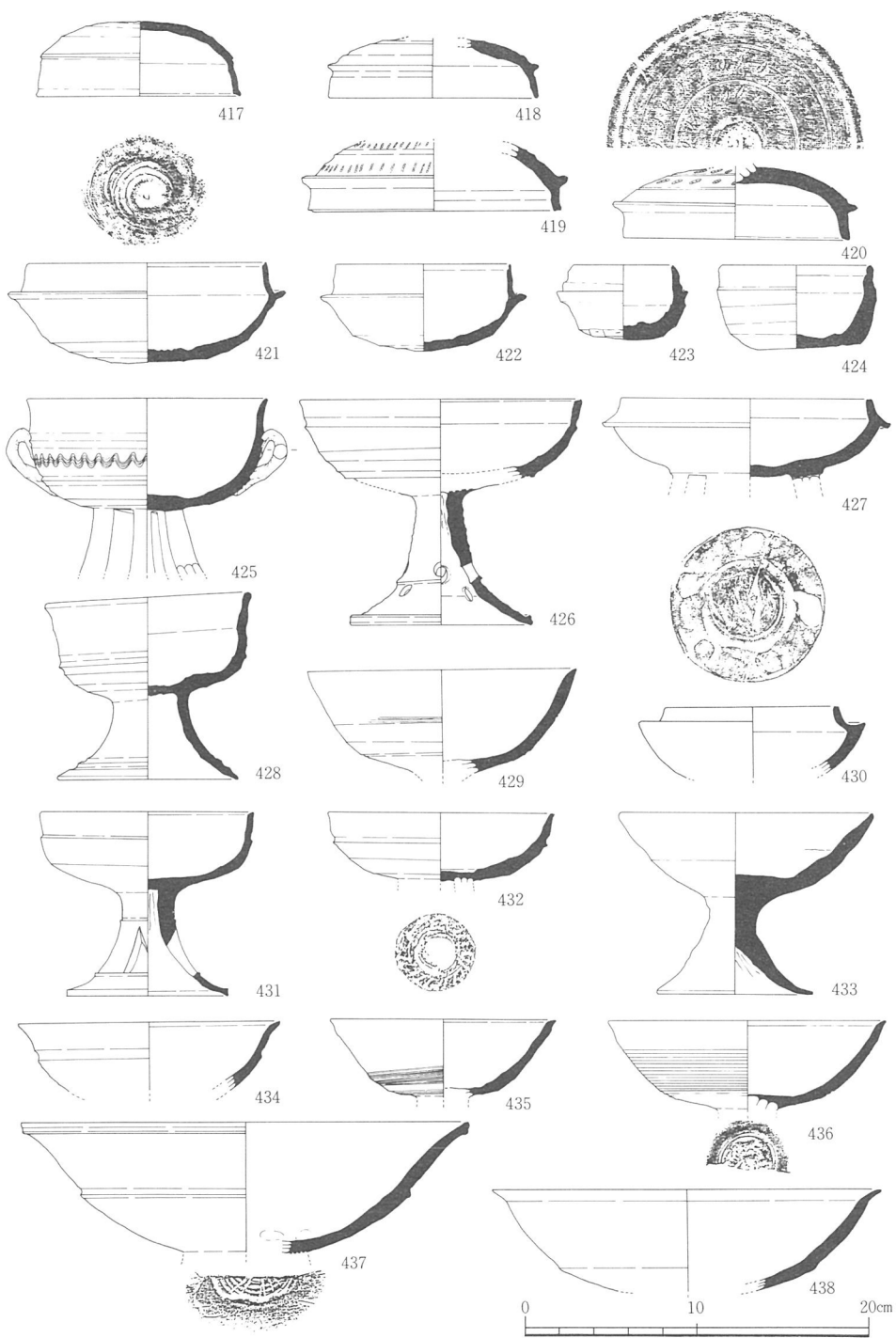
III層出土遺物は第110図から第123図に図示した。

(418~420)は高杯の蓋である。II層出土品と合わせ、蓋の施文は圏線と圏線の間に刺突文を配する文様構成が主流で、圏線の変わりにカキメ、刺突文の変わりに波状文が施される例があることが判る。

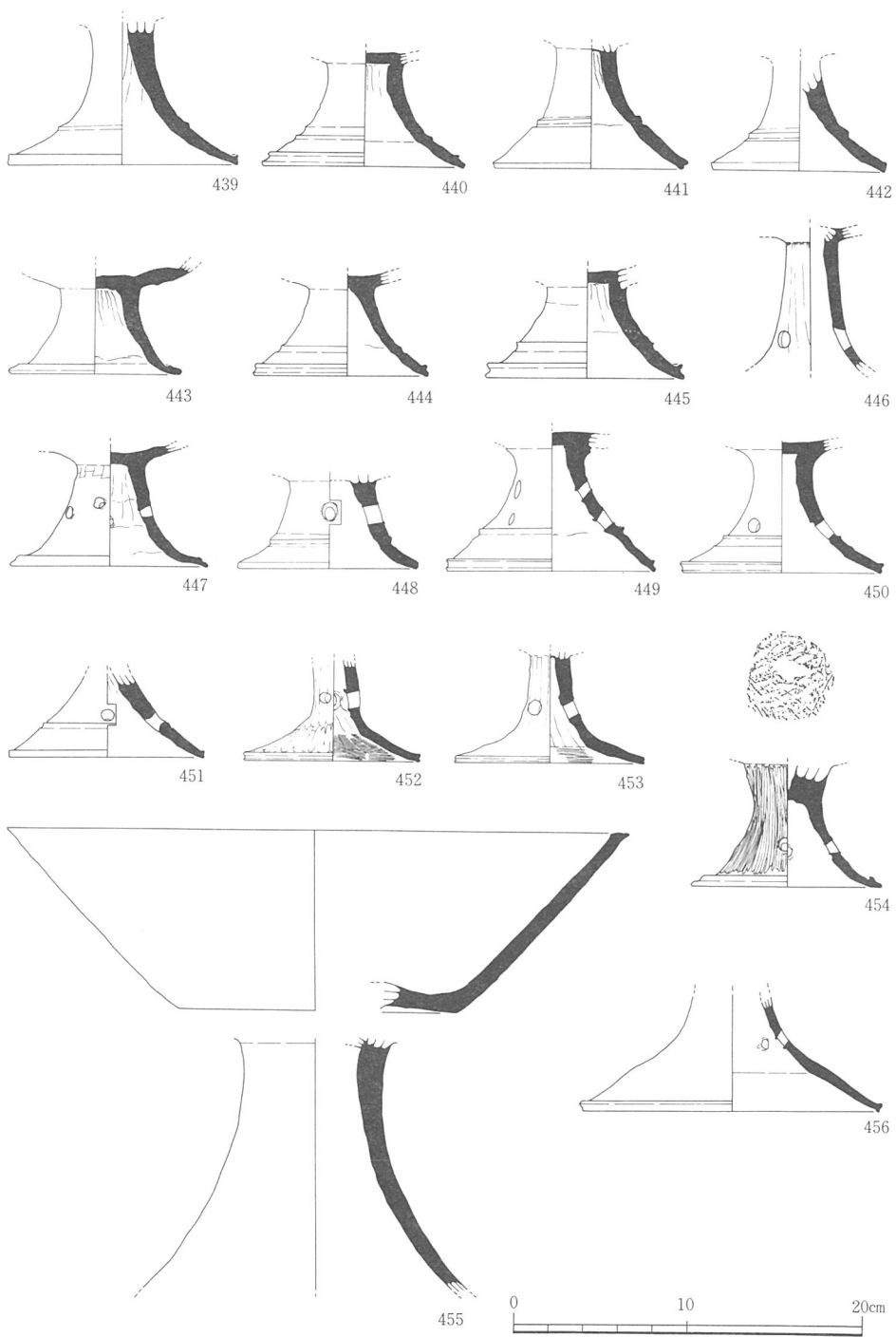
(427・430)は有蓋高杯である。(427)は面取りした5本の脚を有していたと思われる。



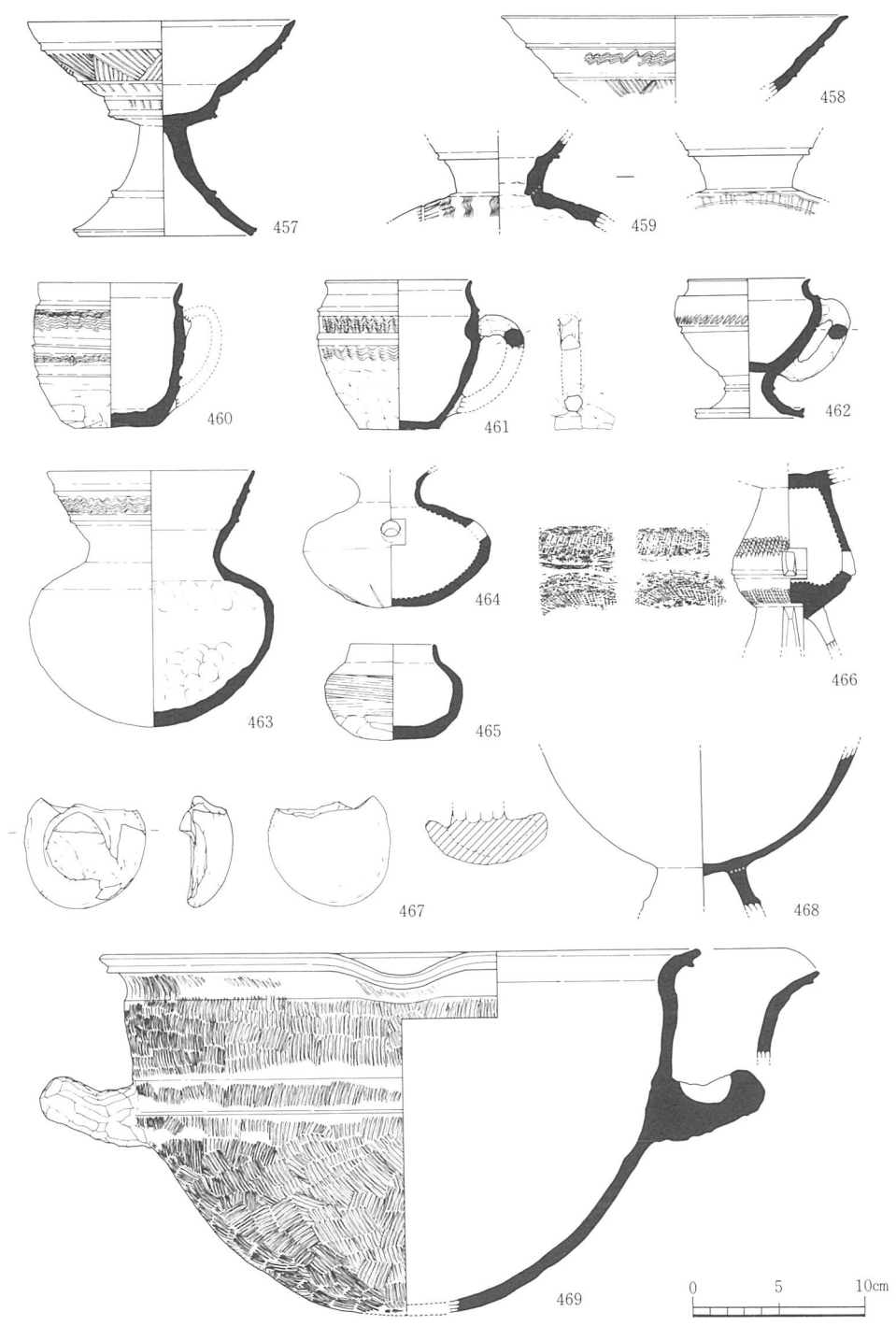
第109図 393-O L II層出土遺物 (40)



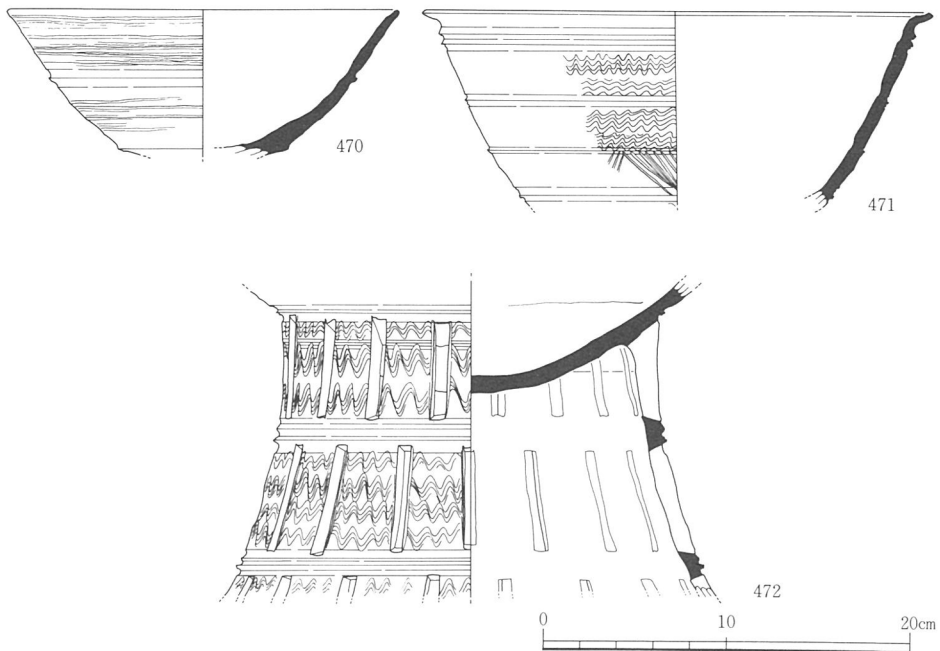
第110圖 393-O L III層出土遺物 (1)



第111图 393-O L III层出土遗物(2)



第112图 393-O L III层出土遗物 (3)



第113図 393-O L III層出土遺物(4)

口縁部、受け部の形状は、池の上墳墓群や古寺墳墓群の中に類例が求められる。(430)は須恵質であるが褐色系の色調を呈する。杯身の可能性もある。

(431)は瓦質で、焼成は良好である。脚柱には2条の凸線が配され、この間に3方の三角形のスカシがある。

(434~436)は須恵器である。(437・438)は土師質である。

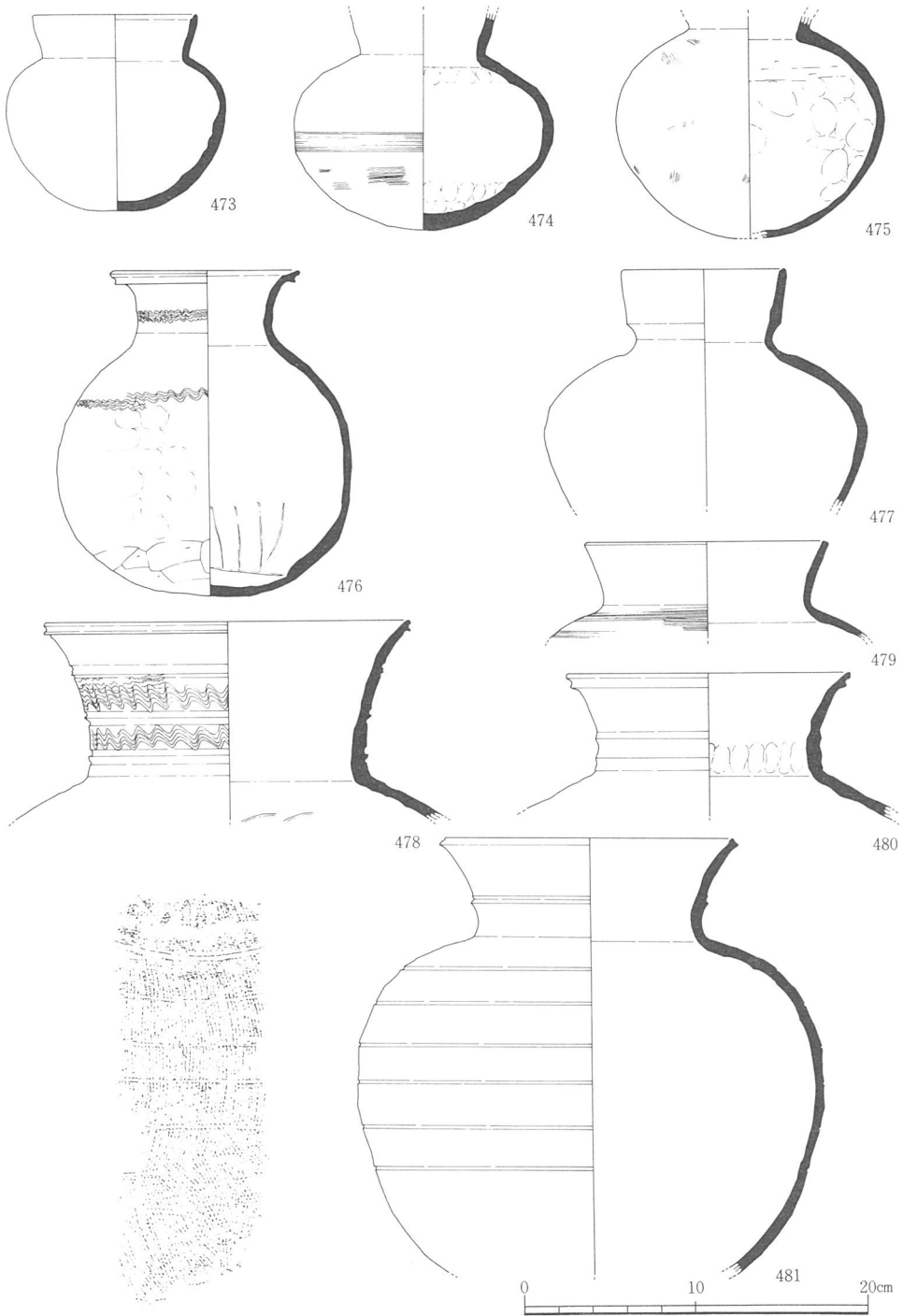
(452)は須恵器である。(453)は(275)とまったく同様の形状、調整である。(454)にも外面にはミガキが施される。

(455)は大型の高杯で、形状は土師器に似るが、須恵質に焼きあがる。杯部と脚部には接点がなく接合できないが、胎土、焼成状況、色調などから同一個体と判断した。

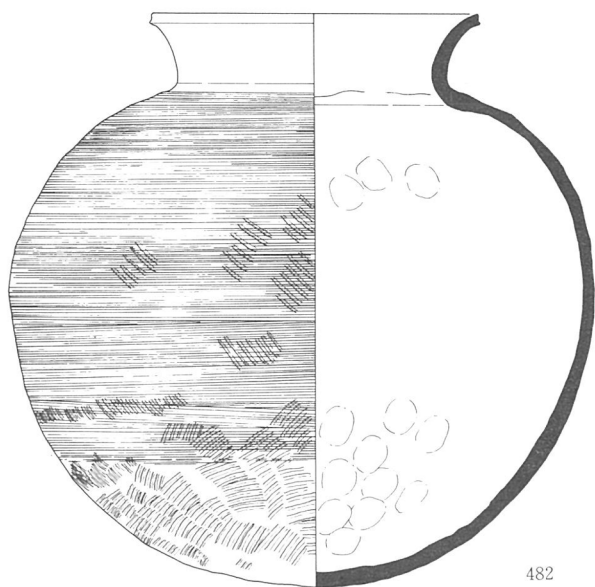
(456)は須恵器で、四方からの円形の穿孔がある。

(457)は杯部に鋸歯文及び刺突文が施文された装飾性の豊かな高杯である。脚部は前述の高杯(298)と同様の形態であり、むしろ(457)の杯部は特異な例であると言え、半島出土の器台例と形態が類似し、より器台的な機能を備えている可能性がある。

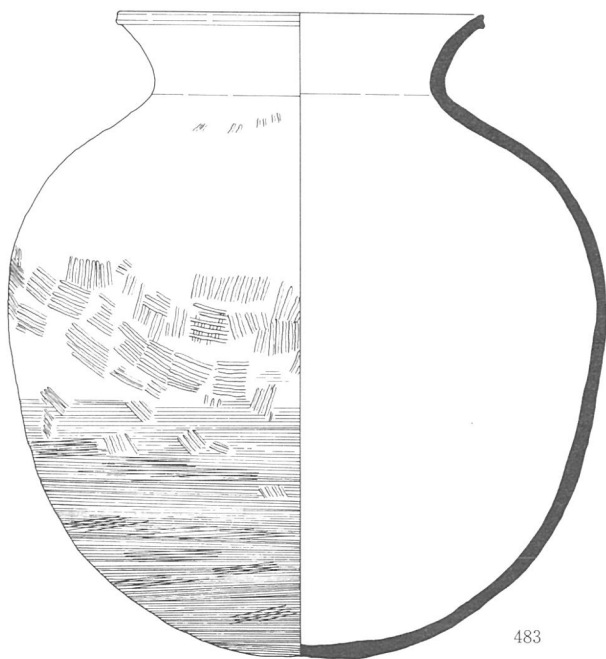
(462)は焼け歪みが著しいが、本来の形状を復原実測した。体部には精緻さを欠いた刺突文が施される。形態は朝鮮半島産とされる福島県郡山市所在の南山田遺跡出土例と酷似



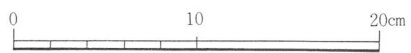
第114图 393-O L III層出土遺物 (5)



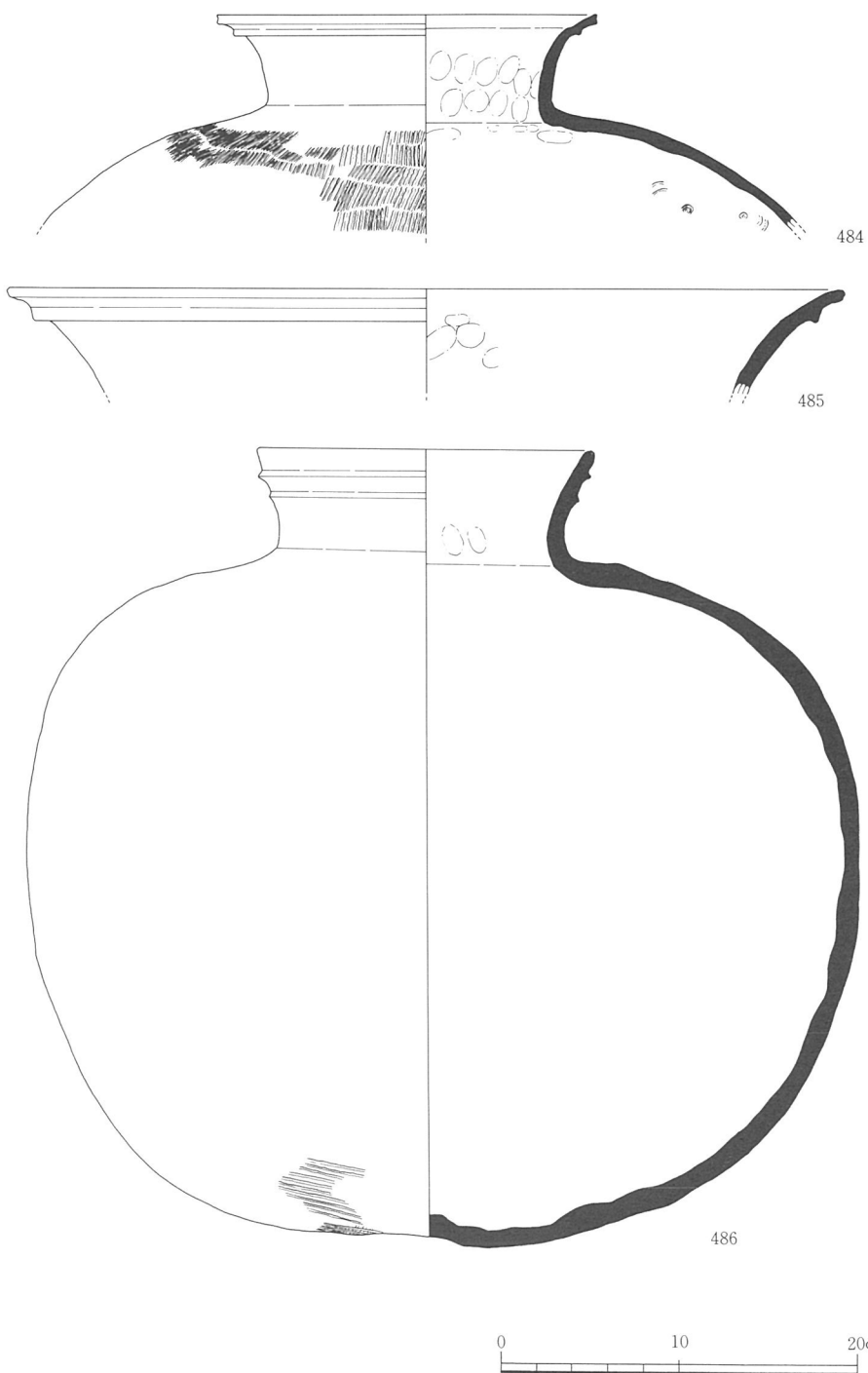
482



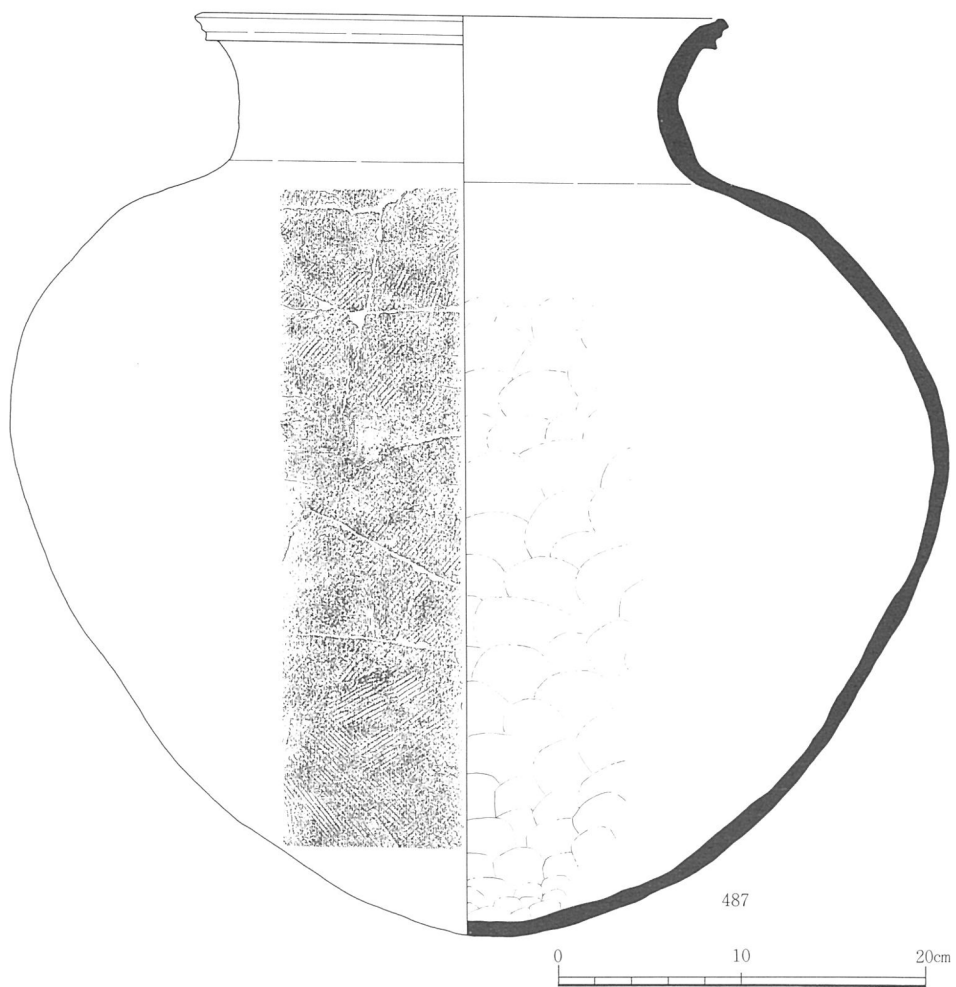
483



第115図 393-O L III層出土遺物(6)



第116图 393-O L III层出土遗物 (7)



第117図 393-O L III層出土遺物(8)

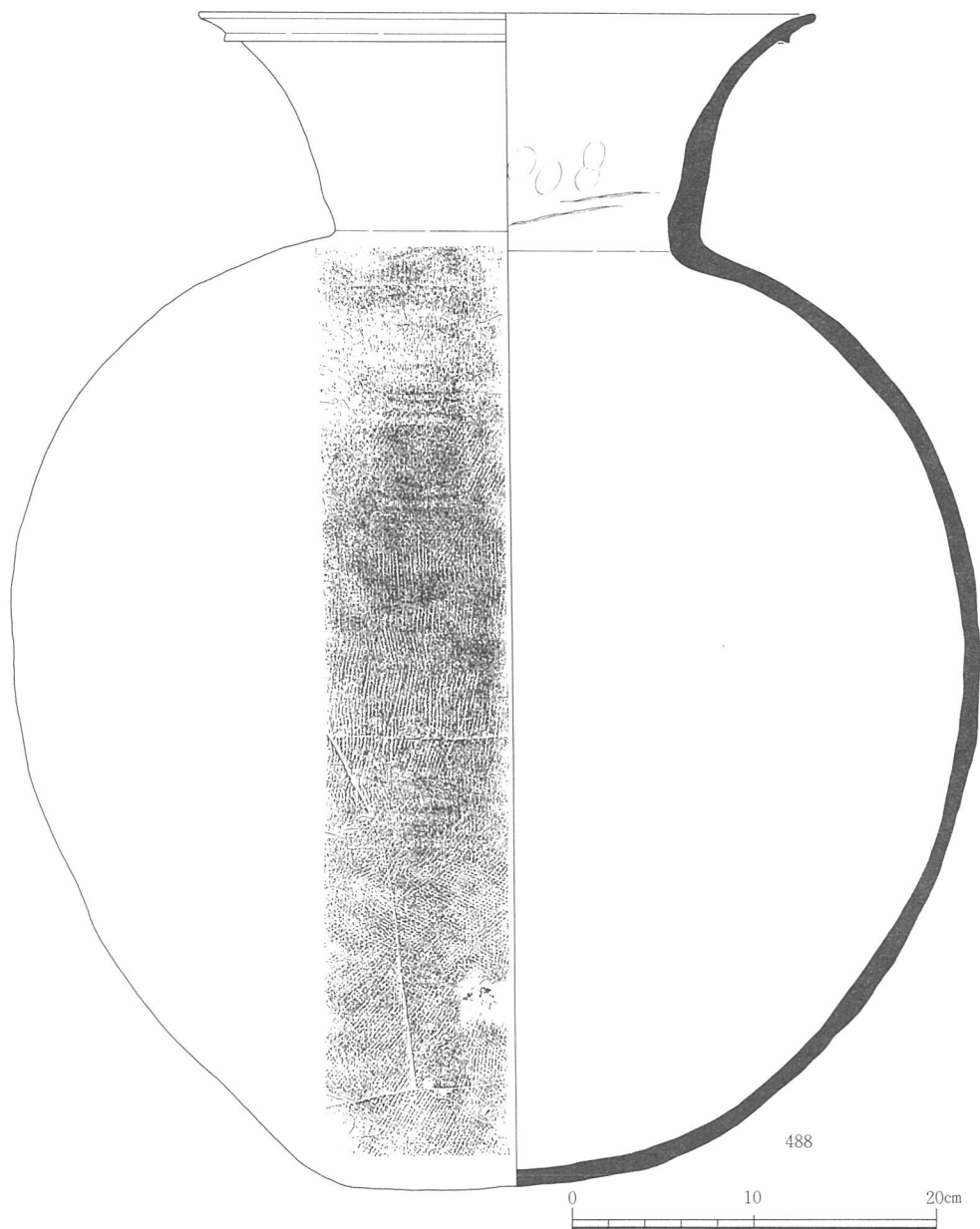
する。

(466)は脚付椀か。椀部と脚部間に相当する部分と思われ、四方には方形の穿孔がある。内部は空洞で、この中に小さな須恵質の円形の玉が2個確認される。穿孔付近に凸線が巡り、上には精緻な波状文が、下には刺突文が施される。

(467)は陶製の無文の当て具である。表面は実際に使用していたためか滑らかである。

(468)は土師質である。

(469)は体部が半円球を呈する埴である。片口の口縁部下には凸帯が配される。平行タ

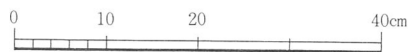
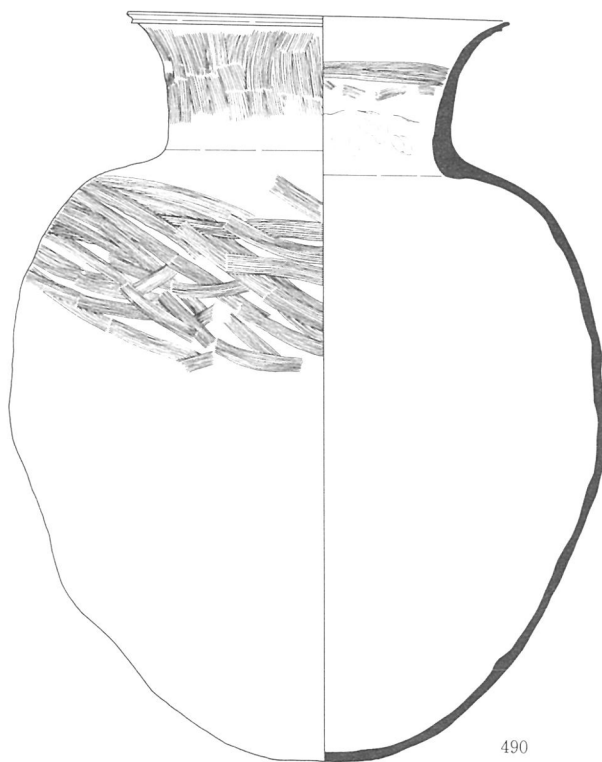
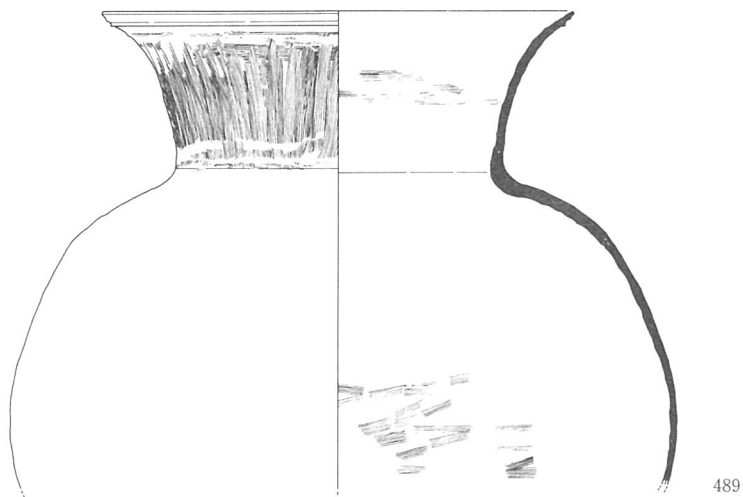


第118図 393-O L Ⅲ層出土遺物(9)

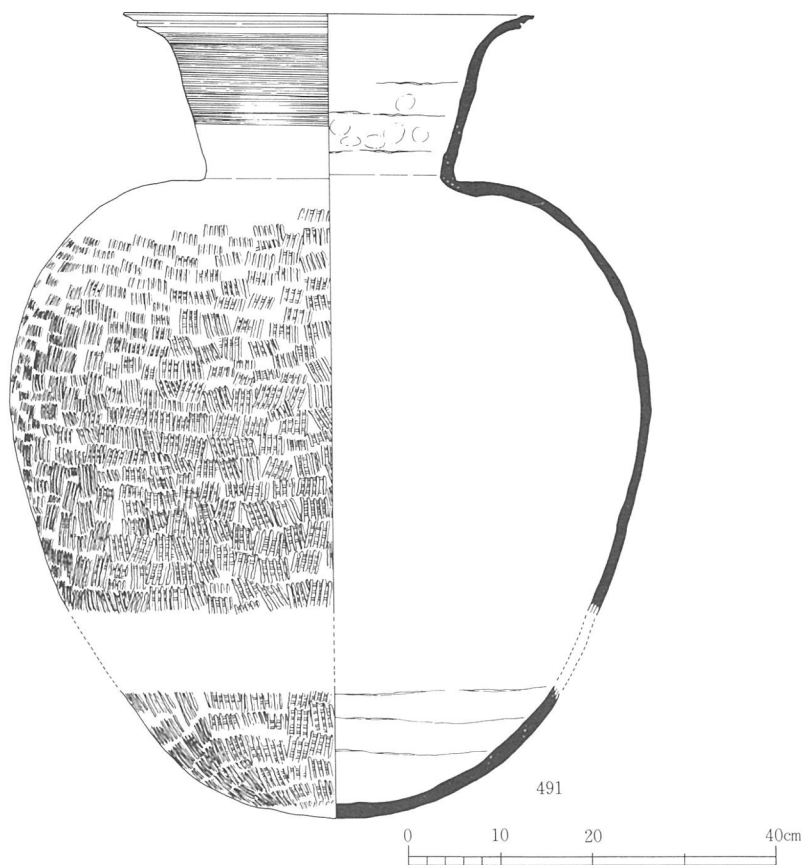
タキは体部から口縁部にいたり、把手付近には1条の沈線が巡る。

(470)は高杯の杯部である。

(472)の杯部と脚部の接合部においても凸帯が配されている。



第119図 393-O L III層出土遺物 (10)



第120図 393-O L III層出土遺物 (11)

第114図には壺類を示した。

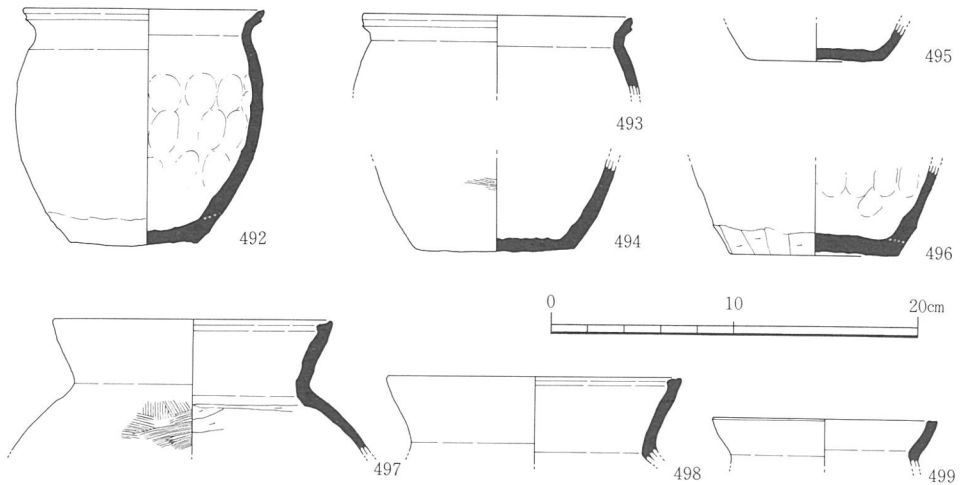
(473)は須恵器、(474・475・477)は土師質である。(474)体部外面には横方向のカキメが施される。内面底部付近では顕著な指頭圧痕が観察される。

(476)は須恵質の壺で、体部最大径は下半に求められる。波状文は精緻さを欠く。その形状は百済的色彩の強い土器と言える。

(481)は瓦質に焼きあがる。体部には螺旋条の沈線が巡り、体部には顕著な縦方向の縄蓆文が認められる。

第115図には小型の、第116・117図には中型の、第118図から第120図には大型の甕を図示した。

(486)は内外面とも丁寧にスリ消されているが、外面底部付近では平行タタキの痕跡が観察される。口頸部は短く直立し、2条の凸帯が配される。



第121図 393-O L III層出土遺物 (12)

(487)の外表面は平行タタキが施され、内面には無文の当て具痕が認められる。(488)の外表面には縄蓆文が認められる。

(489・490)の口頸部には縦方向のハケメが施され、(490)は体部においても横方向のハケメが認められる。

(491)は口頸部にカキメが施され、体部は格子タタキが施される。体部と口頸部の接合に際し体部の粘土をつまみあげ、口頸部の粘土を外方から巻き上げた跡が明確に観察できる。焼成は軟で、白色を呈する。

第121図(492～496)は平底鉢、(497～499)は土師器甕を図示した。(492)は須恵質に焼成され、窯で焼成されている可能性が高い。

第122図は長胴甕を図示した。(500)は須恵器である。

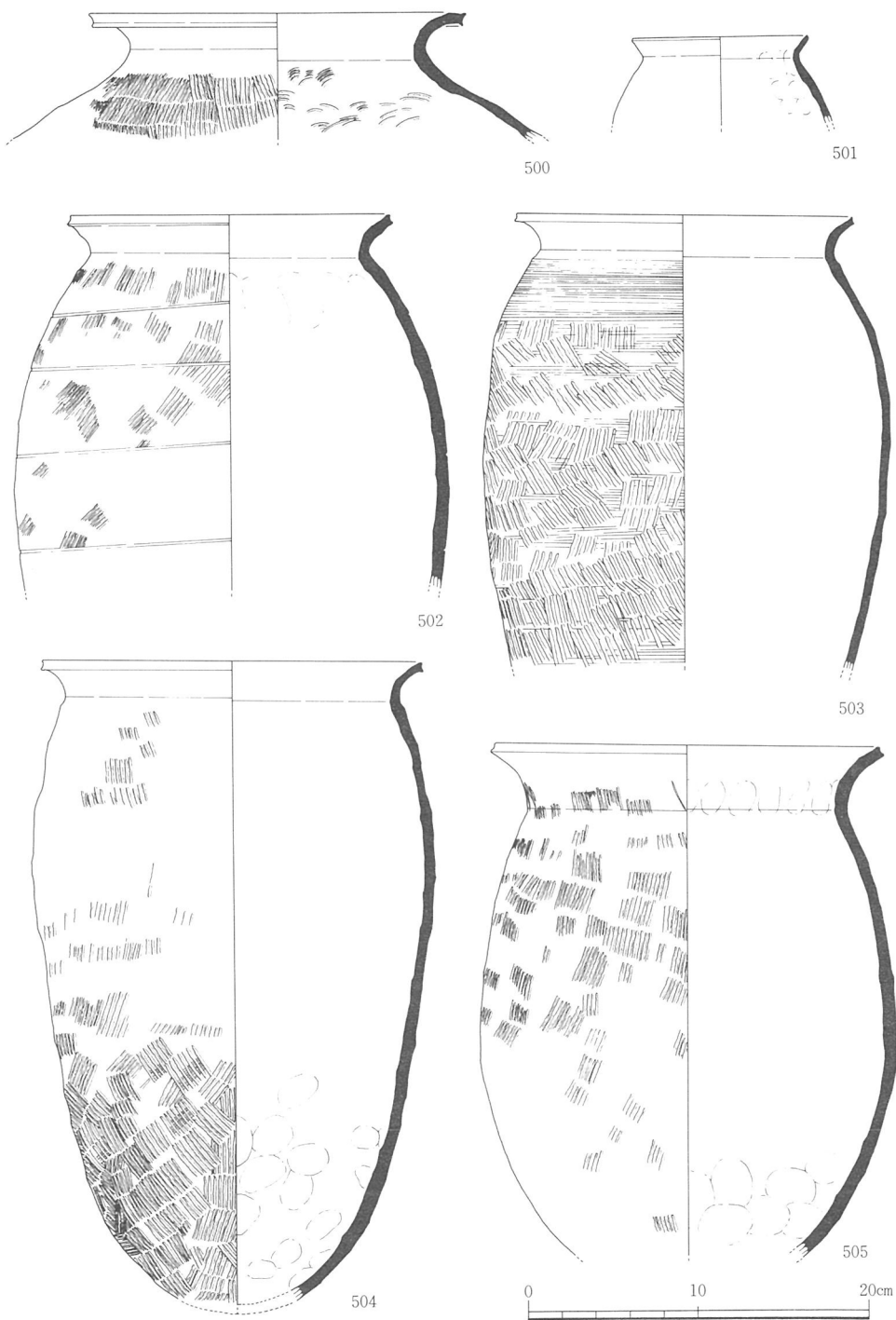
(502～505)はいずれも平行タタキが施される。(502)は螺旋状の沈線が巡る。(505)は体部最大径が下半に求められる。

第123図には甌を示した。

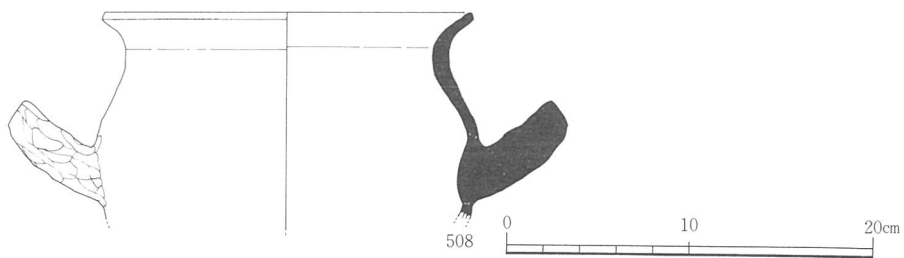
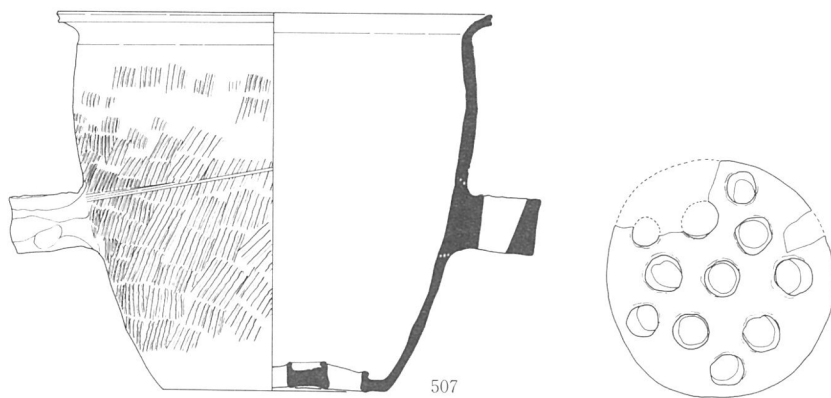
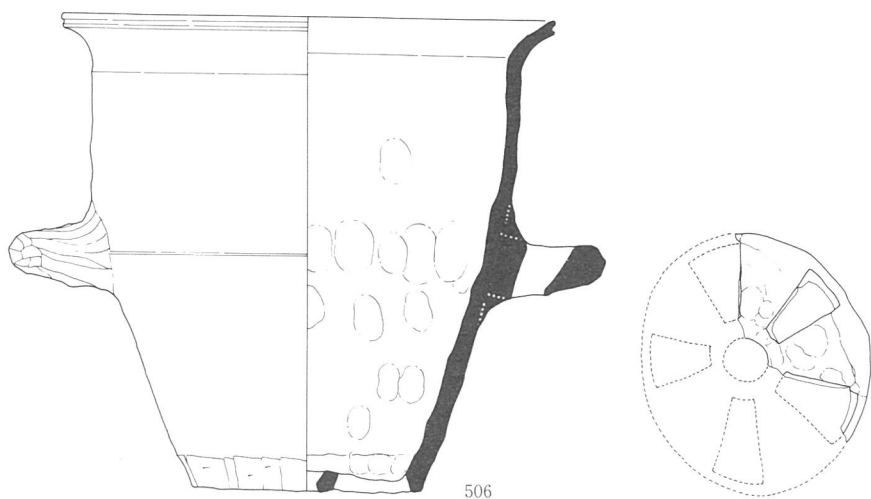
II層で述べた形態の他に(508)のごとく体部の最大径が把手付近に求められ、口縁部と体部の移行部分の径が小さい形態のものがある。また、底部に穿たれる穿孔の形態には円形と長台形がある。

(507)の外表面には平行タタキが施される。

以上概観してきたごとく、谷状地形からは多くの須恵器、軟質土器、土師器が出土した。その器種は、蓋杯、甕、壺、高杯、器台、甌、甌、把手付椀、平底鉢、長胴甕など多彩で



第122图 393-O L III层出土遗物 (13)



第123図 393-O L Ⅲ層出土遺物 (14)

ある。また個々の中でも、特に初期須恵器に関しては多種多様な形態が存在する。

器種ごとの出土量は初期須恵器の場合甕、高杯が多く、蓋杯の占める割合が少ない傾向がある。軟質土器では平底鉢が多い。軟質土器は、器壁に煤が付着するなどの使用痕跡が観察される例が多い。

遺物のみからみると、甕にハケメが施される例が多いこと、高杯の形態と脚部などに土師器的な調整技法が認められることなどから、須恵器の製作には土師器工人が組み込まれている蓋然性は高い。同時に想像をたくましくすれば、雑多な器種の存在は新しい技術の習得を模索する中に従来の土師器的成形・調整技法が具現された結果生じたと考える。そしてその背景には須恵器が定型化するまでの試行錯誤と取捨選択といった揺盪する状況が窺えよう。

また、土師器を遙かに上回る出土量の軟質土器の存在から、大庭寺遺跡において須恵器製作に深く関わった渡来人の蟠踞が裏付けられよう。

次に遺物の出土状態からは、Ⅲ層、特に最下層からの出土遺物は初期須恵器の段階に限られ、完形にちかい遺物の出土例が多いことから、谷状地形周辺の丘陵上には初期須恵器を擁するある種の生活、生産活動に密着した空間が機能していたと考えられる。谷状地形はこれを構成する要素の一つとして組み込まれ、何らかの役割を担っていたとも考えられる。

Ⅱ層堆積段階の奈良時代においては、丘陵上は旧状を大きく変える大規模な開発が行われ、古墳時代の多くの遺構は土砂とともに斜面地や谷状地形に排されたものと考えられる。すなわち斜面部包含層や谷状地形Ⅱ層出土遺物は丘陵上の遺構に本来属していた遺物と考える。既往の調査では丘陵上や斜面部から出土した遺物が遺構の出土遺物と接合関係にあることが確認されている。

第4章 まとめ

第1節 古墳時代の集落について

石津川流域における最大の画期は、古墳造営、須恵器生産、集落のいずれから見ても5世紀前半～中頃にかけての時期である。また、この時期に出現する遺跡の多くは須恵器生産に深く関与した遺跡であることも指摘できる。大庭寺遺跡も同様で最初の開発の手がいるのは竪穴住居や多量の土器の検出から弥生時代の後期のことであることが判明しているが、それが顕著となるのはやはり5世紀以降である。

今回の調査の成果は、初期須恵器の伴う時期の居住域を確認できたことである。これまで初期須恵器は多く検出されるものの、当該期の建物の検出は1棟だけであったが石津川に面した斜面から大型住居1棟、小型の住居5棟以上の複数の住居を確認できたことである。このうち、大型の竪穴住居は工房跡で、小型のものについては住居と考えており、これによって、大庭寺遺跡は単なる集荷・選別としての性格だけではなく、須恵器工人の工房を兼ねた職住近接型の集落であることが明かとなった。窯は丘陵反対側の濃登ノ池に面した斜面に2基構築されており、両者の中間にあたる丘陵上が製品の集荷・選別の場であったことが考えられる。大庭寺遺跡から出土する須恵器に不良品が多いのもそのためである。ただ、丘陵上にはそれを示す遺構が削平のため十分に残されておらず、その具体像を把握することはできない。

大庭寺遺跡で検出された竪穴住居はともに、炉あるいは竈を持ち合わせておらず、周辺地域の竪穴住居とは明らかに異なる。比較的状态のよい1-ODでは竪穴住居中央から甕の破片を敷並べ竪穴住居外部へと延びる施設を検出しているが、あるいは「オンドル」的な施設の可能性も想起させる。既刊の「大庭寺II」でII期とした1085-ODについては、その後の遺物の検討と今回検出した120-ODとの比較から、初期須恵器の時期の工房であることを、指摘するとともにここに修正をしておきたい。初期の段階では工房と見られる竪穴と竪穴住居さらには倉庫から構成される小単位が一つのまとまりと考えられる。

掘立柱建物はこれまでの調査で15棟検出しており、今回4棟の追加を見た。資料的にはこれまでの倉庫群と比較して差違は認められないがそのうち、3棟については並列に位置しており、3棟1単位の法則性が認められるとともに、更に南に倉庫群が広がる気配を見

せている点が成果といえよう。

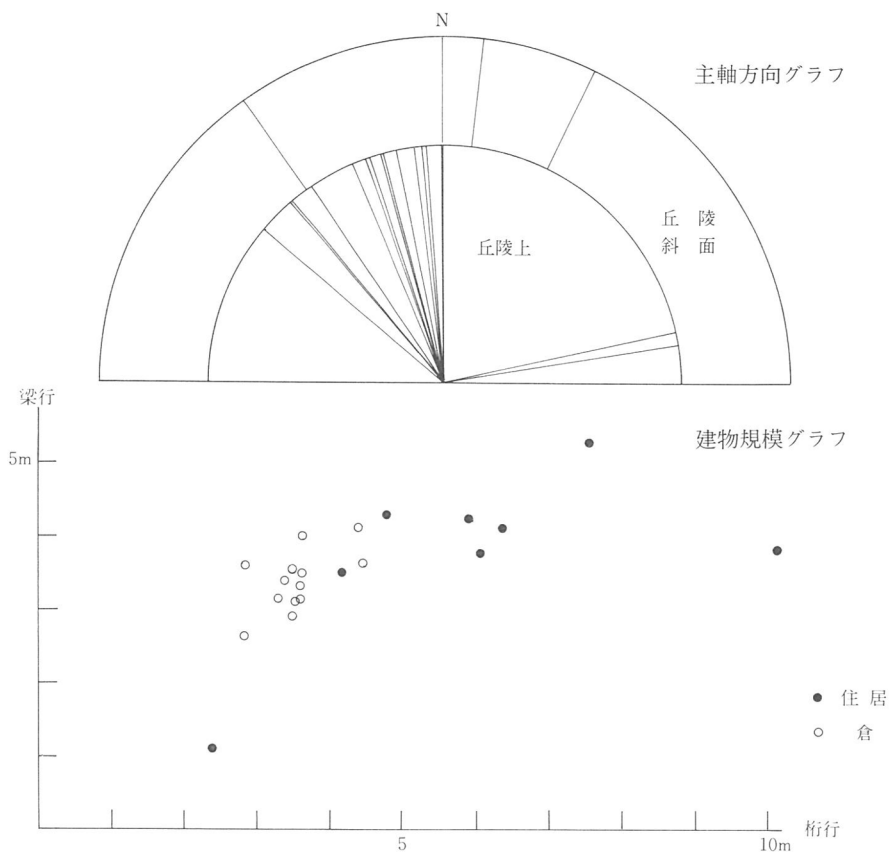
古墳が発見されたのも成果の一つである。これまで古墳は見つかっていなかったが、1ないし2基の古墳を検出した。いずれも6世紀代の古墳で391-O Gについては後半代の古墳である。これまでに5世紀代と見られるU字形鍬先や埴輪等が見ついているため先行する古墳がかつて存在していた可能性も指摘できる。

柵丘陵には、野々井古墳群や牛石古墳群の存在が知られているが、このうち、牛石古墳群の範疇でとらえることが可能であろう。これらの古墳群の被葬者は石津川流域を中心とした地域を統括した複数のグループの一つで、百舌鳥古市古墳群の被葬者を支えた首長であり、直接陶邑を管理した階層であると考えられる。これまでの研究で須恵器



第124図 古墳時代遺構全体図

第1表 古墳時代掘立柱建物観察表



生産は組織化された専門集団によって支えられていることが指摘されているが、このような、階層が存在したからこそ須恵器生産を容易にしたと考えられる。

主要参考文献

- 石神怡他『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（財）大阪文化財センター 1984
- 中村 浩『和泉陶邑窯の研究』 1981
- 〃 「近畿の初期須恵器」『古文化談叢』第15集 1985
- 富加見他『陶邑・大庭寺遺跡Ⅱ』 1990

第2節 奈良時代の集落について

既往の調査成果より、奈良時代の掘立柱建物群が中位段丘上から沖積部にかけて、等高線に沿って大きく4つのまとまりをもって展開する様相が既に指摘されている。今年度の発掘調査では、大庭寺遺跡の奈良時代を把握するにあたり空白部分を更に補完することとなった。

既往の調査成果に則れば、住居と倉からなる4つのまとまりをA・B・C・Dと呼称し、これら全体が一つの集落を構成することとなる。うち、今年度の発掘調査によって検出された建物群はB群とC群に属する。

B群では既に住居2棟(282・354-OB)とその背後の倉4棟(630・393・389・387-OB)が出土遺物、建物の配置・方向などから一時期に存在していたことが指摘されているが、住居2棟(282・354-OB)と方向が同じで規模の異なる住居が2棟(47・17-OB)検出され、これらに加わる。結果、これら一時期に建物群が分布する範囲は最も大きく、平面的には規則的な配置によって構成されていることが判る。なお、他の建物は今回もその切り合い関係を検証することが出来なかったため、前後関係を明らかにすることが出来なかった。また、B群東辺に建物群に平行して検出された溝(886・889・1074-OB)が、建物群を画する機能を有していた可能性が更に高まったといえるのではないかと。

C群では、既調査分とあわせて、住居8棟と倉2棟が検出されたことになり、その分布状況はやや散在的であるが、範囲は更に調査区外へと展開する可能性をはらんでいる。顕著な出土遺物はないものの、84・85・82・141-OBが重複して検出されている状況から3～4段階の設定が可能であろう。住居の規模としては、141-OBが卓越した広さを有する。

ここでもう一度大庭寺遺跡の奈良時代を概観すれば、集落は広く中位段丘の丘陵上から沖積部(A群は石津川旧河道上)に立地している。住居と倉によって構成される4つの建物群のうち、個々の規模や配置などからその中心的位置にあったのはB群であると考えられる。遺物包含層からの遺物出土量も、地形的な制約を考へてもB群付近が最も豊富であり、遺構密度などを実直に反映するものと思われる。また、調査区内では続く平安時代の建物群はB・C群のみに認められ、なかでもB群一帯においてその分布が顕著であり、農民層の集落として位置づけられている。

建物群相互の前後関係を検出状態から検証される例は少なく、出土遺物からも困難であるといえる。しかし遺物包含層及びその他の遺構から出土した遺物は、「平城宮Ⅲ」を中

心とする時期に属することから集落の消長が推し量られる一方、先の古墳時代との間をうめる遺物・遺構の出土例は極めて希薄である。

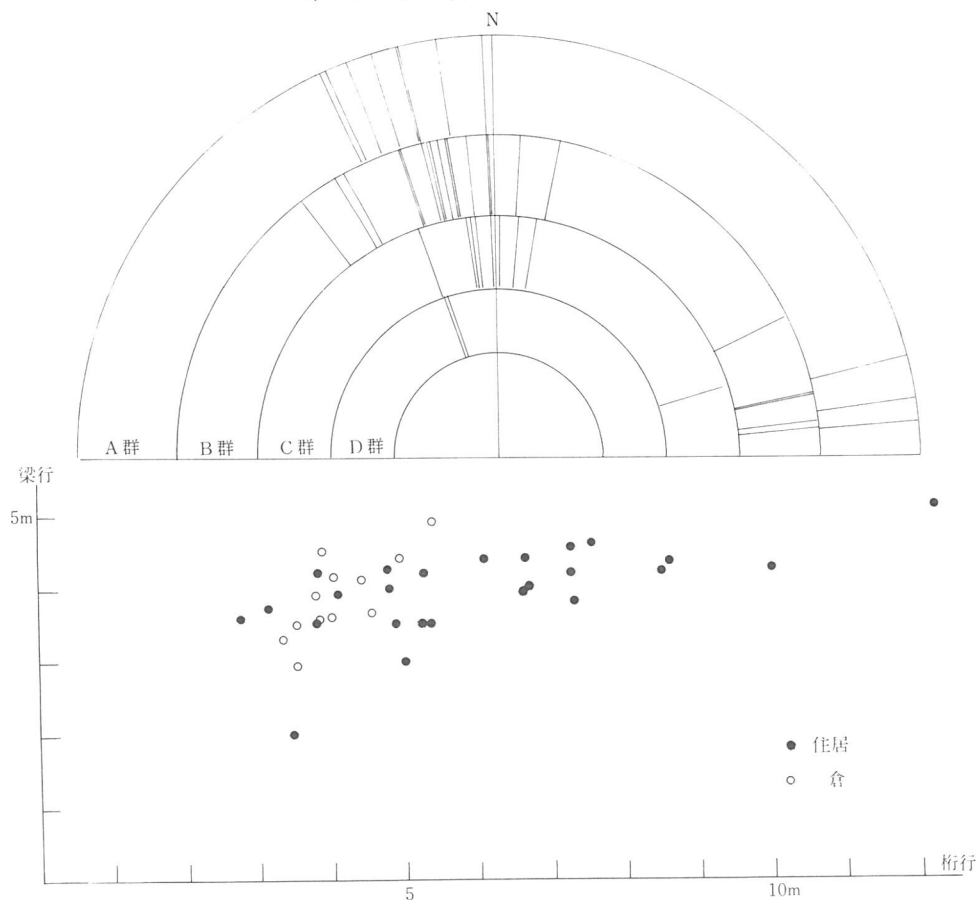
また出土遺物では、既往の調査成果とあわせ瓦、埴、埴仏等寺院遺構の存在を容易に連想させる遺物の出土が顕著であるといえる。遺物、地名、文献資料などから既に指摘される「大庭造」「大庭院」の存在がこの周辺地域に求められる有力な資料となると考える。

さて、C群の西側には多くの初期須恵器が出土した、393-OLが存在する。谷状地形の埋積土と出土遺物の関係より、開口状態にあって、常時流水状況下に曝された古墳時代に比べ、奈良時代に至っては一変して滞水性の水成堆積層が認められる。谷状地形の埋積が、奈良時代以降の居住域確保に起因する丘陵部造成



第125図 奈良時代遺構全体図

第2表 奈良時代掘立柱建物観察表

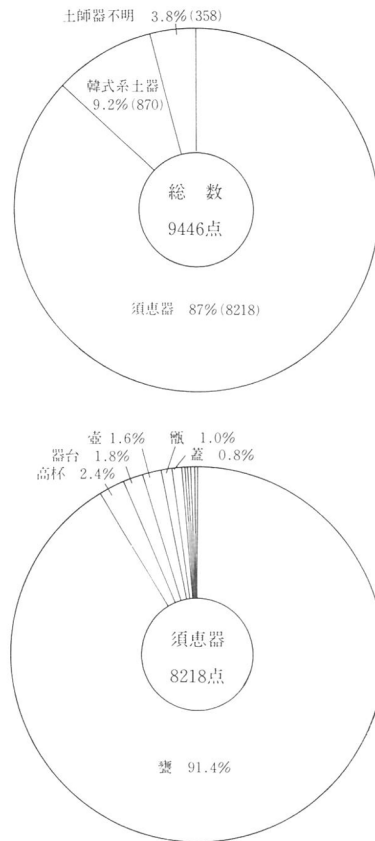


にともなった排土の投棄を一因にあげても、埋積土層の大局的な様相は、続く濃登ノ池全体にも適合するものとする。すなわちうがって考えれば、丘陵上に開析する谷地形を築堤により池状に改変することにより、奈良時代では居住域の確保と同時に、飛躍的な可耕地の拡大を目的とした広範囲にわたる開発が行われた可能性がある。これは現存する条里は奈良時代の建物方向に近く、また水田址の検出例の少ない状況下、小阪遺跡では条里型地割が8世紀末まで遡る可能性が指摘されるなど、その蓋然性は高いと考える。

第3節 初期須恵器について

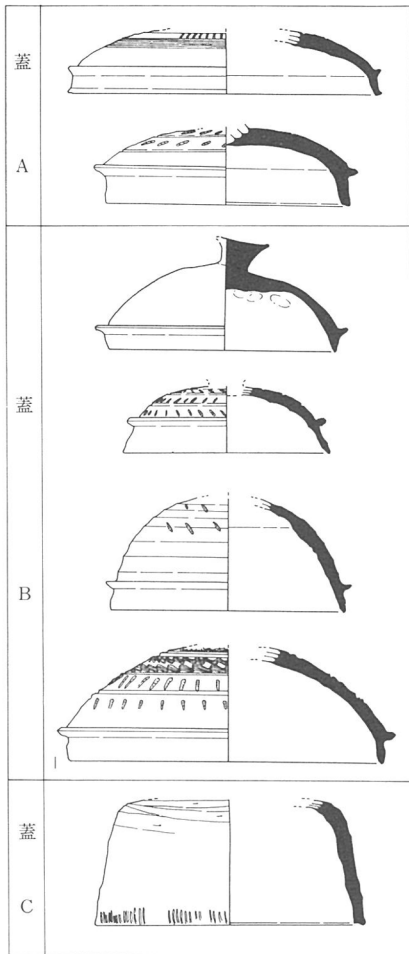
今回の調査では、393-O Lで多くの初期須恵器を検出した。第3表に示したのは、同時期と見られる初期須恵器、韓式系土器、土師器を破片数で比較した構成比率で、須恵器が87%を占めていることがわかる。なかでも甕の比率が最も高く、91.4%と高い割合を占めている。甕の割合が高いのは通例の通りであるが、大庭寺遺跡の場合、高杯と器台で4.2%を占め、他の器種を凌駕していることが大きな特徴であるといえる。393-O Lからみた最古型式の器種には蓋杯、高杯、器台、壺、甕、甗、甑、把手付碗、把手付有蓋有脚短頸壺、埴がある。その製品のなかにはこれまでの須恵器と形態、装飾が大きく異なり、朝鮮半島の陶質土器と区別がつかないものが多く含まれている。それぞれの器種について、現状での整理を試みることにしたい。

第3表 393-O L出土遺物器種構成比率表

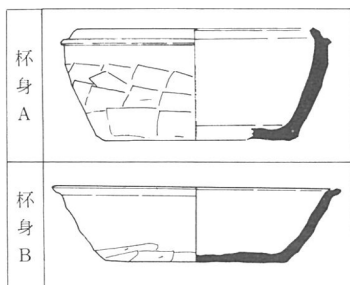


蓋杯 (第126・127図) 蓋は細分が可能であるが、A類—器高が低く天井が扁平なタイプとB

類—器高がやや高く丸みを持つタイプとC類—天井が高く、角ばっているタイプに大きく分類できる。A、B類とも天井部には例外を除いてはほぼ圏線と圏線の間刺突文を配す文様構成による装飾が施されている。波状文も存在するがその数はわずかである。TK73・85号窯を始めとする陶邑のこれまでの資料のなかには、装飾性に富む蓋は認められず、洛東江中流域の慶尚北道高靈郡池山洞古墳群（たとえば33号墳等）や慶尚南道釜山の華明洞第2号墳等いわゆる伽耶といわれる地域の蓋により近いといえる。蓋のなかには、把手付有蓋有脚短頸壺の蓋と考えられる例や宮崎県六野原地下式横穴出土の陶質土器といわれる有蓋高杯の蓋に酷似する例等もある。第4表にみられるごとく大庭寺の蓋の法量の範囲と有蓋高杯の口縁径の範囲がほぼ一致することと、杯の存在が、わずかであることを考慮す



第126図 蓋形態分類図



第127図 杯身形態分類図

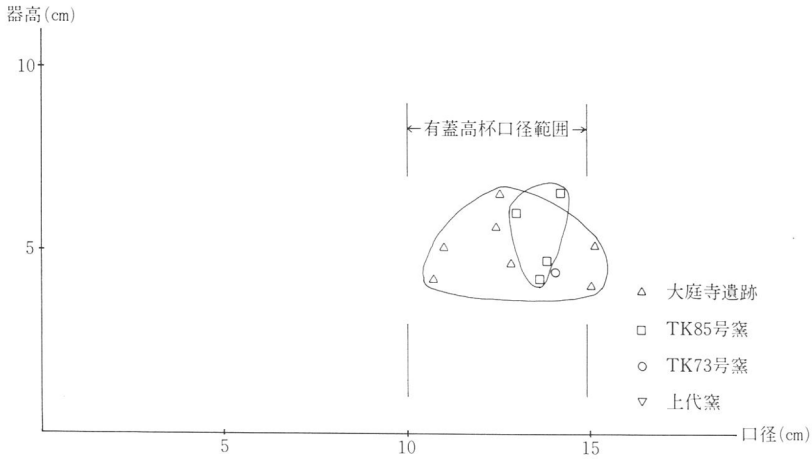
れば高杯の蓋が含まれている可能性が高い。蓋は内面に自然釉が付着するものも多く、焼成時は逆さの状態であったことがわかる。C類については、陶邑深田橋遺跡の例などから見てやや後出すると考えられるのでここでは除外する。

一方、杯身はA類（有蓋のもの）、B類（無蓋のもの）があるが蓋の個体数に比べ、前述のようにその量は多くない。成形は粘土板をロクロに置き、マキアゲているのが通例である。調整はA類は静止ヘラケズリを通例とするが、B類のなかには静止ヘラケズリもあるがナデ調整によるものが多い。

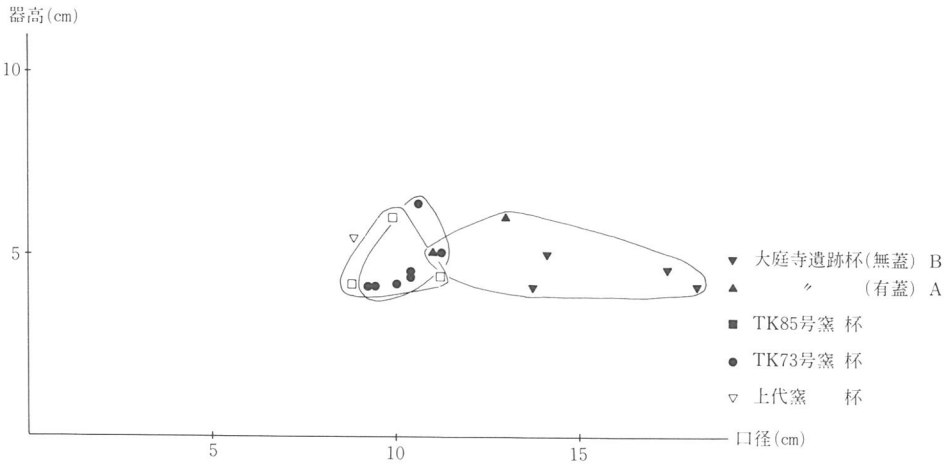
T K73号窯、濁り池窯、上代窯等が蓋杯中心で百済的であるとみられるのに対し、蓋杯が器種構成の上で量的に少ないことは、これまで陶邑に先行すると考えられていた北部九州における初期の窯跡群と同じ傾向を示していることが看取できる。高杯（第128図）A類（有蓋のもの）、B類（無蓋のもの）に大別できる。有蓋高杯は縦長の長方形スカシを持つ多窓のものが多く、スカシは個体によって異なるが9～16方までである。口縁端部は平坦でやや内傾し、水平で幅広の受け部を形成し特徴的である。A類がほぼ個体差程度の相違であるのに対し、B類は蓋杯の蓋を逆さにして杯部に、脚を付けた形状を示すものが多い。B類の脚は基部が細く、大きく「ハの字」に開く形状で脚柱部と裾部の境には凸線が巡るものが一般的であるが、基部が太いものも存在する。脚部の形態差が時間

差として捉えられるかはいまのところ判然としない。スカシは基部が細いものは三角形、菱形、長方形、円形と多彩であるのに対して、基部が太いものは円形のみである。他に有

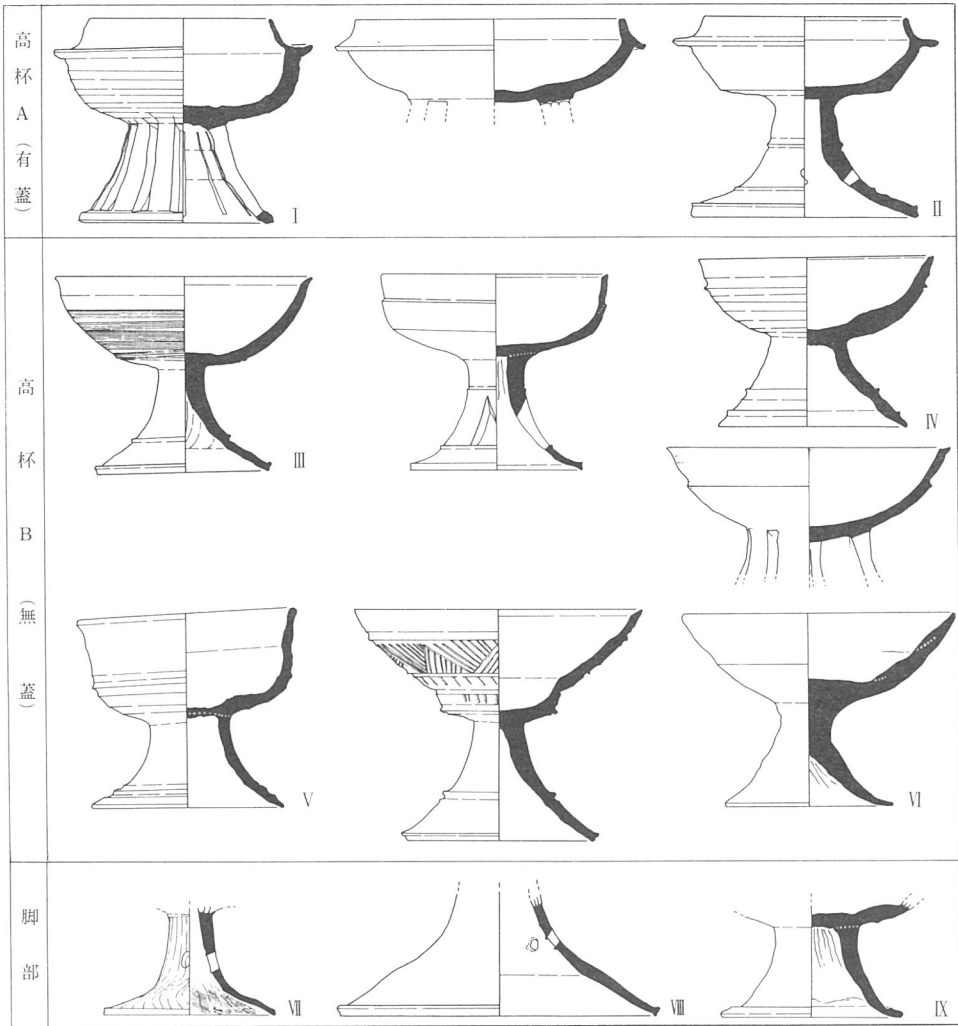
第4表 蓋法量比較表



第5表 杯身法量比較表

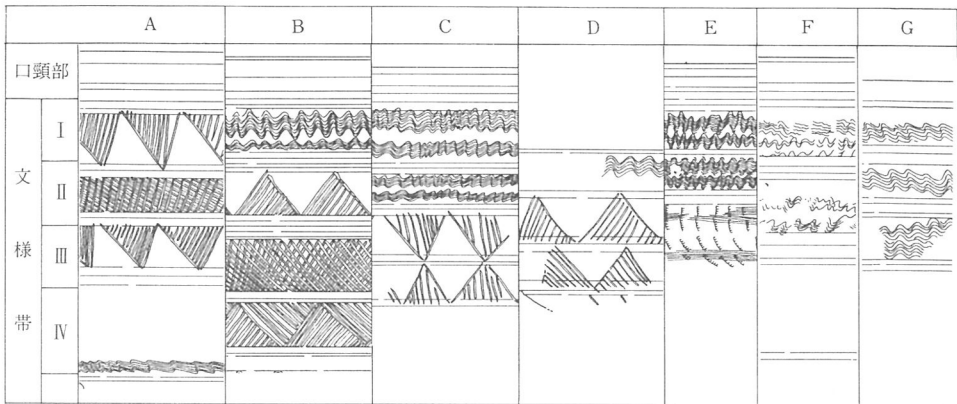


蓋では「釜型」の杯部をもつもの、無蓋では装飾性豊かな器台的な高杯や土師器的な高杯まである。高杯のうちA-I類としたものは、前述の六野原の有蓋高杯に酷似する。管見では陶邑内で大庭寺遺跡以外いまのところ多窓の高杯は濁り池窯で確認されているにとどまる。多窓の高杯は朝鮮半島では無蓋のものが多くのように認識しており、融合あるいは変容された形で大庭寺にもたらされたと考えることも可能である。しかし、陶質土器と区別できないものが含まれるのも事実で、その系譜についてはわからないのが現状といえる。B類のなかには華明洞古墳群、東萊福泉洞古墳群等慶尚南道に類似する例が多くあり伽耶的要素を持つことが多い。



第128図 高杯形態分類図

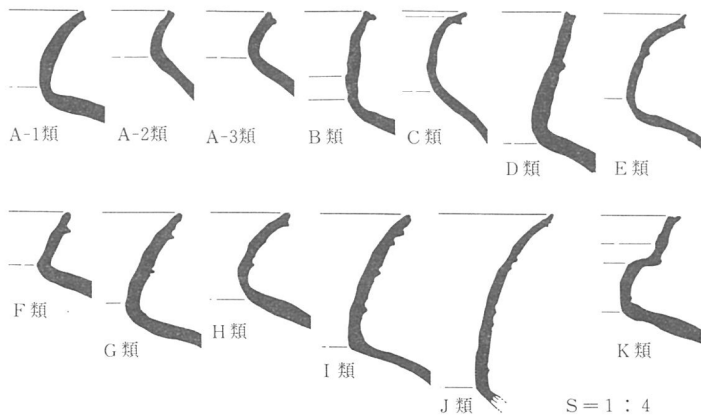
器台 器台は大庭寺遺跡を特徴づける器種で、高杯形器台（A類）と筒形器台（B類）がある。量的にはA類が圧倒的に多く和歌山県楠見遺跡の器台に近い。A類の器台は、細部においては微差は認められるが口縁部が大きく外反し、内面には楠見遺跡に見られる凸帯はないものの明瞭な稜線を有している。杯体部は第129図に示すように4区画からなる文様帯で構成するのを基本とするが、時期が新しくなるとF、G類のように波状文だけの施文となる。凸帯は貼付け凸帯で、高さもあり明瞭である。脚部は3区画に構成された文様帯に波状文を施文し、千鳥（上下交互配列）に短冊形のスカシが穿たれているものが多いが、三角形を呈するものもある。時間差というよりはむしろ系譜の違いと考えられる。杯



第129図 器台装飾文様分類図

部に見られる装飾文様は既報告の組紐文、竹管文に加えて、波状文、鋸歯文、斜格子文、刺突文を相互に組み合わせた装飾性に富むことがその特徴といえる。斜格子や鋸歯文あるいは波状文が施文されている点は東萊福泉洞21号墳副木郭出土の器台等と共通する要素といえる。しかし、脚部は上下交互配列で新羅的といえ、筒形器台の脚部も、上下交互配列のスカシを持ち、新羅的要素を強く持っていると考えられる。

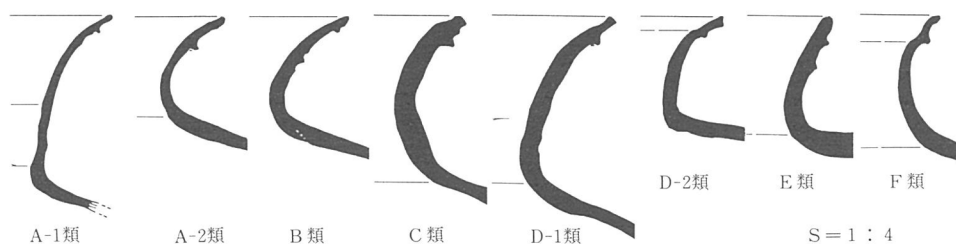
壺 口縁部の形状から、短頸広口壺、長頸広口壺に分類できる（第130図）。短頸広口壺は端部が軟質土器に多く見られるように凹面を形成している。体部はカキメと螺旋状の沈線が巡るもの、縄蓆文を施し螺旋状の沈線がめぐるもの、タタキによるものがその主流である。なかには須恵質ではなく瓦質焼成のものも存在する。長頸広口壺は口頸部に凸帯を持



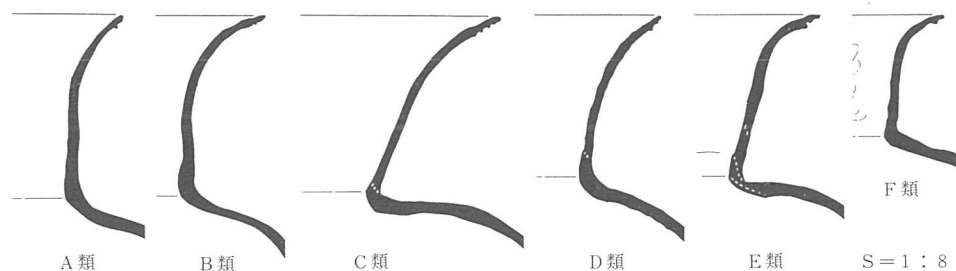
第130図 広口壺口頸部形態分類図

ち刺突文が施文されたもの、波状文が施文されたものがある。体部は球形のもの、肩が張るもの、逆に下脹れのもの多彩である。陶邑では螺旋状の沈線を持つ例はこれまで知られていなかったが、大庭寺遺跡で初めて確認されている。このような例は伽耶に祖形をもとめるのが妥当であろうと考えられるが、直口壺や平底の壺等はむしろ百済に祖形を求められよう。わずかではあるが、二重口縁の壺もあり、土師器工人の関与も想定できる。法量については第7表に見られるごとく差は認められない。

甕 口頸部は直立気味に立ち上がり、肩部が張っているものが多く、形態としては卵形の体部のものが多い。口縁端部は丸く、直下に断面三角形の貼付け凸帯を持つ。凸帯は1条が最も多く9割以上を示すが、なかには2条あるいは3条のものも存在する。器面の調整は第6表に示すとおりナデによって消しているものが大半であるが、ハケメによるもの、縄蓆文によるもの、格子タタキによるもの、平行タタキによるものがある。底部は丸底が多いが、尖り気味のものもある。甕のなかには伽耶土器の特徴である肩部に突起を持つものはないが、製作技法上特徴的な底部絞り込み技法による例（第99図364・365）が複数ある。この痕跡は香川県三谷三郎池窯、和歌山県鳴滝遺跡等にも見られる例で、朝鮮半島では洛東江流域に広く分布しており、おそらく他の多くの器種と同様、朝鮮半島南部にその源流を求めることができよう。大庭寺の例では底部が例外なく尖り底を呈し、体部は如



第131図 中型甕口頸部形態分類図



第132図 大型甕口頸部形態分類図

実に分割成形によってつくられたことを示している。瓦質に近い長胴甕も出土しておりその出自も問題の一つである。

把手付椀 粘土板に粘土紐を巻き上げ、直線的に立ち上がる形状を示し、口縁部と体部は不明瞭な凸帯によって境としている。断面円形の大きな把手を持つ。波状文などの装飾文様は認められない。やや時期が下ると、波状文が認められ、把手に蕨手が付く例もある。

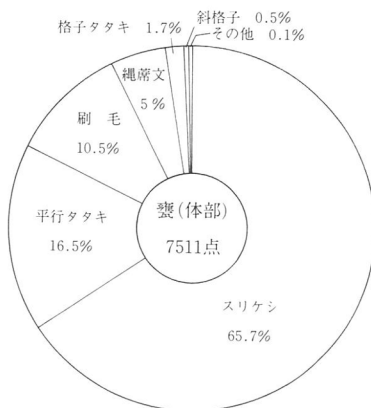
罎 平底のものと丸底のものがあり、いずれも小型品である。

甗 基本的には軟質系のものが圧倒的に多いが須恵質のものもある。古式のものほど口縁と器高の比率が1：1に近く、把手は上方に直線的に延び、その端部は平坦なものが多い。底部に設けられた孔は基本的には中央に大きな孔を配し、周りに小さ目の孔（短冊形、三角形、円形）を穿つのが多いが多様多様である。

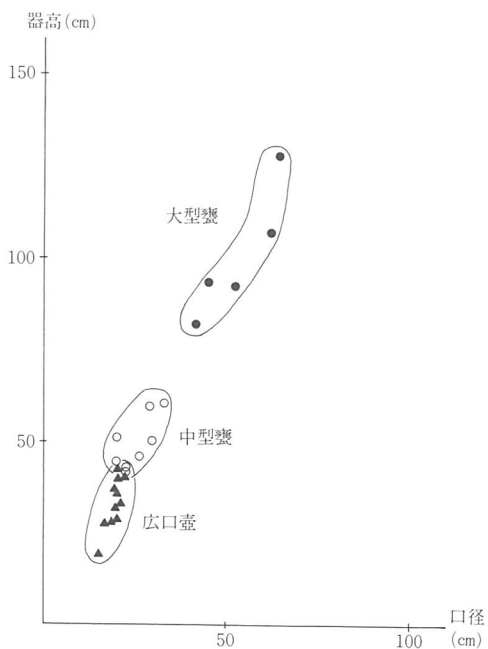
甗 外面底部の静止ヘラケズリやみこみ部分の突き出し痕をナデ消すなど、全体に丁寧な仕上がりである。甗は初期の段階では大型品はなく小型品が多い。樽型もその存在は顕著でない。甗は朝鮮半島では、全羅南道霊岩萬樹里古墳群等に散見でき、百済の様相が強いと見られる器種といえる。

把手付有蓋有脚短頸壺 唯一1点出土している。陶質土器と考えられる福島県南山田遺跡や大阪府野中古墳例と比較すると法量はやや大振りである。肉眼による胎土の観察と焼き歪み製品としては不良品であるため、舶載品とは考えられず陶邑産とする蓋然性は高い。

第6表 甗（体部）調整比率表



第7表 甗・壺法量比較表



以上、今回出土した初期須恵器について見てきたが、調査担当者としての現時点での認識を整理することによってまとめとしたい。

泉北丘陵を中心とした地域で須恵器窯の大規模な発掘調査が行なわれてから、古墳時代の須恵器研究は飛躍的に前進し、確立され今日では須恵器編年研究の基準となっている。この還元焰で焼いた青灰色の硬質の焼きもの（須恵器）の具体的な故地についてはいまだ確定はしていないが、その源流について朝鮮半島南部地域の陶質土器であることはほぼ意見の一致するところである。

これまで須恵器は一元的に陶邑から全国に供給されたと考えられてきたが全国各地で古い窯が相次いで発見されるに至り修正を余儀なくされている。これは、須恵器生産の揺籃期においては日本の各地域にそれぞれ工人が渡来し、独自に窯煙をたなびかせた結果であると考えられ、その発生は多元的である。

陶邑のなかにあっても高蔵、榎、信太山の各丘陵で見られる初期須恵器はそれぞれの様相を示している。これは丘陵毎に系譜の異なる工人によって窯が多元的に発生したためと推察され、系譜が一様ではないことを物語っている。

畿内の初期須恵器の研究の過程で最古型式とされたT K73号、T K85号窯などの陶邑の出土資料は、朝鮮半島の資料と比較した場合、器種組成、手法のうえで、大きなヒアタスがありすでに日本に同化したものと考えられる。そのなかで、大庭寺遺跡の初期須恵器は渡来した工人が深く関与し、陶質土器がさほど時間を経過せず、模倣され（＝初期須恵器）、生産された製品とみなして大過なく、その間を埋める資料が大庭寺遺跡出土の一群であると考えている。直接の比較検討はできないが、池の上・古寺墳墓群に副葬、供献土器を供給した朝倉窯跡群の一群とほぼ同じ頃と考えている。

地方窯では、極めて一過性が強く、器種も限定されることが指摘されているが、大庭寺の場合、その揺籃期の様相は百濟、伽耶、新羅等の三国の特徴を合わせ持ったものが多く、変容された形として捉えることができるのも事実である。今後朝鮮半島において、大庭寺の祖形となるものが発見されないとは限らないが、朝鮮半島の各地の工人が畿内政権のお膝元である陶邑に結集された結果の所産であろうと考えるのが妥当と考えている。

初期窯の在り方は、陶邑では、その器種は豊富で供給圏も汎日本的であるのに対し、その供給圏も地域にとどまる事が多い。これは、畿内政権と地方豪族の力の差であり、まさに陶邑は畿内政権のお膝元で管理された窯跡であったからにほかならない。陶邑の成立には4世紀末～5世紀にかけての朝鮮半島での国際的な緊張が深く関与し、従来にない技術

革新を我が国にもたらしたものと推察される。

しかし今後、各地で出土する初期須恵器についてそれが時間差で捉えうるのか、あるいは系譜が異なるのかの問に対する明快な答えは未だなく躊躇せざるをえない。韓国では、我が国の須恵器生産に直接影響を与えたとみられる洛東江流域の調査が進められており、近未来的にその系譜が明らかにされるであろうが、我が国においては、日常雑器として出土する軟質土器および土師器との共伴関係からも相対年代を検討せねばならないと考えられる。

主な参考文献

- 福尾正彦 「宮崎県内出土の須恵器—地下式横穴・高塚古墳出土例を中心として—」『古文化談叢』6 九州古文化研究会 1976
- 田辺昭二 『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園研究論集第10号 1966
- 中村浩他 『陶邑』Ⅲ大阪府文化財調査報告第30輯 大阪府教育委員会 1978
『和泉陶邑窯の研究—須恵器生産の基礎的考察—』 1981
- 田辺昭三 『須恵器大成』 1981
- 灰掛薫 「上代遺跡」『府中遺跡群発掘調査概要Ⅳ』和泉市教育委員会 1984
- 金廷鶴・鄭澄元 『釜山華明洞古墳群』釜山大学校博物館遺跡調査報告第2輯 1979
- 鄭澄元他 『東萊福泉洞古墳群Ⅱ』釜山大学校博物館遺跡調査報告第14輯 1990
- 藺田香融他 『和歌山市における古墳文化』関西大学文学部考古学研究紀要4 1971
- 栖崎彰一監修 『日本陶磁の源流—須恵器出現の謎を探る—』 1984
- 郭鍾喆 「韓国慶尚南道地域出土の陶質大型甕の成形をめぐる」『東アジアの考古と歴史』上 岡崎敬先生退官記念論集 1987
- 橋口達也 『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告第5集 甘木市教育委員会 1979
『古寺墳墓群』甘木市文化財調査報告第14集 1990
- 九州大学考古学研究室 『山隈窯跡群の調査』 1990
- 小田富士雄 「須恵器文化の形成と日韓交渉・総説編—西日本初期須恵器の成立をめぐる—」『古文化談叢』第24集 1991
- 定森秀夫 「日本出土陶質土器の原郷」『季刊考古学』33 1990
- 酒井清治 「陶質土器と初期須恵器」『季刊考古学』33 1990

附章 分析

大庭寺遺跡出土硬質土器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻利一

1) はじめに

伽耶諸国の窯跡出土陶質土器の分析データが出始めた。大伽耶、高霊の内谷洞窯群、陝川松林里の礪波堤窯群、昌寧の余草里窯群の陶質土器の分析データは既に筆者の手元にある。金海周辺にも窯跡があるものとみられる。これら伽耶諸国の陶質土器がどのように伝播するのかを胎土分析によって追跡しようというのが筆者の計画である。その結果、文献でも不明確な伽耶諸国の動向についての情報が入手できるものと期待される。さらに、新羅の慶州群（望星里窯群、上辛里窯群、徳山里窯群）の陶質土器の分析データも出されており、それらが伽耶諸国の遺跡にどのように伝播していくのかも興味ある問題である。

これに対して日本側では、近年、(財)大阪府埋蔵文化財協会によって発掘調査が進んでいる大庭寺遺跡出土の須恵器胎土の化学特性と土器形式が注目される。胎土分析によって、伽耶諸国の窯跡出土陶質土器と相互識別できるかどうか、土器形式では伽耶諸国のうち、どの地域の窯の製品にもっとも類似するのかといった問題が差し迫って研究対象となる。

このような点で、もっとも注目を集める大庭寺遺跡の集落跡から出土した硬質土器の蛍光X線分析の結果について報告する。

2) 分析方法

試料片はすべて、表面をグラインダーで研磨して灰釉等の付着物を除去したのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉碎した。粉末試料は塩化ビニール製リングに入れて15トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ3～5mmの錠剤試料を作成した。

蛍光X線分析にはエネルギー分散型のスペクトロメーターを使用した。K、CaはTiを2次ターゲットにし、真空下で、また、Fe、Rb、SrはMoを2次ターゲットにして空気中で測定された。

分析値は同時に測定した岩石標準試料JG-1の蛍光X線強度を使い、各元素ごとに標準化された。分析値はこの標準化値で表示された。

3) 分析結果

今回分析した全試料の分析値は表1にまとめられている。

データ解析は大坂陶邑産か、朝鮮半島産かという立場から進められた。今回は朝鮮半島の代表として、内谷洞窯群の陶質土器が選ばれた。K、Ca、Rb、Srの4因子を使い、大坂陶邑群と内谷洞群の間で2群間判別分析が行われた。その結果、両群の相互識別は、十分可能であることがわかった。

次に、大庭寺遺跡の硬質土器が大坂陶邑群と内谷洞群のいずれに帰属するのかの判別分析が行われた。各母集団への帰属条件は $D^2 \leq 10$ である。Dは各母集団の重心からのマハラノビスの汎距離である。両母集からの D^2 値も表1にまとめられている。その結果、No.44は両母集団への帰属条件は満足せず、産地不明としたが、他はすべて、大坂陶邑群への帰属条件を満足した。一部の試料には内谷洞群への帰属条件を満足するものもあるが、その場合、ほとんど

のものが D^2 値は大坂陶邑群への距離がより近かった。ただ、帰属条件を満足したということで、表1には産地推定として両母集団を上げておいた。

さて、この産地推定の結果は分布図上でも確かめられる。図1にはRb-Sr分布図を示す。この図には定性的な大坂陶邑領域と内谷洞領域を示してある。ほとんどの試料が大坂陶邑領域に分布するが、一部には内谷洞領域との重複領域に分布するものがあり、表1の

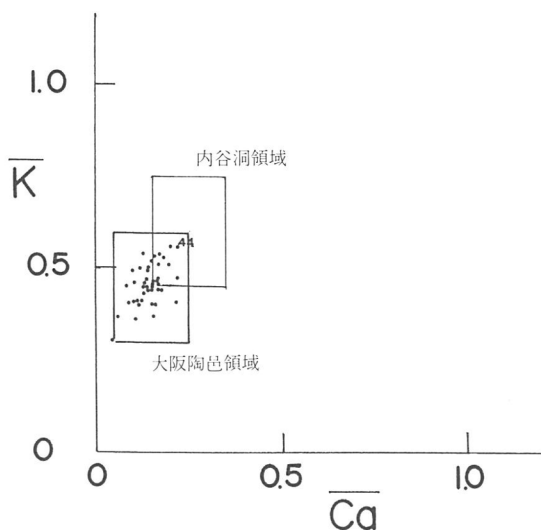


図1 Rb-Sr分布図

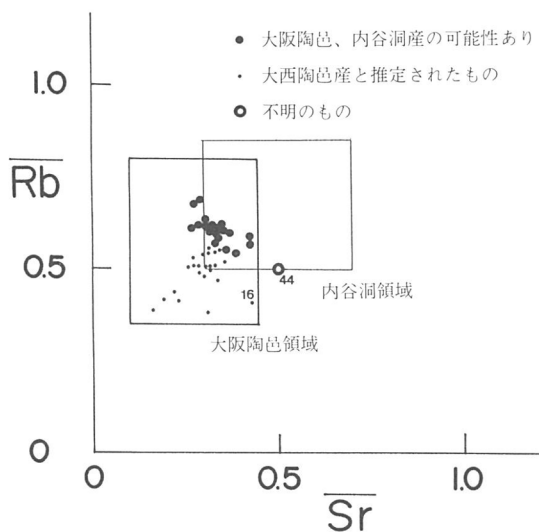


図2 K-Ca分布図

産地推定の結果がうなずける。この点をより明確にするため、K-Ca分布図を描いてみた。その結果を図2に示す。この図では両領域の重複領域に分布するものの数は少なくなり、ほとんどが大阪陶邑領域に分布することがわかる。表1でも、ほとんどの試料が大阪陶邑群への距離がより近く、この点で図2の結果はよく理解される。この結果、大庭寺遺跡の集落跡から出土した硬質土器は大阪陶邑産の製品である可能性が大きいと推定された。

表1 分析データ

本書遺物番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	大阪陶邑	内谷洞	推定産地	
260	0.434	0.127	1.63	0.505	0.262	0.72	18	大阪陶邑	
201	0.362	0.106	2.26	0.440	0.222	3.3	31	〃	
389	0.406	0.098	2.79	0.514	0.288	1.6	18	〃	
250	0.454	0.084	2.71	0.514	0.276	0.9	17	〃	
321	0.506	0.201	2.27	0.602	0.371	2.9	5.3	〃	内谷洞
262	0.540	0.168	2.31	0.688	0.293	5.6	3.7	内谷洞	大阪陶邑
249	0.528	0.183	1.90	0.622	0.354	1.9	3.9	大阪陶邑	内谷洞
345	0.502	0.138	1.99	0.585	0.343	0.7	7.1	〃	〃
264	0.499	0.141	2.22	0.624	0.312	1.1	5.9	〃	〃
395	0.411	0.219	2.29	0.409	0.428	12	24	大阪陶邑(?)	
488	0.521	0.145	1.69	0.618	0.324	0.9	5.1	大阪陶邑	内谷洞
352	0.449	0.137	1.94	0.601	0.285	2.4	10	〃	〃
355	0.465	0.153	1.56	0.513	0.331	0.9	13	〃	
391	0.496	0.115	1.76	0.504	0.319	1.7	15	〃	
301	0.302	0.040	1.79	0.391	0.155	6.1	46	〃	
331	0.404	0.158	2.21	0.500	0.317	3.6	18	〃	
267	0.438	0.167	1.86	0.187	0.293	2.2	20	〃	
322	0.466	0.139	1.74	0.626	0.313	1.9	7.6	〃	内谷洞
344	0.475	0.218	2.20	0.574	0.427	6.0	7.2	〃	〃
254	0.511	0.169	2.32	0.613	0.324	1.7	5.5	〃	〃
364	0.449	0.127	2.52	0.573	0.327	1.1	10	〃	〃
255	0.462	0.102	1.92	0.617	0.275	1.5	9.7	〃	〃
114	0.455	0.165	2.32	0.591	0.338	2.5	8.7	〃	〃
328	0.451	0.135	1.76	0.529	0.274	0.6	15	〃	
369	0.439	0.149	2.58	0.511	0.313	1.3	15	〃	
108	0.367	0.053	2.43	0.423	0.191	2.4	34	〃	
290	0.405	0.093	1.99	0.415	0.233	1.0	31	〃	
324	0.374	0.157	1.75	0.383	0.311	6.0	34	〃	
257	0.458	0.152	1.86	0.542	0.303	1.0	12	〃	
293	0.402	0.118	2.14	0.482	0.296	1.9	20	〃	
251	0.437	0.138	1.80	0.554	0.327	1.5	12	〃	
393	0.536	0.129	1.66	0.552	0.364	3.5	9.8	〃	内谷洞
392	0.560	0.216	1.42	0.503	0.504	14	11	不明	
343	0.537	0.169	2.14	0.599	0.342	1.3	5.2	大阪陶邑	内谷洞
319	0.442	0.167	2.26	0.552	0.358	2.8	11	〃	
490	0.487	0.104	1.90	0.680	0.283	3.1	7.6	〃	内谷洞
486	0.473	0.173	2.49	0.605	0.347	2.4	6.9	〃	〃
102	0.458	0.164	1.64	0.537	0.389	3.2	10	〃	〃
270	0.407	0.112	1.55	0.558	0.321	2.8	15	〃	
363	0.556	0.202	2.12	0.573	0.428	4.4	5.0	〃	内谷洞
433	0.399	0.153	1.94	0.471	0.343	4.4	20	〃	
350	0.410	0.119	2.04	0.542	0.308	2.1	15	〃	
476	0.445	0.149	2.24	0.517	0.364	2.6	13	〃	

S U M M A R Y

We excavated two points at Toga Hill, which are confronted to Isizu River. One is located on the hill, which was named Point D, and the other on the eastern flat creek of the hill (Point E). At Point D, we found more than five dwellings. Each of them had a 'L'-shaped drain at the hill side. The large dwellings were supposed to be the laboratories for the production of Sue stonewares, and smaller ones presumably houses. It seemed quite strange to us that none of them had a fire-place nor an oven.

There were three stockhouses stood in line at Point D. They made us realize that the site had expanded far more south than we supposed. We also found two Kofun tombs here. We think they and Nozono Kofun, which is located near Noto-no-ike Pond, belonged to Ushi-ishi Kofun-tomb Cluster. Now we regard that the scope of the cluster much larger than we used to suppose.

There was a valley which looked toward Noto-no-ike Pond. Here we found a huge number of early Sue stonewares. They can be divided into two groups; one is consisted of the disposed inferior potteries resulted from the production, and the other abandoned commodities according with the large-scaled development at the hill in Nara Period.

Some archaeologists say that the early Sue stonewares we found this time may be older than the ones from the kiln called Suemura-TK73, which has been thought to be the oldest in Kinki region. We found two dumping grounds accompanied with Sue kilns near Noto-no-ike Pond. People in those days might have collected and selected the products on the hill.

This survey showed us that Obadera Site was a village of Sue stoneware manufacturers, whose dwellings, working places and kilns stood close for each other.

written by Y.Fukami

translated by H.Arii

